福岡市埋蔵文化財年報
VOL.36

―令和３（2021）年度版―

2023

福岡市教育委員会

序

福岡市では、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存と活用を図ることを目的として、公共及び民間の各種開発事業の事前審査、記録保存のための緊急調査、また重要遺跡確認調査等を実施しております。

本書は、令和３年度における埋蔵文化財保護行政の概要を報告するものです。開発事業に起因する事前審査件数は大幅な増加傾向をみせており、これに伴う緊急調査件数は平成 25 年度より微増し続けています。今後とも埋蔵文化財保護業務については適正で迅速な対応を進めたいと思います。

本書が文化財保護に対するご理解の一助となり、また学術資料として活用いただければ幸いです。

令和５年３月 23 日

福岡市教育委員会

教育長　石橋　正信

例　　言

・本書は、埋蔵文化財課、文化財活用課、史跡整備活用課が令和3年度に実施した各種開発事業に伴う事前審査と発掘調査の概要及び本報告、ならびに新指定文化財の概要について収録したものである。

・本書に記載ある令和3年度調査のうち、調査番号 2105、2113、2115、2117、2126、2127、2129、2136、2137、2138、2139、2142、2144、2145、2146、2148 はこの年報をもって本報告とする。また、令和2年度調査のうち、2043 についても年報において本報告を行う。

・Ⅴの各調査の概要及び調査報告は各調査担当者が分担執筆した。7019 については比佐陽一郎（文化財活用部）、槇和泉（同志社大学）が執筆した。

・Ⅵについては本田浩二郎、Ⅶについては文化財活用課（赤坂亨）が執筆した。

・上記以外の執筆並びに本書の編集は田上勇一郎、三浦悠葵が担当した。

表紙：博多遺跡群 221 次調査の石積遺構と白磁一括廃棄遺構

目　　次

Ⅰ　令和３年度文化財活用部の組織と分掌事務 …… 2
Ⅱ　開発事前審査 …… 3
Ⅲ　発掘調査 …… 5
Ⅳ　公開活動 …… 5
Ⅴ　令和３年度発掘調査概要・報告 …… 6
Ⅵ　令和３年度国指定史跡 …… 106
Ⅶ　令和３年度福岡市新指定文化財 …… 108
報告書抄録 …… 111

Ⅰ　令和３年度文化財活用部の組織と分掌事務

文化財活用部の組織と分掌事務

文化財活用部　50

文化財活用課　10

管理調整係（事３、文２）	部の総括、予算・決算、庶務・経理、文化財施設の管理
調査普及係（文１、学１）	文化財保護審議委員会、文化財の調査、普及事業
歴史資源活用係（学１、文１）	歴史文化基本構想の策定、文化財の活用推進

史跡整備活用課　8

福岡城跡整備係（事１、文３）	福岡城跡の調査・整備・活用、課の庶務、福岡みんなの城基金に関すること
鴻臚館跡整備係（文１）	鴻臚館跡の調査・整備・活用
史跡整備活用係（文１、事１）	史跡の整備・活用

埋蔵文化財課　25

事前審査係（文５）	公共及び民間開発事業に係る埋蔵文化財の事前審査
主任文化財主事（文１）	
調査第１係（文６）	課の庶務・主に東部地区の埋蔵文化財の発掘調査及び保存
主任文化財主事（文３）	
調査第２係（文６）	国庫補助事業総括・主に西部地区に係る埋蔵文化財の発掘調査及び保存
主任文化財主事（文３）	

埋蔵文化財センター　6

運営係（事１、文２）	施設の管理運営、埋蔵文化財の収蔵・保管・展示等、教育普及
保存分析係（文２）	埋蔵文化財の保存・分析

事：事務職　文：文化財専門職　学：文化学芸職

埋蔵文化財課の職員構成（文化財専門職）

埋蔵文化財課長	菅波正人
事前審査係長	田上勇一郎
係　員	松崎友理
	神啓崇
	山本晃平
	三浦悠葵
主任文化財主事	森本幹彦
嘱託員	中園将祥

調査第１係長	本田浩二郎
係　員	佐藤一郎　吉武学　久住猛雄　木下博文
	鶴来航介
主任文化財主事	常松幹雄　池田祐司　屋山洋
調査第２係長	藏冨士寛
係　員	荒牧宏行　清金良太　三浦萌　岩熊拓人
	田中健
主任文化財主事	大庭康時　赤坂亨　阿部泰之
熊本市派遣	阿部泰之（上半期）

Ⅱ 開発事前審査

1．概　要

本市では、土木工事等の各種開発事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、開発事業計画地における埋蔵文化財の有無を確認した上で、保存に係わる協議等を行っている。

公共事業については、関係機関・部局に次年度の事業計画の照会を行い、埋蔵文化財の保存上問題になると判断される事業についてはその取り扱いについて協議を行っている。

民間の開発事業については、都市計画法に基づく 1,000㎡以上の開発事業、建築基準法に基づく建築事業等を対象として事前協議を求めている。また建築等の計画策定段階での照会にも窓口やメール、ファックスで応じ、埋蔵文化財の保存上の措置について必要な指示を行っている。平成 24 年 8 月からは本市ホームページにて、包蔵地外町丁名リストの公開を開始し、利用者の照会の便宜を図っている。また、令和 3 年 10 月よりオンラインによる申請受付を開始した。

2．令和3年度の事前審査

令和 3 年度の事前審査件数は、表 1 のとおりである。福岡市域の開発事業を反映するように増加傾向となるが、平成 22 年からは年間 2,500 件前後で高止まり状態となる。平成 26 年度から令和 3 年度にかけて、若干の増減はあるが、ほぼ横ばいの状況となっている。

表 1　平成 16 ～令和3年度事前審査件数推移

事業	内訳	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	R1年度	R2年度	R3年度
公共	事前照会審査件数	665	769	862	1,143	1,191	1,181	1,181	1,220	989	1,381	1,381	1,280	1,322	1,443	729	679
	申請審査件数	133	161	202	228	195	191	184	135	290	155	164	137	115	139	125	186
	審査件数計	798	930	1,064	1,371	1,386	1,372	1,365	1,355	1,279	1,536	1,545	1,417	1,437	1,582	854	865
民間	窓口照会件数	8,309	7,226	6,144	5,555	6,225	6,791	7,195	6,491	12,301	12,356	14,349	14,773	16,687	16,520	15,488	16,392
	FAX照会件数	3,354	3,990	3,537	3,729	4,584	5,716	7,170	7,999	8,648	9,317	9,936	9,904	10,524	10,749	10,272	10,240
	メール照会件数																977
	照会件数計	11,663	11,216	9,681	9,284	10,809	12,507	14,365	14,490	20,949	21,673	24,285	24,677	27,211	27,269	25,760	27,609
	申請（審査）件数	1,090	1,011	1,000	924	1,184	1,176	1,261	1,339	1,140	1,147	1,123	1,134	1,265	1,348	1,118	1,364
公･民 申請審査件数計		1,223	1,172	1,202	1,152	1,379	1,367	1,445	1,474	1,430	1,302	1,287	1,271	1,380	1,487	1,243	1,550
公･民審査件数計		1,888	1,941	2,064	2,295	2,570	2,548	2,626	2,694	2,419	2,683	2,668	2,551	2,702	2,930	1,972	2,229
試掘調査実施件数		327	384	364	345	371	371	379	443	318	286	267	254	353	322	263	307

申請内容（表 1・2）

公共事業に伴う依頼は 186 件となり、昨年度から 61 件増加している。事業者別では、国機関 26 件、県 7 件、市 153 件となる。事業別に見ると水道・電気等 53 件、道路 48 件、空港関係 20 件、学校関係 10 件、公園関係 10 件、河川関係 6 件、市営・県営住宅の建て替え事業 3 件、その他の開発・建物は 21 件、その他の農業関連事業 11 件である。このうち公有財産の売却等の土地調査にかかる事前審査依頼は 2 件であった。なお事業照会件数は 679 件で、昨年度から 50 件減少した。事業別の内訳は、上下水道 304 件、道路 150 件、学校 119 件、公園 21 件、住宅 22 軒、空港施設関連 25 件、河川 19 件、電気 3 件、その他の建物 12 軒、その他の開発 4 件であった。

民間事業の届出件数は 1,364 件で昨年より 246 件増加している。届出内容は、事業別では個人住宅 341 件、戸建住宅 366 件、共同住宅 205 件、戸建住宅・共同住宅併設 2 件、宅地造成 21 件、個人住宅兼工場または店舗 2 件など住宅関連事業をあわせると 937 件となる。土地売買に先立つ事前の調査依頼は 127 件であった。戸建住宅・共同住宅の件数は前年より増加した。そのほか、空港関係 4 件、学校関係 19 件、工場 5 件、店舗 23 件、その他建物 126 件、ガス・電気・水道等 107 件、その他開発 16 件である。

公共・民間の申請件数の合計を区別に見ると、東区 175 件、博多区 312 件、早良区 337 件、西区 216 件、南区 248 件、中央区 57 件、城南区 160 件となる。すべての区で前年より増加している。

指導内容（表 2）

公共、民間各事業の事前審査の結果、事業者に指導した内容は表 2 のとおりである。次年度への継続、取り下げを除くと審査件数(申請件数)は 1,514 件で、前年より 290 件増加した。総括的に見ると書類審査での回答 1193 件、

踏査 9 件、試掘 307 件である。審査結果は開発同意 121 件、慎重工事 1,155 件、工事立会 132 件、発掘調査 67 件、要協議（設計未定、売却予定で遺跡ありなど）34 件である。

窓口等照会（表 1）

民間業者等による窓口での「埋蔵文化財の有無に係わる照会等は 16,392 件、ファックスでの照会は 10,240 件、メールでの照会は 977 件、あわせて 27,609 件で、令和 2 年度実績 25,760 件より増加している。平成 24 年 8 月より本市ホームページにて、包蔵地外町丁名リストの公開を開始し、利用者の照会への便宜と照会件数減を図っているが、窓口件数は大きく増加している。ファックス照会件数は 22 年度以降毎年増加しているが、30 年度から大きく増加し 10,000 件を超えた。また、メールでの問い合わせも 1,000 件近くある。ホームページ「福岡市の文化財」では、「福岡市埋蔵文化財包蔵地分布図（Web 版）」を整備・公開しており、窓口のみでしか閲覧できなかった埋蔵文化財包蔵地分布図が遠隔地からも確認できるようになった。

試掘調査・確認調査（表 3）

包蔵地内で行われる確認調査、包蔵地隣接地・包蔵地外で行われる試掘調査（以下試掘調査と総称する）は令和３年度で 307 件実施した。区別の内訳として東区 35 件、博多区 99 件、中央区 10 件、南区 46 件、城南区 19 件、早良区 50 件、西区 48 件となる。対象とした遺跡数は 110 遺跡である。10 件以上試掘した遺跡としては博多遺跡群 14 件、箱崎遺跡 11 件、比恵・那珂遺跡群 17 件、井尻Ｂ遺跡 13 件となっている。包蔵地隣接地および包蔵地外での試掘調査は 37 件であった。確認・試掘調査 307 件のうち補助対象は 251 件、現物重機等による調査は 56 件となる。

表 2　令和3年度事前審査内訳

区名	事業	審査種別（書類審査・現地踏査・試掘調査）でみた判断指示の結果																	区別審査件数	
		開発同意			慎重工事			工事立会			発掘調査			協議			審査継続	取り下げ	公民別計	区計
		書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘				
東	公共	3			12		2	1			1		1				2		22	175
	民間	20		1	82	1	21	14			2		6	1		4	1		153	
博多	公共	1			44			4			1						1		51	312
	民間	9		4	116	1	52	20		10	7		15	2		9	9	7	261	
中央	公共	3			9			2		1			1						16	57
	民間	5			12		8	1			5		9				1		41	
南	公共	2			8		1										1		12	248
	民間	13		1	163	3	24	19								10		3	236	
城南	公共				3			1											4	160
	民間	4			116		15	8		2	5		1			1	4		156	
早良	公共	5			34			3											42	337
	民間	22			195		43	15		5	2		4		1	4	1	3	295	
西	公共	7			23		1	7									1		39	261
	民間	20		1	126	1	39	13		6	2	2	3			2	5	2	222	
小計	公共	21	0	0	133	0	4	18	0	1	2	0	2	0	0	0	5	0	186	1550
	民間	93	0	7	810	6	202	90	0	23	23	2	38	3	1	30	21	15	1364	
合計		114	0	7	943	6	206	108	0	24	25	2	40	3	1	30	26	15	1550	

表 3　令和3年度確認調査・試掘調査一覧

区		東		博多		中央		南		城南		早良		西		計	
件数		35		99		10		46		19		50		48		307	
補助	現物	28	7	86	13	6	4	39	7	11	8	39	11	42	6	251	56
包蔵地内		31		88		9		40		18		42		44		272	
包蔵地隣接地		4		11		1		6		1		8		4		35	
包蔵地外		0		0		0		0		0		0		0		0	

Ⅲ 発掘調査

1．令和3年度の発掘調査（表４・5）

令和３年度の発掘調査件数は、２年度からの継続事業 11 件、令和３年度新規事業 52 件の計 63 件で、このうち４件は令和４年度に継続である。新規調査 52 件は文化財保護法第 93、94 条に基づく記録保存のための発掘調査 51 件、92 条に基づく学術調査１件である。

記録保存 51 件の発掘調査総面積は 16,843㎡で、前年度と比べ調査件数は増加したが、調査面積は減少となった。継続事業９件を含めると発掘調査総面積は 22,798㎡で公民別では公共事業が 3,963㎡、民間事業が 18,835㎡であり、民間が全体の 83％を占めている。公共事業総面積が前年度比で 59％、民間事業は約 66％減少している（平成 24 年度から、国立大学法人関係の調査は民間事業扱いとしている）。今年度についても前年度に続いて圃場整備事業に伴う発掘調査は実施していない。

個々の発掘調査の面積としては、100㎡以下が 18 件、101 ～ 300㎡が 22 件、301 ～ 500㎡が４件、501 ～ 1,000㎡が３件、1,001 ～ 10,000㎡が４件となり、全体的に減少している。300㎡以下の小規模調査は 40 件と、前年度の 29 件から件数・比率ともに増加した。１件あたりの平均調査面積は 380㎡、公共事業で 1,321㎡、民間事業では 330㎡である。区ごとでは東区８件、博多区 20 件、中央区０件、南区 10 件、城南区４件、早良区６件、西区３件となり、博多区に調査件数が集中する傾向が続いている。

各区の面積では、東区 3,064㎡、博多区 5,642㎡、中央 0㎡、南区 2,475㎡、城南区 247㎡、早良区 1,038㎡、西区 4,376㎡である。なお博多遺跡群、箱崎遺跡などでは複数の遺構面を調査するため、実際の発掘面積は増加する。

表４　令和3年度　発掘調査区別調査件数・面積（学術調査を除いた前年度継続分9件・学術調査3件を除く）

令和３年度	東	博多	中央	南	城南	早良	西	全市
公共調査	1	2	0	0	0	0	0	3
民間調査（民受+令達+補助）	7	18	0	10	4	6	3	48
計	8	20	0	10	4	6	3	51
調査面積総計（㎡）	3,064	5,642	0	2,475	247	1,038	4,376	16,843
平均調査面積/1件	383	282	0	248	62	173	1,459	330

参考　　学術調査3件　　13,100 ㎡

学術調査を除いた継続9件　　7,811.24 ㎡

表５　発掘調査件数の推移　　（　）前年度からの継続件数、なお学術調査2件（H30）、5件（R１）、7件（R２）１件（R３）を除く

事　業		22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	R1年度	R2年度	R3年度
民　間（民受+令達+補助）	調査件数	30　(0)	27　(1)	22　(2)	42　(4)	50　(5)	47　(5)	48　(7)	38　(5)	41　(4)	70　(6)	50　(12)	57　(9)
	調査面積（㎡）	15,649	6,175	15,333	20,293	15,786	10,687	12,807	16,498	17,534	24,111	28,603	18,835
圃場整備	調査件数	4　(2)	1　(2)	0　(0)	0　(0)	0　(0)	0　(0)	0　(0)	0　(0)	0　(0)	0　(0)	0　(0)	0　0
	調査面積（㎡）	9,775	1,984	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
公　共	調査件数	16　(3)	23　(3)	19　(2)	5　(1)	6　(1)	8　(2)	2　0	3　(2)	1　(0)	1　(0)	2　(0)	3　0
	調査面積（㎡）	22,856	14,322	14,440	3,315	1,996	6,842	1,728	2,909	1,335	2,712	6,762	3,963
合　計	調査件数	50　(5)	51　(7)	41　(4)	47　(5)	56　(6)	55　(7)	50　(7)	41　(7)	42　(4)	71　(6)	52　(12)	60　(9)
	調査面積（㎡）	48,280	22,481	29,773	23,608	17,782	17,529	14,535	19,407	18,870	26,823	35,365	22,798

※調査件数・面積は前年度からの継続件数も含むが、大学による学術調査 15 件は含まない

Ⅳ 公開活動

市民への公開を目的として、記者発表や現地説明会、体験学習および福岡市埋蔵文化財調査報告書の刊行等がある。令和３年度は７月 31 日に博多区那珂遺跡群第 185 次調査にて近隣住民の皆様に対しての現地説明会を実施した。また市内小中学校の職場体験の一環として発掘調査や整理作業への参加を受け入れているが、令和３年度は、新型コロナウイルス蔓延のため実施していない。

公開・活用に資するための埋蔵文化財報告書・年報は、表８のとおり計 30 冊が刊行された。

表６ 令和３年度発掘調査遺跡一覧表

1. 顕孝寺遺跡	7. 那珂遺跡群	13. 五十川遺跡	19. 田島Ａ遺跡	25. 田村遺跡
2. 箱崎遺跡	8. 板付遺跡	14. 井尻Ｂ遺跡	20. 田島Ｂ遺跡	26. 上籠遺跡
3. 博多遺跡群	9. 高畑遺跡	15. 三宅Ｂ遺跡	21. 片江Ｂ遺跡	27. 大林遺跡
4. 吉塚遺跡	10. 麦野Ａ遺跡	16. 野多目Ｃ遺跡	22. 原遺跡	28. 羽根戸古墳群
5. 久保園遺跡	11. 井相田Ａ遺跡	17. 警弥郷Ｂ遺跡	23. 有田遺跡群	
6. 山王遺跡	12. 南八幡遺跡	18. 田島和尚頭遺跡	24. 野芥遺跡	

表 7-1　令和3年度発掘調査一覧

番号	審査番号	種別	遺跡名	次数	略号	開発内容	区	所在地	調査面積	着手日	終了日	地図	主番
1805	27-1-122	令達	博多遺跡群	221	HKT	跡地活用事業	博多	上川端町97-1	2671.8	H30.4.25	R4.2.17	49	0121
1924		国補（史跡）	福岡城跡	78	FUE	祈念櫓	中央	城内1番1、1番4	19	R1.12.1	継続中	60	0193
1959		国補（史跡）	福岡城跡	80	FUE	鴻臚館32次	中央	城内1番1、1番4	1541	R2.1.10	R4.7.15	60	0193
1960	2019-2-482	民受	博多遺跡群	239	HKT	ホテル	博多	祇園町417番、418番、419番、420番、421番、422番、425番、426番、427番	1012.47	R2.2.17	R3.4.23	49	0121
2020		国補（史跡）	福岡城跡	82	FUE	潮見櫓	中央	城内1番1、1番4		R2.5.25	R3.8.31	60	0193
2038	2019-2-1311	民受	博多遺跡群	245	HKT	テナント付き共同住宅	博多	須崎町90、91-1、91-2、91-3、92-1、92-2、93、88-1、88-2番	226.56	R3.1.5	R3.5.7	49	0121
2042	2019-2-1272	民受	博多遺跡群	246	HKT	事務所ビル	博多	綱場町9、10、11、12、13、14他12筆	269.1	R2.2.1	R3.8.6	48	0121
2043	2020-2-143	民補	井尻Ｂ遺跡	48	IGB	戸建住宅3棟	南	井尻１丁目704番の一部、705番の一部	120	R3.2.15	R3.3.13	25	0090
2044		学術	箱崎遺跡	115	HKZ	学術研究（記録保存）	東	箱崎６丁目10-1　船舶海洋工学実験室	3200	R3.2.15	R3.9.30	33	2639
2045	2020-2-798	民受	箱崎遺跡	116	HKZ	共同住宅	東	箱崎３丁目3263番2	96	R3.2.19	R3.4.9	34	2639
2046		学術	大平寺古墳	1	THK	学術研究（現状保存）	南	太平寺１丁目93番1外	8000	R3.3.8	R3.8.31	53	0180
2101		学術	箱崎遺跡	117	HKZ	学術研究（記録保存）	東	箱崎６丁目10-1　正門前	1900	R3.5.24	R4.3.10	34	2639
2102	2020-2-844	国補	田島B遺跡	2	TZB	専用住宅	城南	田島５丁目188-2	54.2	R3.4.7	R3.4.26	62	0200
2103	2020-2-857	国補	那珂遺跡群	184	NAK	専用住宅	博多	竹下５丁目385番、386番、390番の各一部	248	R3.4.8	R3.5.24	38	0085
2104	2020-2-880	民受	南八幡遺跡	21	MHM	共同住宅	博多	寿町２丁目117番1、117番2	215	R3.4.12	R3.5.31	12	0051
2105	2020-2-729	民受	田村遺跡	29	TMR	宅地造成	早良	田村２丁目804番1	136.5	R3.4.12	R3.5.10	93	0317
2106	2020-2-741	民補	山王遺跡	18	SNN	共同住宅	博多	山王２丁目9番2	199.73	R3.4.13	R3.6.16	37	2379
2107	2020-2-788	民受	那珂遺跡群	185	NAK	介護施設建設	博多	竹下５丁目444	850.04	R3.4.19	R3.8.10	38	0085
2108	20-1-10	公受	久保園遺跡	6	KBZ	気象レーダー	博多	上臼井字屋敷295	200	R3.4.19	R3.6.28	23	0833
2109	2020-2-546	民受	博多遺跡群	247	HKT	テナントビル	博多	店屋町104、105番地	262.31	R3.4.26	R3.8.31	49	0121
2110	30-1-61	公受	箱崎遺跡	118	HKZ	都市計画道路	東	箱崎６丁目10-1	2040.22	R3.4.12	R3.6.30	33	2639
2111	2020-2-955	民受	羽根戸古墳群	11	HDK-F	土地造成	西	大字羽根戸地蔵尾876-１	1027	R3.4.21	R3.8.11	105	0566
2112	2020-2-779	民補	那珂遺跡群	186	NAK	共同住宅	博多	東光寺町１丁目334、336、337、348、351、352-1、352-2、353	477.46	R3.5.17	R3.7.30	37	0085
2113	2020-2-1107	民補	野多目C遺跡	7	NMC	共同住宅	南	野多目２丁目328-1、329-1、335-2	249.1	R3.5.19	R3.6.11	40	0147
2114	28-2-318	民補	博多遺跡群	248	HKT	集会所（結婚披露宴）	博多	上川端町47番，48番，49番2，12番2	323.46	R3.6.22	R3.9.30	49	0121
2115	2021-2-49	国補	野芥遺跡	21	NKE	専用住宅	早良	野芥５丁目378番12（5号地）	62.15	R3.7.1	R3.7.21	84	0319
2116	2019-2-927	民受	上籠遺跡	2	KAG	土地区画整理	西	戸切２丁目601-1、602、603-1、606－3～６、11、12、607－6、10～12、608-1～5、8、9、12、13、612－3、613-1、5、617-1、618-1、4、5、1201-1、1202、1203、1204、1205	3334	R3.8.18	R4.2.25	92	2844
2117	2021-2-255	国補	片江B遺跡	5	KEB	専用住宅	城南	片江1丁目1074番1、1074番5、1075番2、1076番2、1080番7	62.44	R3.7.15	R3.7.28	63	0207
2118	2020-2-1059	民受	田島A遺跡	9	TZA	宅地造成	城南	田島４丁目60番2、60番3	74	R3.7.19	R3.8.31	62	0199
2119	2020-2-1048	民補	那珂遺跡群	187	NAK	共同住宅	博多	東光寺町1丁目240番、243番、244番	210	R3.7.19	R3.9.14	37	0085
2120	2021-2-318	国補	那珂遺跡群	188	NAK	専用住宅	博多	東光寺町1丁目240番、243番、244番の各一部	86	R3.8.26	R3.9.13	37	0085
2121	2020-2-769	民受	警弥郷B遺跡	9	KYB	宅地造成	南	弥永４丁目2番9	541.61	R3.8.2	R3.10.25	41	0158
2122	2020-1-111	公受	高畑遺跡	23	TKB	警察学校道場体育館建替	博多	板付6丁目１－１	1723	R3.9.1	R4.10.31	24	0095
2123	2020-2-742	民補	箱崎遺跡	119	HKZ	共同住宅	東	箱崎１丁目2485番	182.72	R3.9.1	R3.11.12	34	2639
2124	2021-2-127	民受	顕孝寺遺跡	2	KKG	宅地造成	東	多々良1丁目789番１、789番2、790番、791番、792番	159	R3.9.5	R3.11.16	19	0076
2125	2021-2-446	国補	野芥遺跡	22	NKE	専用住宅	早良	野芥5丁目378番9	32	R3.9.6	R3.9.24	84	0319
2126	2021-2-405	国補	五十川遺跡	24	GJK	専用住宅	南	五十川1丁目629番2、630番1	103	R3.9.6	R3.9.28	38	0088
2127	2021-2-501	国補	板付遺跡	76	ITZ	専用住宅	博多	板付2丁目10-9の一部	9.4	R3.9.1	R3.9.1	24	0094
2128	2021-2-172	民受	箱崎遺跡	120	HKZ	共同住宅	東	箱崎3丁目8-46	188	R3.9.15	R3.12.13	34	2639
2129	2021-2-268	国補	麦野Ａ遺跡	32	MGA	専用住宅	博多	麦野3丁目1-19	83.8	R3.10.1	R3.10.29	25	0048
2130	2021-2-232	民受	野芥遺跡	23	NKE	共同住宅	早良	野芥2丁目834番1	215	R3.10.4	R3.12.10	83	0319
2131	2020-2-1106	民補	井相田A遺跡	4	ISA	共同住宅	博多	井相田3丁目4番6	285.57	R3.10.12	R3.12.23	12	0052
2132	2021-2-69	民受	原遺跡	38	HAA	共同住宅	早良	原8丁目1162-1、1162-2、1162-3	396.6	R3.10.18	R3.12.1	82	0311
2133	2021-2-631	民受	三宅B遺跡	2	MYB	戸建住宅５棟	南	三宅2丁目909番１、931番３	353	R3.11.1	R3.12.17	39	0139
2134	2021-2-259	民受	南八幡遺跡	22	MHM	共同住宅	博多	寿町２丁目３番、４番	128.4	R3.11.15	R3.12.23	25	0051
2135	2021-2-137	民補	有田遺跡群	272	ART	共同住宅	早良	南庄3丁目257、258、260-4	196.107	R3.11.22	R4.1.28	81	0309
2136	2021-2-562	民受	五十川遺跡	25	GJK	共同住宅	南	五十川2丁目261番４、257番1	80.7	R3.12.1	R3.12.21	24	0088
2137	2021-2-831	民受	箱崎遺跡	121	HKZ	戸建住宅	東	箱崎1-28-2、3	37	R3.12.1	R3.12.28	34	2639
2138	2021-2-895	民受	五十川遺跡	26	GJK	戸建住宅	南	五十川2丁目287番16、287番24	74	R3.12.13	R4.1.14	24	0088
2139	2021-2-617	国補（試掘）	那珂遺跡群	189	NAK	駐車場部分（戸建住宅3棟）	博多	那珂2丁目132-2	20.73	R3.12.23	R3.12.23	24	0085
2140	2021-2-1018	民受/令達	那珂遺跡群	190	NAK	プレハブ仮設校舎	博多	那珂2丁目18番1号	84	R4.1.5	R4.2.8	24	0085
1805	27-1-122	令達	博多遺跡群	221	HKT	跡地活用事業	博多	上川端町97-1	2671.8	H30.4.25	R4.2.17	49	0121
2141	2021-2-498	民受	井尻B遺跡	49	IGB	共同住宅	南	井尻1丁目108番２～４（調査対象）	249.83	R4.1.13	R4.3.17	25	0090

表 7-2　令和3年度発掘調査一覧

番号	審査番号	種別	遺跡名	次数	略号	開発内容	区	所在地	調査面積	着手日	終了日	地図	主番
2142	2021-2-962	国補	大林遺跡	2	OBY	専用住宅	西	拾六町5丁目972番１	15.43	R4.1.11	R4.1.17	103	0375
2143	2021-2-55	民補	箱崎遺跡	122	HKZ	共同住宅	東	箱崎3丁目3272番2、3275番2	105	R4.1.20	R4.3.12	34	2639
2144	2021-2-474	国補（試掘）	博多遺跡群	249	HKT	店舗・事務所	博多	冷泉町107番	29.02	R4.1.17	R4.1.18	49	0121
2145	2021-2-1005	国補	田島和尚頭遺跡	1	TAO	専用住宅	城南	田島2丁目565番２、566番２	56	R4.2.10	R4.2.22	73	0249
2146	2021-2-1067	国補（試掘）	警弥郷B遺跡	10	KYB	診療所	南	弥永4丁目2番３	170	R4.2.14	R4.2.18	40	0158
2147	2021-2-920	民受	井尻B遺跡	50	IGB	共同住宅	南	井尻5丁目234番7、69	122.17	R4.2.21	R4.3.11	25	0090
2148	2021-2-100	民受	吉塚遺跡	19	YSZ	戸建住宅	博多	堅粕４丁目370番３	39.8	R4.2.21	R4.3.4	35	0123
2149	2021-2-316	民受	箱崎遺跡	123	HKZ	共同住宅	東	箱崎1丁目1911番2、1912番2、1925番1～３、1927番	280	R4.3.1	R4.4.18	34	2639
2150	2021-2-344	民受	博多遺跡群	250	HKT	共同住宅	博多	下呉服町502、503-1、503-2	166.35	R4.3.1	R4.5.20	48	0121
2151	2021-2-425	民受	井尻B遺跡	51	IGB	共同住宅	南	井尻1丁目372-2、373-2	531.83	R4.3.1	R4.6.8	25	0090
2152	2021-2-1052	国補	箱崎遺跡	124	HKZ	専用住宅	東	箱崎3丁目3518－１	72	R4.3.11	R4.3.25	34	2639

表8　令和3年度刊行報告書一覧

集	書名	副書名	収録調査番号
1438	井尻B遺跡28	井尻B遺跡第45次調査報告	1957
1439	井尻B遺跡29	井尻B遺跡第47次調査の報告	2033
1440	クエゾノ遺跡３	５次調査の報告	1950
1441	田村20	第28次調査報告	1820
1442	那珂84	那珂遺跡群177・180次調査報告	1947・2003
1443	那珂85	那珂遺跡群178次調査報告	1949
1444	那珂86	那珂遺跡群181次調査の報告	2004
1445	名子遺跡２	名子遺跡第５次調査報告	1961
1446	野芥遺跡７	野芥遺跡第18次調査報告	1964
1447	野芥遺跡８	野芥遺跡第19次調査報告	1965
1448	博多181	博多遺跡群第224次調査報告	1835
1449	博多182	博多遺跡群第225次調査報告	1906
1450	博多183	博多遺跡群第228次調査報告	1905
1451	博多184	第231次調査報告	1915
1452	博多185	博多遺跡群第234次調査報告	1937
1453	博多186	博多遺跡群第235次・236次調査の報告	1942
1454	博多187	第238次調査報告	1958
1455	博多188	博多遺跡群第242次調査報告	2017
1456	博多189	博多遺跡群第243次調査報告	2018
1457	箱崎64	第92次・第102次・第108次調査報告	1830・1940・2011
1458	箱崎65	箱崎遺跡第96次調査報告	1924
1459	箱崎66	箱崎遺跡第110次調査の報告	2024
1460	比恵90	第157次調査報告	2035
1461	東入部遺跡５	第13次調査報告	2002
1462	福岡城下町３	福岡城下町遺跡第３次調査報告	1902
1463	藤崎遺跡22	藤崎遺跡第39次調査報告	1955
1464	麦野C遺跡11	麦野C遺跡第18次調査報告	1948
1465	麦野C遺跡12	第19次調査の報告	2029
1466	弥永原10	弥永原遺跡第18次調査の報告	2019
埋蔵文化財年報VOL.35 令和2（2020）年度版		弥永原遺跡第17次調査	2005
		中村町遺跡第９次調査	2009
		中村町遺跡第10次調査	2010
		有田遺跡群第271次調査	2014
		那珂遺跡群第183次調査	2021
		麦野Ｂ遺跡第７次調査	2022
		山王遺跡第17次調査	2027
		麦野Ａ遺跡第31次調査	2041
		鳥飼遺跡第１次調査	2047
		井相田Ｅ遺跡第２次調査	1963
		井尻Ｂ遺跡第46次調査	1966
		麦野Ａ遺跡第30次調査	1969

調査概要・報告は表７の調査番号順に掲載し、位置番号は右ページの調査一覧表と一致する。
また、各報文の図〔1. 調査地点の位置〕の（　）内は、左から福岡市都市計画図図幅番号・図幅名称・遺跡番号・縮尺である。令和３年度の発掘調査件数は、表７に示したように、令和２年度からの継続調査 11 件、令和３年度新規調査 52 件の計 63 件で、このうち 4 件の調査については令和 4 年度に継続である。新規調査 52 件のうち 51 件は文化財保護法第 93、94 条に基づく記録保存のための発掘調査であり、残り 1 件は文化財保護法第 92 条に基づく調査で、九州大学箱崎キャンパス跡地で実施された九州大学埋蔵文化財調査室主体の発掘調査である。調査番号としては 2101 がこれにあたる。

本年報においては各調査の概要について報告を行うが、例言に記載したとおり調査番号 2105、2113、2115、2117、2126、2127、2129、2136、2137、2138、2139、2142、2144、2145、2146、2148 はこの年報をもって本報告とする。また、令和２年度調査のうち、2043 についても年報において本報告を行っている。これらの調査はいずれも短期間、狭小な対象面積を対象に行ったものである。

継続調査および新規調査 63 件の内容を見ると、箱崎遺跡 10 件で全体件数の 16％を占めている。次いで博多遺跡群が計 8 件で 13％、那珂遺跡群 7 件で 11％となっている。箱崎遺跡調査 10 件のうち 2 件については九州大学埋蔵文化財調査室による調査であり、8 件についてが福岡市による開発事業に先立つ発掘調査となる。各調査の詳細については、各報告および巻末に掲載した抄録を参照されたい。

表9　令和3年度包蔵地等改訂一覧

番号	遺跡名称	変更事項
1	洲崎台場跡	包蔵地の新設･新規登録遺跡
2	小呂島砲台跡	包蔵地の新設･新規登録遺跡
3	西戸崎飛行場跡	包蔵地の新設･新規登録遺跡
4	駄ヶ原古墳群Ⅰ群	包蔵地、隣接地の新設･新規登録遺跡
5	玄界遠見番所跡	包蔵地、隣接地の新設･新規登録遺跡
6	野芥社日古墳	包蔵地の新設･新規登録遺跡
7	元寇防塁　姪の浜地区	隣接地の拡大
8	香椎Ａ遺跡	包蔵地の一部拡大･隣接地の一部解除
9	箱崎遺跡	隣接地の一部解除
10	元寇防塁　箱崎地区	包蔵地の位置一部変更
11	西油山古墳群Ⅰ群	包蔵地の新設･新規登録遺跡
12	警弥郷Ｂ遺跡	包蔵地、隣接地の一部拡大

2101　箱崎遺跡 117 次（HKZ-117）

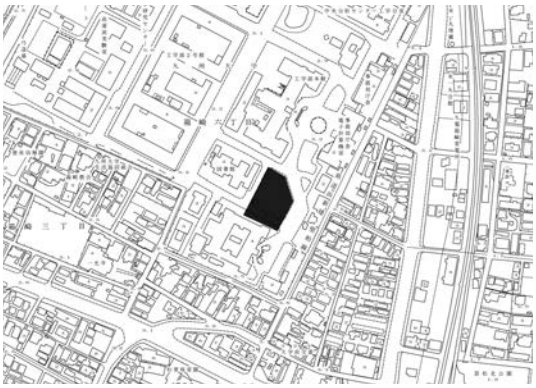
所 在 地　東区箱崎６丁目 10-1（正門前地点）
調査原因　学術研究（記録保存・HZK2101）
調査期間　2021.5.24 ～ 2022.3.10
調査面積　1,900㎡
担 当 者　九州大学埋蔵文化財調査室
処　　置　記録保存

調査の概要

箱崎遺跡九州大学 HZK2101 地点（正門前地点）では、中世の建物、墓、土坑、溝、井戸、石組の室、ピットなど 559 遺構が検出された。大溝が調査区の中央を東西に横断する。溝の北側は、建物の柱穴が密集しており、柱穴の切りあいや礎石のレベル差から複数回の建替えがあったことが推測される。調査区内では深く掘り込まれた土坑がいくつも検出されているが建物はそれらを切って建てられる。

井戸は，素掘井戸２基と，石組井戸２基が検出されている。これらの石組井戸や石組の室の構築材として石塔部材が、また建物礎石にも破損した板碑が使われていることから、宗教施設が近在した可能性が考えられる。少数ながら墓も検出され、そのうちの１基からは青銅の鈴が出土した。

遺物としては陶磁器や瓦、滑石製品なども多くみられる。



1．調査地点の位置（33　貝塚　2639　S＝1/8,000）

2．発掘区全景（北西から）

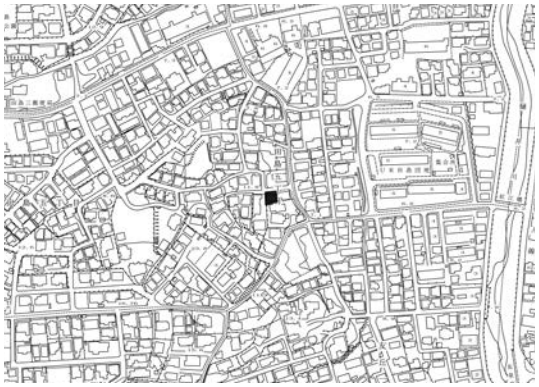
2102　田島Ｂ遺跡２次（TZB-2）

所 在 地　城南区田島５丁目 188-2
調査原因　個人住宅建設
調査期間　2021.4.7 ～ 2021.4.26
調査面積　54.2㎡
担 当 者　清金良太
処　　置　記録保存

調査の概要

田島Ｂ遺跡は樋井川左岸にある標高７～ 24 mの低丘陵上に位置する。第１次調査は北側の丘陵端部で行われており、弥生時代前期の貯蔵穴 14 基、中期の竪穴住居４軒、古墳時代前期の竪穴住居４軒や詳細時期不明の掘立柱建物４棟が検出されている。

第２次調査地点は田島Ｂ遺跡の東側斜面上に位置しており、周囲は段造成されている。今回の調査で出土した主な遺構は掘立柱建物１棟、竪穴住居１棟である。遺構は深さ５～ 15㎝と浅く、後世の開発により削平されたと考えられる。掘立柱建物からは弥生時代後期前半の土器が数点出土している。竪穴住居は残りが悪く、時期がわかるような遺物は検出されなかった。



1．調査地点の位置（73　茶山　0200　S＝1/8,000）

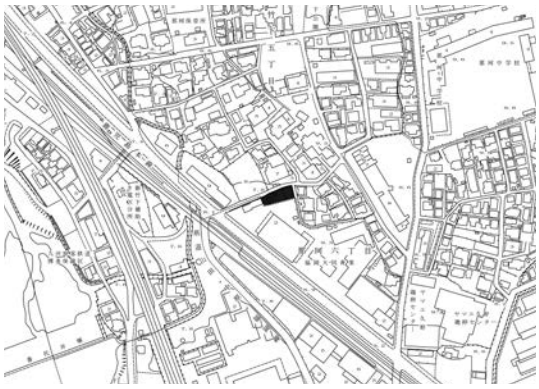
2．Ⅰ区全景、掘立柱建物（西から）

2103　那珂遺跡群 184 次（NAK-184）

所 在 地	博多区竹下５丁目 385 番他２筆
調査原因	個人住宅建設
調査期間	2021.4.8 ～ 2021.5.24
調査面積	248㎡
担 当 者	木下博文
処　　置	記録保存

調査の概要

那珂遺跡群は御笠川と那珂川に挟まれた低位段丘上に展開する弥生時代から古墳時代の集落跡である。今回の調査地点は遺跡の南西端部に位置し、37 次の北隣、道路を挟んで 55 次の南および 22 次の南西に位置する。37 次では弥生時代の二重環濠、55 次・22 次では正方位をとる古墳時代後期の東西方向の溝が検出されている。今回の調査ではピットの他、一定の幅を保ちながら並列する溝２本を検出した。道路の側溝の可能性が高い。溝から古墳時代後期～古代の須恵器蓋杯・土師器把手・瓦片、12 世紀代の中国産磁器・滑石製石鍋片が出土しており、長期にわたって使用されたとみられる。また道路の走向は敷地の北を通る現代道路と同じであり、この地域の地割に強い影響を与え続けてきた可能性がうかがえる。出土遺物は調査全体でコンテナ７箱分に上る。



1．調査地点の位置（38　塩原　0085　S ＝ 1 /8,000）

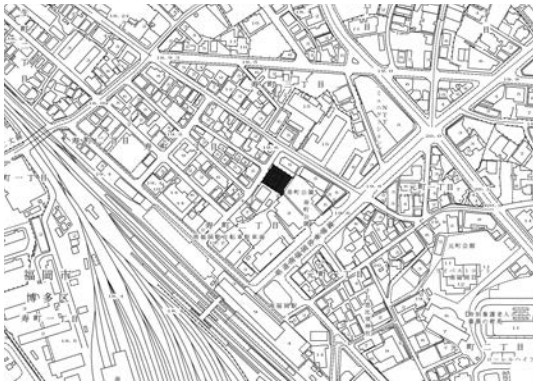
2．２区全景（西から）

2104　南八幡遺跡 21 次（MHM-21）

所 在 地	博多区寿町２丁目 117 番 1、117 番２
調査原因	共同住宅建設
調査期間	2021.4.12 ～ 2021.5.31
調査面積	215㎡
担 当 者	中園将祥
処　　置	記録保存

調査の概要

南八幡遺跡は、大野城市・春日市と接した福岡市の南端に位置し、福岡平野を流れる那珂川と御笠川に挟まれた洪積台地上に立地する遺跡である。今回の調査対象地の南西側では第２次・３次調査が行われており、6 世紀後半から 8 世紀後半にかけての竪穴住居跡（16 軒）・掘立柱建物跡（8 軒）が検出されている。今回の調査では、標高約 20 m前後の遺構検出面で、竪穴住居跡 1 軒・土坑 1 基・ピット状遺構 66 基が検出された。竪穴住居跡はカマドを伴う約 3 × 3 mの方形の平面を呈し、深さは約 0.4 mを測る。出土遺物などから 8 世紀中頃から後半の住居であると考えられる。今回の第 21 次調査では第２次・３次調査で検出された集落域が北西方向にも広がる事が確認でき、周辺の古代の遺跡や環境を考える上で重要な調査となった。

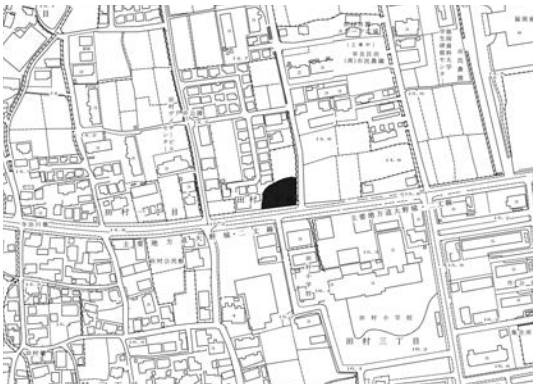


1．調査地点の位置（13　雑餉隈　0051　S ＝ 1 /8,000）

2．Ⅱ区全景（北西から）

2105　田村遺跡 29 次（TMR-29）

所 在 地　早良区田村 2 丁目 804 番 1
調査原因　宅地造成
調査期間　2021.4.12 ～ 2021.5.10
調査面積　136.5㎡
担 当 者　赤坂亨
処　　置　記録保存



1．調査地点の位置（83　野芥　0317　S ＝ 1 /8,000）

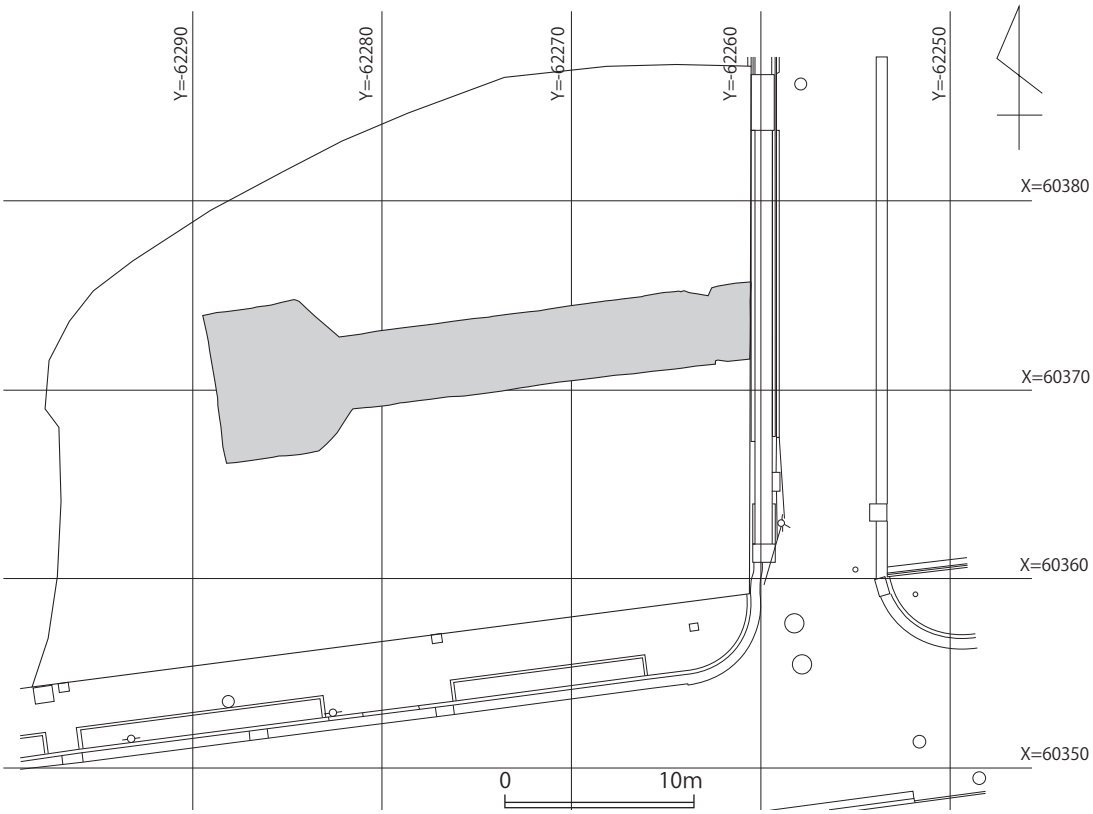
調査の概要

1．調査に至る経緯

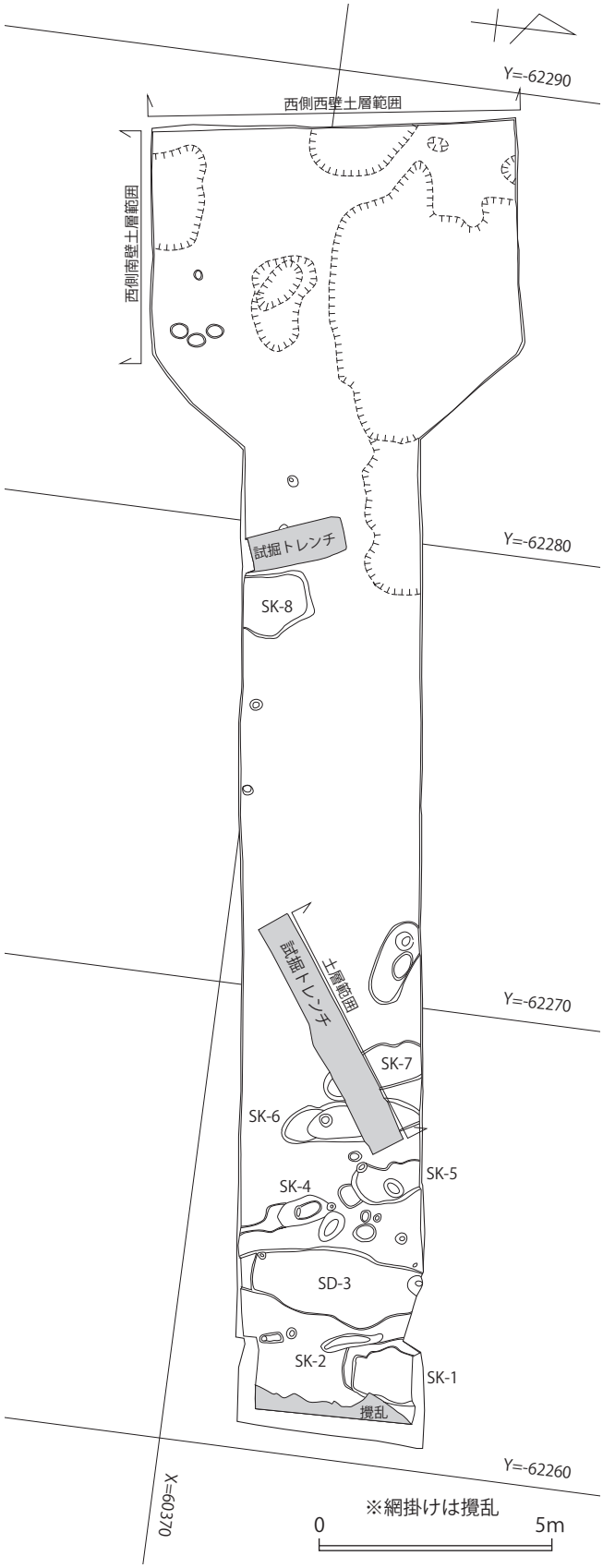
令和 2 年 10 月 1 日付で上記地における埋蔵文化財の有無についての照会を受理した（事前審査番号 2020-2-520）。これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である田村遺跡に含まれていることから、令和 2 年 10 月 27 日に確認調査を行った。確認調査では現地表下 35cm で古代の遺構が検出された。その後、上記地にて令和 2 年 12 月 1 日付で上記地における埋蔵文化財の有無についての照会を再受理した（事前審査番号 2020-2-729）。前回の確認調査の結果を踏まえ、遺構の保全等に関して申請者と協議を行ったが、工事による埋蔵文化財への影響が回避できないため、宅地造成事業の位置指定道路敷設が行われる範囲について記録保存のための発掘調査を実施した。

2．調査の方法

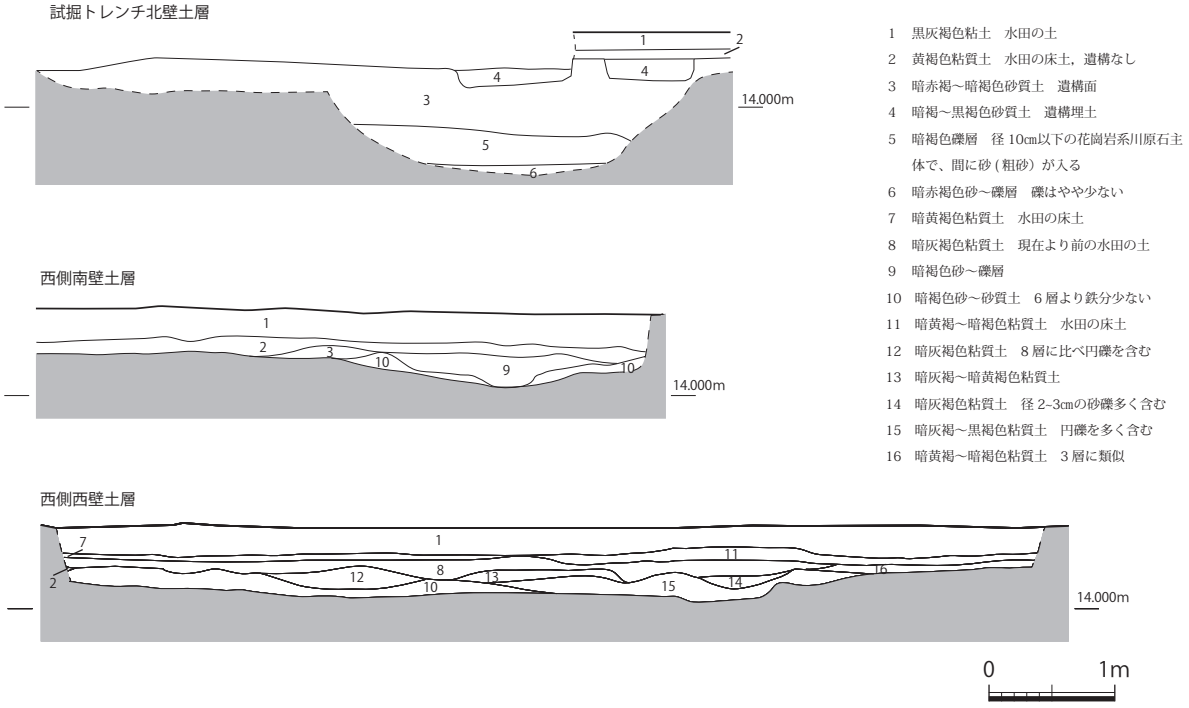
道路敷設により遺跡が影響を受ける範囲に限って発掘調査を行った。表土掘削・埋戻しは小型重機で行った。遺構の精査・掘削は発掘作業員 6 名によって行い、測量、作図、写真撮影は赤坂が行った。全景写真は高所作業車より撮影し、オルソ画像は AgisoftMetashapeStandard で作成した。



2．調査区の位置（S=1/400）



3．調査区遺構平面図（S=1/150）およびオルソ画像



4．土層断面図（S ＝ 1/60）

3.調査の概要

田村遺跡は早良平野中央部の標高 13 ～ 17m 前後の沖積微高地上に立地する。２９次調査は中世の条里地割の痕跡が良好に遺存する田村遺跡北西部に位置する。条里を区画する溝は 12 世紀前半に開削され、南北方向で 1 町（約 109 m）単位を基本とする主水路と、東西方向で半町単位やそれ未満の位置にも設けられる分水路で構成され、本調査地は南北主水路と東西分水路の合流点北西側に位置している。今回の調査では、遺構面は現況水田の床土を取り除いた、標高 14.400m 付近の砂質土暗赤褐～暗褐色砂質土上面で検出した。調査区西側では遺構面の高さで砂礫が流れ込み（5 層土）を検出した。5 層土は径 10㎝以下の花崗岩系川原石 (角が丸い) が主体で、間に砂 (粗砂) が入り、西側と東側で標高を違えて調査区全面に面的に広がっていた。河川氾濫時の土砂と考えられる。

遺構は土坑 7 基(SK-1・2・4 ～ 8)・溝 1 条 (SD-2)・柱穴を検出した。条里主水路に近い調査区東側に遺構が集中し、西側では人為的な遺構はほとんど存在しなかった。また、主水路・分水路に関する溝等の遺構は確認できなかった。土坑 7 基はいずれも長径 2 ～ 3 m短径 1 ～ 2 m深さは 20㎝前後を測り、底面はほぼ水平である。暗褐色～暗褐色砂質土（4 層土）を埋土とし、出土遺物も少ない。

溝 1 条 (SD-2）は調査区を南北に貫くが、幅は一定せず、また深さが 25㎝前後で底面がほぼ水平であり、前述した土坑とほぼ性格が近いことから、大きめの土坑である可能性が高い。

遺物は土師器皿・白磁・青磁片が遺構から、黒曜石剥片・弥生土器甕が遺構外から出土した。遺構出土遺物の時期は 12 世紀頃で、南北主水路と近い時期である。遺物総量はパンケース 1 箱分である。

4.まとめ

中世における田村遺跡の条里区画内部での、当時の土地利用状況の一端が判明した。

5. 調査区全景（東から）

6. 試掘トレンチ北壁（南から）

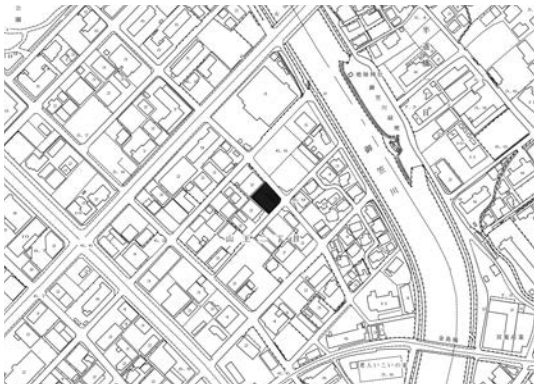
7. SK-1・SK-2・SD-3（南から）

8. 調査区西側西壁土層（東から）

9. 調査区西側南壁土層（北から）

2106　山王遺跡 18 次（SNN-18）

所 在 地　博多区山王２丁目９番２
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2021.4.13 ～ 2021.6.16
調査面積　199.73㎡
担 当 者　三浦萌
処　　置　記録保存



1．調査地点の位置（37　東光寺　2379　S ＝ 1 /8,000）

調査の概要

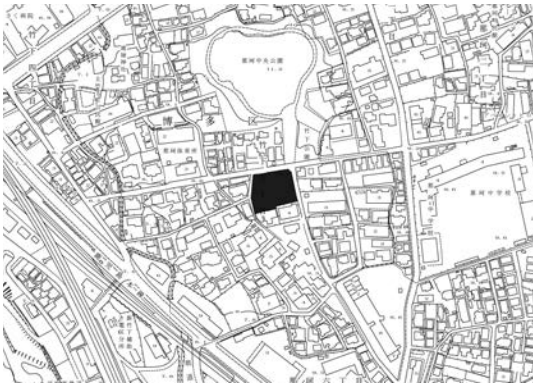
山王遺跡は御笠川と那珂川にはさまれた洪積台地の低位丘陵上に存在する後期旧石器時代から中世にわたる複合遺跡である。西側にある丘陵最北端には比恵遺跡群が存在している。当調査は 18 次調査であり、近隣調査としては北東で 10 次調査が、南西で１次調査と３次調査が行われている。

調査の結果、弥生時代末から古墳時代初頭の土坑を６基発見した。いずれも調査区の南東部の壁に沿うようにして位置している。遺構は南側に集中しており、北側ではほぼ検出できていない。遺物は弥生時代中期の土器が主体であり、そのほとんどが包含層からの出土である。このことから弥生土器を多く含む土壌が当調査区周辺に流れ込んできたか、その土壌を使用して整地した可能性が指摘できる。包含層からは石剣や石包丁、弥生土器、須恵器、白磁などが発見された。

2．土坑 SK003(北から）

2107　那珂遺跡群 185 次（NAK-185）

所 在 地　博多区竹下５丁目 444
調査原因　介護施設建設
調査期間　2021.4.19 ～ 2021.8.10
調査面積　850.04㎡
担 当 者　池田祐司・鶴来航介
処　　置　記録保存



1．調査地点の位置（38　塩原　0085　S ＝ 1 /8,000）

調査の概要

調査地点は春日丘陵の西端、那珂遺跡群の中央部に位置する。現在の地表面から１m程度掘り下げた深さで鳥栖ローム層がひろがり､その上面で主に古代の遺構や遺物を発見した。

調査区北半ではロームの上層に黒褐色の土が堆積し、縄文時代の石器や弥生土器をふくむ。全体では８～９世紀の遺物をふくむ暗褐色土がローム層を覆い、その上に平安時代までの遺物をふくむ茶褐色土が堆積している。

古代では７世紀ごろの直線的な溝が南北方向と東西方向で検出され、両者が調査区南東部で接続することを確認した。７世紀後半に溝が埋没すると、８世紀には内側に浅い溝を掘削する。また数棟の掘立柱建物跡がみとめられるが、これらの年代は溝よりも新しい。

2．２区全景（東から）

2108　久保園遺跡６次（KBZ-6）

所 在 地　博多区上臼井字屋敷２９５番
調査原因　気象レーダー建設
調査期間　2021.4.19 ～ 2021.6.28
調査面積　200㎡
担 当 者　常松幹雄
処　　置　記録保存

1．調査地点の位置（22　上臼井　0083　S＝1/8,000）

2．調査区全景（北から）

調査の概要

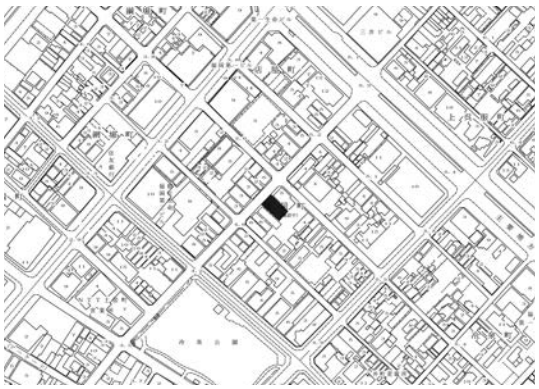
久保園遺跡は、月隈丘陵から裾部にかけての平地に立地している。調査地は、丘陵裾部の西端の福岡空港内に位置している。開発が予定されている 14m 四方を調査区に設定した。

地表の標高は９m。地表から 1.5 ～ 2.5 m下の面で黄白色の花崗岩バイラン土層が確認された。調査区東の GL － 1.5 m下で丘陵裾に沿った幅 2.5 mの道路跡を検出した。道路跡は近代の地図でも確認されることから、空港が整備されるまで使用されたとみられる。道路面の下層約 50cm で遺物包含層を確認。上面で弥生の遺物包含層を切る南北方向の溝（8 世紀頃）を検出。下面では弥生中期～後期の小土坑を確認した。

西側の GL － 2.5 mで弥生中期～後期の溝（水路）・土坑・柱穴が検出された。溝は久保園３次と席田大谷６次調査区で検出された谷から派生する河川につながるものとみられる。

2109　博多遺跡群 247 次（HKT-247）

所 在 地　博多区店屋町 104，105 番地
調査原因　テナントビル建設
調査期間　2021.4.26 ～ 2021.8.31
調査面積　262.31㎡
担 当 者　佐藤一郎
処　　置　記録保存



1．調査地点の位置（49　天神　0121　S＝1/8,000）

2．063 Ⅰ層下面（北西から）

調査の概要

博多遺跡群は福岡平野の中央、那珂川河口右岸に位置し、博多湾岸に沿って形成された古砂丘上に立地する。今回の調査地は遺跡の中央やや南寄り、古砂丘縁辺の入り江に面し、近辺の調査では砂丘砂は確認されていない。

最初の遺構面である現地表下 1.5m の（標高 3.0m）上面で、16 世紀末～ 17 世紀初頭の井戸・土坑・石積土坑、下面では上面で検出漏れの遺構、16 世紀後半の溝・土坑を検出した。石積土坑は南側に集中して分布していた。

遺構や包含層から土師器小皿・杯片、肥前陶器碗皿他、備前陶器すり鉢・甕、明代の白磁・青磁・青花の碗・皿、木製品では曲物・下駄・折敷の他、鉄製品では釘・刀子、製鉄関連では鉄滓・鞴羽口、銅製品では銭貨の他、繭形分銅、笄、掛け仏などが出土した。自然遺物では獣骨・魚骨が出土した。

2110　箱崎遺跡 118 次（HKZ-118）

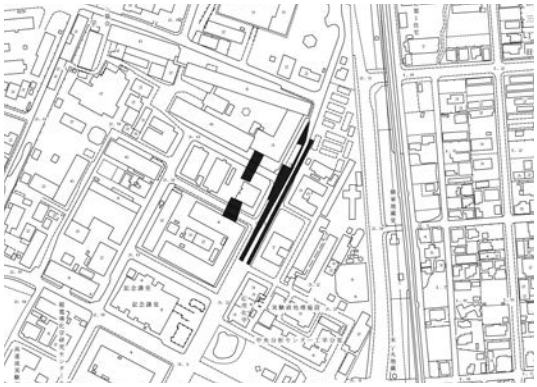
所 在 地　東区箱崎６丁目 10-1
調査原因　都市計画道路建設
調査期間　2021.4.12 ～ 2021.6.30
調査面積　2040.22㎡
担 当 者　吉武学
処　　置　記録保存

調査の概要

箱崎遺跡は博多湾岸の砂丘上に立地する平安時代末から室町時代の遺跡で、調査地点は遺跡の北端部にあたる。標高２ｍ前後の砂丘上に位置し、元寇防塁の東に隣接する。

今回の調査地点は旧九州大学の建設・解体による削平・破壊が著しく、遺構が確認できた範囲は一部に留まる。確認した遺構は、室町時代～江戸時代初期のピット少数・土坑１・溝１で、出土遺物は土師器、須恵器、中国産陶磁器、漁網用の土製のおもりなどコンテナケース４箱あるが小片が多い。

今回は前年度調査区東西を南北に長く調査し、一部で室町時代～江戸時代初期の遺構と遺物を発見したが、この時代にはすぐ西に元寇防塁の高まりがまだ残っていたと考えられることから、海風を避けることのできる空間に漁業などを生業とする人々が生活した可能性も考えられよう。



１．調査地点の位置（33　貝塚　2639　S＝1/8,000）

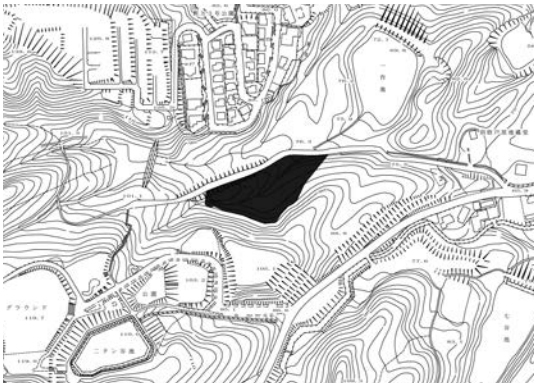
２．９・10 区全景（南から）

2111　羽根戸古墳群 11 次（HDK-F-11）

所 在 地　西区大字羽根戸地蔵尾８７６ － １
調査原因　土地造成
調査期間　2021.4.21 ～ 2021.8.11
調査面積　1027㎡
担 当 者　荒牧宏行
処　　置　記録保存

調査の概要

標高 80 ～ 83 ｍの丘陵斜面に位置する。支群のＦ群に含まれ、４基が並び、１号、２号は昭和 53 年に既に調査され消滅している。今回、３号と４号が調査対象である。３号は方形プランに近い小型の玄室である。天井石は欠損している。４号の石室は天井石まで遺存する。墳丘前面の左右にテラスを有し、その直上には玄室内に副葬されていた遺物と考えられる土器や鉄製馬具が出土した。その中には木棺に取り付けられたとみられる鐶座金具や朝鮮半島系の土器に形態が類似する鏃も含まれる。外護列石は３号、４号ともに付設され、墳丘のおよそ、1/4 分割で石材の大きさや工法が異なる。築造時期は３号、４号ともに７世紀前半代とみられるが、石室形態から３号が後出であろう。出土遺物は８世紀前半までみられ、その時期までの追葬が考えられる。

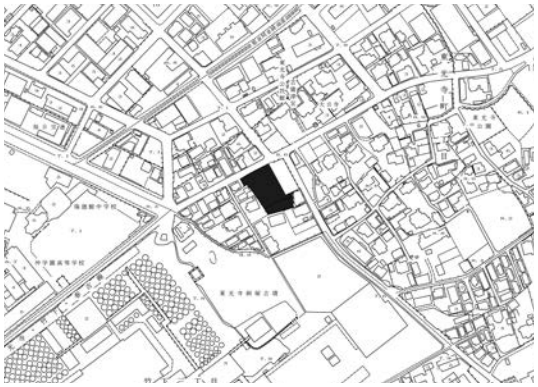


１．調査地点の位置（105　叶岳　556　S＝1/8,000）

２．　３号墳・４号墳全景（南東から）

2112　那珂遺跡群 186 次（NAK-186）

所 在 地　博多区東光寺町 1 丁目 334 他 7 筆
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2021.5.17 ～ 2021.7.30
調査面積　477.46㎡
担 当 者　屋山洋・田中健
処　　置　記録保存



1．調査地点の位置（37　東光寺　0085　S ＝ 1 /8,000）

調査の概要

第 186 次調査地点は遺跡群の北側に位置し、遺構面の標高は 8m 前後を測る。

今回検出した遺構は、古代の掘立柱建物 3 棟、古墳時代の竪穴建物 1 軒、中世の堀 3 条、中世の溝 3 条、古代の井戸 1 基、その他に柱穴・ピット多数である。

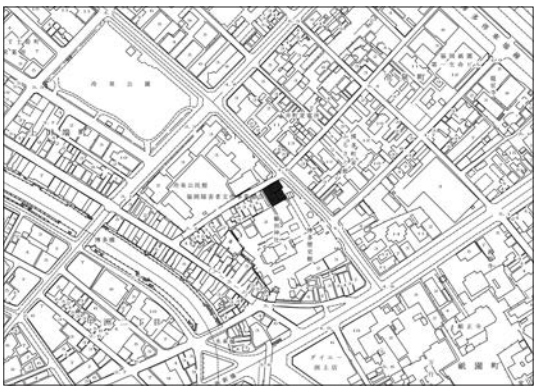
調査区南東において弥生土器を含む柱穴が確認されたことから弥生時代の掘立柱建物が存在した可能性がある。竪穴建物は確認できた範囲では一辺約 5 m である。時期は古墳時代前期であると考えられる。3 条の堀はいずれも調査区西側に位置し、いずれも南北方向に延びる。堀、溝はいずれも中世の時期であり、区画溝とみられる。

調査結果から本調査地点において弥生時代～中世にかけて居住域が形成されていたことを確認するととができた。

2．調査区全景 (東から)

2114　博多遺跡群 248 次（HKT-248）

所 在 地　博多区上川端町 47 番，48 番，49 番 2，12 番 2
調査原因　集会所建設
調査期間　2021.6.22 ～ 2021.9.30
調査面積　323.46㎡
担 当 者　木下博文
処　　置　記録保存



1．調査地点の位置（49　天神　0121　S ＝ 1 /8,000）

調査の概要

博多遺跡群は、博多湾岸に沿った 3 列の砂丘上に立地する複合遺跡である。今回の調査地点は最も内陸の砂丘の南西部、櫛田神社の北隣に位置する。敷地の北側に位置する旧冷泉小学校跡地内では、中世博多の港湾施設とみられる石積み護岸が検出されている。また付近一帯は鎌倉時代後期に設置された鎮西探題の推定地とされており、中世博多の最重要地域である。

今回の調査では、古墳時代前期の竪穴建物・土坑、平安時代末期の土坑、江戸時代の瓦組井戸・土坑・石組遺構・溝を検出した。出土遺物は布留式の土師器甕・小型丸底壺、平安時代末期の中国産磁器椀・銅銭（大観通宝）、土師器皿、江戸時代の染付・瓦・銅銭 (寛永通宝) などコンテナ 60 箱分である。

2．3 区全景（西から）

2113　野多目C遺跡７次（NMC-7）

所 在 地　南区野多目２丁目 328-1、329-1、335-2
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2021.5.19 ～ 2021.6.11
調査面積　249.1㎡
担 当 者　清金良太
処　　置　記録保存

調査の概要

１.調査に至る経緯

令和３年３月 26 日付けで、当該地における埋蔵文化財の有無についての照会文書が提出された（事前審査番号 2020－２－1107）。

これを受け令和３年４月 15 日に申請地の試掘調査を行ったところ、GL-22㎝から溝２条を確認した。事業面積 957.38㎡のところ共同住宅建設により遺構が破壊される 282.63㎡を調査対象面積とした。

発掘調査は 2021 年５月 19 日から調査区の掘削作業を開始し、同年６月 11 日に作業を終了した。

２.位置と環境

野多目C遺跡は、福岡平野を北流し那珂川中流域の左岸に形成された、河岸段丘上に立地している。遺跡内では、これまでに６次にわたる調査が行われ、本調査区は野多目A遺跡と接する。西隣では第５次調査が行われ、８世紀前半の土師器・須恵器片、縄目叩きの瓦片が少量ではあるが出土している。また、野多目小学校建設の際に発掘調査が行われ、奈良時代、中世の堰・柵などの遺構がみられ、内行花文鏡をはじめとし、縄文時代～近世までの幅広い時代の土器が確認されている。今回報告する第７次調査では、溝が１条、近世の土坑が３基検出されている。

３.調査の記録

１）溝 (SD)

SD005(第４図) 幅約 1.14 m、深さ 0.34 mの溝である。埋土は暗茶褐色粘質土に礫が混じっていた。

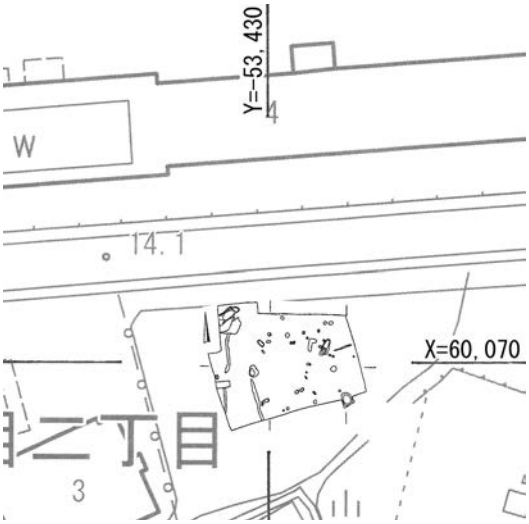
２) 土坑 (SK)

SK001(第４図) 平面形は南北に細長い形で、0.88 × 2.38 m、深さは 0.38 mを測る。遺物は出土していない。

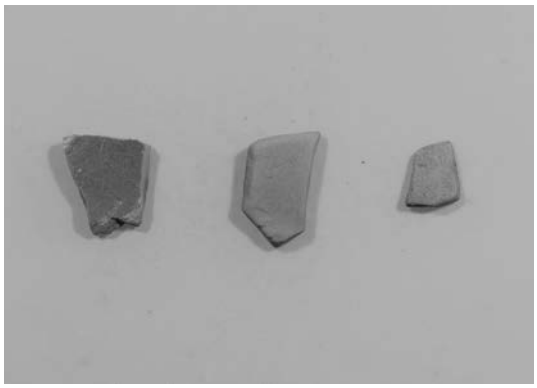
SK002(第４図) 楕円形を呈し、1.24 × 1.7 m、深さ 0.58 mを測る。２層から土師器片が１点出土した。

SK003(第４図) 大きさ 1.44 × 1.18 m、深さ 0.53 mを測る。磁器片１点と土師器片数点が出土した。（写真３）

１．調査地点の位置（40　老司　0147　S＝1/8,000）



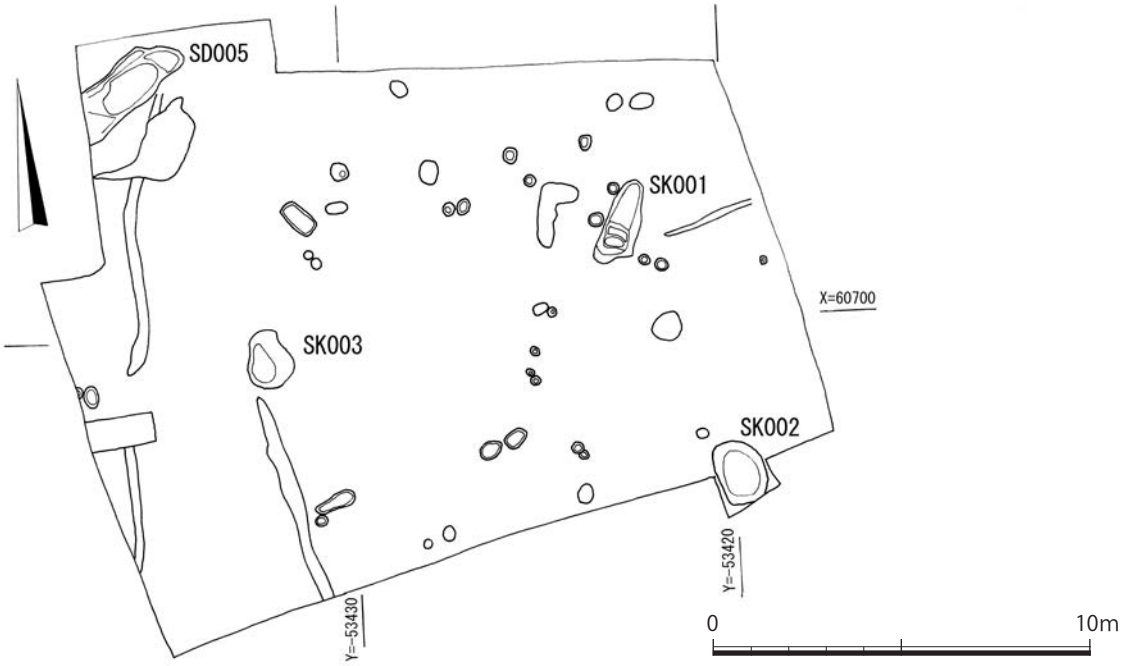
2．調査区位置図（S＝1/1,000）



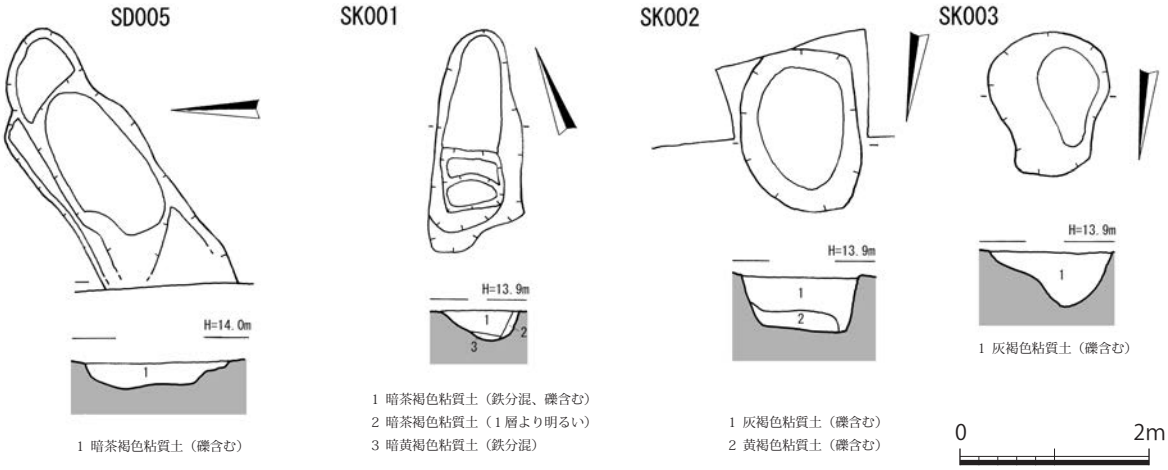
３．出土遺物

4.小結

調査前は水田で、約 0.2 から 0.3 m重機で掘り下げを行った。遺構面は、標高約 13.8 mとフラットであった。野多目小学校敷地内で行われた発掘調査の遺構面が標高 13.4 ～ 14.8 mなのでそれほど変化はない。今回の調査地点は野多目 A 遺跡の野多目 C 遺跡が交わる縁辺部であり、遺構の少なさもそれに起因していると考えられる。２基の土坑から土器が出土したが、共に近代の土器である。



4．調査区全体図（1/200）



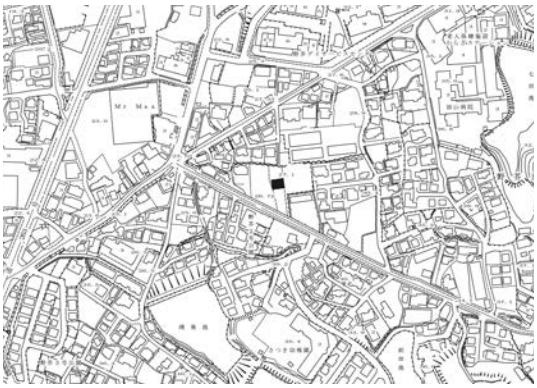
5．SD005・SK001・002・003 実測図（1/80）

6．調査区全景 (北から)

7．調査区北西部 (西から)

2115　野芥遺跡 21 次（NKE-21）

所 在 地　　早良区野芥５丁目 378 番 12
調査原因　　個人住宅建設
調査期間　　2021.7.1 ～ 2021.7.21
調査面積　　62.15㎡
担 当 者　　三浦萌
処　　置　　記録保存



1．調査地点の位置（84　重留　0319　S＝1/8,000）

1.調査に至る経緯

令和３（2021）年４月２７日付けで、当該地における埋蔵文化財の有無についての照会文書が出された（事前審査番号 2021-2-49）。過去の試掘報告や周辺調査結果から遺構が残っていることは明らかであったため、埋蔵文化財課事前審係は申請者と協議を行った。その結果、戸建住宅１棟を建設する範囲において発掘調査を行うことで合意した。

調査は令和３（2021）年７月１日に開始し、同月２１日に終了している。

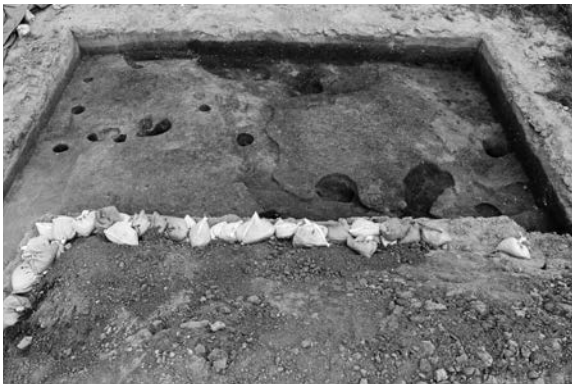
2.位置と環境

野芥遺跡は油山北麓に位置する旧石器から中世にわたる遺跡である。東にクエゾノ遺跡、北西に野芥大藪遺跡が位置する。２１次調査地は遺跡の南端に位置している。調査区と東側で面している道路部分では２０次調査が、２０次調査を挟んで西側では２２次調査が行われている。２０次調査では古墳時代後期から古代を中心とした集落跡が発見されている。

3.調査の記録

現地表下 60 ～ 80cm で遺構面である白色の礫を多く含んだ黒褐色砂質土に到達する。廃土処理の関係上、まず北半部の調査を行い埋め戻した後に南半部の調査を行った。今回発見された主な遺構は竪穴住居址１軒と土坑、ピットが複数である。

現地表下 60 ～ 80cm で遺構面である白色の礫を多く含んだ黒褐色砂質土に到達する。廃土処理の関係上、まず北半部の調査を行い埋め戻した後に南半部の調査を行った。今回発見された主な遺構は竪穴住居址１軒と土坑、ピットが複数である。



2．Ⅰ区全景（南から）

3．Ⅱ区全景（北から）

ＳＣ０２１

調査区南東で調査区外へ発見された竪穴住居址である。検出できた範囲で 2.6 × 2.7 m、深さ約 25 ～ 30cm の規模になる。伴う柱穴は２基。住居址の東辺部で焼土が多く検出されたことから、カマドはこのあたりにあったものと推測される。いわゆる赤焼土器が多く出土した。

出土遺物　１・２は甕である。１は口径 18㎝、頸部径 15.2㎝、残存高 9.4㎝。外面は口縁端部のみナデ、残りはタテハケ。内面は口縁部から頸部にかけてヨコハケを施しており、胴体部は上方向のケズリがみられる。２は口径 13.8㎝、頸部径 12.3㎝、最大胴径 16.85㎝、残存高 15.2㎝。外面胴体部はハケ後ナデか？内外面口縁部はヨコナデ、内面胴部はナデと思われる。３～５は土師器である。３は坏身である。須恵器の坏身の影響を受けていると考えられる。口径 11.9㎝、高さ 4.3㎝。内外面の胴体から口縁部にかけては回転ヨコナデ、内面底部は不定方向ナデ、外面底部はケズリである。胎土は橙色を呈し、いわゆる似非須恵土師

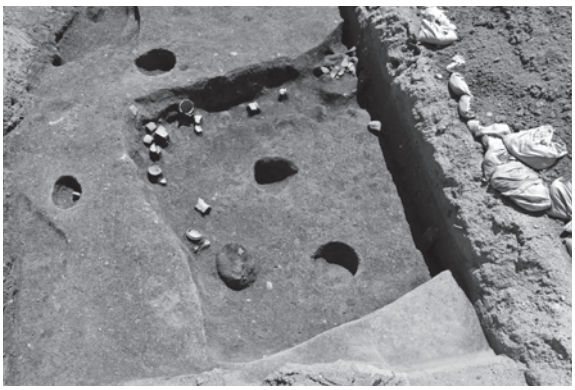
器であると思われる。４・５は高坏の坏部である。４は口径 14.7㎝、残存 4.5㎝。外面底部は回転ケズリ、胴部から口縁部は回転ナデである。内面は摩耗が激しく調整は不明である。胎土は橙色を呈す。５は口径 15.5㎝、残存高 4.5㎝。内外面調整は回転ヨコナデ、外面底部は回転ケズリである。胎土は橙色を呈す。６は高坏の脚部である。残存高 8.1㎝。外面にはおそらくカキ目が施されている。胎土は橙色を呈すが須恵器か。７は直口壺である。口縁部には不明瞭ではあるがカキ目がみられる。口径 6.8㎝、頸部径 6.95㎝、最大胴径 12.3㎝。胎土はにぶい橙色を呈すが須恵器か。８は須恵器の蓋坏である。口径 12.5㎝、高さ 3.9㎝。外面上部は回転ヘラケズリ、内外面胴部から口縁部は回転ヨコナデ、内面上部はナデである。

４.まとめ

今回発見された主な遺構は古墳時代後期の竪穴住居址１軒である。２０次調査において発見された集落の一部であると考えられ、その調査結果とあわせてみても住居址は南側に広がっているものと考えられる。

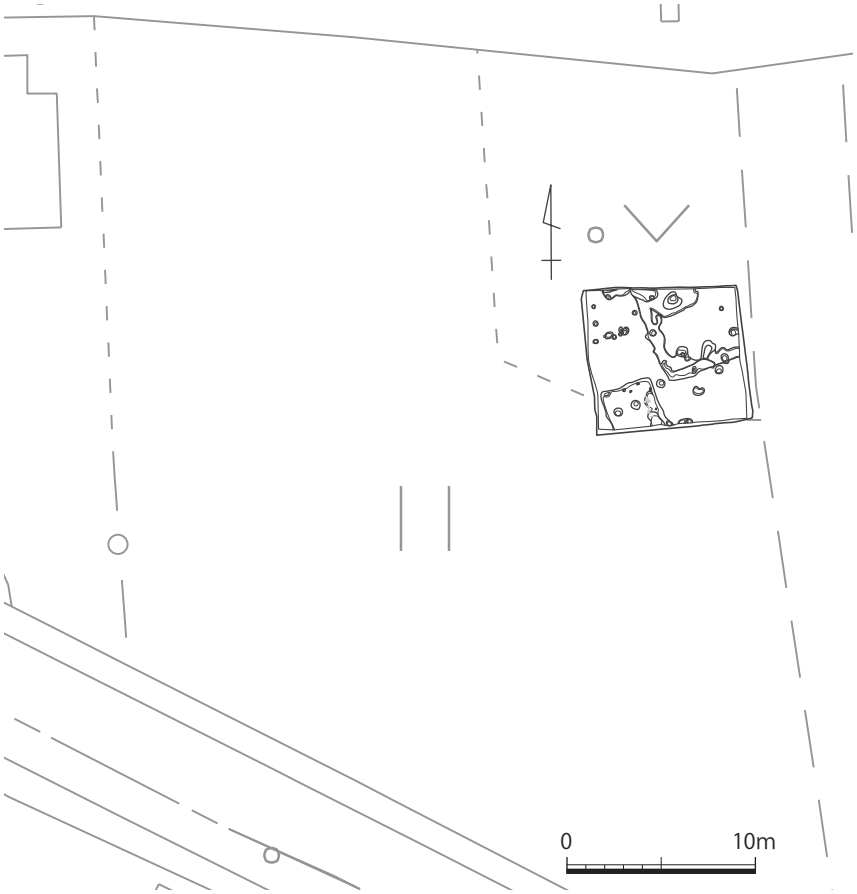
【参考文献】

・福岡県教育委員会 1982「Ⅲ．まとめ」『野間窯跡群』岡垣バイパス関係埋蔵文化財調査報告第１集

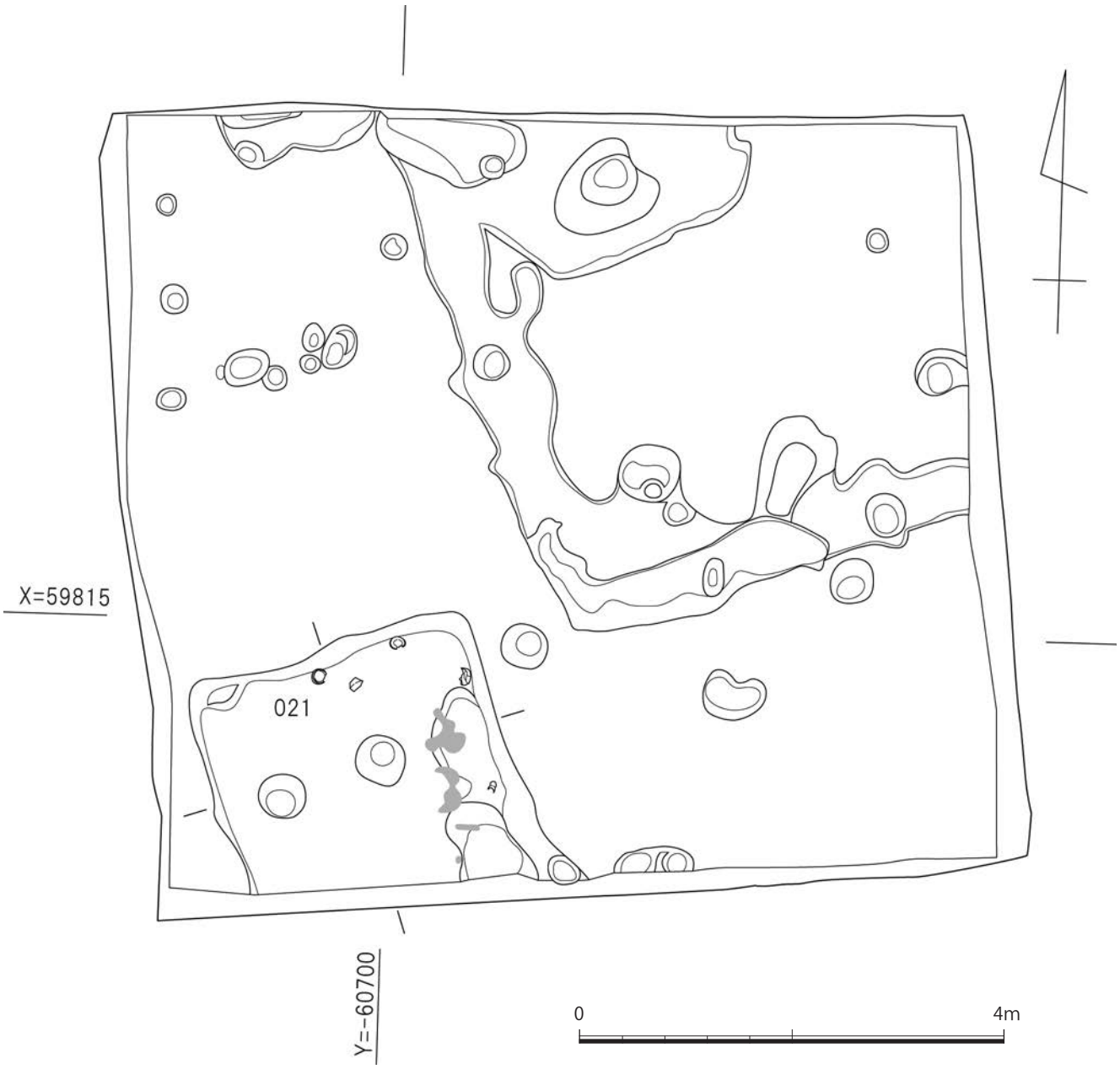


４．SC021（西から）

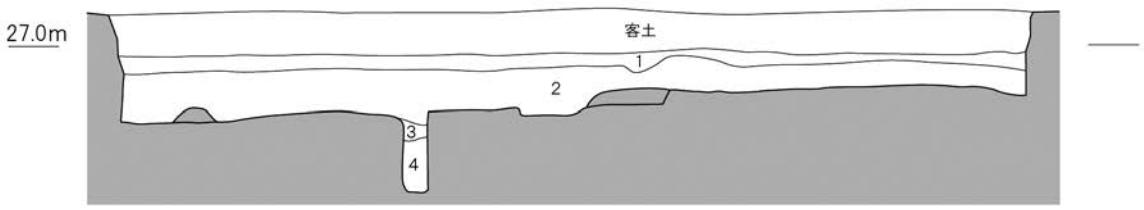
５．SC021 完掘（西から）



６．調査区位置図（1/400）

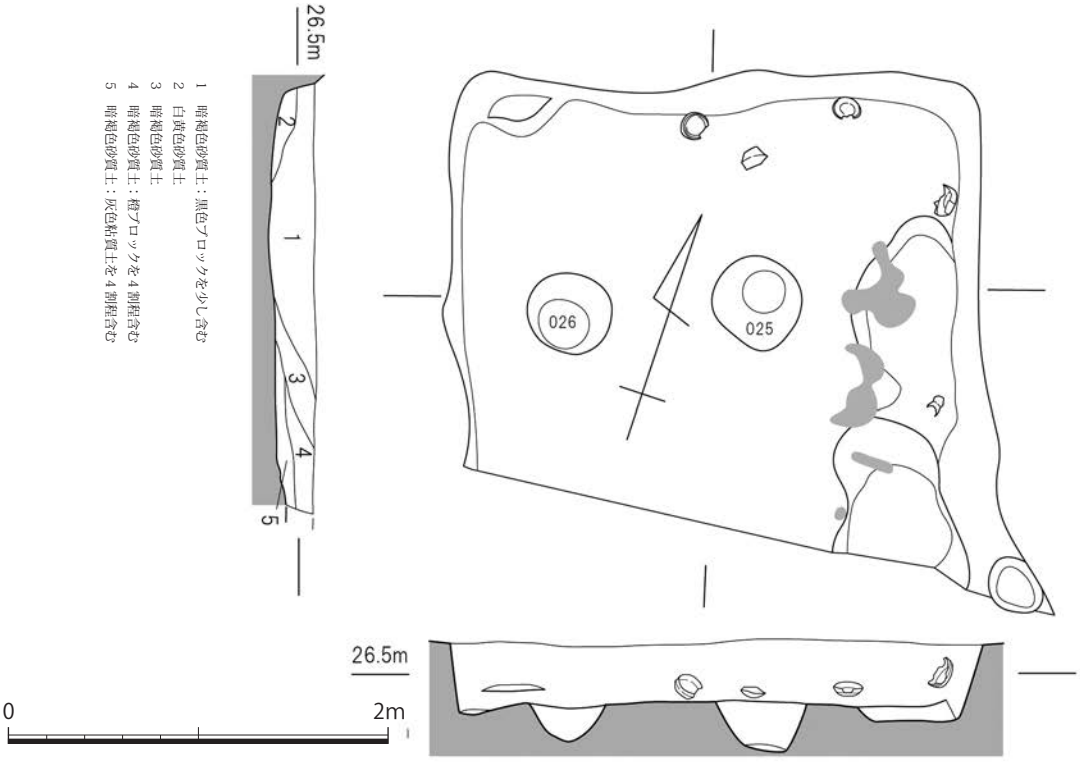


7．遺構配置図（1/60）

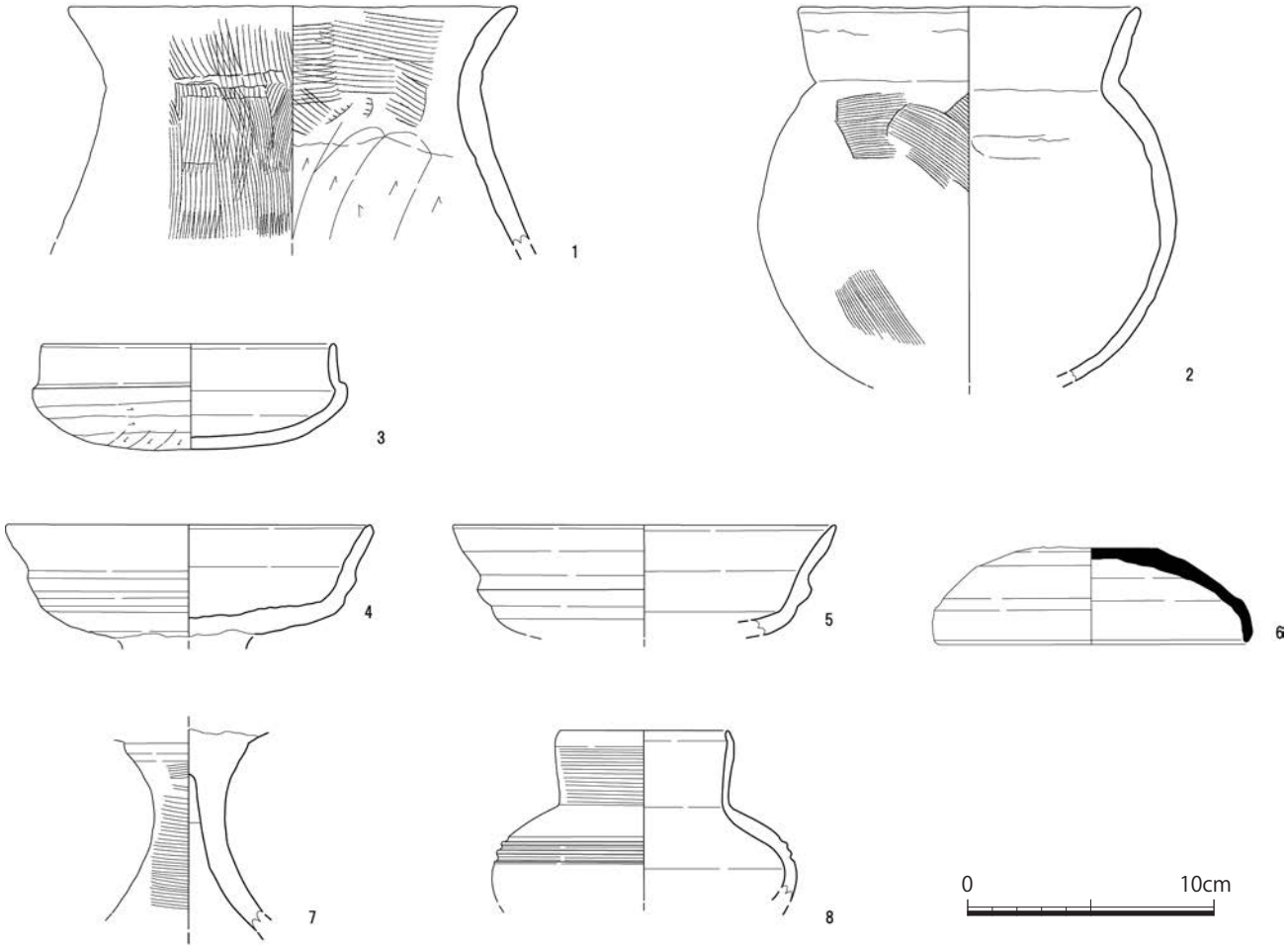


1　黄褐色土
2　暗褐色砂質土：3 cmほどの白色礫を含む。遺物を含む。
3　白黄色砂質土・：3～10cm ほどの白色礫を多く含む。
4　黄色細砂

8．東壁土層図（1/60）



9．SC021 遺構実測図（1/40）



10．SC021 出土遺物実測図（1/3）

2116　上籠遺跡２次（KAG-2）

所 在 地　西区戸切２丁目 601 － 1 他
調査原因　土地区画整理事業
調査期間　2021.8.18 ～ 2022.2.28
調査面積　3334㎡
担 当 者　清金良太
処　　置　記録保存

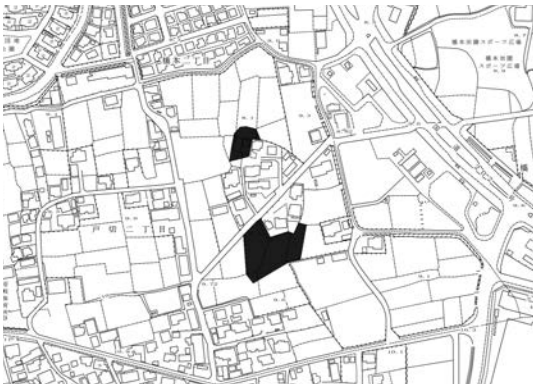
調査の概要

上籠遺跡は西区戸切に所在し、今回の調査が第２次調査である。調査区をⅠからⅢ区に分け、順に調査を行った。

Ⅰ・Ⅱ区は撹乱および削平が著しく、古代から中世の溝、土坑、ピット数基を検出した。

Ⅲ区も削平を受けてはいたが、掘立柱建物５棟、竪穴住居２棟、井戸２基、溝が検出された。掘立柱建物は弥生時代後期が２棟、９世紀が１棟、時期不明が２棟検出された。９世紀の建物は、柱穴に根石が確認できた。竪穴住居は大きく削平を受けており、明確な時期はわからなかった。井戸は２基発掘され、時期は９～ 10 世紀代である。

微高地上に遺跡があり、調査区東側、西側に包含層が広がっていた。西側の包含層は弥生時代後期～９世紀、東側は９世紀から 10 世紀代の遺物が確認できた。



1．調査地点の位置（92　戸切　2844　S ＝ 1 /8,000）

2．Ⅲ区全景（上が北）

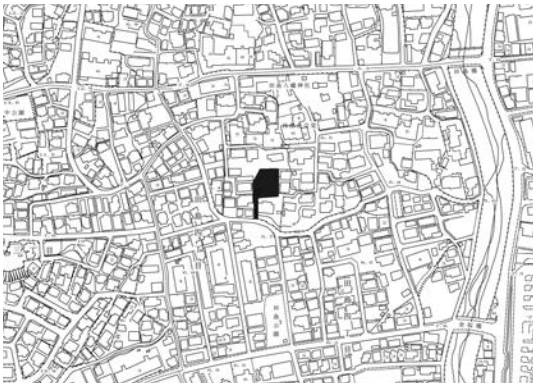
2118　田島 A 遺跡９次（TZA-9）

所 在 地　城南区田島４丁目 60 番 2、60 番 3
調査原因　宅地造成
調査期間　2021.7.19 ～ 2021.8.31
調査面積　74㎡
担 当 者　中園将祥
処　　置　記録保存

調査の概要

田島 A 遺跡は、早良平野の東端、油山から派生する平尾丘陵の西側先端部に位置する。この丘陵には、小さな谷が数多く開削され、いくつもの台地状の地形を形作っている。

今回の第９次調査地点は、東西約 250 m・南北約 550 m の台地の南側裾部に立地する。今回の調査では標高７m前後で、竪穴住居跡５軒・土坑３基・井戸１基・溝１条・ピット状遺構 21 基が検出された。竪穴住居跡は後世の攪乱等の削平を受けていたり、調査区外にも広がる事から、正確な規模は判らないが、井戸・土坑などと共に弥生時代後期から古墳時代前期のものと考えられる。ピット状遺構は深さが約 10 ～ 15㎝程の浅いものが多く、掘立柱建物跡を形成する柱穴になり得るかは不明である。溝からは、土師器・須恵器・瓦の破片も出土する事から、時代は古代であると考えられる。

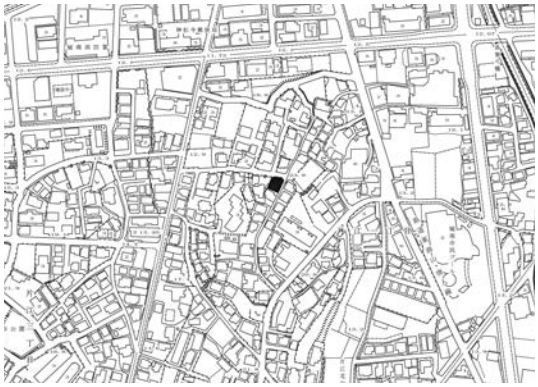


1．調査地点の位置（62　小笹　0199　S ＝ 1 /8,000）

2．調査区全景（南西から）

2117　片江Ｂ遺跡５次（KEB-5）

所 在 地　城南区片江１丁目 1074 番１他４筆
調査原因　個人住宅建設
調査期間　2021.7.15 ～ 2021.7.28
調査面積　62.44㎡
担 当 者　吉武学
処　　置　記録保存


１．調査地点の位置（63　長尾　0207　S＝1/8,000）

２．調査区全景（南東から）

３．北～西側の落ち（東から）

調査の概要

１．調査に至る経緯

令和３年（2021）６月７日、土地所有者より上記所在地における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が福岡市教育委員会に提出された（事前審査番号 2021-2-255）。申請地は周知の遺跡である片江Ｂ遺跡に含まれており、既に確認調査を行って遺構が存在することが判明していた。令和２年２月４日に行った試掘では地表直下で柱穴等の遺構を検出しており、工事による破壊は避けがたい状況であった。このため建物建設範囲について記録保存目的の発掘調査を行うことで地権者と合意し、調査費用については個人住宅建設に伴う調査であるため福岡市内規により全額国庫補助金負担とした。調査は重機により表土を除去したのち、人力による遺構検出等を行い、記録は全景・個別遺構の写真撮影、及び 1/20 縮尺の実測、1/100 縮尺の平板測量により行った。終了後、重機により埋め戻した。

２．位置と周辺環境

油山裾から北へ伸びた枝丘陵の尾根上に位置し、現状では段状造成された独立丘の頂部平坦面に立地する。標高 24 m 弱。北側は緩く落ちて行き、その先端に１次調査地点があり古墳時代後期の竪穴住居等を確認している。東西は急傾斜で落ち、特に西隣の宅地とは１m以上の段差がある。周辺の水田面との比高差は約 10 m。東側の緩斜面で２次調査が行われ中世を主とする建物等の遺構を確認している。

３．検出遺構

遺構面は黄～橙色の風化頁岩で削平を受けている。調査区の東半は地山が地表面に露呈しており、西へ緩く下る。遺構は残りが悪いがピットが４基検出され、うち３基に柱痕跡が認められ柱穴の可能性がある。弥生土器小片と黒曜石片が数点出土し弥生時代遺構とみられるが詳細時期は不明である。

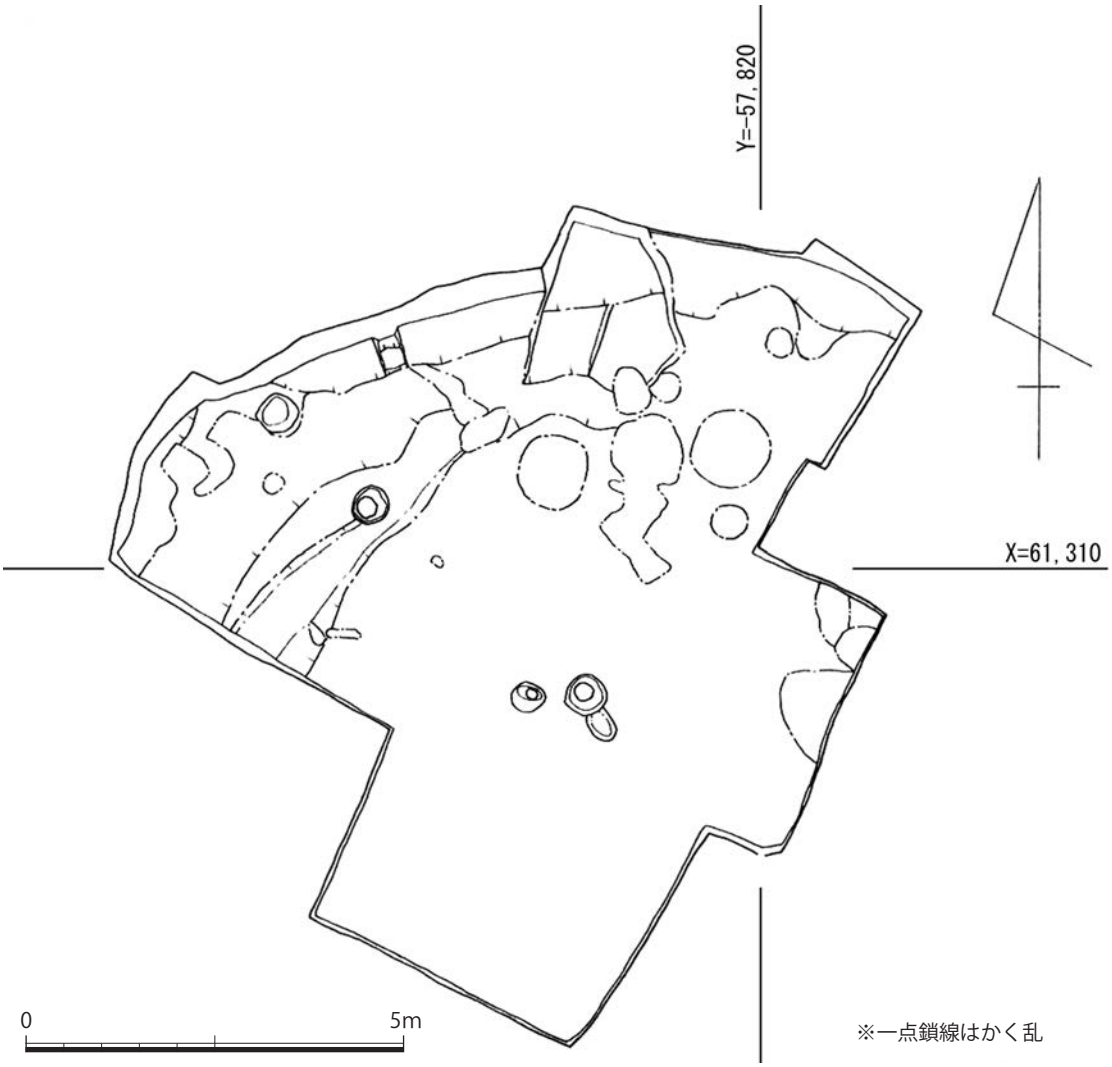
４．出土遺物

弥生土器・須恵器の小片、黒曜石チップなど数点がピット・斜面落ち際から出土したが、図示できるものはない。

５．まとめ

片江Ｂ遺跡では過去に４次の発掘調査が行われているものの、早くに宅地化したため遺跡の内容がほとんど不明であるが、今回調査により宅地下においてもまだ遺構が残る部分があることが判明した。

4．調査区位置図（1/500）



5．遺構配置図（1/100）

2119　那珂遺跡群 187 次（NAK-187）

所 在 地　博多区東光寺町 1 丁目 240 番、243 番、244 番
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2021.7.19 ～ 2021.9.14
調査面積　210㎡
担 当 者　常松幹雄
処　　置　記録保存

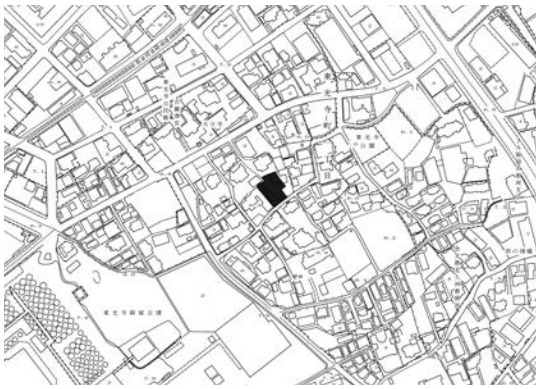
調査の概要

那珂遺跡群は，福岡平野の中央部、那珂川と御笠川にはさまれた標高９ｍほどの丘陵上に立地する。調査地は、那珂遺跡群の北、東光寺剣塚古墳の東に位置している。

遺構は、古墳時代から古代の掘立柱建物 、柱穴のほか近世の溝が検出された。調査区中央部のかく乱が著しい。

出土遺物は、古墳時代から古代の掘立柱建物、柱穴では６世紀後半から８世紀頃の須恵器や土師器が出土した。近世の溝では陶磁器類が出土した。

古墳時代から古代の掘立柱建物、柱穴は九州北部の６世紀後半から８世紀頃の様相を解明するうえで重要である。



1．調査地点の位置（37　東光寺　0085　S＝1/8,000）

2．調査区全景（東から）

2120　那珂遺跡群 188 次（NAK-188）

所 在 地　博多区東光寺町 1 丁目 240 番、243 番、244 番
調査原因　個人住宅建設
調査期間　2021.8.26 ～ 2021.9.13
調査面積　86㎡
担 当 者　常松幹雄
処　　置　記録保存

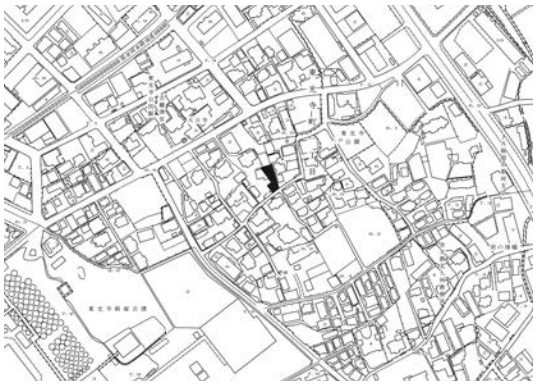
調査の概要

那珂遺跡群は，福岡平野の中央部、那珂川と御笠川にはさまれた標高９ｍほどの丘陵上に立地する。調査地は、那珂遺跡群の北、東光寺剣塚古墳の東に位置している。187 次調査区に東接。

遺構は、弥生時代の土坑や古代の柱穴が検出された。

出土遺物は、弥生後期の器台のほか古代の柱穴では６世紀後半から８世紀頃の須恵器や土師器が出土した。調査区中央はかく乱を受けている。

弥生時代後期から古代にかけての土坑や柱穴は断片的ではあるが、九州北部の２世紀から８世紀頃の様相を知るうえで重要である。



1．調査地点の位置（37　東光寺　0085　S＝1/8,000）

2．調査区全景（南から）

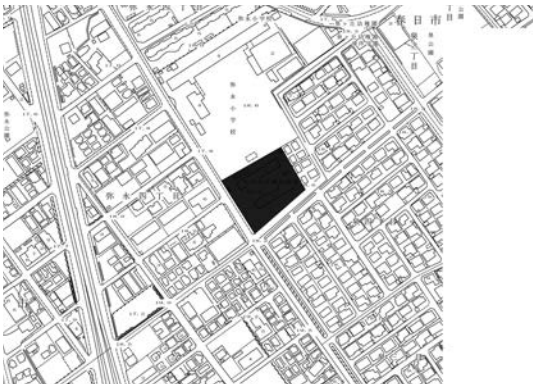
2121　警弥郷 B 遺跡 9 次（KYB-9）

所 在 地　南区弥永４丁目２番９
調査原因　宅地造成
調査期間　2021.8.2 ～ 2021.10.25
調査面積　541.61㎡
担 当 者　三浦萌
処　　置　記録保存

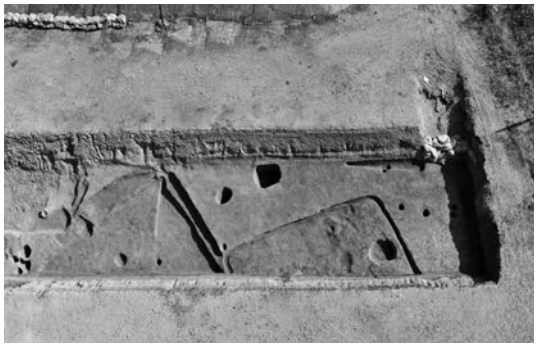
調査の概要

警弥郷 B 遺跡は那珂川中流域の右岸にある沖積微高地上に立地する。本調査区の南西では３次調査が行われており、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺構が見つかっている。

今回確認された遺構は弥生時代中期以降の竪穴住居３軒、溝２条と古墳時代前期の竪穴住居５軒、井戸が１基、その他ピットと土坑が複数である。３次調査では弥生時代中期から古墳時代前期にかけて集落が形成されたことが指摘されており、今回発見された遺構もその集落の一部であると考えられる。また３次調査で発見された溝（SD-01）の延長が当調査区で発見される可能性があったが、今回発見された溝は２条とも時期や位置が異なる。そのため延長部は確認できていない。



1．調査地点の位置（41　警弥郷　0158　S＝1/8,000）



2．SC002・003（西から）

2122　高畑遺跡 23 次（TKB-23）

所 在 地　博多区板付６丁目１－１
調査原因　警察学校道場体育館建替
調査期間　2021.9.1 ～ 2022.10.31
調査面積　1723㎡（2021 年度）
担 当 者　吉武学
処　　置　記録保存

調査の概要

本年度の調査範囲は、全調査対象範囲の６割弱に相当し、西側１区から掘削し排土を反転して東側２区を掘削した。ともに削平が著しく遺構の残りは悪かったが、旧地形の洪積台地が沖積低地へ向かって落ちていく南東側の緩傾斜面で多くの遺構が重なって検出された。主な遺構は、弥生時代の竪穴住居・貯蔵穴・土坑・井戸や台地を取り囲むように長く伸びる溝、古墳時代の竪穴住居・井戸などの集落遺構がある。古代には台地を北西－南東に貫く切り通しが確認され、大宰府（水城東門）と博多方面を結ぶ古代官道の痕跡と考えられる。官道廃絶後の中世には切り通し内は水路が通され水田として利用されている。

弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土錘等の土器、石庖丁などの石器がコンテナ 45 箱出土した。

1．調査地点の位置（24　板付　0095　S＝1/8,000）

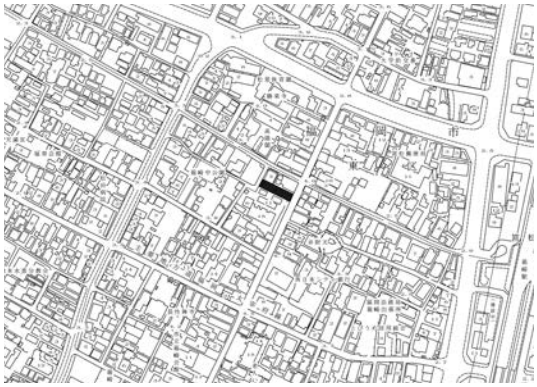
2．Ⅰ区全景（南東から）

2123　箱崎遺跡 119 次（HKZ-119）

所 在 地　東区箱崎 1 丁目 2485 番
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2021.9.1 ～ 2021.11.12
調査面積　182.72㎡
担 当 者　屋山洋・田中健
処　　置　記録保存

調査の概要

箱崎遺跡は博多湾に面した南北に延びる砂丘上に位置する。119 次調査地点は海に向かって傾斜する斜面上に位置し、12 世紀前半の平安時代末から鎌倉時代前期頃に盛土を行い平坦面を築いている。調査区中央には東西方向の溝がある。この溝の北縁に沿って、粗砂を含む細かな整地層があり、道路の可能性がある。また、南側には柱穴が集中しており、柵の存在が考えられる。溝を挟んで南側が柵、北側が道路で敷地の境界部分であると考えられる。その後も若干南北にズレながらも溝が掘られている。13 世紀後半から 14 世紀前半には厚さ 5 ～ 10㎝程の整地層があり、その上にも薄い整地が続く。その後、厚さ 20 ～ 40㎝程のやや雑な整地になり、14 世紀中頃には礎石やそれに伴うグリ石がみられるようになり、溝はみられなくなる。



1．調査地点の位置（34　箱崎　2639　S ＝ 1 /8,000）

2．Ⅰ区 2 面 (西から)

2124　顕孝寺遺跡 2 次（KKG -2）

所 在 地　東区多々良 1 丁目 789 番 1 他 4 筆
調査原因　宅地造成
調査期間　2021.9.5 ～ 2021.11.16
調査面積　159㎡
担 当 者　池田祐司
処　　置　記録保存

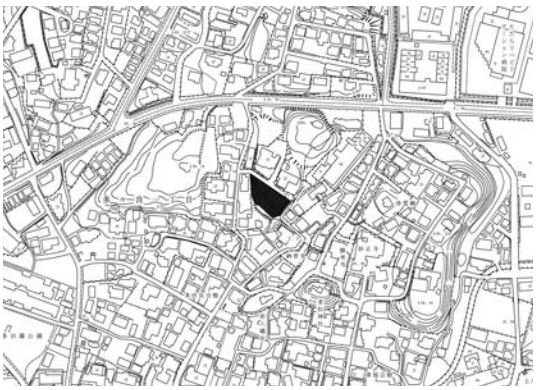
調査の概要

丘陵の端部、標高 14 mで高さ 1 mほどの高まりが調査対象である。対象地の東側では 6 基の弥生前期の貯蔵穴を検出した。西側は 6 棟前後の 6 世紀後半の竪穴建物を確認した。高まりは造成による残丘で周辺は大きく削平を受けている。

貯蔵穴は断面フラスコ状で、大きなもので最大径 2.4 m、残りの良いもので深さ 1.4 mである。2 基の底には炭化物の広がりがみられる。2 基からは形が残った甕、壺が出土した。石斧、石錘が各 1 点出土した。

竪穴建物は残りが悪く、また削平により床面や壁溝、竪穴の一部を確認したのみである。切り合いも多い。遺物は須恵器、土師器の甕、坏に加えてタコ壺 4 個が出土した。

竪穴建物の床では 1 × 1 間で束柱のある掘立柱建物を確認した。その 1 基から鉄斧が出土している。



1．調査地点の位置（19　多田羅　0076　S ＝ 1 /8,000）

2．調査区全景（北から）

2125　野芥遺跡 22 次（NKE-22）

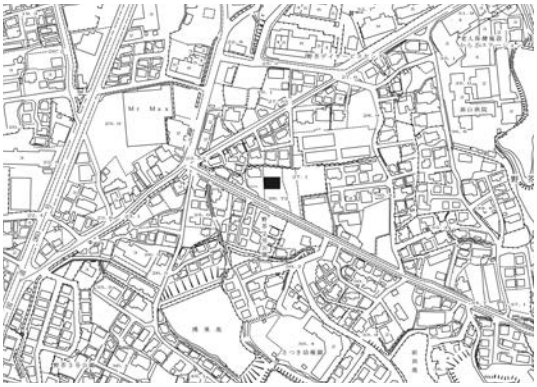
所 在 地　早良区野芥 5 丁目 378 番 9
調査原因　個人住宅建設
調査期間　2021.9.6 ～ 2021.9.24
調査面積　32㎡
担 当 者　荒牧宏行
処　　置　記録保存

調査の概要

野芥遺跡は早良平野の南東部、油山から派生する低位段丘上に立地する。

22 次調査地点は標高 26.2m の砂礫台地上に位置する。検出面の明黄白色の砂礫土は西側へわずかに下降し、褐色の砂礫土に変化する。

検出された遺構は柱穴が主で西側では少なくなる。東側では 2 × 2 間の総柱建物跡 1 棟が検出された。柱穴出土遺物から古墳後期とみられる。検出面上層の褐色砂礫土には遺物がほとんど含まれないが、遺構の可能性がある一部から弥生中期後半とみられる甕と丹塗り壷、蓋の大きな破片が出土した。隣接した道路部分の調査では竪穴住居跡等を含む遺構が比較的、密度高く検出されているので、集落の中心部は東側とみられる。しかし全体として出土遺物量は少ない。



1．調査地点の位置（84　重留　0319　S ＝ 1 /8,000）

2．総柱建物（南から）

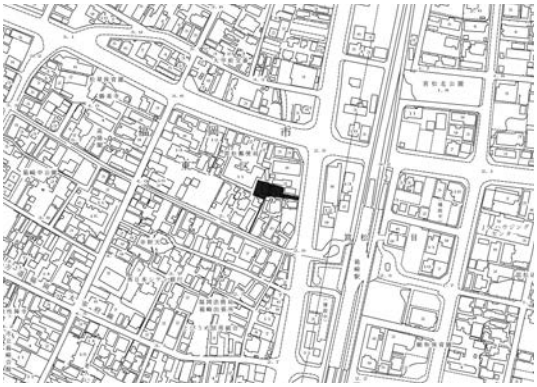
2128　箱崎遺跡 120 次（HKZ-120）

所 在 地　東区箱崎 3 丁目 8 － 46
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2021.9.15 ～ 2021.12.13
調査面積　187.5㎡
担 当 者　赤坂亨
処　　置　記録保存

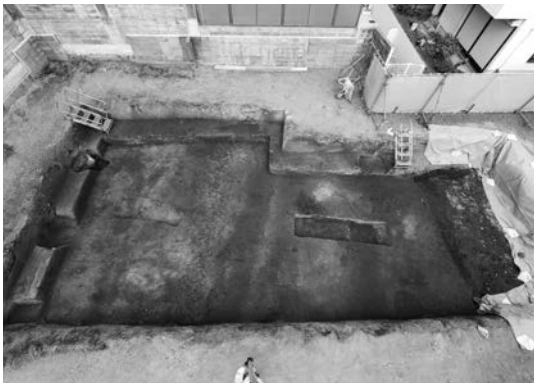
調査の概要

調査地点は箱崎遺跡の北東部に位置する。南側 1 区第 1 面は昭和以後の現代の生活面。第 2 面黒褐色砂質土が全面に広がり、1 区の南半では標高方向のリップルマーク（波状堆積）および杭列を確認した。第 3 面は砂丘面となり、第 2 面杭列と同方向の近世の溝を検出した。第 3 面北半西側では砂丘面で中世の土坑・ピットを検出した。北側 2 区第 3 面では、西半砂丘面から中世のピットが確認され、第 3 面中央では砂の縞状堆積（遺構なし）を検出した。第 3 面東半では近世末～近代遺物と炭を大量に含む包含層が堆積し、東端では包含層が段落ちし（SX-3）、近代遺物が出土した。

中世における箱崎遺跡の北東砂丘縁辺部における集落の様相、近世における唐津街道の宿場町箱崎宿の様相、近代の箱崎町の形成過程の一端が明らかになった。



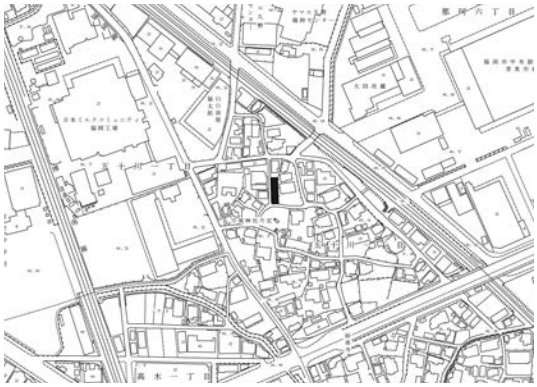
1．調査地点の位置（34　箱崎　2639　S ＝ 1 /8,000）



2．2 区　第 3 面全景（南から）

2126　五十川遺跡 24 次（GJK-24）

所 在 地　南区五十川 1 丁目 629 番 2，630 番 1
調査原因　個人住宅建設
調査期間　2021.9.6 ～ 2021.9.28
調査面積　103㎡
担 当 者　鶴来航介・野村俊之
処　　置　記録保存

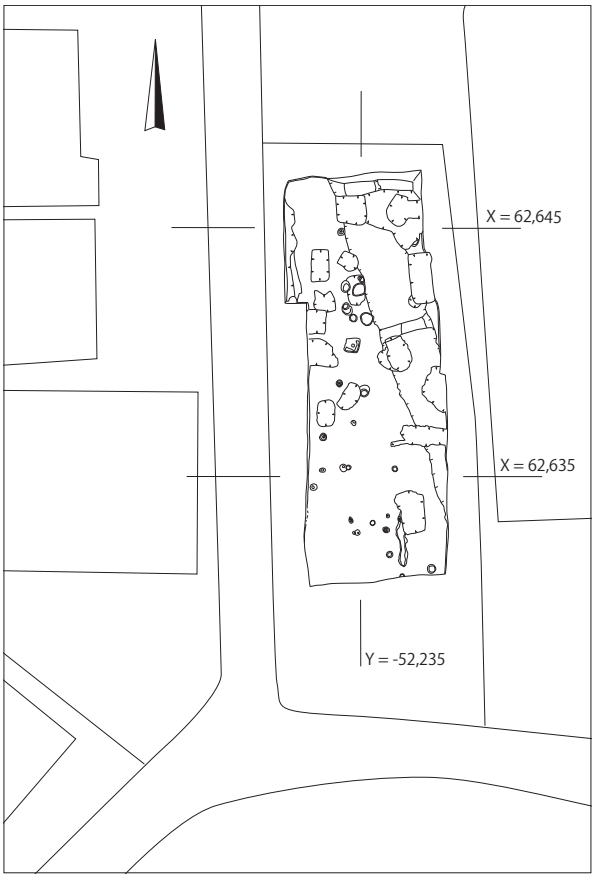


1．調査地点の位置（38　塩原　0088　S = 1 /8,000）

調査の概要

1．調査に至る経緯

令和３年７月 12 日付けで当該地にかかる埋蔵文化財の照会があった（事前審査番号 2021-2-405）。同課事前審査係では周辺の調査・試掘実績より表土直下に遺構が存在する可能性が高いと判断し、８月３日に確認調査を実施したところ、現地表面下 15cm の鳥栖ローム層上面で遺構を確認した。照会地では住宅部分の地盤改良および駐車場部分の切下げが計画されており、同係は遺構への影響が避けられないと判断した。協議の結果、遺構に影響の及ぶ範囲について発掘調査をおこなうことで合意し、個人事業に対する国庫補助を受けて調査を実施した。なお工事による削平の影響を受けない南側約 5.5m については現状保存としたほか、後述する SD01 は地盤改良の深度よりも深く、完掘のうえで埋戻すと地盤が脆弱になる恐れに鑑みて、全体を 15cm 程度段下げしたうえで２か所をトレンチ状に掘削し、残りを現状保存とした。したがって将来的に当該地で工事がおこなわれる場合は、同遺構に対する影響をあらためて確認する必要がある。



2．調査区位置図（S=1/300）

3．調査区全景（北から）

4．SD01 トレンチ１土層（南から）

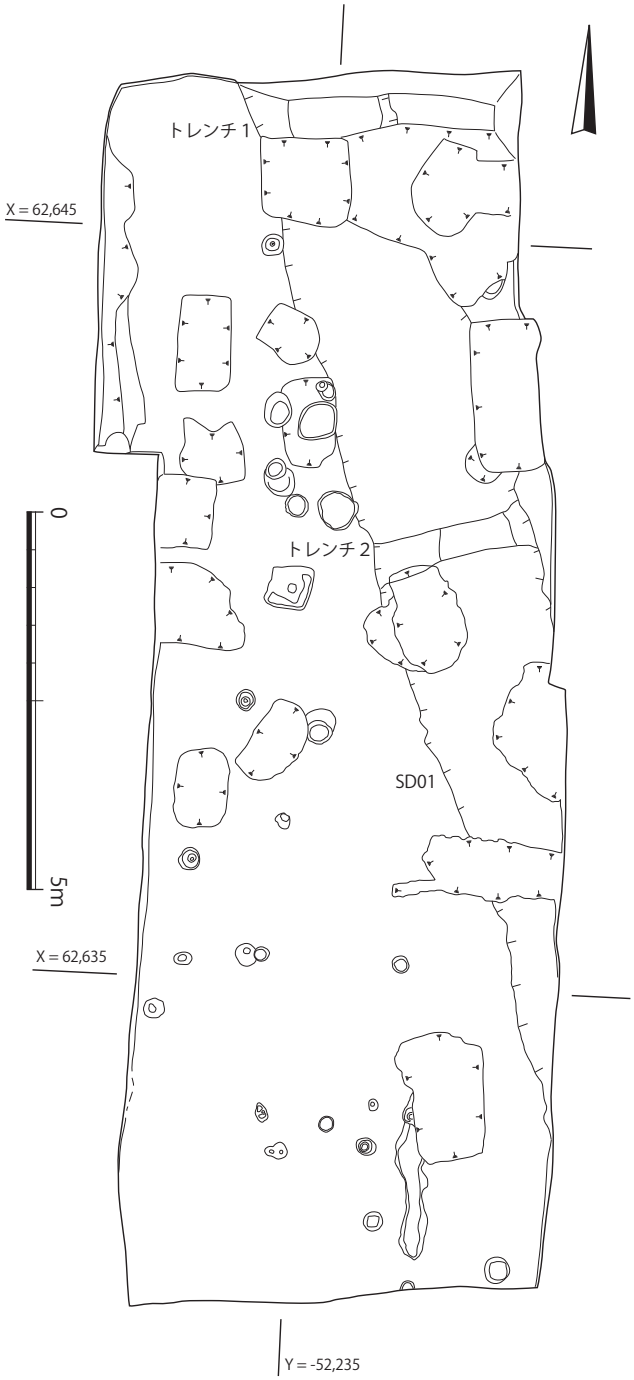
２．位置と環境

五十川遺跡は那珂川と御笠川が削り出した洪積台地、中位段丘上の北側に立地する。北側は鞍部を挟んで那珂遺跡群と対峙し、南側は狭小な谷をこえて井尻Ｂ遺跡が隣接する。これまでに 26 次の調査を重ね、弥生時代以降は近世まで断続的に遺構をみとめるが、なかでも弥生時代前期後半、古墳時代前期、中世で遺構の密度が高く、活発な土地利用がうかがえる。今回の調査区は遺跡のほぼ北端に位置する。遺跡の北側は調査実績に乏しく様相の不明な部分も多いが、本調査区の北側に隣接する 12 次調査では古墳時代後期の土坑や古代の布掘り溝、中世後期の溝などが見つかっている。道路を挟んで南側には今宮神社古墳が所在する。

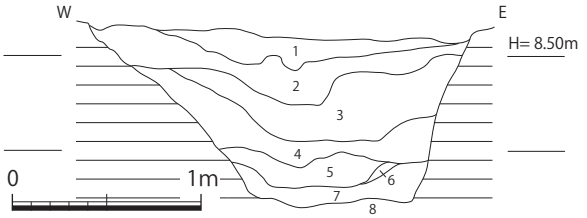
３．調査の記録

遺構を検出した鳥栖ローム層は、調査区北端で現地表面下から最大 15cm 程度、南側では表土を２～３cm 剥ぐと確認され、削平の影響を強く受けていると思われる。また全体に攪乱による影響も受けている。全体に遺構の密度は低く、とくに南側ではほとんど確認できなかった。溝２条、ピット９基を検出した。出土遺物はパンケース１箱分である。

SD01　Ｎ－22°－Ｗの方位で直線的にのびる溝である。調査区内では総延長 14.6m を検出し、検出面での最大幅は 2.2m、底部幅は 0.8 ～ 1.1m である。最大深度は 100cm を測り、底が平坦であるため断面が逆台形を呈する。西岸が 40 ～ 50 度ほどの傾斜で掘り込むのに対して、部分的に確認し得た東岸は 60 ～ 70 度の急角度となっている。南側は古墳の手前で収束するか東西へつづくとみられる。埋土は上層が黄褐色砂質土、下層が褐灰色粘質土と分かれており、砂質土の最下部には鉄分が沈着して赤褐色を呈する。下層はしまりの良好な堆積である一方、上層はボロボロと崩れやすい。遺物は



５．遺構配置図（S=1/100）



1　暗黄灰色土（鉄分・炭ふくむ）
2　にぶい黄褐色粗砂
3　にぶい褐色粗砂
4　にぶい黄橙色粗砂（赤褐色土ブロックふくむ）
5　褐灰色土（10cm 大の褐色ブロック混じり）
6　暗赤灰色粗砂（微量の鉄分）
7　赤灰色粘質土（鉄分沈着、砂をふくむ）
8　にぶい黄褐色粘質土（地山）

６．SD01 断面図（S=1/40）

上層で多く、下層ではあまり出土していない。なお、冒頭でも述べたように地盤の強度に対する懸念から遺構の大部分が未掘削であり、今後あらためて深く掘り込む工事が実施される際には再調査をおこない、遺構の評価も見直す必要があることを付言しておく。

その他の遺構　調査区の西側で直列する３基のピットを検出した。互いに 2.1 ～ 2.2m の間隔をとり、いずれも底部の深度が一致し、うち北側の２基で柱痕跡の堆積を確認した。東側では対応する柱穴を発見し得なかったため、西側に建物が展開するものと考えられる。遺物を伴わないため時期は不明である。

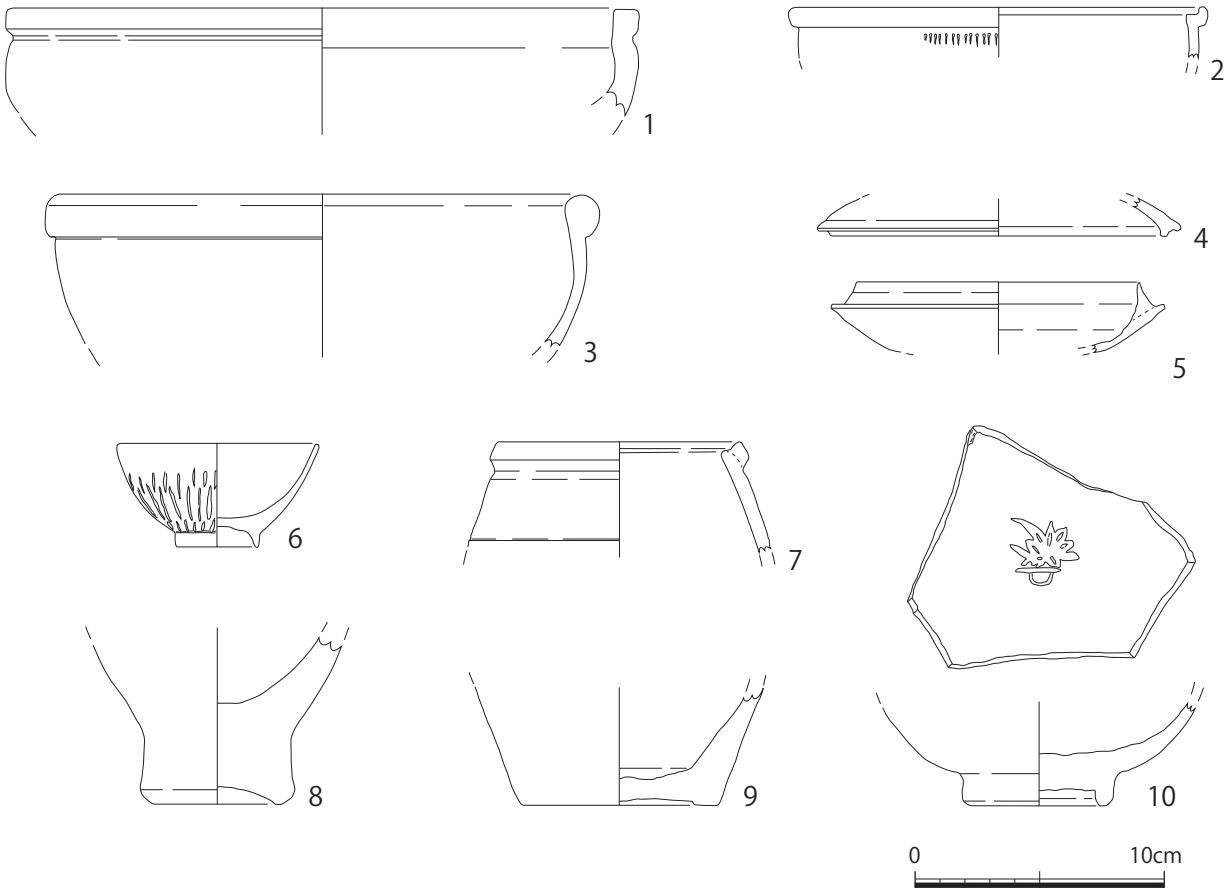
出土遺物　１～６は包含層など遺構外から出土、７～ 10 は SD01 から出土したものである。１は近世の甕で外面のみ施釉。２は施釉陶器の口縁部で外面に列点状の文様を施す。近世～近代。３は青磁の大型碗。４・５はそれぞれ須恵器の坏蓋と坏身で、いずれも７世紀前半。６は青磁の小碗で近世後期。７は陶器の壺の口縁部。８は弥生土器の甕底部で中期初頭。９は陶器の壺の底部で 13 世紀ごろ。10 は龍泉窯系青磁碗の底部。見込みに印花文を施す。

４．小結

SD01 の埋没時期は、トレンチ２中層より出土した 10 の青磁から 14 世紀以降と考えられる。ただし弥生時代の遺物が多くふくまれることから、周辺に同時期の居住域が展開した可能性が想定できる。

本調査は調査実績の少ない遺跡北側の様相を検討する貴重な機会となった。遺構は未発見ながら弥生土器や黒曜石の剥片が出土したことで、弥生時代以前より当該地で活動痕跡を見いだした点はひとつの成果と言える。SD01 は調査区外に向かって南北へまっすぐのびることを確認した。その規模から中世居館の区画溝の可能性が考えられ、溝の西側に遺構がまばらであることを勘案すると、東側に居館の存在が推定される。

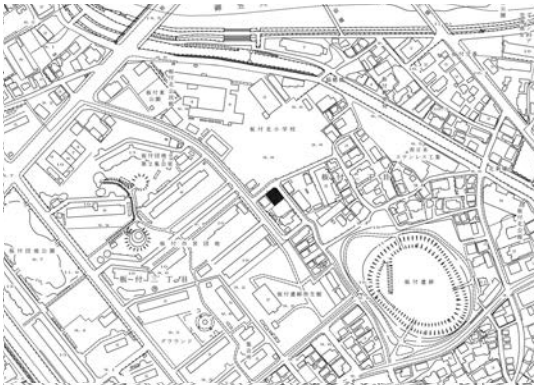
また今宮神社古墳に関連する遺構も当初想定されたが、調査区内では発見されなかった。古墳の周溝が遺存しているとすれば、神社の西半をめぐる道路部分とみられる。



７．出土遺物（S=1/3）

2127　板付遺跡 76 次（ITZ-76）

所 在 地　博多区板付２丁目 10 － 9 の一部
調査原因　個人住宅建設
調査期間　2021.9.1
調査面積　9.4㎡
担 当 者　森本幹彦・山本晃平
処　　置　記録保存



1．調査地点の位置（24　板付　0094　S ＝ 1 /8,000）

調査の概要

１．調査に至る経緯

令和３年８月５日付けで、当該地における埋蔵文化財の有無についての照会文書が提出された（事前審査番号 2021-2-501）。申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である板付遺跡に含まれており、周辺の確認調査から水田の存在が想定される地点であった。

今回の工事は杭工事を伴うものであったため、遺跡への影響は避けられない状況であった。しかし調査対象面積が狭いことから、簡易的な調査を行うことで対応することにした。

調査は令和３年９月１日に行い、同日に終了した。

２．調査の概要

板付遺跡は福岡平野のほぼ中央に位置する遺跡である。今回の調査地点は板付遺跡内の北側に位置する。調査対象範囲は建築建物範囲であったが、対象範囲を横断するように東西方向に埋設管が入っていた。そのため埋設管の北側をⅠ区と設定し調査を行うことにした。

2.　Ⅰ区１面全景（北東から）

遺構面は砕石（20㎝）、造成土（50㎝）、旧耕作土（20㎝）、灰褐色砂（5㎝）を取り除いた黄褐色粘質土上面（GL-95㎝）を１面目とした。遺構検出の結果、およそ東西方向に延びる溝が１条とそれに切られた水田と考えられる層とピット数基を検出した。水田層の上面には足跡（埋土が黒褐色土）があったが、畦畔は確認できなかった。そのあと調査区の中央部分を掘り下げ、下層の状況を確認した。２面目は黒色粘質土上面（4　B-B´の７）とした。上面には足跡と思われる痕跡はあったが、明確に足跡と断言できない。また畦畔は確認できなかった。最後に一部を深堀りしてさらに下層の状況を確認し（C - C´）、記録後埋め戻してⅠ区の調査を終了した。

Ⅱ区の調査はⅠ区の調査で確認できた水田の広がりを確認するためにトレンチのみで調査を行った。

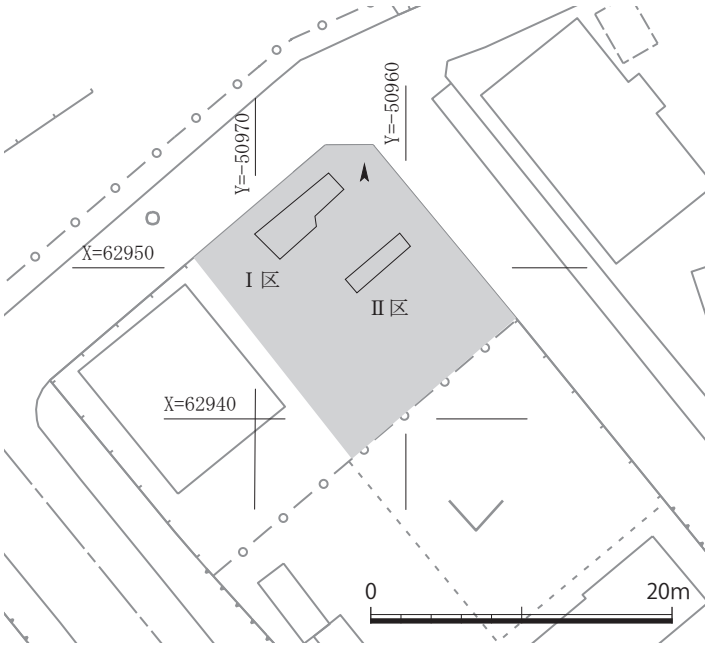
３．遺構と遺物

検出遺構は溝１条と水田である。SD001 はおよそ東西方向に延びている。調査区内で溝幅全体を確認することができなかったため、幅は不明だが深さは約 40㎝である。埋土は黒褐色砂である。近世の溝と思われる。

水田面はおよそ２面あると想定される。Ⅰ区１面目の黄褐色粘質土層とⅠ区２面目の黒色粘質土層である。それぞれⅡ区の５層の灰褐色粘質土と７層の黒色粘質土に対等する。またこれら上面では足跡と考えられる痕跡は確認できているが、畦畔は確認できていない。出土した遺物がないため、明確な時期はわからないが、黒色粘質土層は弥生時代の水田の可能性がある。

４.小結

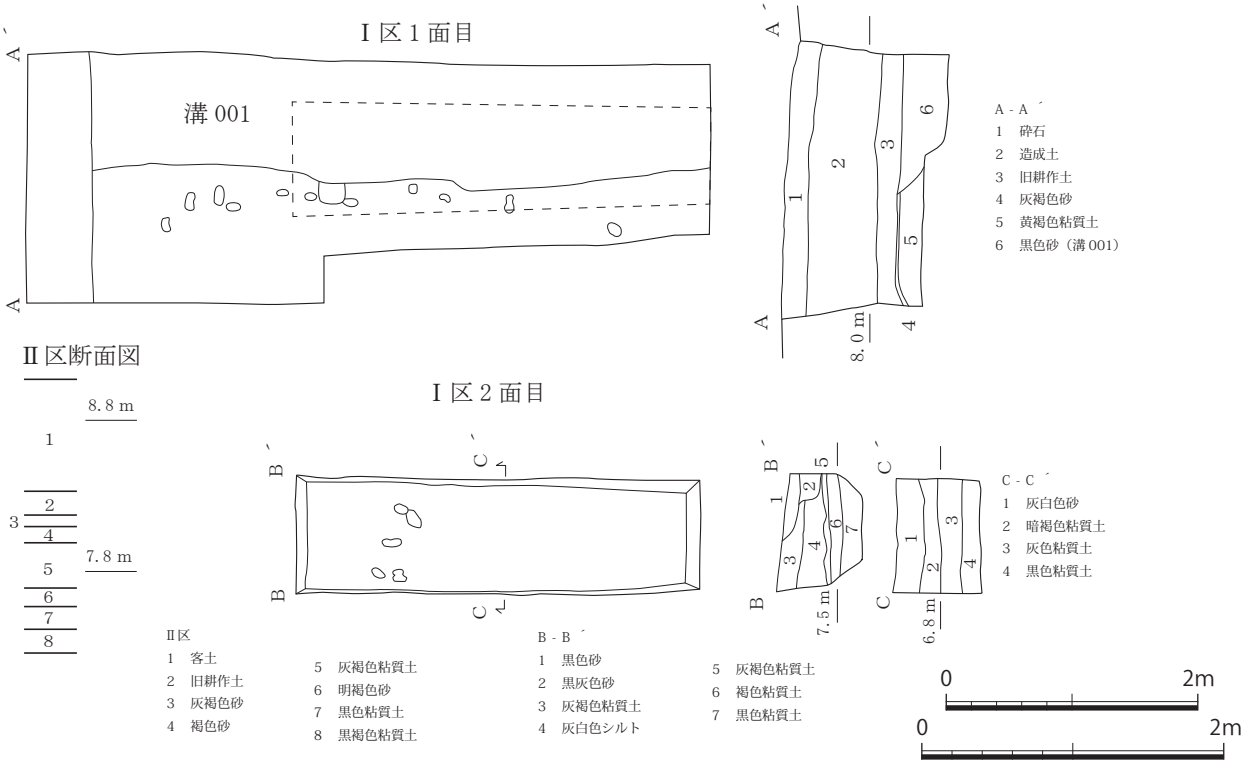
今回の調査では、近世と考えられる溝１条と水田面を確認した。土器の出土がなかったため断定はできないが、周辺の確認調査・本調査事例から弥生時代の水田も存在すると考えられる。



3. 調査区位置図（S=1/500）

5. 土層断面Ａ－Ａ´（北東から）

6．土層断面Ｂ－Ｂ´（北東から）



4. 調査区平面図及び土層断面図（Ⅰ区　1/60　Ⅱ区　1/50）

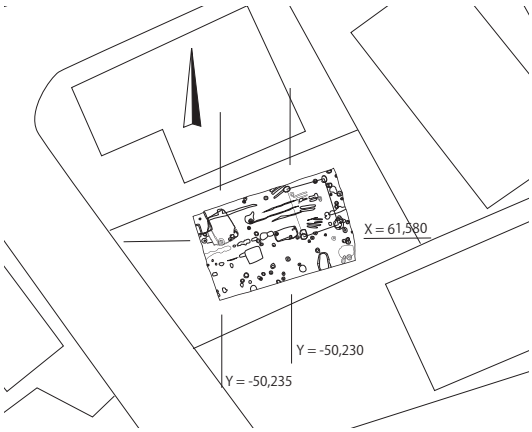
7. Ⅰ区２面全景（北西から）

8. Ⅱ区土層断面（南東から）

2129　麦野Ａ遺跡 32 次（MGA-32）

所 在 地　博多区麦野３丁目１番 19
調査原因　個人住宅建設
調査期間　2021.10.1 ～ 2021.10.29
調査面積　83.8㎡
担 当 者　鶴来航介・野村俊之
処　　置　記録保存

１．調査地点の位置（12　麦野　2881　S ＝ 1/8000）

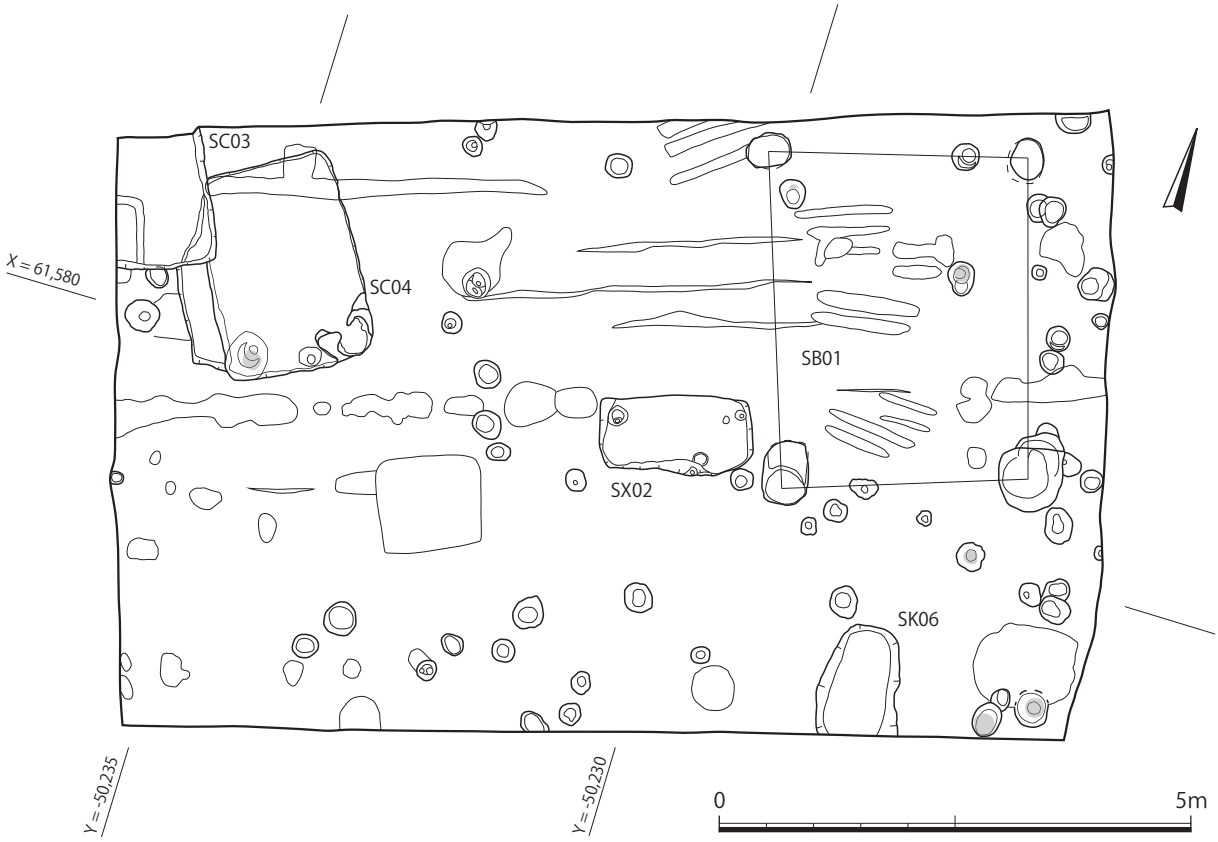


2．調査区位置図（S=1/600）

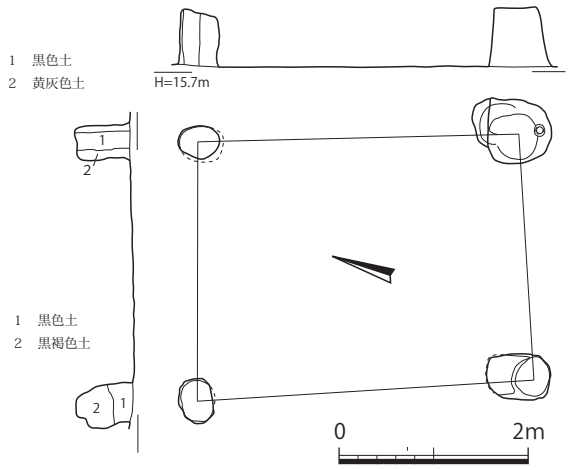
調査の概要

１．調査に至る経緯

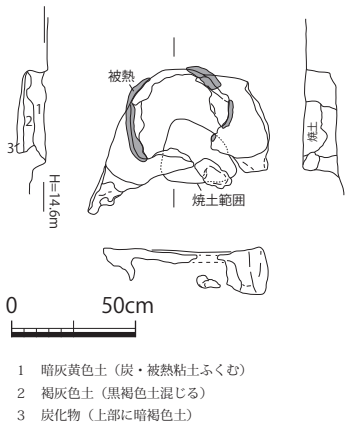
令和３年６月 10 日付けで当該地にかかる埋蔵文化財の照会があった（事前審査番号 2021-2-268）。同課事前審査係では周辺の調査・試掘実績より照会地中に遺構が存在する可能性が高いと判断し、９月９日に確認調査を実施したところ､現地表面下 50cm の鳥栖ローム層上面で遺構を確認した。今回は杭工事が計画されており、同係は遺構への影響が避けられないと判断した。協議の結果、遺構に影響の及ぶ範囲について発掘調査をおこなうことで合意し、個人事業に対する国庫補助を受けて調査を実施した。ただし東へ向かって傾斜する土地に対して水平に盛り土をおこなっているため、調査対象範囲の東側は盛り土が段状に露出して崩壊しやすく、１m程度の引きを取らざるを得なかった。



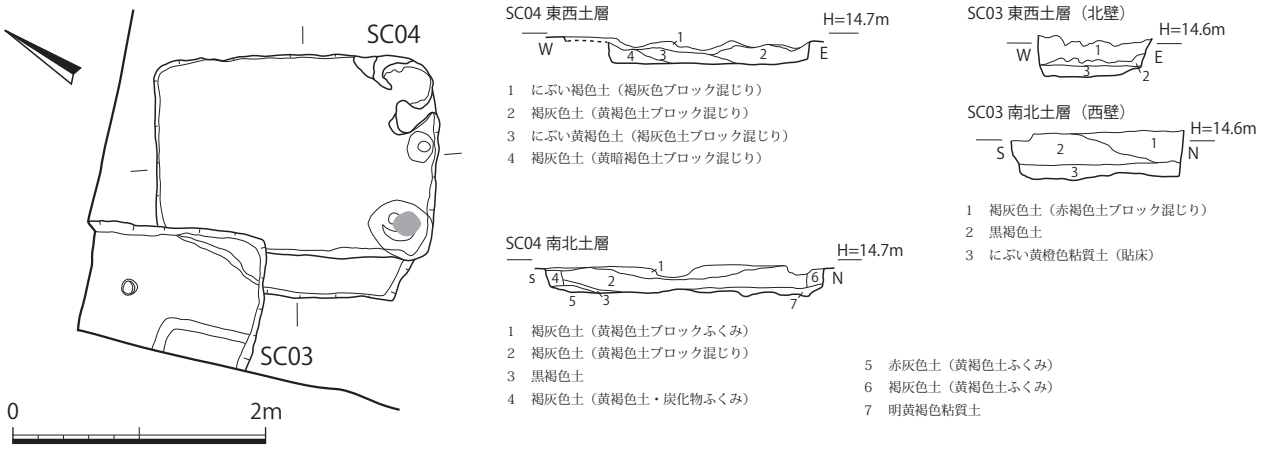
３．遺構配置図（S=1/80）



4．SB01（S=1/80）



5．カマド（S=1/30）



6．SC03・04（S=1/60）

2．位置と環境

麦野Ａ遺跡は御笠川とその支流である諸岡川が形成した中位段丘上に立地する。この段丘上には、北側では板付遺跡や高畑遺跡、南側では麦野Ｂ遺跡、麦野Ｃ遺跡、南八幡遺跡など連綿と遺跡が形成されている。麦野Ａ遺跡では旧石器時代から遺物の散布はみとめられるが、居住の痕跡が顕著になるのは弥生時代前期以降であり、以後古代と中世に大規模な集落が形成される。本調査区は遺跡の北側に位置しており、板付小学校から南へ 100m ほどの地点である。小学校の西側を南北にのびる道路が尾根に沿っており、その東西で集落の展開が確認されているが、調査地は道路の東側にあたる。

3．調査の記録

遺構は地表面から 30 ～ 50cm ほど下の鳥栖ローム層上で検出した。遺存状況は良好で攪乱による影響も最小限にとどまる。調査区内では地形の変化はみとめられなかった。遺構は掘立柱建物１棟、竪穴建物２棟、土坑２基のほか、多数のピットを検出した。遺物はパンケース２箱分である。

SB01　１間×１間の掘立柱建物である。柱穴はいずれも径 50cm 前後で深度 60cm 以上であり、東西 2.8m、南北 3.2m と大型の構造物が復元される。調査区の北東隅で見つかっており、調査区外へさらに展開する可能性もある。南東側の柱穴 SK01 から出土した土師器碗より、時期は７世紀後半と考えられる。

SC03　調査区北西隅で検出した竪穴建物である。検出面から床面までの深さは 15cm を測り、ロームと灰褐色土の混じり合う粘質土を貼り床として 10cm ほど敷く。南東隅には本来ならば切り合っている SC04 の床面が遺存していたが、誤って一部を掘り下げている。南側では 15cm ほどの落ち込みが確認されたが、調査区外へ続いており性格は不明である。黒褐色埋土中から出土した須恵器碗より、建物の時期は７世紀末。

SC04　SC03 に切られる竪穴建物である。2.2m × 1.9m と小規模で柱穴は確認していない。SC03 とともに尾根と方位を揃える。南東隅には破壊を受けていないカマドが残る。焚口は建物の中心を向いており、上部は削平されている。袖部は白色粘土で構築するが、奥壁は建物隅の屈曲部と共有しており、建物の壁を構成する地山と袖の内側

に被熱による赤変がみとめられる。カマドの内部には焼土塊が充填しており、その上部に転落した炉体の白色粘土が被覆する。土器などの遺物はふくまれていない。カマドの床面は奥に向かって高くなり、建物全体の床面よりもやや高い。カマドの周囲には炉体とみられる白色粘土が散在するものの、袖部の遺存状態からみて破壊を受けたとは考えにくく、部分的な自然崩壊によるものだろう。カマドの西脇には５cm 程度の浅いくぼみがあり、甕の据付穴の可能性がある。壁溝は検出しなかったが、堆積から有機質製の構造物を廻らせたとも考えられる。遺物は土師器の小片のみで時期を絞り込めないが、SC03 の時期と大きな開きはないものと思われる。

SK06　南壁付近で検出した浅い土坑である。東西 0.9m、南北 1.1m を確認し、南側は調査区外へ続く。20cm 程度の深さで底面は平坦に広がる。３層に堆積した埋土の第２層では白色粘土が赤褐色土と混じり合う。白色粘土は土坑全体に広がるが、均一ではなく塊が散在する状況を示す。被熱痕跡は観察されないため窯とは考えにくい。上層では遺物が多く出土したが、中層より下ではほとんど遺物をふくまない。須恵器、土師器、平瓦が出土する。８世紀前半。

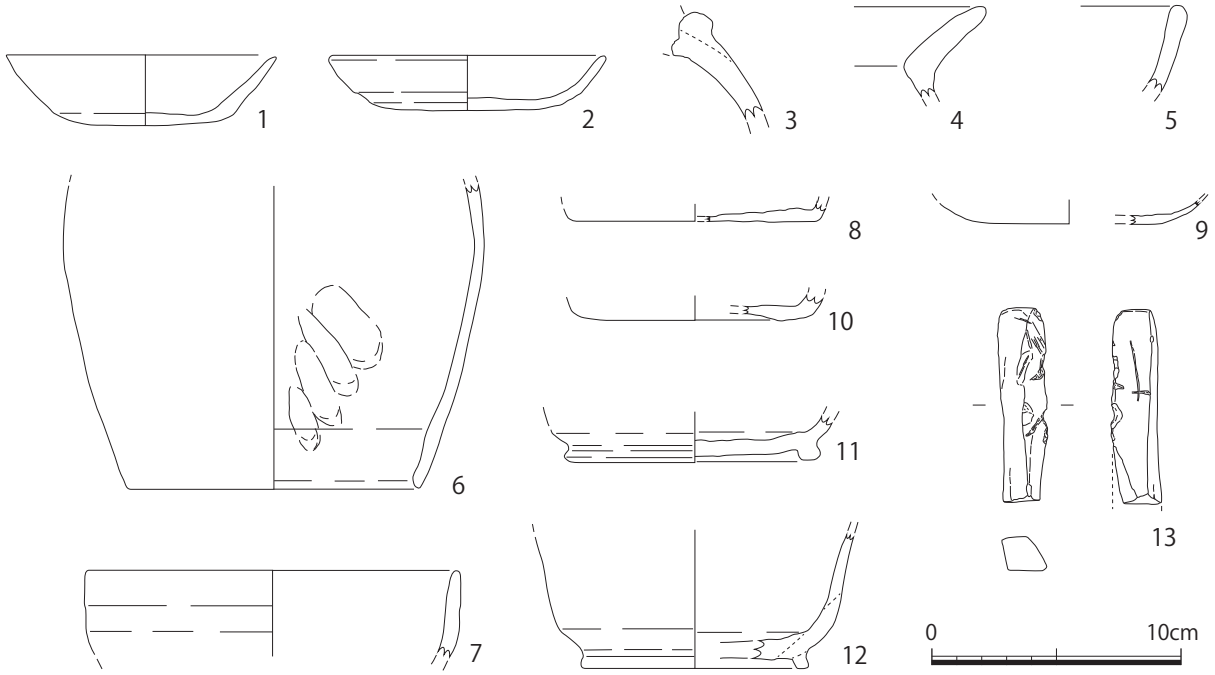
SX02　調査区中央で検出した浅い土坑である。東西 1.6m、南北 0.8m の長方形を呈し、深さ 0.1m で床面は平坦である。北側の両隅に各１基、南側中央に１基の小さなピットがあり、上屋が存在した可能性がある。土師器や平行叩きの平瓦などが出土する。７世紀後半か。

出土遺物

遺構から出土した遺物を中心に掲載する。１・９・13 は SB01 南東隅の SK01 出土。１・９は土師器坏で８世紀前半。13 は泥岩製の砥石。２方向に平滑な面を作り出し、長軸方向の擦痕を残す。２・４・５・８は SK06 出土。２は土師器坏で８世紀。底面に回転ヘラ削りがみられる。４は土師器甕の口縁部でく字形を呈する。８世紀前半か。５は土師器碗。８は須恵器坏で７世紀末から８世紀初頭とみられる。３は SK05 から出土した複合口縁壺の頸部で、弥生時代後期中葉から後半。６・11・12 はすべて SC03 上面で出土した。６は甑の底部で内面を指ナデ成形する。11・12 は須恵器坏。11 は底面に回転ヘラ削りが観察できる。いずれも７世紀末。７と 10 はいずれもピット出土。７は須恵器坏の口縁部。10 は須恵器坏の底部。

４．小結

今回の調査では麦野 A 遺跡における７世紀後半から８世紀前半の活発な居住活動を追認する形となった。20m ほど北の 22 次調査区でも同時期の建物跡が検出されており、当該地に居住域が形成されていたと考えられる。一辺２m程度の小規模建物は比恵・那珂遺跡群から中ノ原遺跡にいたる春日丘陵上の遺跡で散見する。そうした特徴的な遺構が形成される背景についても今後追究していくことが望まれる。



７．出土遺物（S=1/3）

8．調査区北側全景（西から）

9．調査区南側全景（西から）

10．SB01（西から）

11．SC03・SC04（西から）

12．SK06 半裁　白色粘土検出（西から）

13．カマド（西から）

2130　野芥遺跡 23 次（NKE-23）

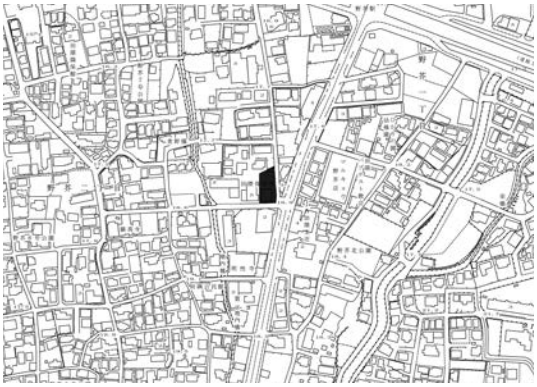
所 在 地　早良区野芥 2 丁目 834 番 1
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2021.10.4 ～ 2021.12.10
調査面積　215㎡
担 当 者　常松幹雄
処　　置　記録保存

調査の概要

調査地は、早良平野東南部の標高約 18 mの扇状地に位置している。周辺の調査で弥生時代から古代にかけての集落の存在が明らかになっている。

地表から -100 ～ 110cm で灰褐色砂を含むシルト層の遺構面に達した。北側の調査区で、８次調査で検出された SD03 の延長部にあたる断面 U 字の溝 SD01 を検出した。溝は南西から北東にのびており、深さ約 1 m、中央に深さ 40 ㎝の掘り込みがある 2 段の構造となっている。また調査区の東で 1.5 m四方の範囲に古墳時代前期の土器溜 SX02 が検出された。

SD01 では、３～４世紀代を主体とする土器のほか碧玉製の管玉 1 点が出土した。SX02 では、在来の西新式の甕のほか山陰系二重口縁の甕や低脚杯、庄内式の甕などの外来系土器のほか鉄斧 1 点が出土した。時期は 3 世紀中頃に比定される。



1．調査地点の位置（83　野芥　0319　S ＝ 1 /8,000）

2．調査区全景（南西から）

2131　井相田 A 遺跡 4 次（ISA-4）

所 在 地　博多区井相田 3 丁目 4 番 6
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2021.10.12 ～ 2021.12.23
調査面積　285.57㎡
担 当 者　阿部泰之
処　　置　記録保存

調査の概要

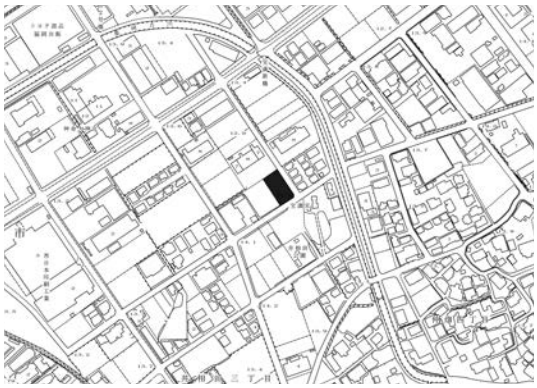
調査地は井相田 A 遺跡が位置する沖積微高地の北端部に位置する。

今回の発掘調査で検出された遺構は、竪穴住居跡 3 軒・溝 2 条・土壙 1 基・ピット多数である。

竪穴住居跡の時期は飛鳥時代で、うち 1 軒は一辺 7 mと大型である。溝と土壙の時期は鎌倉時代で、ピットの多くは木の根痕である。

出土遺物の多くは竪穴住居跡の土器で、土師器が多く須恵器は少ない。住居跡からは石製紡錘車の他、石製小玉、ガラス小玉が出土した。また、鎌倉時代の溝や土壙からは中国製陶磁器が出土した。

今回の発掘調査では、飛鳥時代と鎌倉時代の２つの時期の集落跡の北端を確認することができた。



1．調査地点の位置（12　麦野　0052　S ＝ 1 /8,000）

2．調査区西半全景 (北から)

2132　原遺跡 38 次（HAA-38）

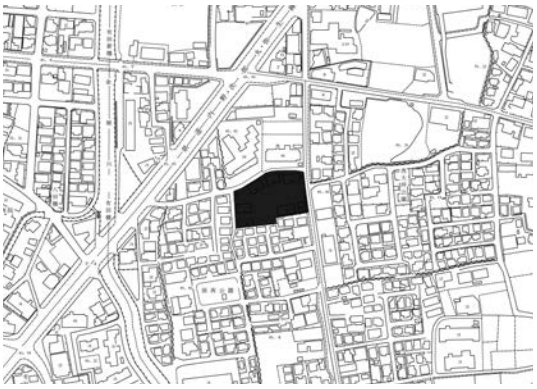
所 在 地　早良区原 8 丁目 1162 ‐ 1 他 2 筆
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2021.10.18 ～ 2021.12.1
調査面積　396.6㎡
担 当 者　木下博文
処　　置　記録保存

調査の概要

原遺跡は早良平野の中央、金屑川右岸の微高地上に展開する。今回の調査地点は、遺跡の南西端に位置し、中世後期の居館を囲む大溝を検出した 9 次・22 次調査地点の南側隣接地に当たる。現地表面の標高は 6.5 ～ 6.7m である。

遺構は現地表面下 70 ～ 80cm の黄褐色シルトの上面で検出した。標高 5.8 ～ 5.9 mである。弥生時代後期前半の土坑、中世の溝、ピットを検出した。

出土遺物は土坑から弥生時代後期前半の完形の壺・甕、溝から 12 世紀の同安窯系青磁椀など、コンテナ 6 箱分が出土している。



1．調査地点の位置（82　原　0311　S ＝ 1 /8,000）

2．調査区東半全景（北西から）

2133　三宅 B 遺跡 2 次（MYB-2）

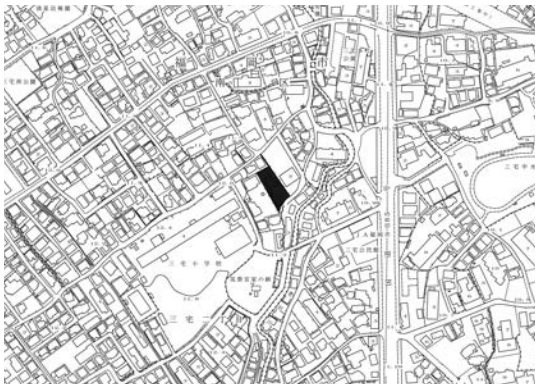
所 在 地　南区三宅 2 丁目 909 番 1，931 番 3
調査原因　戸建住宅建設
調査期間　2021.11.1 ～ 2021.12.17
調査面積　353㎡
担 当 者　佐藤一郎
処　　置　記録保存

調査の概要

三宅 B 遺跡は那珂川左岸の沖積地に立地し、東側は那珂川の支流老司川が北流している。調査地は遺跡の北西に位置する。遺構面は表土直下 GL-0.3m（標高 11.5m）の黄褐色粘質土上面で確認した。

弥生時代中期後半～後期前半と古墳時代（4 世紀後半～ 5 世紀前半頃）の柱穴・ピット状遺構 80 余個を検出した。内 2 個は完形に近い弥生土器甕や壺が埋納されていた。北端では弥生時代後期前半頃の東西方向の大溝（幅 3m、深さ 1m）を延長 10m 検出した。溝の南側埋土中には地山下層の粗砂を含む暗褐色土ブロックが多く見られ、溝の南側には同時期の遺構がみられないことから、土塁が築かれていた可能性がある。

遺物は遺構から弥生土器・古式土師器片がコンテナケース 10 箱分出土した。



1．調査地点の位置（39　三宅　0139　S ＝ 1 /8,000）

2．調査区東側全景（北から）

2134　南八幡遺跡 22 次（MHM-22）

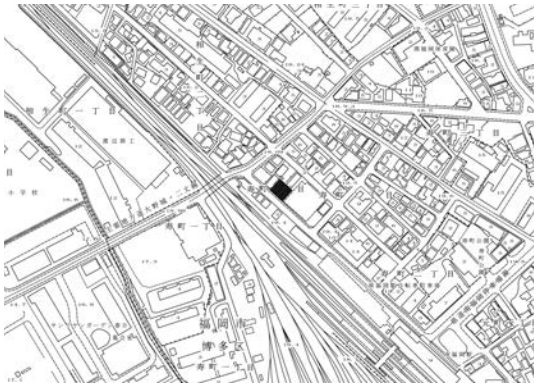
所 在 地　博多区寿町２丁目３番，４番
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2021.11.15 ～ 2021.12.23
調査面積　128.4㎡
担 当 者　鶴来航介・中園将祥
処　　置　記録保存

調査の概要

南八幡遺跡は春日丘陵からのびる中位段丘上に立地しており、本調査区は遺跡の中央部西側に位置する。

本調査では現地表より約 80cm の深さで遺構を発見した。弥生時代後期の竪穴住居３棟と同終末期の井戸、および時期不明の柱穴などを検出した。このうち２号住居では、中央部で土器の一括廃棄の状況がみとめられた。時期は弥生時代後期中葉が主体であり、道路を挟んだ 19 次調査で見つかった住居とほぼ同時期だと判明した。特筆すべき遺物として、鉄器片数点、ガラス玉１点が出土している。また、３号住居でもガラス玉５点が集中的に出土した。

今回の調査では，南八幡遺跡の西側で弥生時代後期に居住活動が展開したことをあらためて裏付けるとともに，後期中葉の良好な一括資料を得るなど有意義な成果があった。



1．調査地点の位置（13　雑餉隈　0051　S ＝ 1 /8,000）

2．２号住居遺物出土状況（南から）

2135　有田遺跡群 272 次（ART-272）

所 在 地　早良区南庄３丁目 257，258，260 － 4
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2021.11.22 ～ 2022.1.28
調査面積　196.107㎡
担 当 者　田中健・野村俊之
処　　置　記録保存

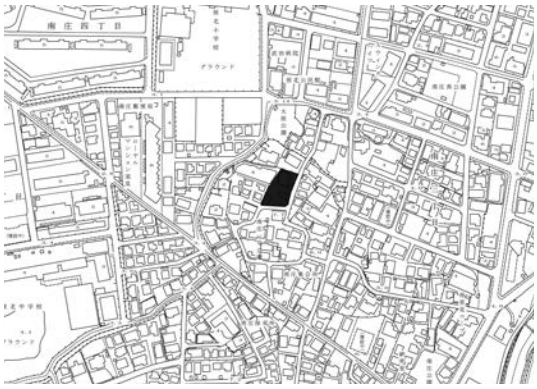
調査の概要

有田遺跡群は早良平野の北側に位置し，室見川右岸の独立中位段丘上に立地する。第 272 次調査地点は遺跡群内の北側に位置し、遺構面の標高は約 6.5m を測る。近隣地では 178 次、202 次調査が実施され、古墳時代前期の周溝墓群が確認されている。

今回検出した遺構は、古墳時代後期の竪穴住居跡１軒、時期不明の掘立柱建物跡１棟、溝１条、ピット多数である。

出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器で、コンテナケース３箱分である。

以上の調査結果から本調査地点において古墳時代後期の居住域が形成されていたことを確認することができた。一方、東西の隣接地で確認されている周溝墓群に関連する遺構は確認することができなかった。

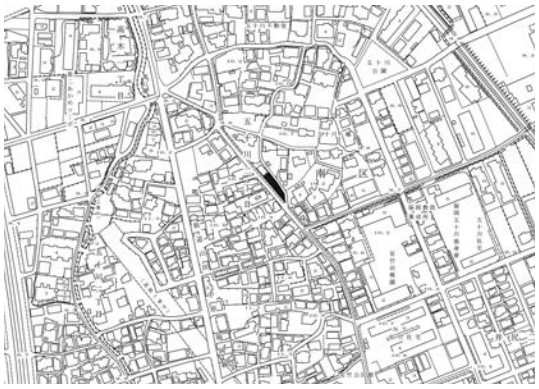


1．調査地点の位置（81　室見　0309　S ＝ 1 /8,000）

2．調査区全景（東から）

2136　五十川遺跡 25 次（GJK-25）

所 在 地　南区五十川２丁目 261 番４，257 番１
調査原因　戸建住宅建設
調査期間　2021.12.1 ～ 2021.12.21
調査面積　80.7㎡
担 当 者　三浦萌
処　　置　記録保存


１．調査地点の位置（24　板付　0088　S＝1/8,000）

２．調査区南半全景（南から）

３．調査区北半全景（南から）

調査の概要

１．調査に至る経緯

令和３（2021）年８月２３日付けで、当該地における埋蔵文化財の有無についての照会文書が提出された（事前審査番号 2021-2-562）。過去の試掘調査の結果から現地表下 140㎝の鳥栖ローム上で遺構が検出されており、遺構が残っていることが確認されている。そのため埋蔵文化財課事前審査課は協議を行い、その結果、建設予定の戸建住宅３棟のうち北側２棟にあたる部分の発掘調査を行うことで合意した。

発掘調査は令和３（2021）年１２月１日から行い、同月２１日に終了している。

２．位置と環境

五十川遺跡は福岡平野の中央部の独立台地上に位置する弥生時代から中世後半にわたる複合遺跡である。２５次調査地はその中央からやや南よりの位置にあたり、南東で３・４次調査が、西で２６次調査が行われている。

３．調査の記録

調査の対象は戸建住宅２棟を建設する部分である。廃土処理の関係上、表土剥ぎを２回にわけておこなった。また調査区中央部付近は重機による掘削で溝の続きを確認している。

遺構面は鳥栖ロームで、標高は 9.2 ～ 9.4 mである。発見した主な遺構は溝３条である。

ＳＤ００１

調査区を南北に縦断する溝である。幅約 1.76 ～ 2.2 m、深さ約 70㎝である。溝の底面（標高 8.6 ～ 8.7 m）で湧水する。土層断面図から埋没した後に図示できる遺物はないものの、底面付近から青磁片が出土していることから、中世以降の遺構であると考えられる。他には須恵器片などが出土した。

ＳＤ００２

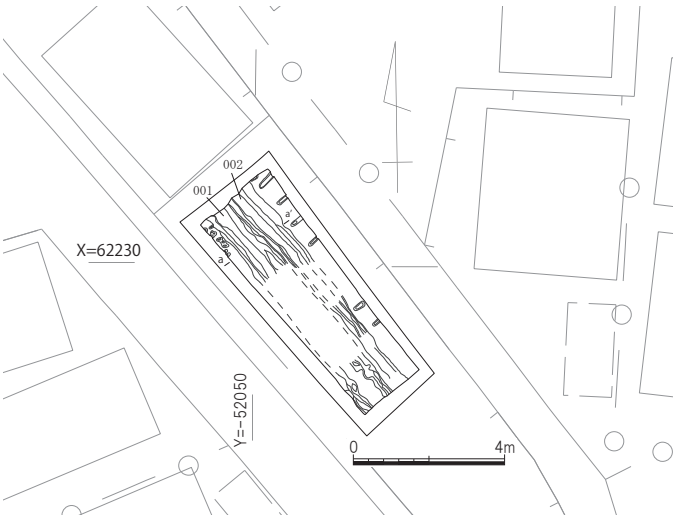
ＳＤ００１が埋没した後に新たに掘削されたと考えられる溝である。幅約１m、深さ約 22㎝。

ＳＤ００３

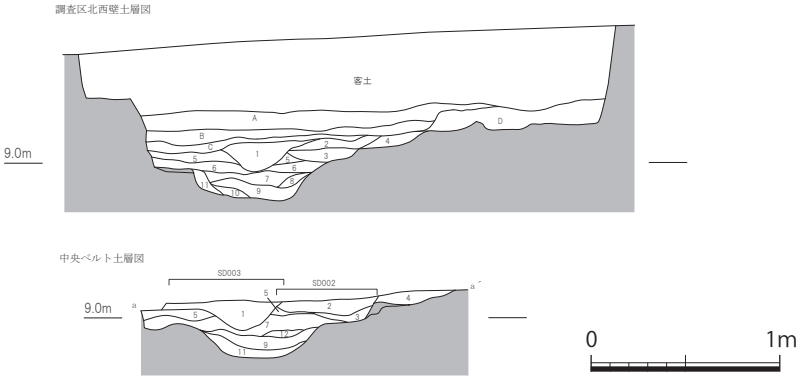
ＳＤ００１・００２が埋没した後に掘削されたと考えられる溝である。幅約１m、深さ約 28㎝。

４．まとめ

今回発見された遺構は中世の溝２条である。時期ははっきりしていないものの、ＳＤ００１はその方向や規模、堆積状況から、南東で行われた４次調査で発見されたＳＤ０１０の続きである可能性がある。またＳＤ００２・００３から明確に出土した遺物は確認できていないものの、溝全体の遺物の時期から今回発見された溝３条の時期差はそれほどないものと考えられる。また４次調査では１４～１５世紀の居館に関係する遺構が多く発見されており、今回発見された遺構も居館の堀などといった遺構である可能性が高い。



3．遺構配置図（1/200）



SD 001
- 5　にぶい黄褐色粘質土：黄橙ブロックをわずかに含む
- 6　にぶい黄褐色粘質土：黄橙ブロックを６割程含む
- 7　にぶい黄褐色粘質土：黄橙ブロックを４割程含む
- 8　褐色土
- 9　にぶい黄褐色粘土　：大きな黄橙ブロックを１割、小さな黄橙ブロックを２割程含む。
- 10　にぶい黄褐色粘土
- 11　にぶい黄褐色粘土　：６層より若干明るいか
- 12　にぶい黄褐色粘質土：小さい暗褐色ブロックと小さい黄橙ブロックをわずかに含む

SD 002
- 2　褐色（粘質）土　　：明黄橙ブロックと黒褐色ブロックを３割ほど含む
- 3　にぶい黄褐色粘質土：明黄橙ブロックをわずかに含む
- 4　にぶい黄褐色粘質土：大きな明黄橙ブロックと黒色土ブロックを含む

SD 003
- 1　にぶい黄褐色粘質土

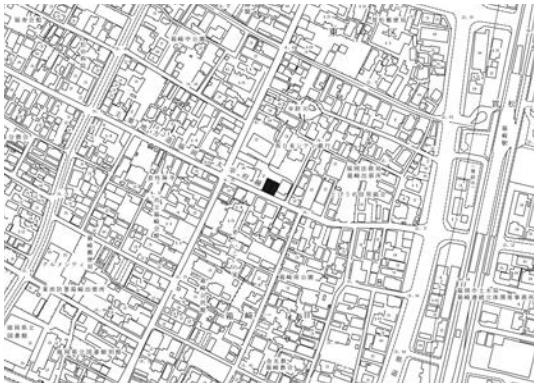
- A　灰色土
- B　暗褐色土
- C　暗褐色土
- D　にぶい黄褐色土

4．調査区土層図（1/40）

5．3・4・25 次調査区位置図（1/500）

2137　箱崎遺跡 121 次（HKZ-121）

所 在 地　東区箱崎 1 丁目 28 ‐ 2,3
調査原因　戸建住宅建設
調査期間　2021.12.1 ～ 2021.12.28
調査面積　37㎡
担 当 者　荒牧宏行
処　　置　記録保存



1．調査地点の位置（34　箱崎　2639　S ＝ 1 /8,000）

2．121 次調査地点と周辺（S ＝ 1 /1,000）

調査の概要

1.　調査に至る経緯

令和 3 年 11 月 1 日付で当該地における埋蔵文化財の有無についての照会文書（事前審査番号 2021-2-831）が受理された。同敷地内の確認調査は先の照会（事前審査番号 2021-2-429）に伴って既に行い、遺構を確認していた。今回の建設計画は敷地を 3 分割し、その中の 1 区画で地盤補強を行うものであった。そのため、この補強する 1 区画のみ調査を行うことになり、他の 2 区画は遺構に影響が及ばないと判断され調査対象から外された。

2.　基本層序と遺構面

GL. は標高 4.1m を測る。基本層序は以下の通りである。

第 1 層　現代客土（層厚 35 ～ 50cm）
第 2 層　淡黄灰色粘質土（層厚 0 ～ 50cm）
第 3 層　黒色砂質土（層厚 25 ～ 70cm）
第 4 層　黒色砂混じり明褐色砂（層厚 20cm）
第 5 層　明黄褐色砂丘砂（地山）

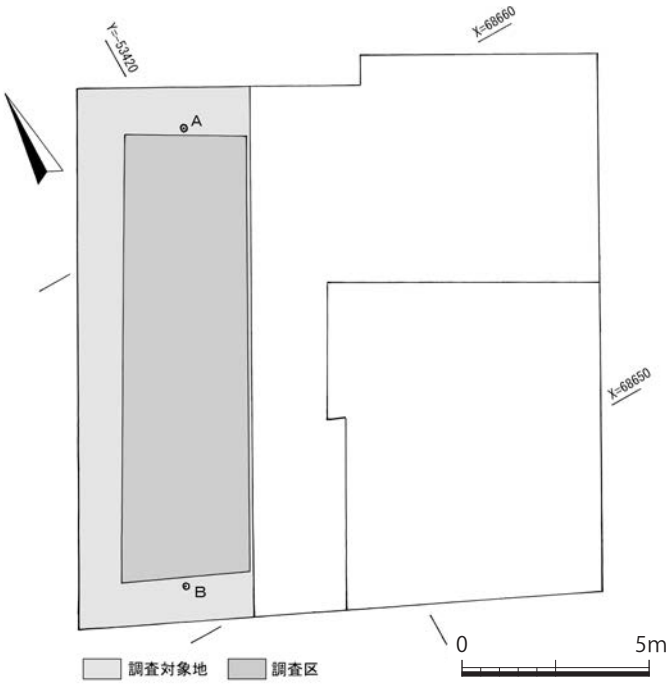
第 2 層は黄灰色粘土を含み、北半部にかけてレンズ状に堆積している。調査の第 1 面は第 2 層を水平に切った状態で GL から -60cm（標高 3.5m）に設定した。この面では 14 世紀以降から近世にかけての遺構、遺物が検出される。既往の調査ではこのレベルでの遺構面設定をほとんど行っていない。

第 3 層は南側では標高 3.5 mの高いレベルで検出され、北側では既述のように上面は凹レンズ状となり、そのレベルは標高 3.0 ～ 3.5m を測る。

第 2 面はこの第 3 層の中間のレベルに設定し標高 2.8m を測る。掘り下げはトレンチを手掘りで掘削したが、大半はバックホーを用いた。

第 4 層は地山の明黄褐色砂が部分的に検出できる漸移層である。第 2 面下部としてこの上面を設定した。標高 2.7m を測る。

第 5 層は混じりが無くなった地山の明黄褐色砂丘砂である。この上面の標高 2.5m に第 3 面を設定した。

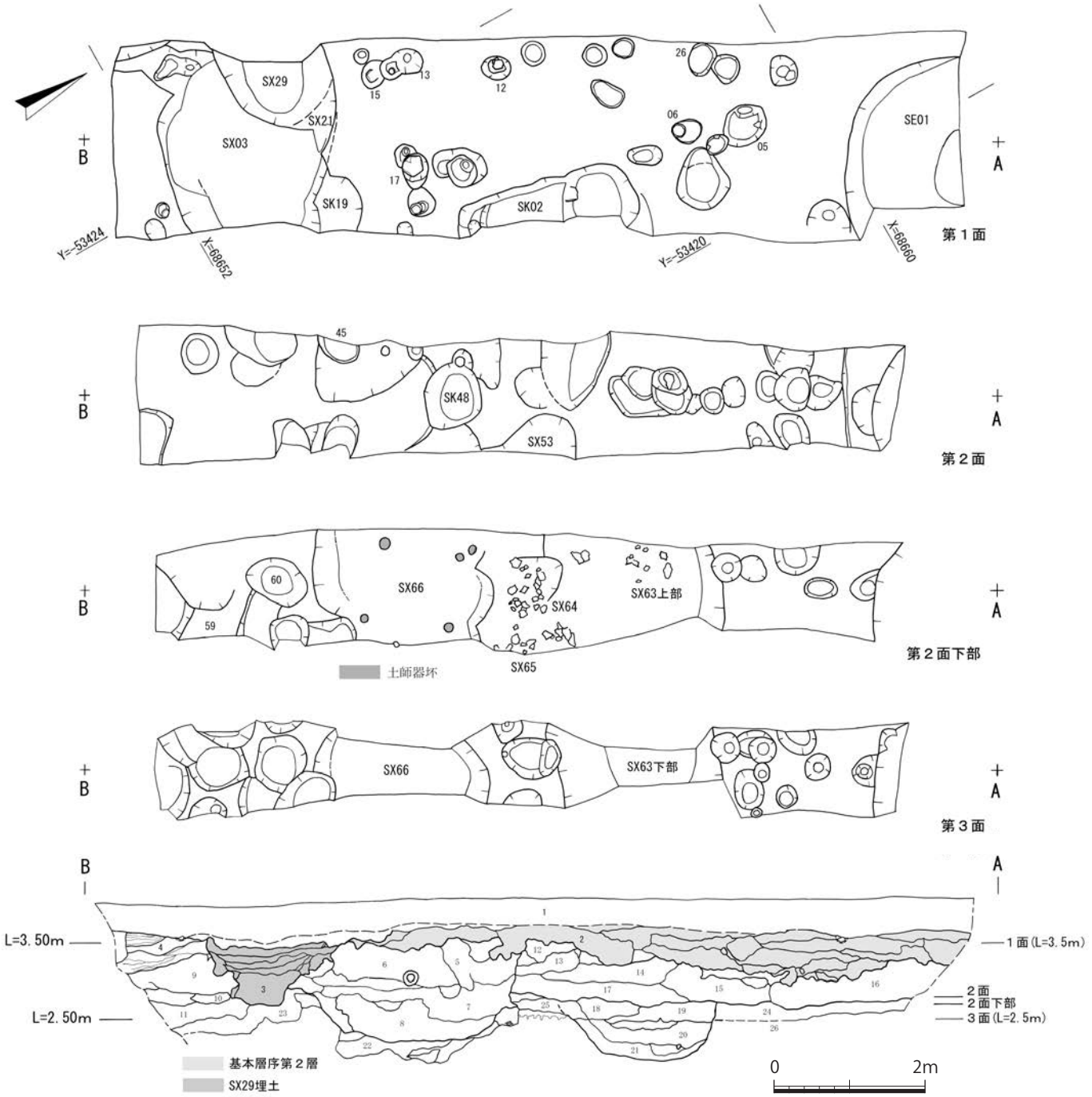


3．敷地区画割りと調査範囲（S ＝ 1 /200）

3.　各遺構面の遺構と遺物

（1）第 1 面

検出された遺構は上部を削平され、遺構面に近



1. 現代客土　2. 暗黄灰色粘質土（基本層序の第２層は黄灰色粘土や粘土粒を含む）3. 黒褐色砂質土（SX29 の最下層）4. 暗灰褐色粘質土（上，下層に炭，焼土を含む黄褐色粘土と黒褐色砂質土の互層によるラミナがみられる）　**5 ～ 8 は SX66 埋土**　5，6. 黒褐色砂質土　7. 暗灰黒色粘土　8. 黒色砂質土　9. 黒褐色砂質土　10. 明黄褐色砂　11. 黒褐色粘質土　12 ～ 17. 黒色砂質土　**18 ～ 21 は SX63 埋土**　18. 黒灰色砂質土　19. 黒色粘質土　20. 明黄褐色砂混り黒色粘土　21. 黒色粘土混り明黄褐色砂　22. 黒色砂混り明黄褐色砂　23. 明黄褐色砂混り黒褐色砂質土　24. 黒色砂混り明黄褐色砂　25. 黒褐色砂質土　26. 明黄褐色砂丘砂

4．遺構配置図と土層断面図（S ＝ 1/80）

いレベルで柱穴底面の根石が検出される。出土遺物は 14 世紀以降から近世にかけての時期が目立つ。既往の調査でほとんど検出されてこなかった時期であり、今後の調査に検討を要す。

SE01　調査区北端で検出された。調査区外に広がるため完掘はできていない。井筒を明黄褐色粗砂で埋めていた。染付を含む陶磁器、七輪、瓦片、スサを混入した焼壁体等を含み近世後半以降の時期が考えられる。

SK02　中央東際で検出された。1 辺 235cm 以内の方形に近い形状とみられるが、隅丸方形のピットと切り合っている。埋土は黒褐色を呈し、中世とみられた。出土遺物 10 は土師質の摺鉢、11、12 は瓦質の鉢である。

SX03　調査区南端で検出された。埋土は明黄褐色粘質土ないし砂質土からなり、中央部の締りが無い部分を SX3-

1、粘質土の部分をSX03-2としたが、遺物の時期差はみられず、近世以降の遺物を含む。壁面や下底の形状から3基の土坑が重なっている可能性があり、調査区東辺際の下底近くから出土した遺物をSX03-3とした。

（出土遺物）1～6はSX03-2、7はSX03-3、8、9はSX03-1から出土した。1は白磁の型押しによる小皿である。後述の第2面下部SX66から出土した56と同一個体である。2は染付皿、3は陶器椀、4は陶器摺鉢、5は備前摺鉢、6は土師質の火舎か。口縁部に刻み列点文を施す。7は瓦質の鉢で内外面が燻され黒色を呈す。8、9は土鍋である。

図示した以外にフイゴの羽口片と鉄滓が出土した。

SX29　調査区の南西際で検出された円形プランの土坑である。客土下の上層から掘りこまれている。出土遺物は細片であるが近世まで降るものは無い。白磁片、褐釉陶器盤、黒色土器、瓦器、土師器坏、皿片、鉄滓など13世紀代までのものであるが、図示したヘラ切り底の土師皿7のように古い時期の混入が多い。

柱穴　礎板に平石を用いたものが3基（SP12、15、17）検出された。いずれも遺構検出面のレベルとほぼ変わらない深さで石の上面が検出された。SP12はこの礎板（石）の上に備前陶器片（18）を2枚重ねていた。

5．調査区西壁土層（南から）

6．調査区北側土層（最上層の白い部分が現代客土，下の薄白い部分が第2層，下層の黒い部分が第3層）

土坑、柱穴出土遺物（13～19）13、14は土鍋である。外面に煤が付着する。15は瓦質の摺鉢である。16は土鍋、17は土師皿である。18は備前甕、19は瓦質の摺鉢である。一部に粘土を貼り付けて膨らんだ部分を有す。上面に3方からの摺目が施され、その下部の粘土にも接合のためか刻みを有す。

1～2面整地層出土遺物（20～25）2面までの掘削に際し、出土した遺物である。20は青磁大椀、21は土師質の摺鉢、23は陶器鉢、22は土師質の鉢であるが、火熱を受け、外面には煤が付着する。24は陶器の湯釜か。25は土錘である。

（2）第2面

検出された遺構は柱穴が大半を占める。時期は13世紀代までがほとんどであるが、一部に青磁碗29のような14世紀まで降るものがある。

SK48　中央部で検出された。軸長が70×85cmの楕円形に近いプランである。出土遺物の25は青磁碗である。見込みに4ヶ所粘土目跡を有し、中央に花文のスタンプが施されている。26は土鍋、27は土師質の鉢、28は平瓦片である。

SP45　調査区南端近くで検出された柱穴である。出土遺物30は丸瓦の瓦当片である。

SX53　中央の東壁際で検出された。第2面では一部で礫を検出するに止め、第2面下部で礫の広がりを確認した。出土遺物29は龍泉窯系青磁碗Ⅲ類に近く、14世紀初頭くらいまで降る。

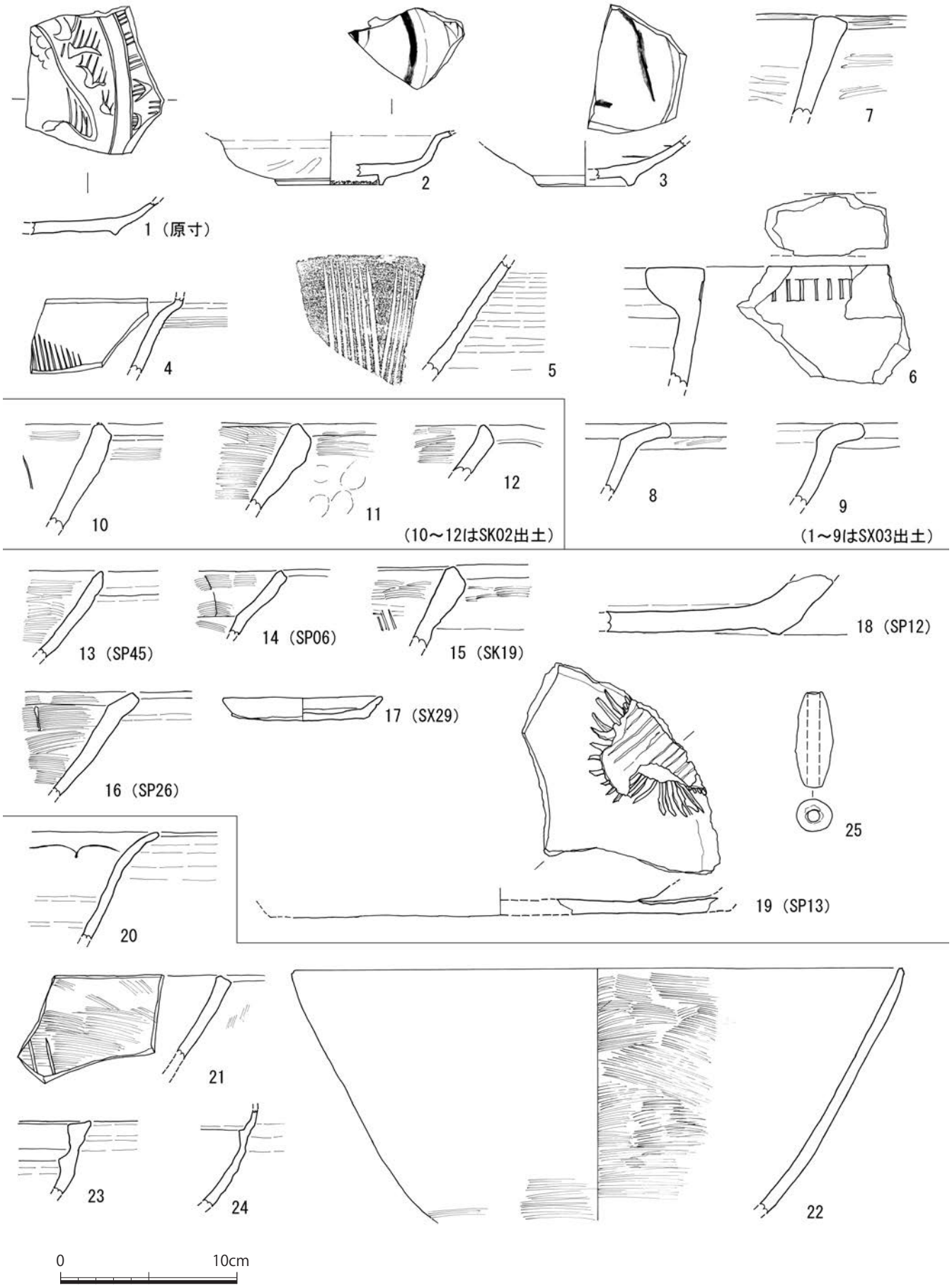
（3）第2面下部

12、13世紀の柱穴、土坑が主であるが、集石遺構のSX63は14世紀初頭まで降る。

SX59　調査区南端の検出面である。出土遺物31、32は回転ヘラ切り底、33は回転糸切り底の痕跡を残す。

SP60　調査区南端近くの柱穴である。34は土師器坏、35は土師器椀である。口縁部が白磁の玉縁に似る。押し出しにより成形し、外面にはロクロ回転によるミガキが施されている。12世紀前半代までに収まると思われる。

SX63　中央部で検出された。集石がSX63、64、65に広がる。第3面では下部に土坑の落ち込みが検出されたが、SX63～65の集石は西壁の土層からも下部の土坑とは別の上層に分布した遺構とみられる。図示した出土遺物は36～50である。36は青白磁の合子である。底部から口縁部にかけて、6本の分割線が施されている。37は口ハゲの白磁碗、38、39は同一個体とみられる龍泉窯系青磁碗Ⅲ類である。40は青磁壷、41は褐釉陶器壷、42は東播系須恵質捏鉢、43は土鍋、44は古墳時代後期の須恵器甕、45、46は須恵器甕である。外面は格子タタキ、



7. 第 1 面出土遺物実測図（S = 1/3・1/1）

45 の内面は粗いハケメ、46 は同心円文のアテ具痕と細かいハケメがみられる。47 は土玉、48、49 は石硯、50 は穿孔を有した滑石製品である。出土遺物から上部の集石遺構は 14 世紀初頭まで降ると思われる。

SX66　中央部で検出された。調査区外広がるため、形状は不明であるが、方形隅に 4 ヶ所に完形の土師器坏が置かれていた。底面からは 30 ～ 40cm 浮いたレベルで正置の状態であった。SX66 は西壁土層から、第 2 面上面から掘りこまれ、SK29 に切られていることが判る。

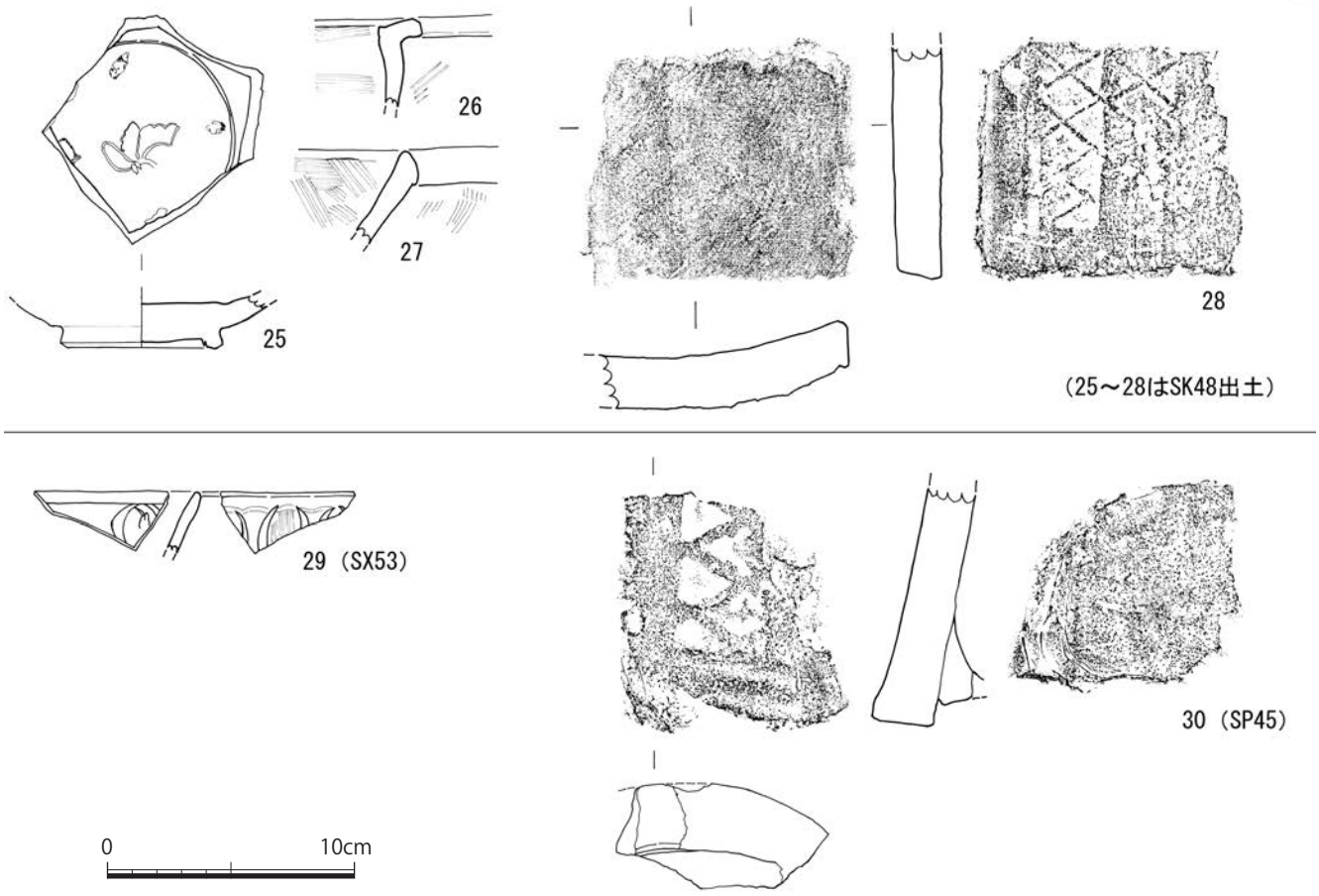
（出土遺物）　51 ～ 55 は完形の土師器坏である。口径 12.5 ～ 13.4cm を測る。底部は回転糸切り痕と浅い板目をわずかに残す。56 は第 1 面の SX03-2 から出土した 1 と同一個体とみられる。口ハゲの白磁小皿で内面に型押しの文様が施されている。57 は白磁合子の蓋である。小突起が列状に配されている。

（4）出土銅銭

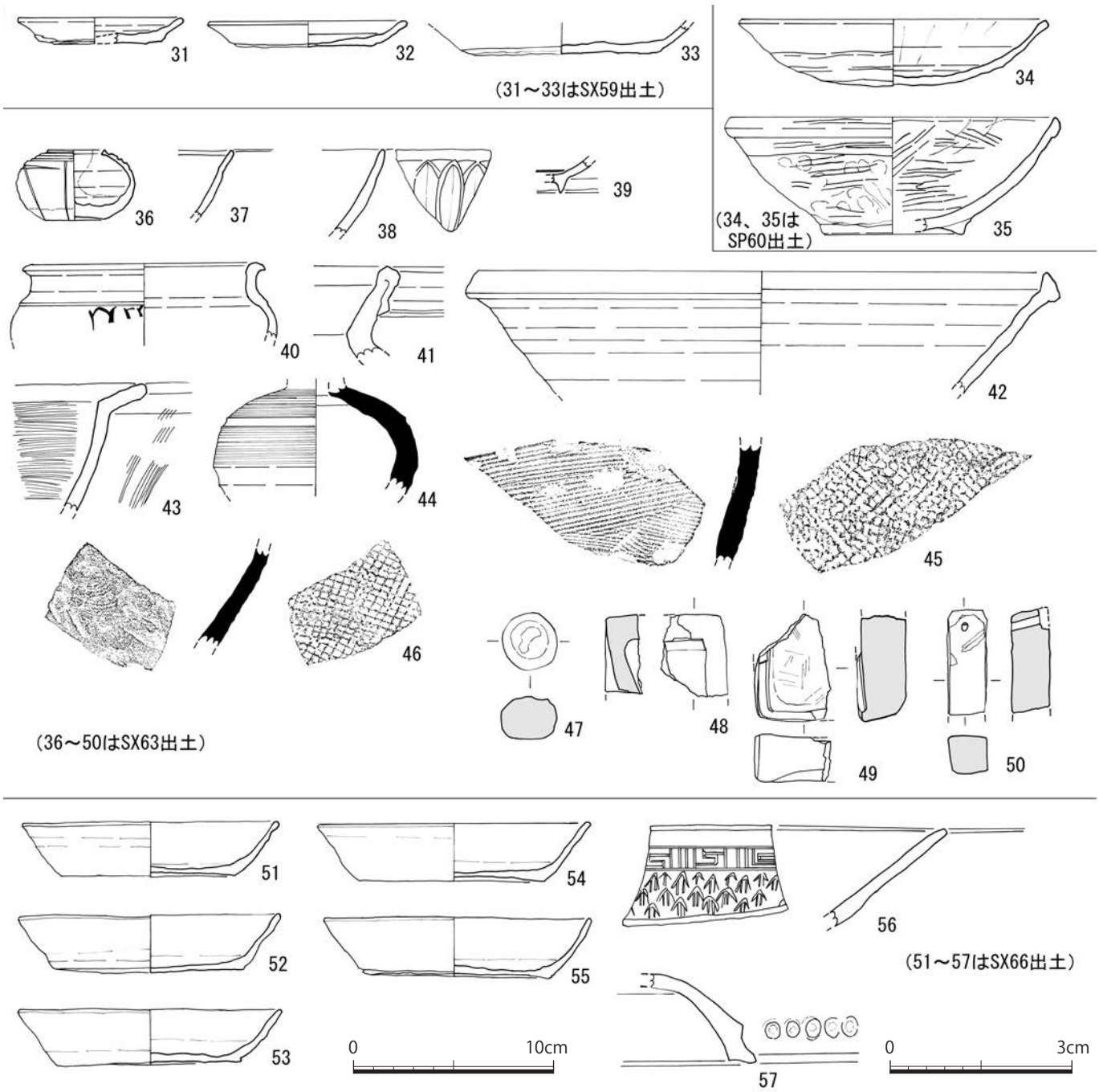
いずれも第 1 面から出土した。1 は SX03-1 出土の皇宋通寳（北宋　1038 年　真書）、2 は北半の第 1 面掘り下げ中に出土した政和通寳（北宋　1111 年　真書）、3 は第 1 面検出で出土した至道元寳（北宋　995 年　草書）、4 は SX21 から出土した。元、寳の 2 字のみ遺存する。

4.　まとめ

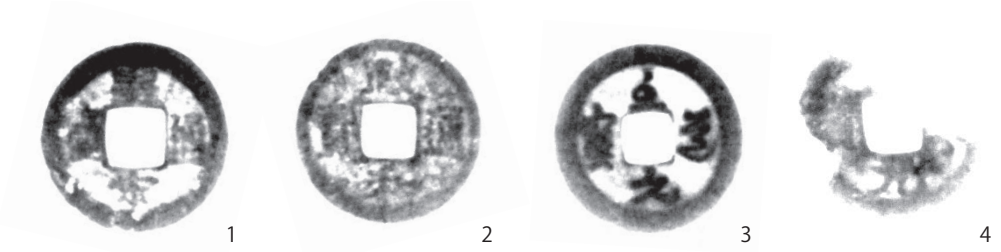
今回の調査において上面（第 1 面）から 14 世紀以降の遺構、遺物が、その下層（第 2 面）から 12 ～ 14 世紀初頭までを中心とした遺構、遺物が検出された。上面で近世の遺構とともに検出される中世後半期の遺構はその遺存の状況から上面の検出においても、かなり削平されている。従って、下層まで掘り下げると消滅するものが多い。



8. 第 2 面出土遺物実測図（S ＝ 1 /3）



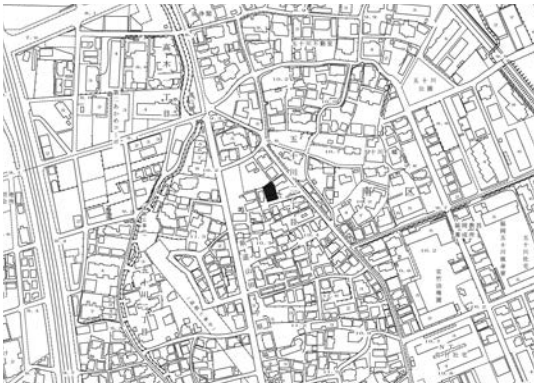
9．第２面下部出土遺物実測図（S ＝ 1/3・1/1）



10．出土銅銭（X 線写真　原寸）

2138　五十川遺跡 26 次（GJK-26）

所 在 地	南区五十川 2 丁目 287 番 16，287 番 24
調査原因	戸建住宅建設
調査期間	2021.12.13 ～ 2022.1.14
調査面積	74㎡
担 当 者	赤坂亨
処　　置	記録保存



1. 調査地点の位置（26　上曰佐　0105　S=1/8,000）

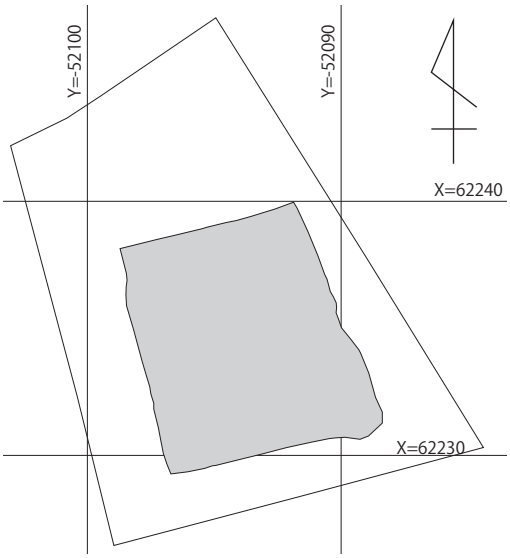
調査の概要

1. 調査に至る経緯

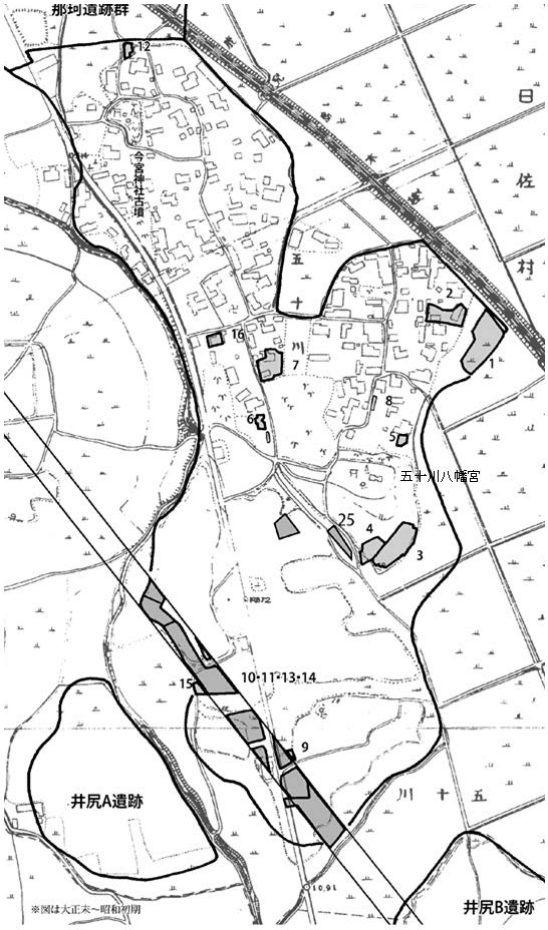
令和 3 年 8 月 19 日付で上記地における埋蔵文化財の有無についての照会を受理した（事前審査番号 2021-2-543）。これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である五十川遺跡に含まれていることから、令和 3 年 10 月 26 日に確認調査を行った。確認調査では現地表下 40cm で弥生時代の遺構が検出された。その後、上記地にて令和 3 年 11 月 16 日付で上記地における埋蔵文化財の有無についての照会を再受理した（事前審査番号 2021-2-895）。前回の確認調査の結果を踏まえ、遺構の保全等に関して申請者と協議を行ったが、工事による埋蔵文化財への影響が回避できないため、掘削が遺構面より深い住宅建築の範囲について記録保存のための発掘調査を実施した。

2. 調査の方法

住宅建築により遺跡が影響を受ける範囲に限って発掘調査を行った。表土掘削・埋戻しは小型重機で行った。遺構の精査・掘削は発掘作業員 7 名によって行い、測量、作図、写真撮影は赤坂が行った。オルソ画像は AgisoftMetashapeStandard で作成した。



2. 敷地境界と調査範囲（S=1/400）



3. 調査地周辺古地図と五十川遺跡範囲
（市報『五十川遺跡 6』Fig.4 に追記）

4．調査区遺構平面図（S=1/80）

3.調査の記録

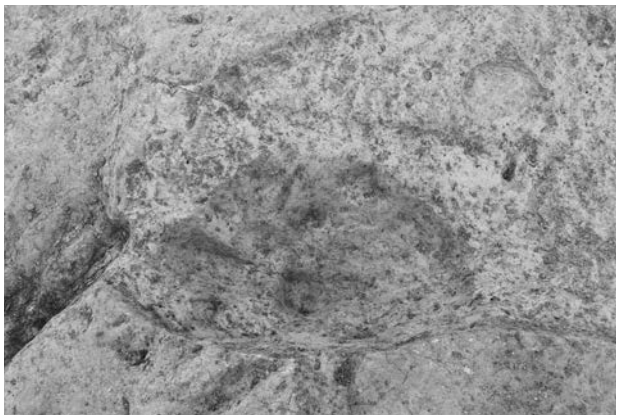
五十川遺跡は御笠川・那珂川により形成された段丘のうち、博多駅南から那珂川町安徳にのびる低平な独立台地に立地し、遺跡の位置する台地は南北約 800 m、東西 240 mほどの面積であり、標高 9 ～ 11 mを測り北へ緩やかに傾斜している。調査地点は標高 10.6 m前後で台地南側中央でも標高の高い地点である。周囲は沖積低地に囲まれ、西側は那珂川支流によって画される。

今回の調査では地表下 40㎝、表土直下で鳥栖ローム層に到達し遺構を検出した。前の住宅にかかる排水溝や基礎が縦横に走っていたが遺構はよく残っていた。南北方向の溝３条（SD-3・5・８）、東西方向溝１条（SD-2）、井戸１基（SE-1）、建物の柱穴多数を検出した。

井戸 SE-1 は円形素掘り井戸で一部が調査区外に伸び未完掘。断面は逆台形で長軸 1.4 m・短軸 0.5 m以上深さ 0.85 m以上を測る。井筒は不明。黒褐色土と淡茶褐色土が水平堆積し、井戸埋没後に溝が上部を走り、その溝の壁はローム土を用いて貼りなおしている。壁面から SE-1 に伴う土器片がまとまって出土し、時期は弥生終末～古墳前期とみられる。

溝 SD-3 は調査区を南北に貫き、断面は逆台形、底面幅 0.2 m、上面幅 0.9 ～ 1.3 m、深さ 0.6 mを測る。土坑 SK- 4 も溝 SD-3 に伴う。出土土器片から時期は中世（12 後半～ 14 世紀）とみられる。その他の溝は幅 0.6 m、深さ 0.6 m前後とやや幅狭く、断面逆台形で方向は SD-3 に平行もしくは直交する。時期は不明だが須恵器片も含まれており、古代～中世の可能性がある。柱穴の時期は不明である。その他遺構に伴わない遺物として黒曜石石鏃１点が出土した。遺物総量はパンケース１箱分である

5．調査区オルソ画像



6．土坑 SK-4・溝 SD-3 南半 (西から)

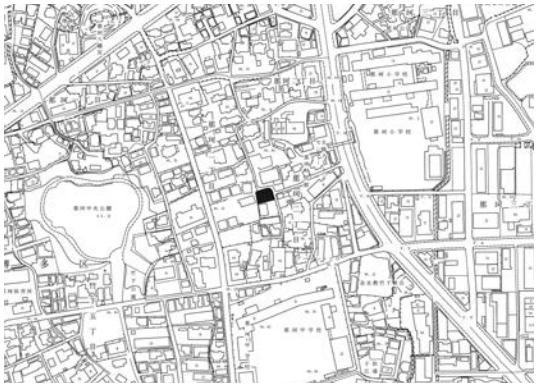
7．井戸 SE-1(西から)

4. まとめ

本調査と同じ台地南側の五十川遺跡 10・11・13・14 次調査では古代の溝や中世後半の大溝、弥生時代から古墳時代の集落が検出されており、本調査でも同様の性格の遺構が広がっていたとみられる。

2139　那珂遺跡群 189 次（NAK-189）

所 在 地　博多区那珂２丁目 132 － 2
調査原因　戸建住宅建設
調査期間　2021.12.23
調査面積　20.73㎡
担 当 者　森本幹彦・山本晃平
処　　置　記録保存



1．調査地点の位置（24　板付　0085　S＝1/8,000）

2．調査区全景（北から）

調査の概要

1．調査に至る経緯

令和３年９月７日付けで、当該地における埋蔵文化財の有無についての照会文書が提出された（事前審査番号 2021-2-617）。申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていることから、令和３年 11 月４日に申請地で確認調査を実施した。その結果、現地表下 13㎝の橙褐色ローム上面から竪穴住居などの遺構が検出された。その結果を踏まえて協議の結果、建物建築部分は盛土を行い、遺構面までの保護層を確保することで遺跡を保全することになった。ただ申請地北側の駐車場部分に関しては切り上げられるため、埋蔵文化財への影響を回避できないことから、その部分は記録保存のための発掘調査を行うことで合意した。

発掘調査は令和３年 12 月 23 日に着手し、同日に終了している。

2．調査の概要

那珂遺跡群は福岡平野を流れる御笠川と那珂川に挟まれた洪積台地、中位段丘上の北側に位置する遺跡である。今回の調査地点は那珂遺跡群内の南西側に位置し、周辺では第 76 次、第 167 次調査など複数箇所で発掘調査が行われている。遺構検出は重機で遺構面上面まで掘削を行った。調査区内は以前の建物の影響か、攪乱が多く遺構の残りは散漫であった。

3．遺構と遺物

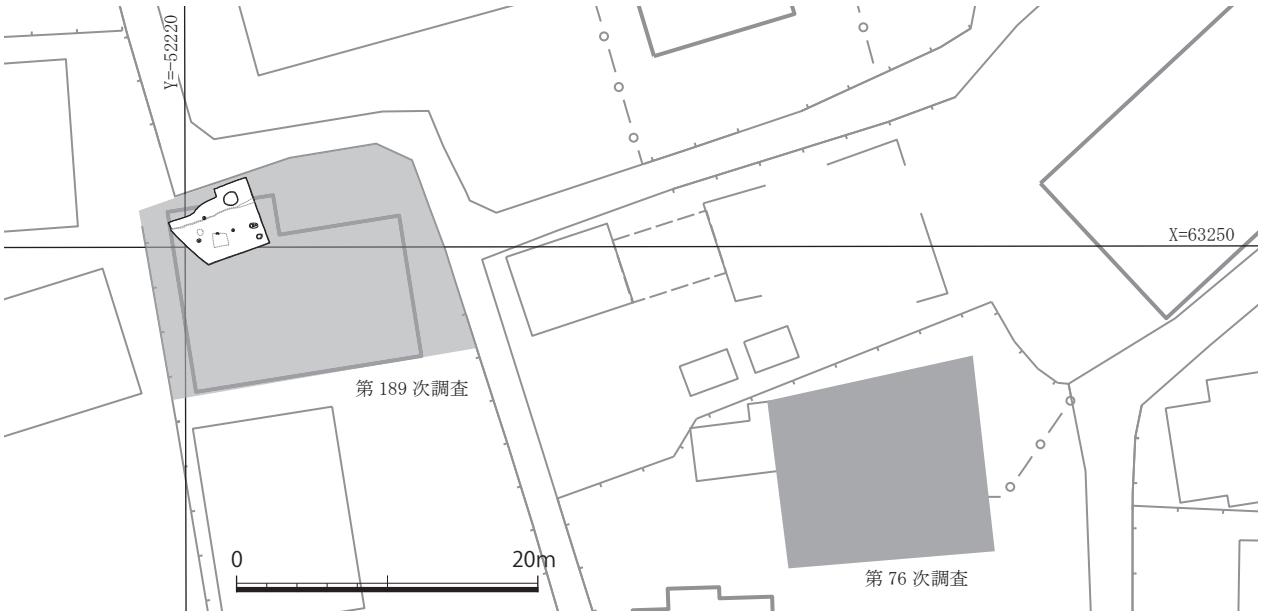
検出遺構は井戸１基と柱穴列である。

井戸 001　調査区北側で検出された井戸である。径 90㎝を測る。埋土は黒褐色粘質土でしまりが強い。今回の工事は現道路面より掘削されることがないため、検出面から約 50㎝程掘り下げたところで現道路面より下がったため、ここで掘削を止めた。出土遺物は弥生土器が出土している。ただすべてが小片で実測に耐えうるものがなかった。

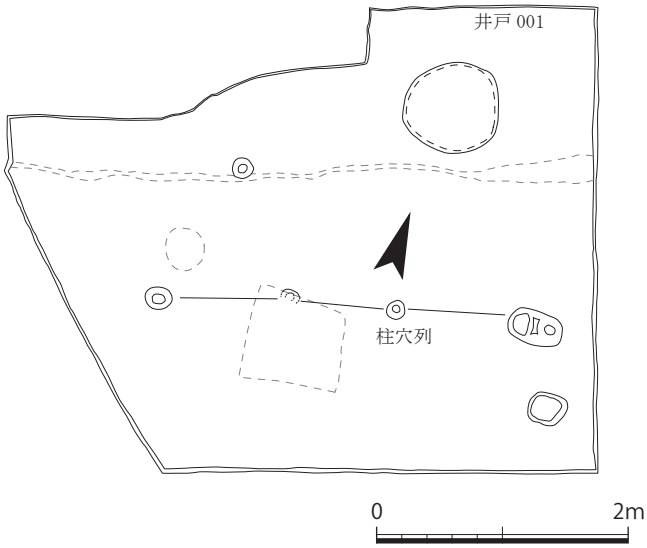
柱穴列　調査区南側で検出されたおよそ東西方向に延びる柱穴列である。３間分確認できており、およそ 1.4 m 間隔で並んでいる。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は小片であるが、土師器と陶器が出土した。時期はおそらく中世頃である。

4　小結

今回の調査では井戸１基と柱穴列を確認した。ただ井戸に関しては遺跡の保全のため完掘はしていない。しかし確認調査の際には竪穴住居と考えられる掘りこみを確認しており、未調査部分にも遺跡が残っていることは間違いなく、那珂遺跡群における集落の一端を確認できた。



3. 調査区位置図及び周辺調査位置図（1/500）



4. 調査区全体図（1/60）

5. 調査区全景（南西から）

6. 井戸 001（北から）

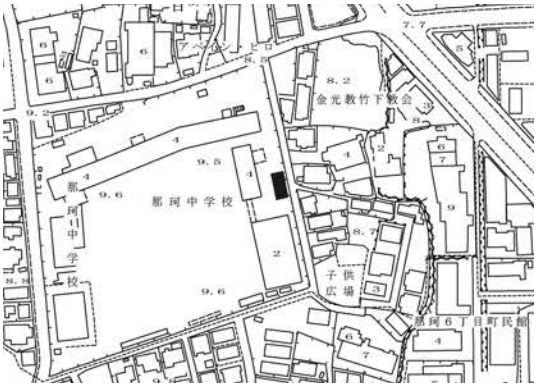
7. 柱穴列（東から）

2140　那珂遺跡群 190 次（NAK-190）

所 在 地　博多区那珂２丁目 18 番１号
調査原因　仮設校舎建設
調査期間　2022.1.5 ～ 2022.2.8
調査面積　84㎡
担 当 者　常松幹雄・鶴来航介
処　　置　記録保存

調査の概要

調査地の那珂遺跡群は、春日丘陵からのびる段丘の北端に立地する。調査地点は那珂中学校の東端に位置しており、120 次調査の北側にあたる。遺構面の標高は約９ｍで、溝や竪穴住居、柱穴が検出された。調査区の西側で、120 次調査で確認された溝の延長部にあたる断面が逆台形の溝を検出した。深さ 60㎝で南北方向にのびる。調査区の北側では南東から北西にかけて深さ２ｍほどの近世の落ち込みがあり、底面は八女ローム層に達する。溝では７世紀代を主体とする平瓦、丸瓦のほか軒丸瓦の瓦当部、土師器や須恵器、砥石が出土した。溝はほぼ磁北に沿って直線的に延びており、北側で近世の落ち込みに切られている。150m ほど南の 179 次調査では今回の溝と直交する７世紀後半の東西方向の溝を確認しており、今回の溝も７世紀代の区画溝と推定される。



1．調査地点の位置（24　板付　0085　S＝1/4,000）

2．調査区全景（西から）

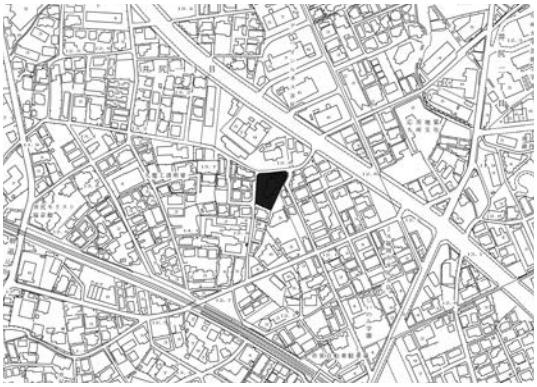
2141　井尻Ｂ遺跡 49 次（IGB-49）

所 在 地　南区井尻１丁目 108 番２～４
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2022.1.11 ～ 2022.3.17
調査面積　249.83㎡
担 当 者　三浦萌
処　　置　記録保存

調査の概要

井尻Ｂ遺跡は福岡平野を流れる那珂川と御笠川に挟まれた台地上に位置している。今回行われた第４９次調査地点は、井尻Ｂ遺跡の東端部に位置しており、南側で行われた３次調査では井尻廃寺の寺域が推測されている。

今回の調査で発見された遺構は弥生時代の掘立柱建物２棟、古墳時代初頭の方形周溝状遺構（墓？）２基、古代の溝１条（SD015）と竪穴住居址１軒、時期不明の掘立柱建物１棟（SB082）である。出土した遺物や遺構は全体的に 17 次調査のものと類似している。また SD015 から出土した遺物や瓦などから考えると、以前から指摘されている井尻廃寺との関係が伺える。３次調査の際に寺域が推測されているが、その範囲よりも少し東側に広がっている可能性もあり、掘立柱建物の時期も含めて今後の検討課題としたい。


1．調査地点の位置（25　井尻　0090　S＝1/8,000）

2．Ⅰ区全景（北から）

2142　大林遺跡２次（OBY-2）

所 在 地	西区拾六町５丁目 972 番１
調査原因	個人住宅建設
調査期間	2022.1.11 ～ 2022.1.17
調査面積	15.43㎡
担 当 者	阿部泰之
処　　置	記録保存

調査の概要

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会 は、同市西区拾六町五丁目 972 番１における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を令和３年 12 月３日付で受理した。

これを受けて埋蔵文化財課 事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である大林遺跡に含まれていること、確認調査の結果現地表面下 30cm で厚さ 120cm を測る遺物包含層が確認されたことから、その保全等に関して申請者と協議を行った。

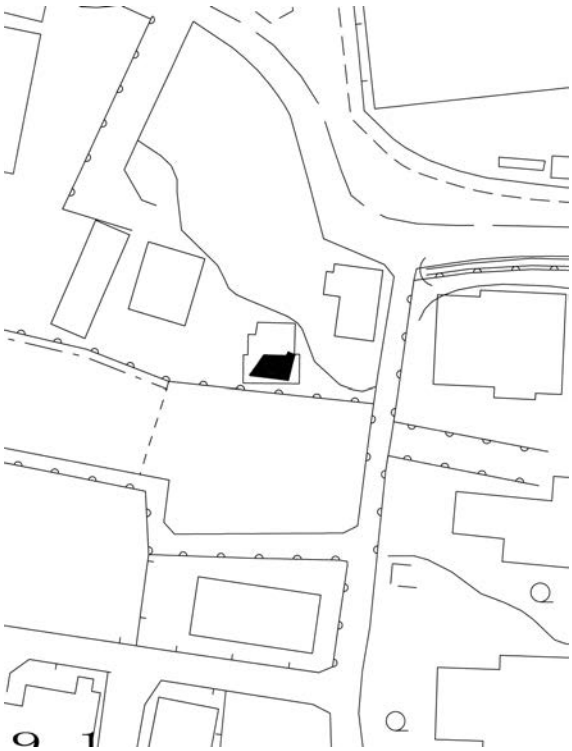
その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建物建築部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、令和４年１月７日付で発掘調査事前協議確認書を取り交わし、同年１月 11 日から発掘調査を、翌令和４年度に資料整理および報告をおこなうこととなった。

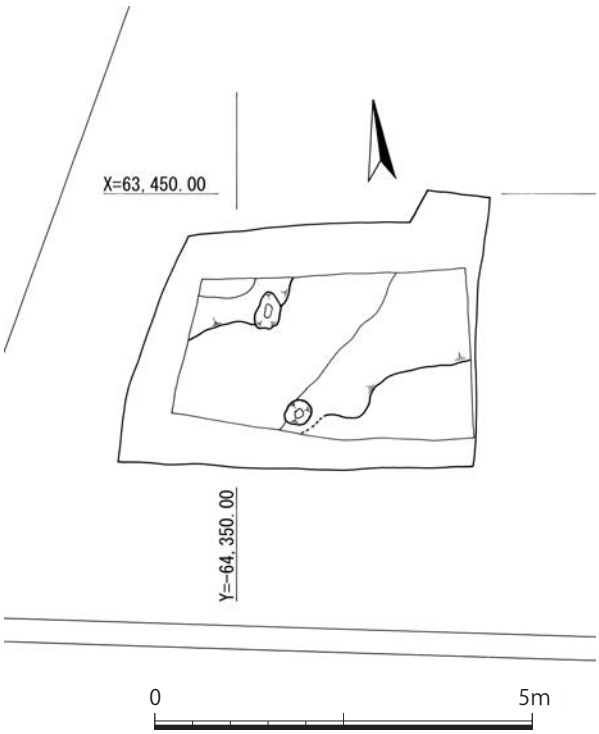
ただし、申請地が狭小であり調査期間が短いうえ、湧水もあることから、安全が確保できる範囲で可能な限りの調査を行うこととした。

１．調査地点の位置（103　長垂　0375　S＝１/4,000）

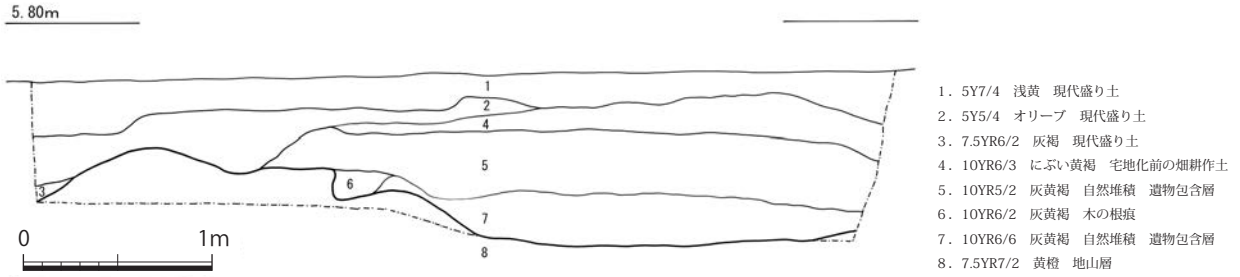
2．調査区全景（東から）



３．調査区位置図（S＝1/1,000）



４．調査区全体図（1/100）



5．調査区南壁土層断面図（S＝1/40）

2．調査の概要

調査地は大林遺跡が位置する低丘陵の北端部に位置し，現況は宅地である。

今回の発掘調査では，弥生時代中期後半～古墳時代前期にかけての遺物包含層を検出した。現地表面下 35 ～ 40㎝、宅地化前の耕作土直下で灰黄褐色の遺物包含層に達する。包含層は地山までの厚さ 60 ～ 90㎝を測り、自然堆積で北に向かって厚くなる。包含層は第 5 層と第 7 層の 2 層に分層でき、その境界から湧水する。また、調査区東側に地山の立ち上がりが検出されたが、包含層との境界は漸移的であったため人為的な溝等の遺構ではなく谷地形内部の自然堆積層と判断した。地山面には木の根痕が複数検出され、かつて林だった状況が窺える。

3.遺物各説

出土遺物 (第７・８図)

遺物は中型コンテナで 5 箱出土した。出土した土器は大半が前期後半から後期末までの弥生土器だが、第 5 層からは突帯文土器および土師器が出土した。器壁は磨滅し谷上部の集落からの流れ込みと推測される。遺物から第 5・第 7 層間に時期の差は認められない。その他、何れの層からも石斧・擦石等の石器が出土している。鉄器等の金属器および木製品は出土しなかった。

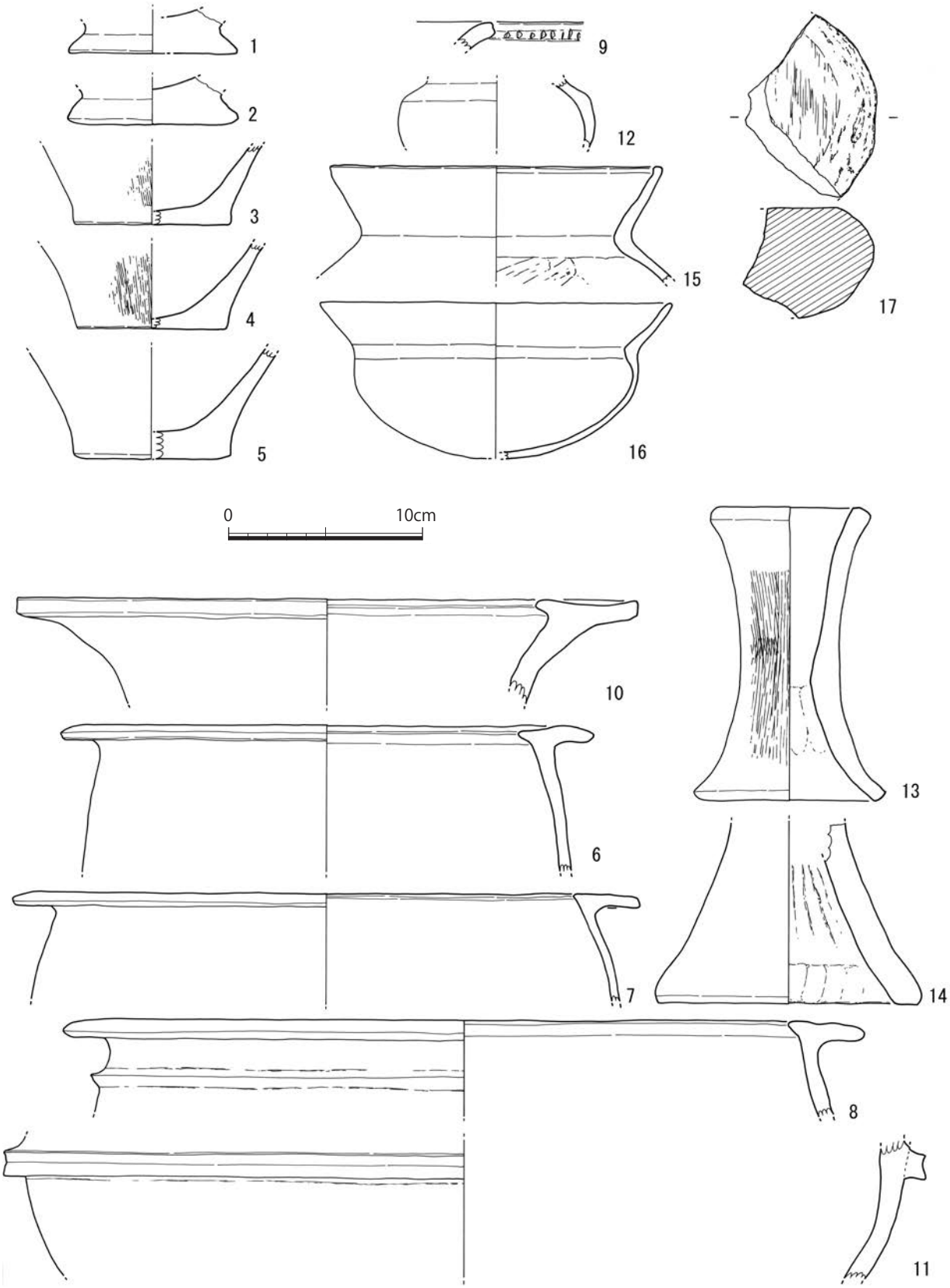
(第７図)

第７図に示すものは第 5 層から出土した遺物である。

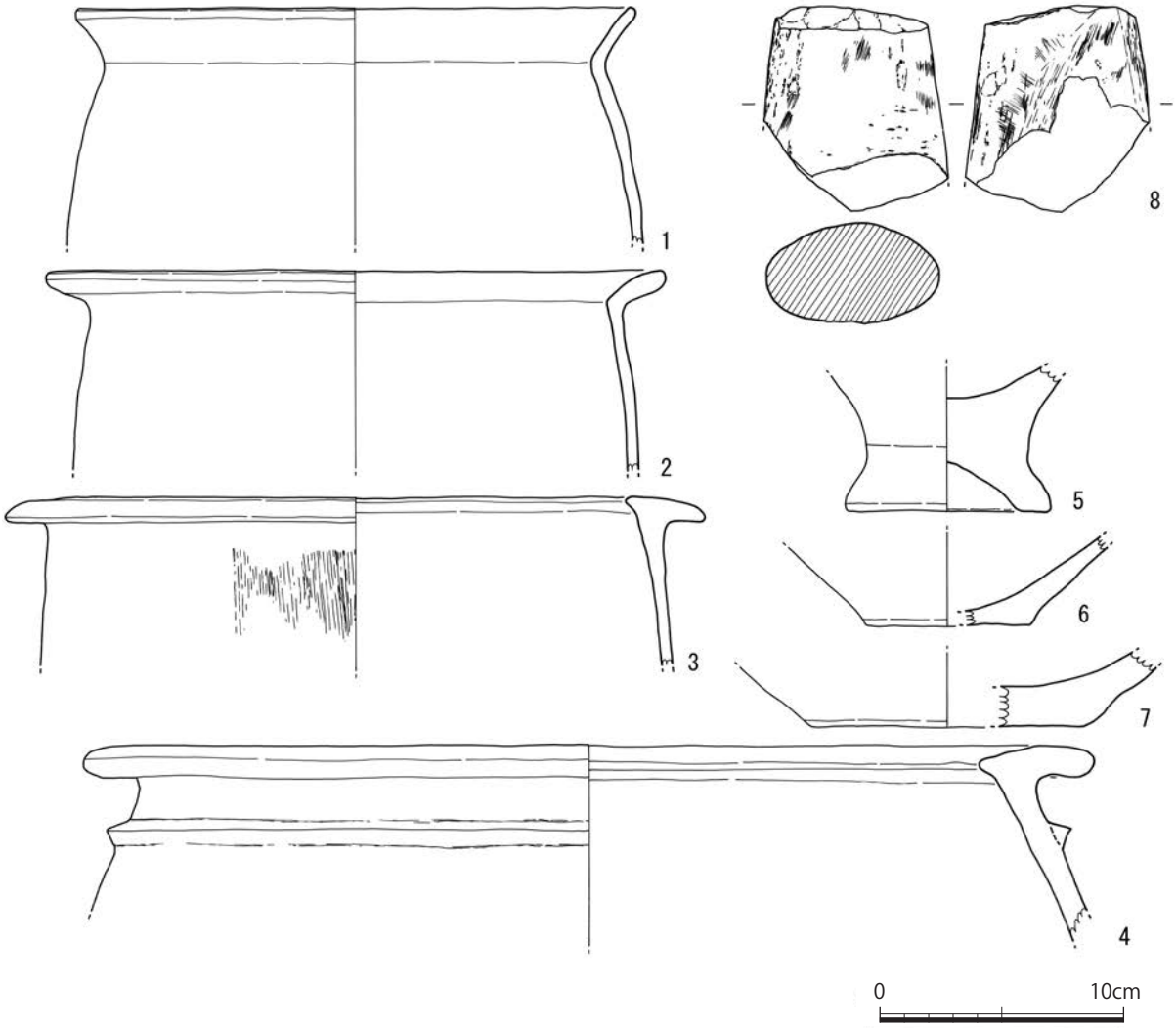
1･2 は突帯文土器深鉢である。底部の小片。3 ～ 8 は弥生土器甕である。3 ～ 5 は底部の、6 ～ 8 は口縁部から胴部にかけての小片である。9 は甕の口縁部で刻目を有する。如意形になるものか。10･11 は弥生土器壺である。10 は鍬形を呈する広口壺の口縁部、11 は胴部下半のいずれも小片である。12 は小形の壺形土器で、胴部の小片。13･14 は弥生土器器台である。13 は 1/4 個体残存する破片で器高 14.8㎝を測る。14 は底部の小片である。15・16 は土師器である。15 は口縁部から胴部にかけての小片、16 は鉢で、浅い皿状の体部に大きく開く口縁部を有する。器壁は薄い。約 1/5 個体の破片で口径 17.8㎝に復元される。

17 は磨石である。花崗岩質の礫を使用し約 1/4 個体残存する。上下の面が平らに磨滅し縁辺部には打痕が認められる。重量 361g を測る。

6．調査区南壁土層 (北より)



7．第５層出土遺物実測図（S ＝ 1/3）



8．第７層出土遺物実測図（S ＝ 1/3）

(第８図)

第８図に示すものは第７層から出土した遺物である。

１～４は弥生土器甕である。いずれも口縁部の小片。5 は弥生土器甕である。底部の破片で上げ底となる。6・7 は弥生土器壺で底部の小片である。8 は磨製石斧。今山産とみられる玄武岩質の石材が用いられた太形蛤刃石斧の頭部である。打痕が観察され、破損後に敲石に転用されたと推測される。重量 382g を測る。

４.まとめ

今回は谷地形の内部に堆積した遺物包含層の調査となった。遺物は器壁が磨滅しほとんど接合しなかったことから谷の上部から流れ込んだものと推測される。本調査区の南西に位置する丘陵上には宮の前遺跡があり、遺物の多くはこの遺跡から流れ込んだものであろう。今回の調査で出土した遺物には弥生早期・前期に遡るものもあり、調査地の南に位置する湯納遺跡からの流れ込みも考えられ、今回の調査地は南側に長く伸びる谷地形の内部にあたると推測される。

2143　箱崎遺跡 122 次（HKZ-122）

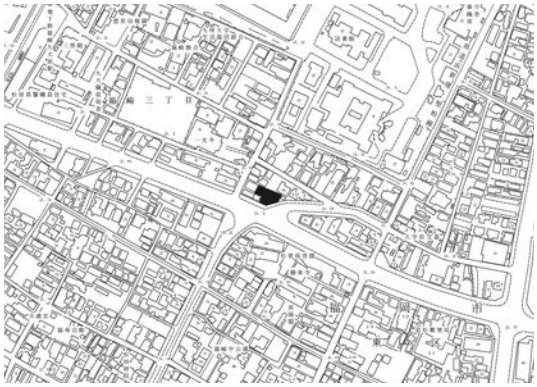
所 在 地　東区箱崎 3 丁目 3272 番 2，3275 番 2
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2022.1.20 ～ 2022.3.12
調査面積　105㎡
担 当 者　赤坂亨
処　　置　記録保存

調査の概要

箱崎遺跡は宇美川下流域、多々良川河口左岸の博多湾に面し、南北に延びる砂丘上に位置する。本調査地点は箱崎遺跡の北部に位置し、博多湾へむけて下る西緩斜面にあたる。

１区では地表下 110㎝まで下げたところ、暗褐色砂の上に焼土・炭が部分的に面をなして広がっていた。焼土・炭を取り除いた暗褐色砂面を第１面とした。方形の地下室状遺構（近現代）および井戸・土坑・ピットなどの第１面遺構が検出できた。地表下 125㎝の砂丘上面を第２面とし、土坑、ピットなどの第２面遺構が検出できた。２区では第１面が検出できず、第２面遺構の検出・個別掘削を行った。２区では井戸・土坑・ピットが検出された。

井戸・土坑・ピットから土器・輸入陶磁器などが出土した。時期は 12 ～ 14 世紀頃である。



1．調査地点の位置（34　箱崎　2639　S ＝ 1 /8,000）

2．１区３面全景 (南東から)

2147　井尻 B 遺跡 50 次（IGB-50）

所 在 地　南区井尻 5 丁目 234 番 7，69
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2022.2.21 ～ 2022.3.11
調査面積　122.17㎡
担 当 者　田中健・池田祐司
処　　置　記録保存

調査の概要

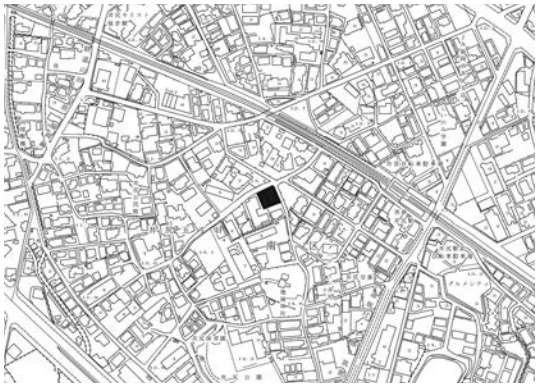
本調査地は遺跡中央南側に位置しており、ローム検出面の標高は調査区北端で約 11.5m、調査区南端で 12m で、南から北に向かって緩やかに下がっている。

今回検出した遺構は、北北西に延びる溝が８条、土坑が２基、ピット少数である。

調査区西壁沿いで検出した SD001 は、幅 80㎝、深さ 15㎝程であるが、土層断面を確認したところ黒褐色粘質土から掘り込まれていた。そのため、本来の溝の幅は約 1.7m、深さは約 60㎝であった可能性がある。

遺物は弥生土器が中心でコンテナケース２箱分出土した。

今回の調査では、弥生時代後期の溝を検出したが、周りの調査では検出されていないため、今後の調査によって明らかになることを期待する。

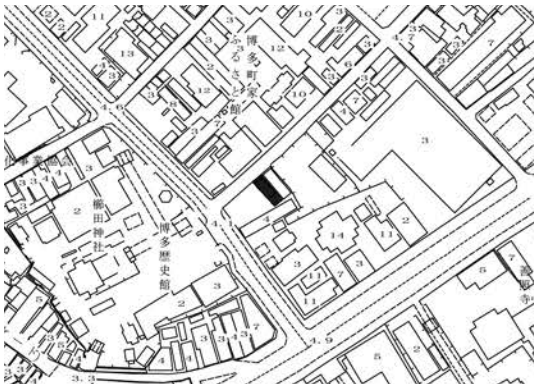


1．調査地点の位置（25　井尻　0090　S ＝ 1 /8,000）

2．第Ⅱ区全景（北から）

2144　博多遺跡群 249 次（HKT-249）

所 在 地　博多区冷泉町 107 番
調査原因　店舗・事務所建設
調査期間　2022.1.17 ～ 2022.1.18
調査面積　29.02㎡
担 当 者　森本幹彦・山本晃平
処　　置　記録保存



1．調査地点の位置（49　天神　0121　S＝1/4000）

2．Ⅰ区調査区全景（北西から）

調査の概要

1．調査に至る経緯

令和３年７月 30 日付けで、当該地における埋蔵文化財の有無についての照会文書が提出された（事前審査番号 2021-2-474）。申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれており、また周辺の確認調査や本調査から中世の遺構等の分布が考えられる場所である。敷地幅が非常に狭く予定工事の基礎等の影響も限定的なものであったため部分的な調査を行うこととなった。

発掘調査は令和４年１月 17 日に着手し、１月 18 日に終了している。

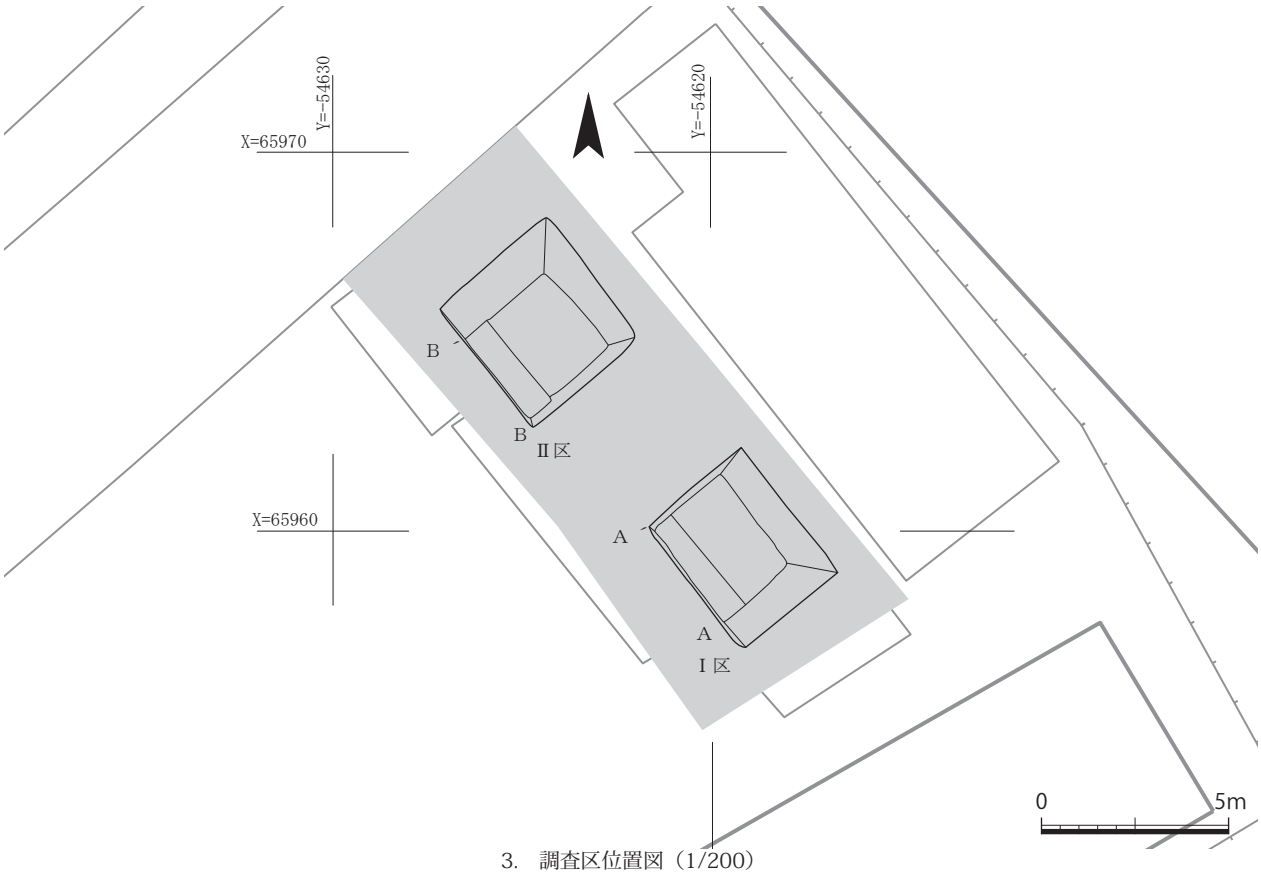
2．調査の概要

博多遺跡群は玄界灘に面する博多湾岸に形成された古砂丘上に位置している。本調査地点は遺跡群内の南西側に位置する。調査は廃土置き場の関係から２区に分けて行った。敷地の南奥側をⅠ区とした。Ⅰ区では GL-100㎝灰褐色砂質土で一度表土掘削を止め、ここを１面目として遺構検出を行った。整地層ではあるが、明確な遺構が確認できなかったため、さらに掘削を行い、GL-160㎝で井戸と思われる遺構２基とピット数基を確認した。ここを２面目として、遺構の一段下げを行い、記録をとった。今回の工事の基礎のフーチングがこの２面目の深さまでしか入らないことから、遺構の完掘は行わなかった。しかし杭が入る箇所に関しては、遺構の断ち割りもかねて一部トレンチ状に掘り下げた。トレンチの断面から遺構の切り合いを明確に確認することはできなかった。Ⅰ区での調査終了後、埋め戻しを行い、続けてⅡ区の調査を行った。Ⅱ区では GL-120㎝程度まで攪乱が大きく入っていた。GL-150㎝でⅠ区１面目と同じ層を確認したが、明確な遺構は確認できなかった。杭が入る箇所にトレンチを入れて断ち割り、土層の確認をした。下層は自然の堆積層（Ⅱ区７～９層）となっており。おそらく周辺の調査事例から谷の覆土と考えられる。

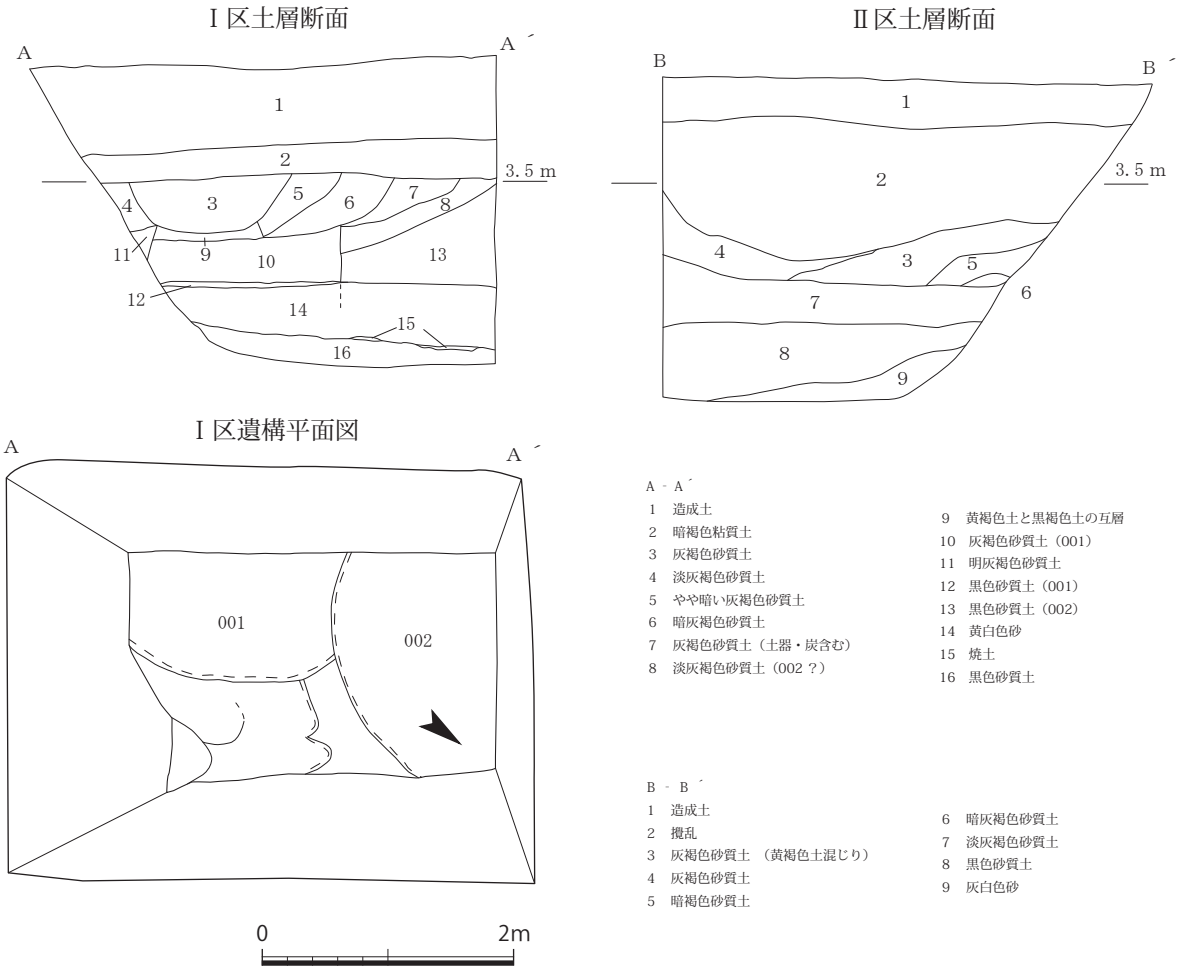
3．遺構と遺物

検出遺構は平面のみでしか確認できていないが、井戸状遺構２基とピット数基である。完掘をしていないので、遺構の規模などは明確でない。

出土遺物は主に土師器、須恵器、白磁などである。1･2･3 はⅠ区 001 から出土した。1･2 は土師器の坏である。1 は口縁部が一部欠けているが、ほぼ完形である。口径は 12.7㎝、器高は 2.7㎝、底径は 8.9㎝をはかる。焼成は良好である。胎土は密で 1㎜以下の白色粒が若干混じっている。色調は橙褐色を呈する。底部は回転糸切りがされており、底部と体部の境にヘラ切りがされている。その他は回転ナデで調整されている。2 は底部しか残存していない。復元底径は 9.2㎝、残存器高は 1.5㎝をはかる。焼成は良好である。胎土は密で雲母が若干混じる。色調は褐色を呈する。外面底部は回転糸切り後に板状圧痕が施されている。体部と内面底部はナデ調整である。3 は白磁の碗である。底部のみ残っている。復元底径は 6.6㎝、残存器高は 2.4㎝をはかる。胎土は灰白色を呈し、精良である。施釉は乳白色を呈する。4・5 はⅡ区のトレンチの下層から出土した。4 は須恵器の蓋である。復元口径は 15㎝、器高は 2.2㎝をはかる。天井部はヘラ切りで、その他は回転ナデが施されている。焼成は良好である。色調



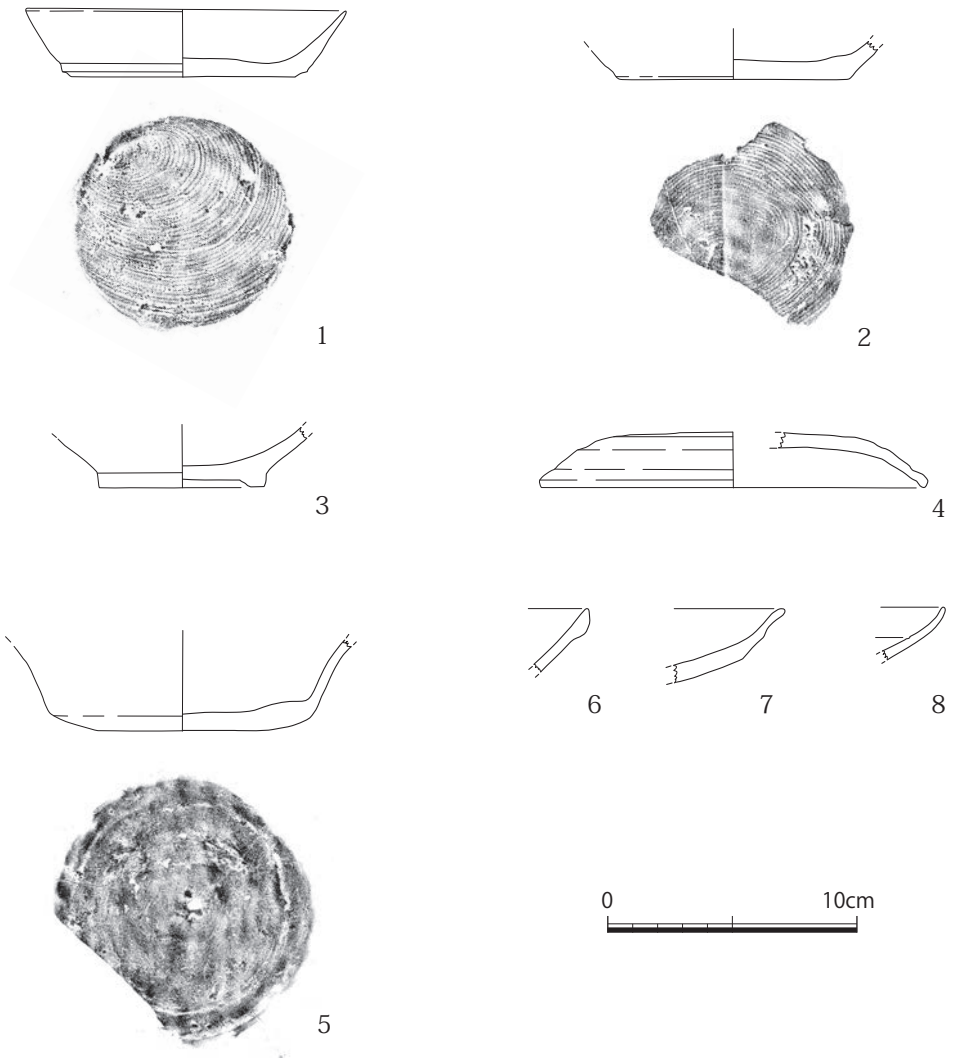
3. 調査区位置図（1/200）



A－A´
1 造成土
2 暗褐色粘質土
3 灰褐色砂質土
4 淡灰褐色砂質土
5 やや暗い灰褐色砂質土
6 暗灰褐色砂質土
7 灰褐色砂質土（土器・炭含む）
8 淡灰褐色砂質土（002 ?）
9 黄褐色土と黒褐色土の互層
10 灰褐色砂質土（001）
11 明灰褐色砂質土
12 黒色砂質土（001）
13 黒色砂質土（002）
14 黄白色砂
15 焼土
16 黒色砂質土

B－B´
1 造成土
2 攪乱
3 灰褐色砂質土 （黄褐色土混じり）
4 灰褐色砂質土
5 暗褐色砂質土
6 暗灰褐色砂質土
7 淡灰褐色砂質土
8 黒色砂質土
9 灰白色砂

4. Ⅰ区平面図及び土層断面（1/60）



5. 出土遺物実測図（1/3）

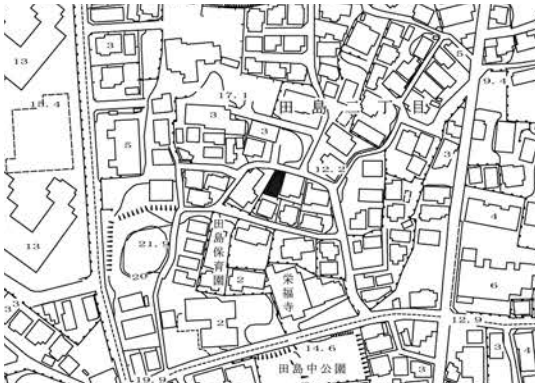
は暗灰色を呈する。5 は須恵器の坏である。底部と体部の一部が残存している。復元底径は 10.2㎝、残存器高は 3.6㎝をはかる。底部はヘラ切りが、その他は回転ナデが施されている。焼成は良好である。色調は暗灰色を呈する。6 は Ⅰ 区トレンチの下層から出土した白磁である。口縁部のみの小片である。口縁部は玉縁を呈する。胎土は白色を呈するが、一部黒色粒を含む。施釉は灰白色を呈する。7・8 はⅡ区のトレンチの下層から出土した。7 は須恵器の坏である。残存器高は 2.9㎝をはかる。体部から底部にかけてヘラ切りが、その他は回転ナデが施されている。焼成は良好である。胎土は密である。色調は橙褐色を呈する。8 は白磁の皿である。残存器高は 2.1㎝をはかる。施釉は灰オリーブ色を呈し、胎土は灰白色を呈する。

4. 小結

今回、遺構の完掘までは行っていないため十分な調査とは言えないが、古代以降に埋没が済んだ谷の上に中世の集落が形成されており、博多遺跡群の様相の一端を確認できた。

2145　田島和尚頭遺跡１次（TAO-1）

所 在 地	城南区田島２丁目 565 番２，566 番２
調査原因	個人住宅建設
調査期間	2022.2.10 ～ 2022.2.22
調査面積	56㎡
担 当 者	常松幹雄
処　　置	記録保存



1．調査地点の位置（73　茶山　0249　S＝1/4,000）

2．Ⅰ区全景（南から）

調査の概要

1.　位置と環境

田島和尚頭遺跡は、油山から派生する丘陵先端部の緩斜面に立地する。調査地は標高 13.5m 程度で、地表から 0.5 m下で黄白色の堆積岩類となる。遺跡の北側 200 mには田島小松浦遺跡が、北東には田島Ａ遺跡が立地している。別府香椎線の建設にともなう調査で古墳時代前期から古代、中近世にかけての遺構や遺物が検出された。また周辺の調査では甑形土器や二重口縁甕や壺などが集中して検出されており、山陰系土器の流入を主導した集団と京ノ隈古墳に前方後方墳が採用されたことの関連が注意される。

さらに調査地点の北側 300 mは、早良郡衙と水城西門ルートをむすぶ古代道路の推定地にあたる交通の要衝に位置していたことを示している。

2.　検出遺構

調査区中央で径 60㎝の円形プランの柱穴６基が検出され、２間×１間の掘立柱建物が確認された。西側中央の柱穴は東端の柱列に比べて 30㎝ほど浅く、束柱とみられることから、調査区を拡張して柱列の検出を行った。拡張区で確認された西側中央の柱穴の深さは 20㎝程度と浅く、これも束柱の延長とみられることから、もともと梁間２間、桁行３間の総柱の掘立柱建物と推定される。柱間は 1.74m ～ 1.9 mをはかる。北側にトレンチを入れたが遺構の広がりは確認されなかった。柱穴から出土した遺物は、土師器や須恵器の細片など僅かである。

このほか調査区南東隅で焼成土坑の一部が検出された。土坑は東西 1.8 m、南北 0.95 mで、本来不整円形の土坑と推定される。土坑の外周にそって焼土があり、内側にかけて炭化物と焼土の輪郭が確認できた。東西の土層は最下層で厚さ 3㎝ほどの焼土面の内側に炭化物を含む黒色土層と白色土が互層をなして堆積していた。南北の土層では炭化物を含む黒色土層付近で炉壁が確認された。焼成土坑内では瓦片が出土したことから、遺構は瓦焼成を目的とした土坑で、壁体の遺存状況から内側に数回築窯が行われたとみられる。焚口は確認できなかった。瓦片には燻しのかかったものと焼成不良のものがある。

出土遺物はコンテナ１箱である。

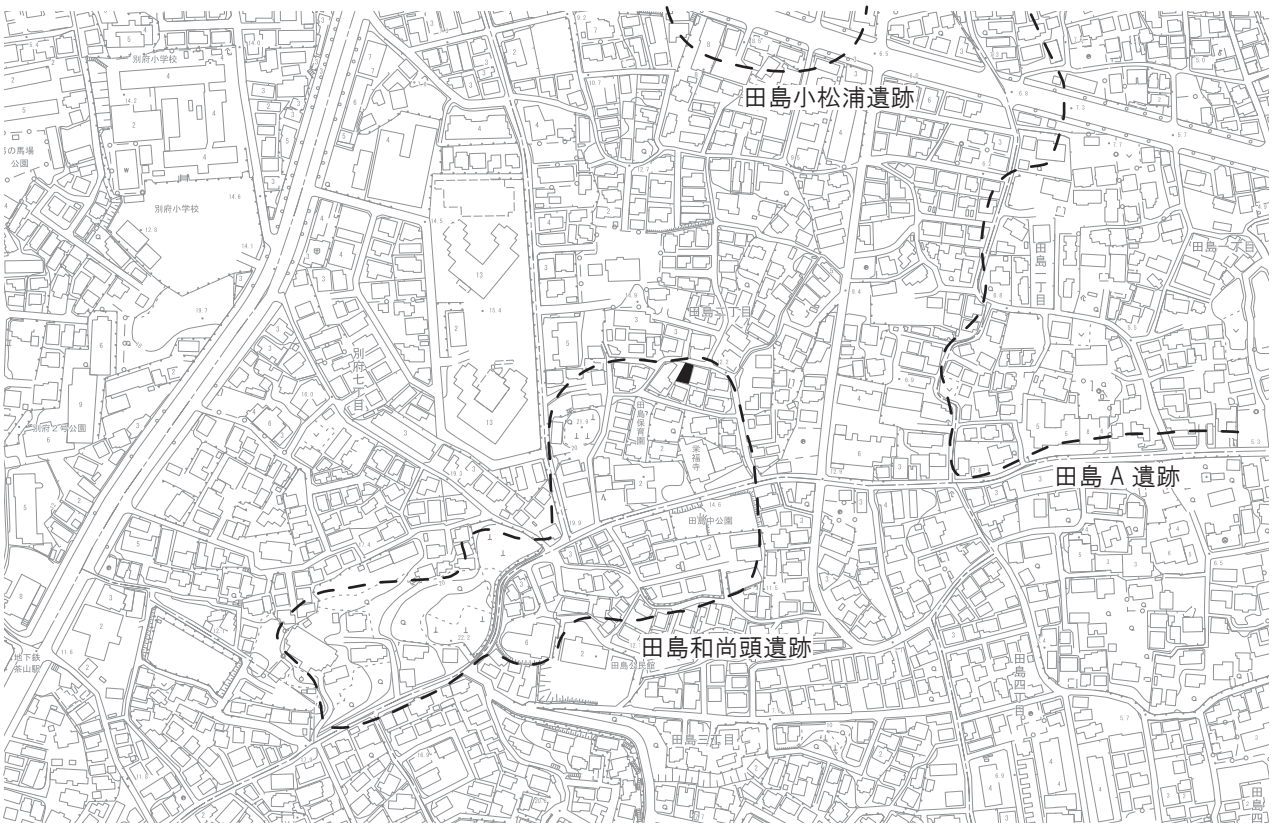
3.　まとめ

調査地の北側約 300 mには薬院と有田・小田部方面をむすぶ古代の道路の推定線が想定されている。倉庫跡とみられる総柱建物が単独で存在したとは考え難いことから、眺望がひらけた場所に中継的な倉庫群と付属施設が置かれたと推定される。時期は田島Ａ遺跡の調査から７世紀末から奈良時代にかけてと考えられる。

『福岡県の地名』によれば元禄年間博多に移った陶工高取某により窯が置かれ陶器製造がおこなわれたが 18 世紀末には廃絶したと記されている。鶏卵・瓦などが明治初年の主要な物産だったようである。調査区の南東隅で検出された焼成土坑は、近世の瓦生産にかかる遺構の可能性があるが、今後の調査の行方がまたれる。

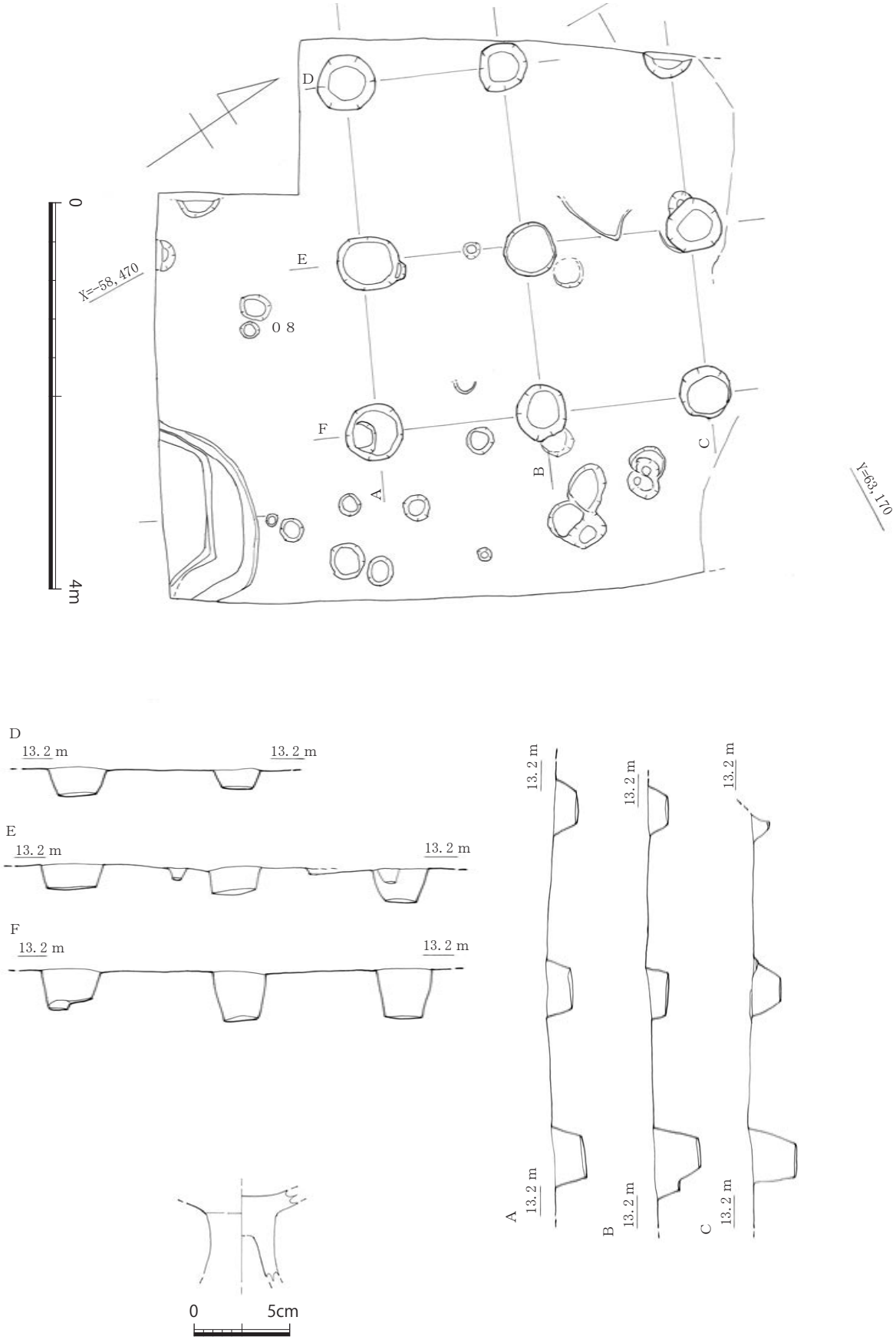
田島は、樋井川沿いの樫原（柏原）から鳥飼にかけての毗伊郷に含まれている。今回明らかになった総柱建物は、早良郡の東部における律令期の物流を解明するうえで注目される。

【参考文献】
平凡社 2004『福岡県の地名』「日本歴史地名大系」41、
山崎純男 1976「京ノ隈遺跡」段谷地所開発株式会社
加藤隆也（編）2000「田島小松浦遺跡　田島Ａ遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第 647 集、福岡市教育委員会

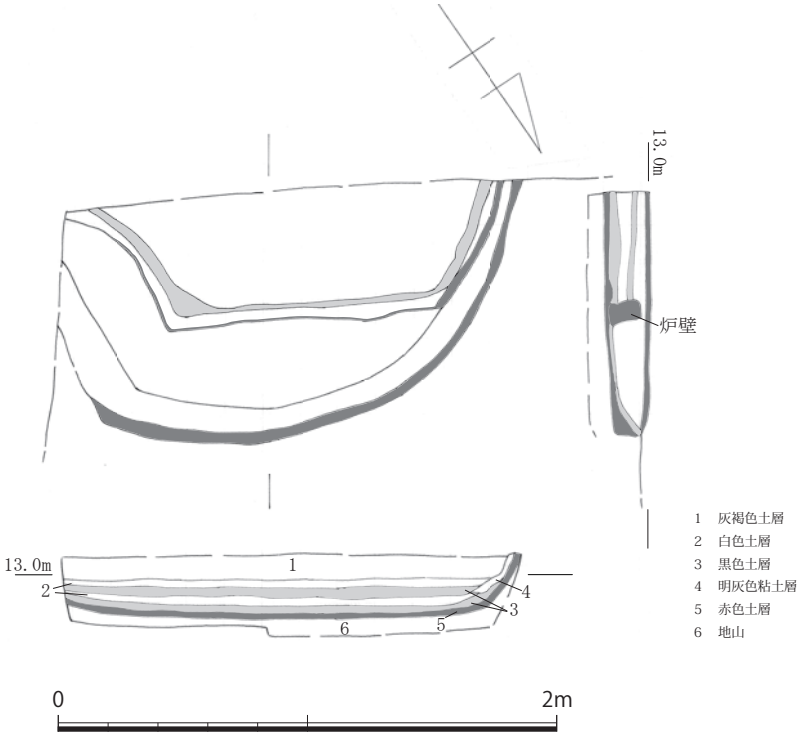


3.　田島和尚頭遺跡周辺図（1/5,000）

4.　調査区位置図（1/400）



5. 調査区全体図及び SB01 実測図（1/60） 遺物実測図（1/3）



6. SX02 実測図（1/30）

7. 調査前全景（北から）

8. 掘立柱建物全景（東から）

9. SX02 全景（東から）

10 SX02 全景（北から）

2146　警弥郷 B 遺跡 10 次（KYB-10）

所 在 地　南区弥永 4 丁目 2 番 3 号
調査原因　診療所建設
調査期間　2022.2.14 ～ 2022.2.18
調査面積　170㎡
担 当 者　池田祐司（試掘）
処　　置　記録保存

1．調査地点の位置（41　警弥郷　0158　S = 1 /8,000）

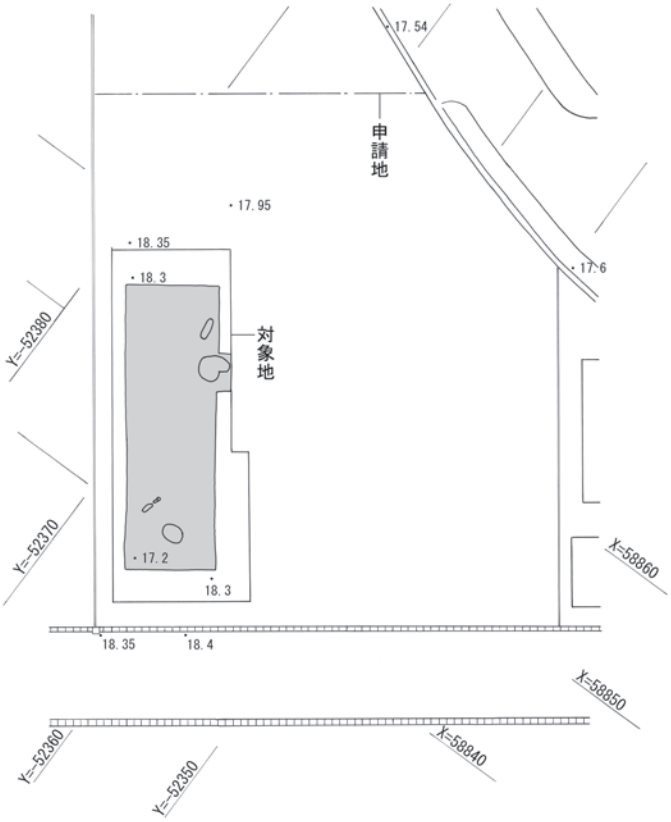
調査の概要

1 調査に至る経緯

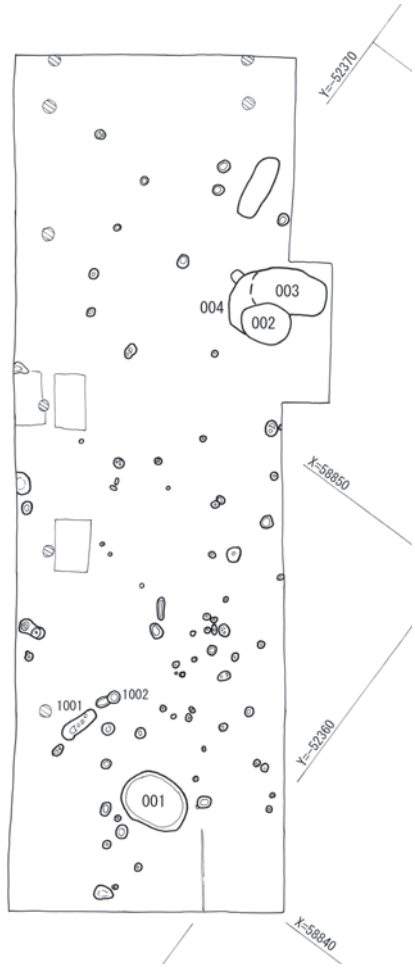
令和 3 年 1 月 13 日付けで当該地における埋蔵文化財の照会があった (2021 － 2 － 1067)。近隣の 9 次調査で弥生時代から古墳時代の集落跡を確認している。1 月 25 日、2 月 4 日に試掘調査を行い、GL － 110㎝で散漫ながらピットを検出した。工事では GL － 145㎝までの掘削が計画されており、遺構の範囲、状況を確認するために 2 月 14 日から 18 日に確認調査を行い、検出した遺構を掘削、記録した。警弥郷 B 遺跡 10 次調査として報告する。敷地面積は 1473.23㎡、対象面積は 293.14㎡である。

2．調査の概要

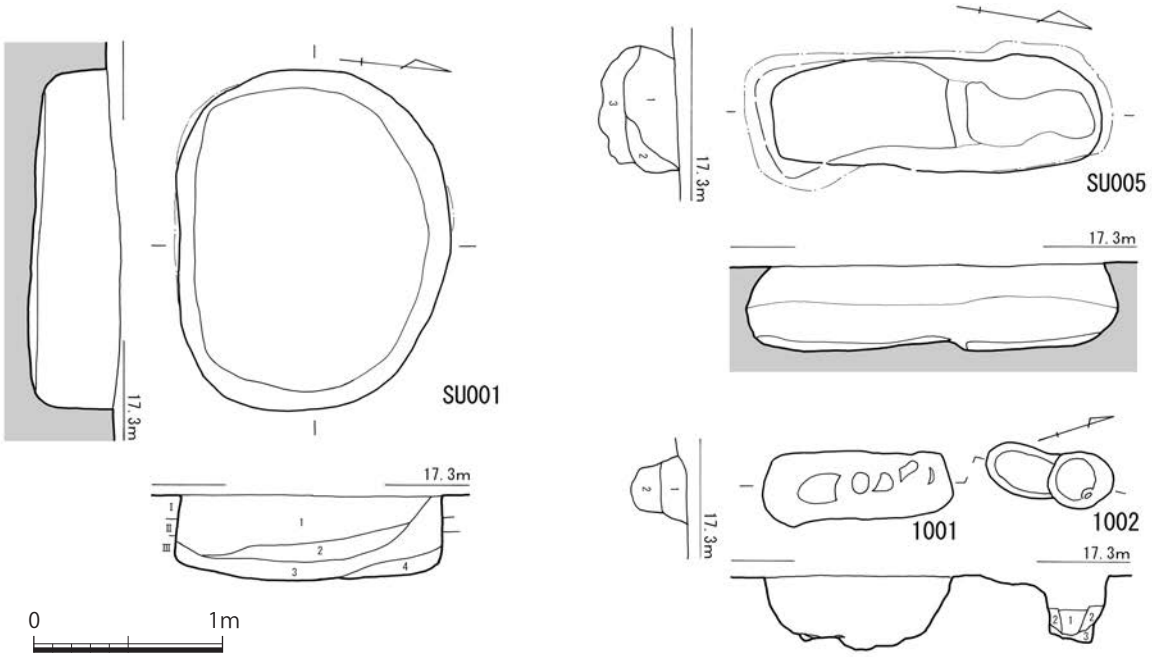
対象地は須玖岡本遺跡が広がる高位段丘の西側に連なる低位段丘上に位置する。春日市との境に接し現在は盛土造成地である。1.1 mほどの客土、水田耕作土等を除去した標高 17.2 mの黄褐色粘質土上面が遺構面である。調査区西半は厚さ 20㎝ほどの耕作土直下が黄褐色粘質土となるが、東側は数枚の耕作土が厚さ 35㎝ほど重なり、その下に黒褐色から暗灰褐色の粘質土が 10 ～ 20㎝堆積し、これを除去して黄褐色粘質土に達する。遺構は弥生時代前期の貯蔵穴 4 基以上、土坑 1 基、ピットを確認した。遺構は黒色～黒灰色の粘質土を覆土としてプランは明瞭



2．調査区位置図（S = 1/600）



3．遺構配置図（S = 1/200）



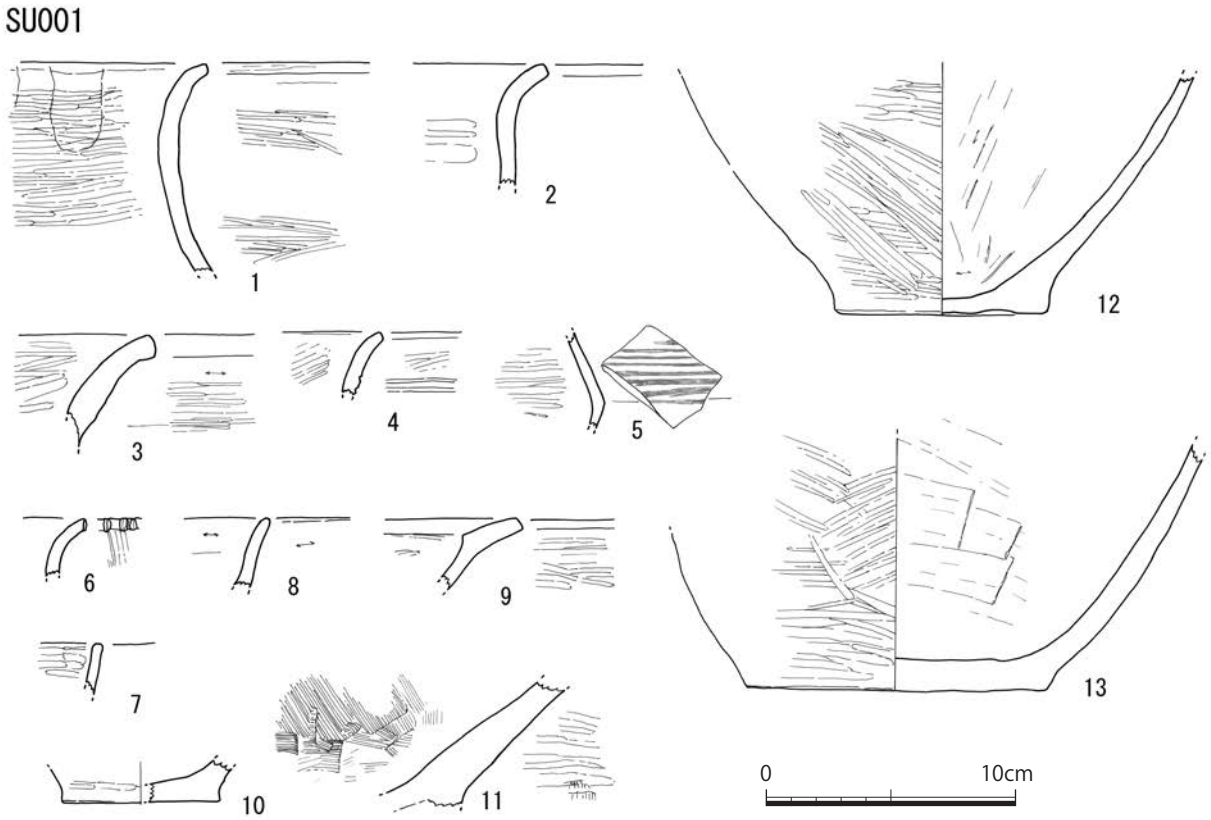
SU001
1 5YR3/1 黒褐色粘質土 細黄色粒多い
2 10YR3/2 黒褐色粘質土 黄色粒多い
3 10Y2/1 黒色土 灰黄褐色粒多く含む
4 N1.5/0 黒色土 にぶい黄色粒含む

SU005
1 暗灰褐色土 黄色粒多く 砂粒、炭粒含む
2 暗褐色土　黄色粒多く 砂粒、炭粒含む
3 暗褐色粘質土 粘性強い 黄色粒多い
2 ～ 4 炭粒含む
Ⅰ 2.5Y8/8 黄色粘質土
Ⅱ 2.5Y8/4 淡黄色粘質土に白色砂含む
Ⅲ N4/0 灰色砂質土 細砂非常に多い

SP1001
1 10YR2/1 黒褐色粘質土
2 10YR2/1 黒褐色粘質土
黄色ブロックまざる

SP1002
1 10Y3/1 オリーブ黒色粘質土に黄色粒・ブロック少量
2 10YR3/1 黒褐色土 細かな黄色土多く含む
3 2.5Y8/8 黄色土２混じる
4 2.5Y3/1 黄灰色粘質土 黄色粒・ブロック非常に多く含む
以上粘質強くよく締まる

4．ＳＵ 001・005、ＳＰ 1001・1002 実測図（Ｓ＝ 1/40）



5．ＳＵ 001 出土遺物実測図（Ｓ＝ 1/3）

である。このほかに暗灰色から灰色のピット、くぼみ状が各所に見られたが、一部を掘削し自然の営為によると判断した。遺構検出面はほぼ水平で、黄褐色土の下は締まりがある灰色砂質土、茶色粗砂となる。SU001、004 の土層に示した。

３．遺構と遺物

SU001（図４・５）対象地南側で確認した略楕円形の土坑で、壁が直からやや断面袋状となり貯蔵穴とした。平面 180 × 144㎝、深さ 45㎝ほどである。床は灰色の砂質土に達し、中央から東側がやや低い。埋土は黒色の粘質土でよく締まり、黄色粘質土の粒を多く含む。遺物は弥生前期の壺を中心とした破片が埋土から出土した。

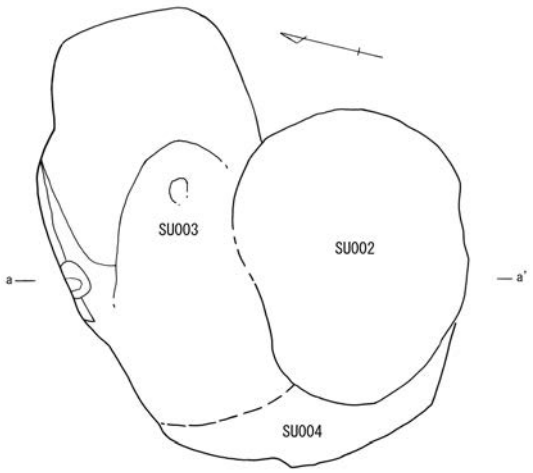
出土遺物　１は壺で器面は荒れるが内面に研磨が残る。２は径が大きく鉢か。磨研がわずかに残る。３は大型、４は小型の壺で磨研調整。５は屈曲部から上に赤色顔料で施した幅 3㎜ほどの横線が８条みられる。胎土は精良で器面は丁寧な磨研。６は外反口縁の甕で口唇部前面に刻目を施す。７、８は小片で鉢か。９は高坏で磨研。10 から 13 は壺の底部。10 は小型品で胎土に砂粒が多い。11 は外面に丁寧な磨研、内面には細かな刷毛目が見られる。12、13 は外面磨研、内面は擦過。13 は荒れが著しい。他に壺を主とする破片が出土している。また黒曜石の原石 62、木片がある。

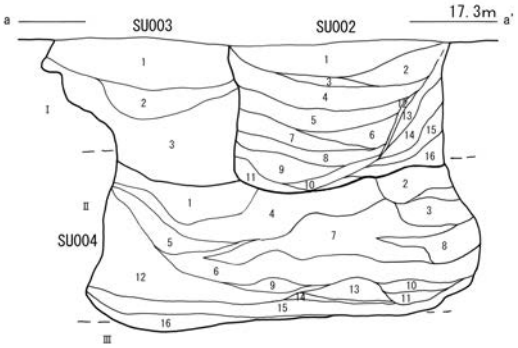
SU002 ～ 004（図６）対象地北側で３基の遺構の重なりを確認した。新しい順に 002 → 003 → 004 である。当初 002 は平面プランを確認し、土層観察ベルトを残して掘削したが、地山を壁とする東側以外とベルト部分以外は明確に壁を出せていない。床もやや掘り過ぎた時点で土層で認識し、床面プランを把握できていない。002 範囲の掘削の後に土層ベルトを延長して遺構群の南半を掘削し、土層のように 003 とその下に 004 を確認した。断面フラスコ状であり貯蔵穴と考える。

SU002　平面 155 × 120㎝ほどの略楕円形で、深さ 80㎝ほどである。１層が黒褐色の埋土で黄色粘土粒が少ないことで範囲を確認した。東から南側の壁は地山で、北側は黄色粒が多い 003 の埋土である。４、５層は炭化物を多く含み、壺 24 を中心に土器がまとまって出土した。３層までと４層の一部を上層、４、５層を中層、６層以下を下層として取り上げたが、下層と上層で接合し、上層と中層の区別も明確ではない。

出土遺物 14 から 23 は上層出土。14 からは壺の頸部から肩部。14 は外面磨研で光沢があり、内面は刷毛目調整。１/4 から復元。15 は肩部で浅い沈線とその周囲に赤色顔料がみられ彩文の痕跡と考えられる。胎土は細かく、外面は磨研調整で黒色を呈す。16 から 18 は線刻による文様を施し、外面磨研、内面は刷毛目または擦過。16 の弧文は左が切る。17 は頸部としたが天地・傾きは不確か。18 は４本の平行斜線の後に横線を描く。19 から 22 は壺の底部か。19 は 1/4 からの復元で外面磨研、内面なで。20 は内面なでで外面荒れる。21 は外面刷毛目の後にへらなで、内面へらなで。22 は内外面と外面底も磨研で 2/3 が残存。23 は内外面ともに刷毛目調整で甕と考えられる。24 から 27 は中層出土で、24、25、27 は上層と接合または同一個体がある。24 は大型の壺で同一個体と考えられる接合しない４つの部位から復元した。縮尺 1/6 で、復元口縁部径 34㎝、同最大径 50㎝、器高 50㎝以上。各部位は口縁部から頸部の 1/6、頚部 1/2 弱、肩部から胴部中位 1/6、最大径部から胴部下部 1/6 が残る。外面は磨研調整、内面は刷毛目調整で口縁部のみ横方向の磨研。25 は大型壺の口縁部片。26 は壺の肩部で外面へらなでまたは擦過、内面に指頭痕が残る。27 は壺の胴部。外面は横方向の磨研で光沢のある黒色で内面は縦に指頭痕が連なる。傾き不確か。28 から 32 は下層出土。28 は壺で 1/6 弱からの復元。外面磨研で内面なで。29 は頸部外面に４条の沈線がみられる。外面磨研、内面指頭痕。傾き不確実。30、31 は外反口縁の甕で 30 は口唇部全面、31 は下端寄りに刻目を施す。31 外面の縦刷毛目は細かく、横刷毛目と異なる。32 は 1/4 からの復元。内外面研磨で外面に細かな刷毛目が残る。壺か。他に小破片があるが、刷毛目調整のものは少ない。石器は砥石状の石器 64、叩き石 65、66、他に黒曜石の石核・剥片各１点がある。

SU003　東側に隅丸長方形プランがみられ、土層に 002 に切られる遺構を確認できたが、西側プランは把握できていない。示した破線は検出時の写真から黄色粘土粒を多く含む範囲から推定した。遺構の重なりの上半のほとんどを 002 と 003 が占めることになる。平面は幅 120㎝、長さ 230㎝ほどである。床は 004 と重なる南側は確認できていない。埋土は灰黒色の締まりある粘質土で全体に黄色粘土粒･ブロックを多くむ。一気に埋めた感がある。壁は切り合いがない東側でフラスコ状を呈し、床面はほぼ水平で深さ 60㎝ほどで標高 16.5 mである。中央には深さ 27㎝（底の標高 16.35 m）の土坑状の掘りこみがある。埋土は 003 と同じだが､底には黄褐色粘土がみられる。土層 c-c' では 003 の床面は深さ 75㎝（標高 16.45 m）であり、土坑状の立ち上がり斜面にあたると考えた。図は





SU002

1　10YR2/2 黒褐色粘質土 黄色粒わずか
2　10YR4/2 灰黄褐色粘質土 黄色粒わずか
3　10YR5/4 にぶい黄褐色土 黄色粒多い 炭混じる
4　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 炭粒目立つ
5　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 黄色粒 1.5㎝大まで多い 炭粒多く含む
6　5Y3/1 オリーブ黒 角砂多く砂質 黄色粒 1㎝大以上含む
7　2.5Y7/4 浅黄色粘土 茶色筋含む
8　7.5Y4/1 灰色粘質土 黄粒少ない
9　N3/0 暗灰色粘質土 黄色粒入る
10　10Y4/1 灰色粘質土 砂混じる
11　10Y2/1 黒色粘土 黄色粒 1㎝大少量含む
12　炭粒含む
13　5Y3/2 オリーブ黒 黄色粒 1㎝大含む 白色砂多い
14　5Y4/1 灰色粘質土 1㎝大までの黄色細粒含む
15　N2/0 黒色粘質土 灰茶色砂多く含む
16　7.5Y4/1 灰色粘質土 黒灰砂・黄色粒・炭化物含む
17　5Y8/8 黄色粘質土

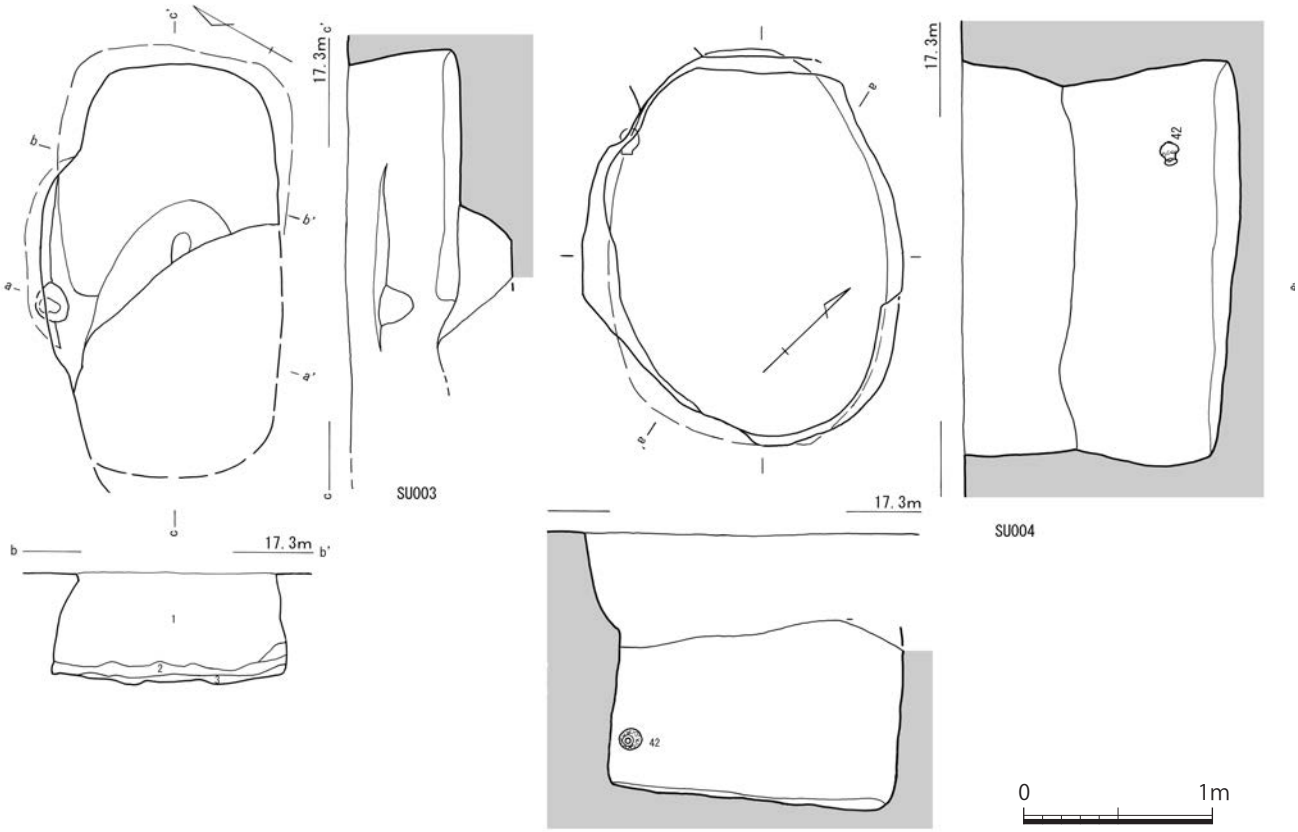
SU003

1　暗灰色粘質土 2 ～ 20㎜大の黄色粒・ブロック多く混じる
2　黄色粘質土ブロック
3　10YR3/1 黒褐色粘質土 粘性強い

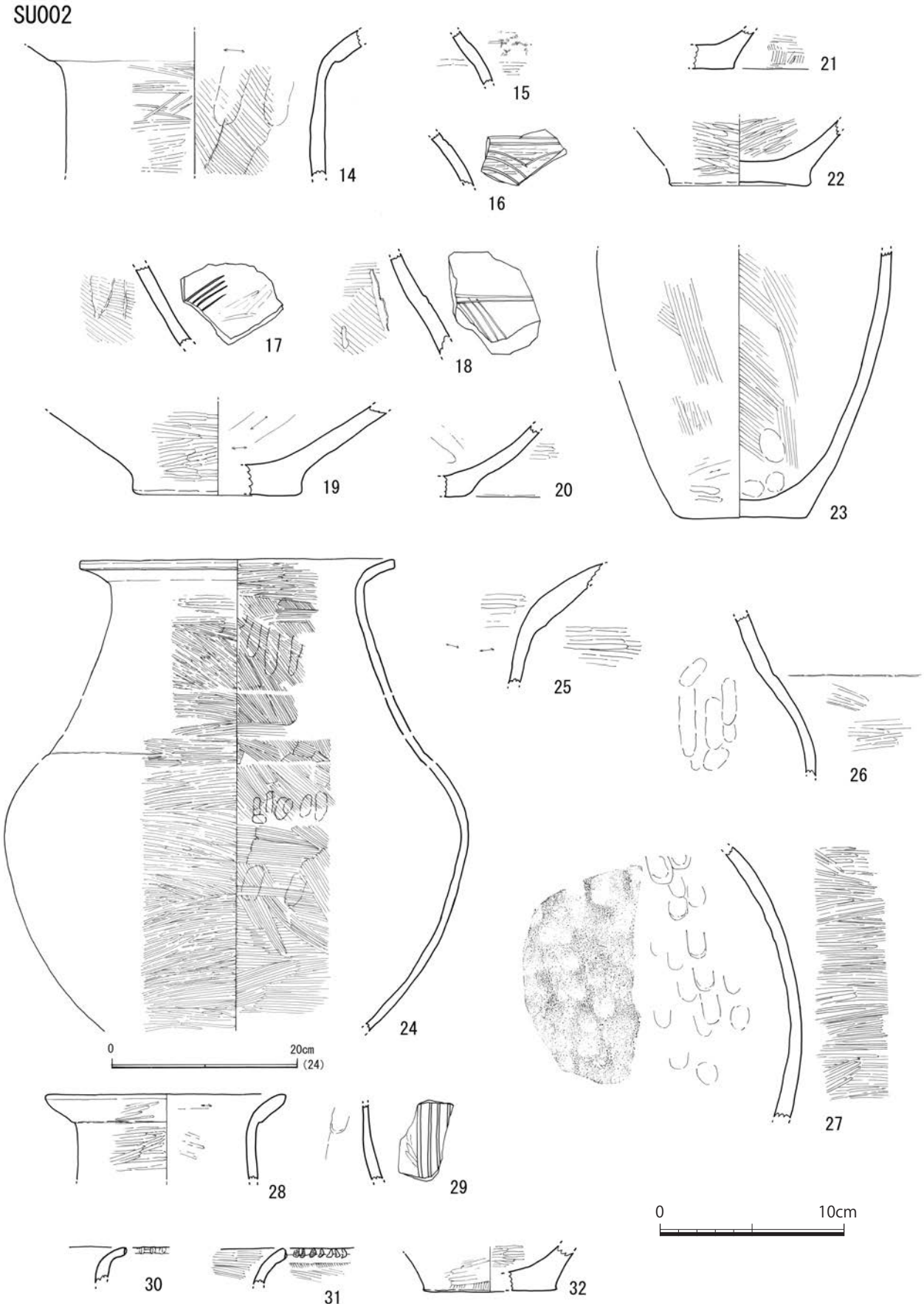
SU004

1　N2/0 黒色粘質土 青っぽい 1㎝大までの淡黄色粒多い
2　10Y3/2 オリーブ黒粘質土 粗砂、4のブロック含む
2'　7.5Y3/1 オリーブ黒砂質土
3　2に近い 4ブロック少ない
4　10Y3/1 オリーブ黒粘質土 細砂多い 淡黄色 1㎝大までのブロック含む
5　N3/1 暗灰色粘土 混じりない
6　5Y5/2 灰オリーブ砂　中砂主体
7　10Y3/1 オリーブ黒粘土 砂含む 黄色ブロック少
8　7に近くやや暗い
9　N4/1 灰色粘土 黄色ブロック・砂多く入る
10　N3/0 暗灰色粘土
11　10Y3/0 暗灰色粘土 砂多く含む
12　2.5GY/3/1 暗オリーブ粘土 砂・淡黄色ブロック少量含む
13　7.5Y4/1 灰色土 砂多く含む
14　N4/0 灰色粘質土 砂多く含む
15　5Y5/3 灰オリーブ 中～粗砂含む
16　N3/0 暗灰色粘土

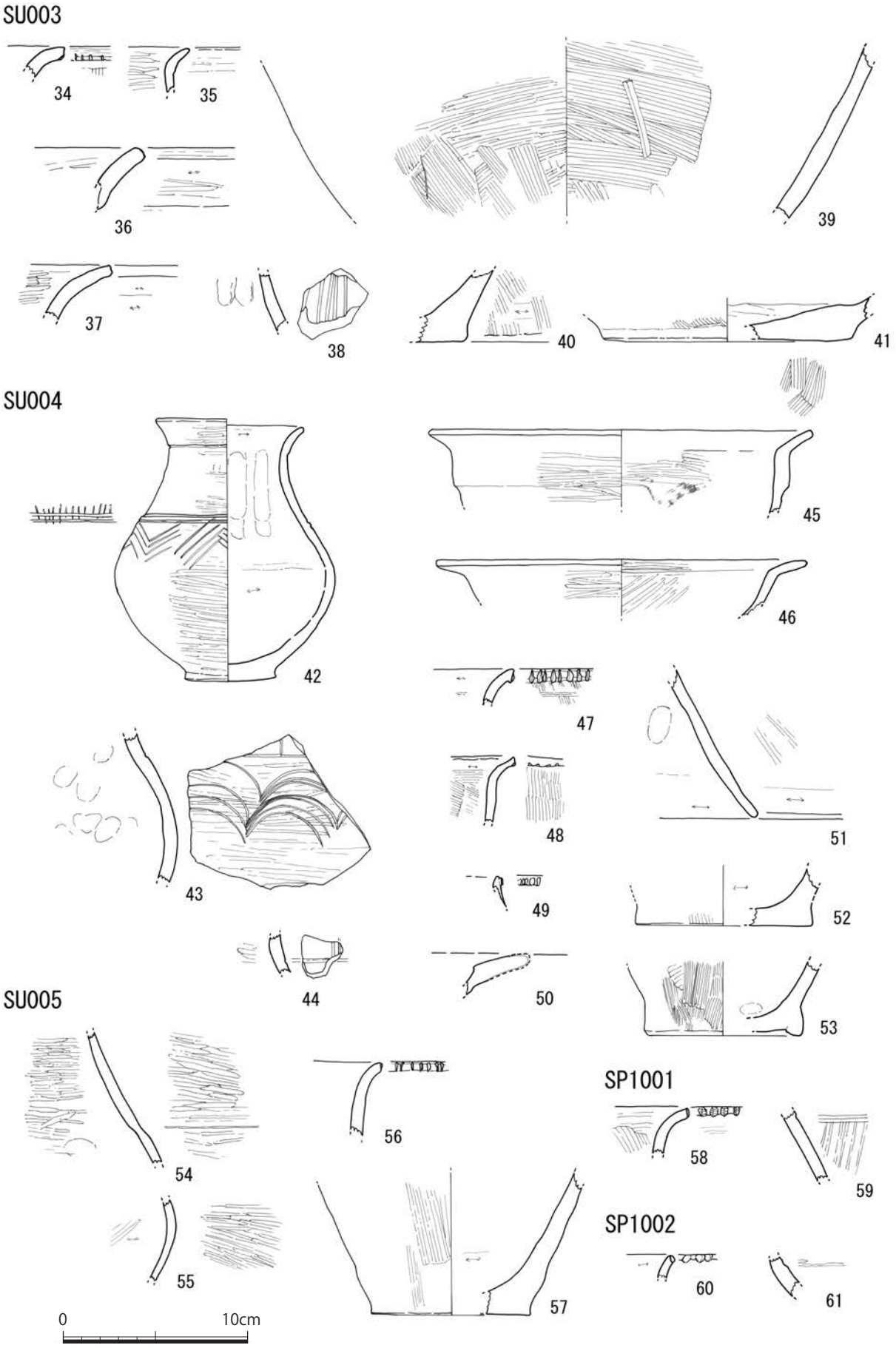
Ⅰ　5Y8/6 黄色粘質シルト
Ⅱ　5B4/1 灰色砂質土 砂多く含み締まる
Ⅲ 2.5Y7/6 明黄褐色粗砂 固く締まる



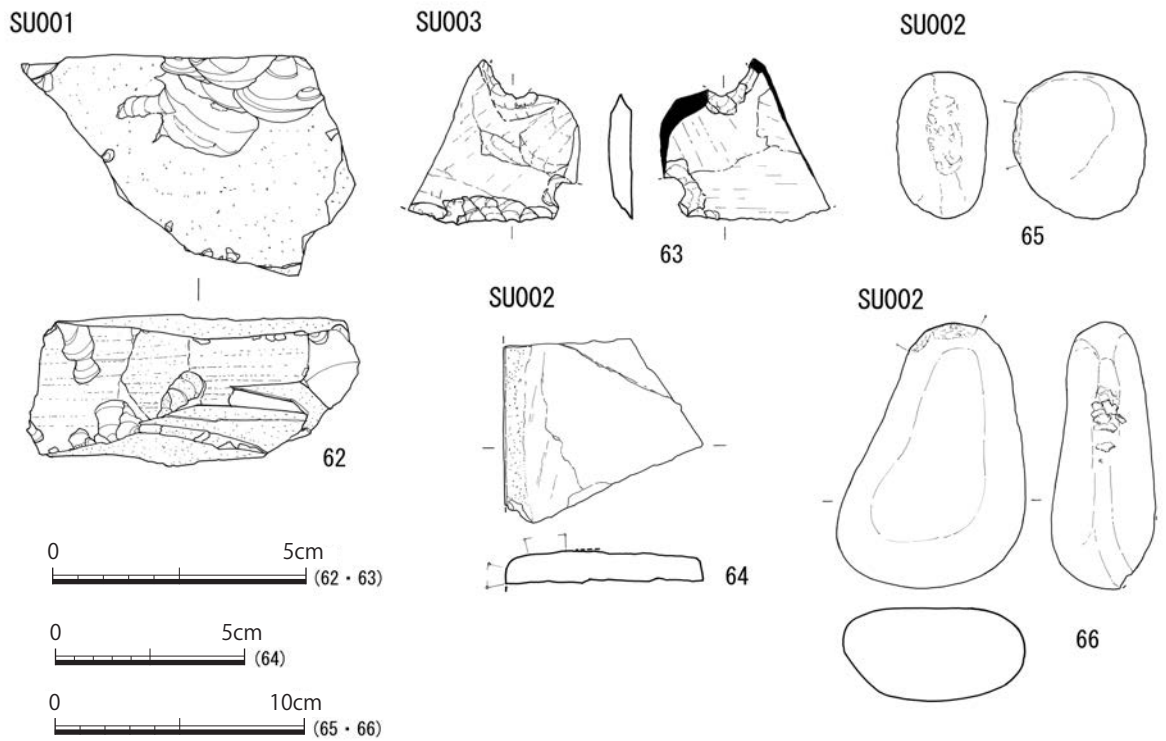
6．SU02・003・004 実測図（S ＝ 1/40）



7．SU002 出土遺物実測図（S ＝ 1/3）



8．SU003・004・005、SP1001・1002 出土遺物実測図（S ＝ 1/3）



9．出土石器実測図（S ＝ 2/3・1/2・1/3）

その推定から示した。

出土遺物　34 は外反する口縁部の下端に細い刻みを施す。甕か。35 は内面磨研で鉢か。36、37 は大型品で壺または鉢。36 は内外面横なで。37 は内面磨研。38 は磨研調整の外面に 4 条の沈線がみられる。39 は壺胴部下部で内外面ともに刷毛目調整で 40 と同一個体か。40 は外面刷毛目の甕。41 は外面胴部と底が刷毛目で内面はなで痕がはっきりみられる。他に壺を主とした破片が出土しているが、刷毛目調整の破片も見られる。石器は安山岩製のスクレーパー 63、他に黒曜石の剥片 2 個がある。

SU004　002、003 に切られる。平面楕円形で 200 × 150㎝ほどだが、上半は 002、003 に削られた可能性がある。深さは 156㎝ほどで北側がやや深い。壁の下半はフラスコ状を呈す。壁は標高 16.6 mから下はよく締まった灰色の砂質土で、床は良く締まる黄色粗砂である。埋土は灰色から黒色の粘土と粗砂が重なる。粗砂が多く、ある程度埋まった段階での洪水等の影響を思わせる。粘土は水気を含み締まりがない。遺物は破片が埋土から出土した。小壺 42 が西壁際に横たわった状態で出土した。床から 20㎝ほど浮いており、土層では 12 層暗褐色粘土中の上部に含まれる。

出土遺物　42 は小壺で掘削時に口縁部の一部が割れた以外は完形品。外面磨研、内面はなで調整である。口縁下に 1 条、肩部に 2 条の横線を施し、その下に 4 条の沈線からなる 10 の山型文を施すが、図のように一か所は完結せず文様が連続しない。この部分が施文の起点であろう。丁度その反対側には横線を切る短い縦線が 11 本描かれている。器高 14㎝、口縁部径 7.7㎝。43 は壺の肩部で外面磨研、内面なでで指頭痕が残る。外面には横沈線の下に細く重孤文を描くが条数が一定しない。頸部には縦沈線がみられる。44 は横沈線と頸部に縦沈線 2 条がみられる。43 と同一個体か。45 は内外面研磨調整で鉢か。1/6 からの復元口径 20㎝である。内面橙色で一部に赤色部がみられる。46 は内面磨研と擦過、外面は荒れる。1/6 からの復元で高坏か。47、48 は外反口縁の甕で 47 は外面橙色で口唇部全面に刻目、48 は下端に刻み外面の縦刷毛目が顕著である。49 は小さく低い突帯に刻目をほどこす。傾き不確か。50 は高坏で器面が荒れる。外面橙色、内面黒色で磨研調整。51 は高坏の脚か。外面擦過。52、53 は甕の底部で 1/6 からの反転。53 の外面刷毛目は細かい。他に壺を主とした破片がある。

SU005（図 4・8）　004 の北西で検出した平面長方形の土坑で長さ 174㎝、幅 60㎝、深さ 44㎝ほどである。壁は断面袋状を呈し、貯蔵穴に含めた。埋土は黄色粘土粒を多く含む黒色土でよく締まり 003 に近い。遺物は小片のみで埋土に散見される。

出土遺物量は少ない。54、55 は同一個体と思われる壺の頚部と胴部。内外面磨研で光沢がある。56 は外反口縁の甕で器面は荒れ桃色を呈す。57 は 1/3 からの復元。器面桃色で荒れるがわずかに刷毛目が残る。56 と同一の可能性がある。他に壺を主とした破片と黒曜石の剥片 2 がある。

SP1001（図 4・8）調査区南側で確認した縦長の遺構で黒褐色粘質土を埋土とする。長さ 100㎝、幅 38㎝、深さ 38㎝で複数のピットの重なりの可能性もある。竪穴建物の中央土坑にも似るが取り囲むピットは見られない。遺物は小片 20 点がある。58 は口唇部全面刻みの甕、59 は外面に縦方向の磨研と浅い横線を施す。内面は荒いなで。器種不明。

SP1002（図 4・8）1001 の北に近接した径 33㎝ほどのピットで径 14㎝ほどの柱痕跡を確認した。遺物は 10 点の小片が出土した。60 は外反口縁の甕で深い刻目が密に入る。61 は壺の頚部で横沈線の周りに赤色顔料がみられる。

ピット群　調査区全体でピットを確認した。概ね黒褐色粘質土を覆土とし、遺物は 8 基から少数の破片のみが出土し弥生前期に収まる。黒曜石砕片 1 がある。3、 4 基が直線上に並ぶ箇所があるが展開しない。SU004 の西側のピット群に竪穴建物の柱穴を想定してみたが不確かである。

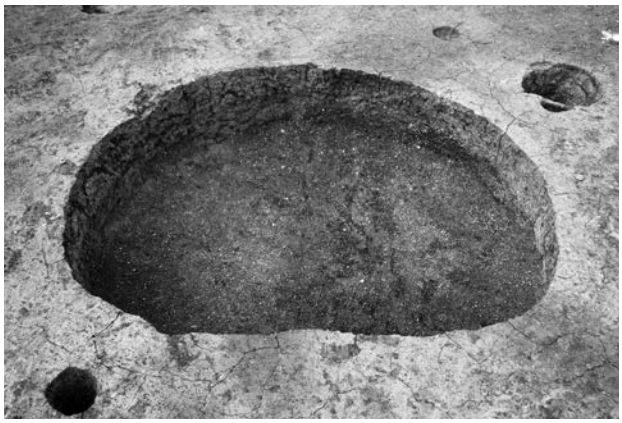
石器　割り付けの都合で最後にまとめて触れる。石器は少ない。黒曜石は 8 点で弥生前期の遺構であることを考えると少ない。62 は 001 出土の黒曜石の原石で浅い剥離がみられる。6.2 × 4.3 × 2.9㎝。他に 1 点の石核の他は剥片・砕片である。63 は 003 出土の安山岩製スクレーパーの剥片で 2 側辺に調整剥離がみられ、 1 辺に抉り状の剥離がある。3.2 × 3.2 × 0.6㎝。64 から 66 は 002 出土。64 は平面の一部と側辺が磨かれ、その間は荒れる。他は破面である。頁岩または砂粒砂岩。65 は花崗岩、66 は玄武岩の叩き石。

4．まとめ

5 基の土坑とピット群を確認した。土坑はいずれも断面フラスコ状を呈し、貯蔵穴と考える。出土遺物は前期に収まり、板付 1 式の範疇に入るものと考える。遺構はやや散漫だが、後世の削平が想定され、竪穴建物等も存在した可能性がある。警弥郷 B 遺跡では試掘調査で前期の遺構を確認しており、高位段丘上の弥永遺跡の西に連なる低位段丘上にこの時期の遺跡が広がるものと考えられる。

10．調査区北半（南東から）

11．調査区南半（南東から）



12．SU001（南から）

13．SU002 ～ 004 検出時（西から）

14．SU003・004（南東から）

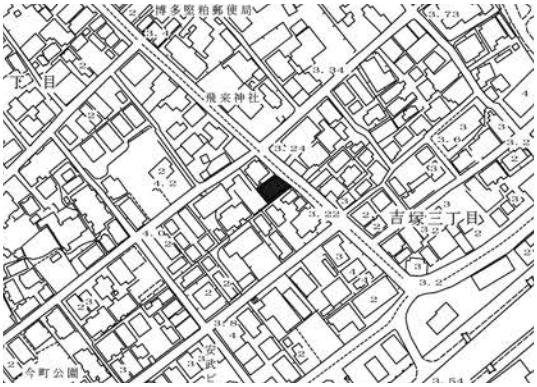
15．SU002 ～ 004 土層（西から）

16．SU005（東から）

17．出土遺物

2148　吉塚遺跡 19 次（YSZ-19）

所 在 地　博多区堅粕４丁目 370 番３
調査原因　戸建住宅建設
調査期間　2022.2.21 ～ 2022.3.4
調査面積　39.8㎡
担 当 者　木下博文
処　　置　記録保存



１．調査地点の位置（36　博多駅　0123　S＝1/4,000）

調査の概要

１.調査に至る経緯

令和３（2021）年４月 28 日付で株式会社オープンハウス・ディベロップメントより福岡市博多区堅粕４丁目 370 番３における戸建住宅建設に伴う埋蔵文化財有無の照会（2021－２－100）があった。申請地は吉塚遺跡の範囲内であり、令和３（2021）年４月 15 日に確認調査を実施し、現地表面下 50 ｃｍで遺物包含層、75 ｃｍで遺構を確認している。今回の基礎工事内容は残存遺構に影響を及ぼすものであることから、発掘調査を実施することとなった。調査は２月 21 日に重機による表土剥ぎより着手した。22 日より遺物包含層の人力掘削・遺構検出を行い、25 日に記録作業を終了、28 日に埋め戻し、３月７日に機材を撤収し調査を終了した。

２.位置と環境

吉塚遺跡は、御笠川の右岸、博多湾岸に並ぶ砂丘群の一画に立地し、現在の福岡市博多区堅粕４・５丁目および吉塚３丁目一帯に広がる。現地表面の標高は３～４ｍである。遺跡の北西側に南から堅粕、吉塚祝町、吉塚本町の各遺跡が並び、御笠川を挟んで西に博多遺跡群が立地する。

遺跡内では、過去に 18 次の調査が実施されており、地点は北東端部、中央部、南西端部に集中している。16 次調査では古墳時代前期の完形土師器群や井戸、同後期の掘立柱建物、17 次調査では弥生時代中期中葉の甕棺墓群を確認している。

今回の調査地点は中央部のやや東寄りに位置する。現地表面の標高は敷地奥の西側が 3.7 m、道路に面する東側が 3.5 mで、西から東に向かってやや下がっている。

３.遺構と遺物

ＳＫ０７（図６）

調査区西隅で検出。深さ 0.1 ～ 0.2 m、全形はうかがえない。

出土遺物（図７）

１は土師器杯。口径 15.6 ｃｍ、器高 3.5 ～ 4.3 ｃｍ、黄橙色を呈し、底部外面は回転ヘラ切りの後なで、内面は丁寧なミガキを施す。

ＳＫ０８（図６）

調査区西端で検出した。1.4 × 1.65 mの楕円形で、深さ 0.3 m。

出土遺物（図７）

２は赤焼須恵器の高杯脚部。にぶい赤褐色を呈す。３は古式土師器の二重口縁壺。黄橙色を呈し、内外面にハケ目を施す。４は土師器の甕。にぶい赤褐色を呈し、内外面にハケ目を施す。

ＳＫ０９（図６）

調査区西端で検出した。径１mの円形で、深さ 0.2 m余り。

出土遺物（図７）

５は須恵器杯蓋。口径 13.3 ｃｍ、器高 3.6 ｃｍ。

ＳＫ 10（図６）

調査区西端で検出。２× 0.67 mの不整楕円形で、深さ 0.2 m。

ＳＫ 11（図７）

調査区西端で検出。径 1.25 mの円形で、深さ 0.3 m。

出土遺物（図７）

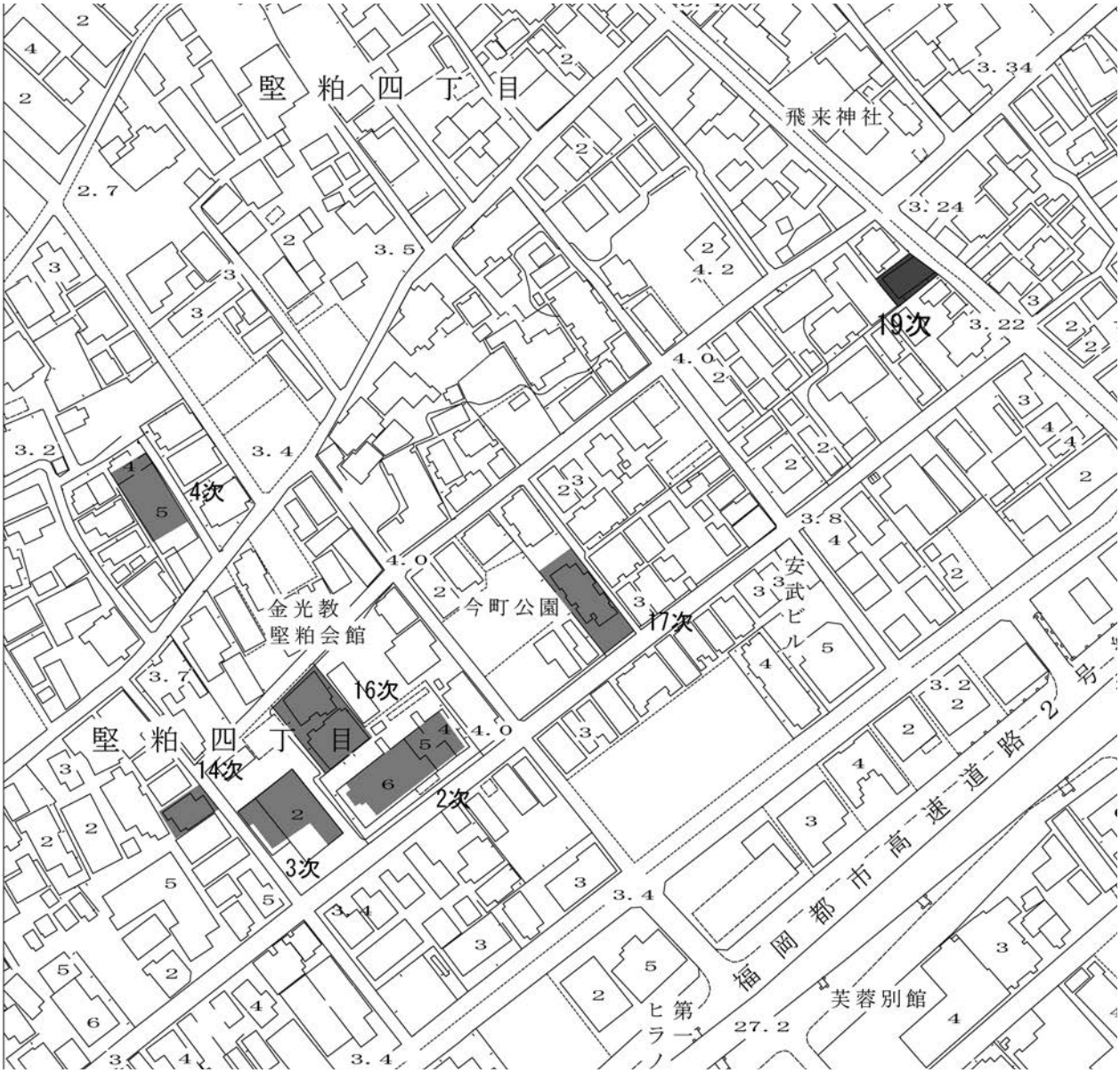
６は古式土師器の小型丸底壺。口径 9.2 ｃｍ、残存高 7.7 ｃｍ、橙色を呈し、縦部内面にヘラ削りを施す。７は土師器の高杯。復元口径 17.0 ｃｍ、残存高 3.3 ｃｍ、にぶい赤褐色を呈す。

ＳＤ０１・０２・０３（図５）

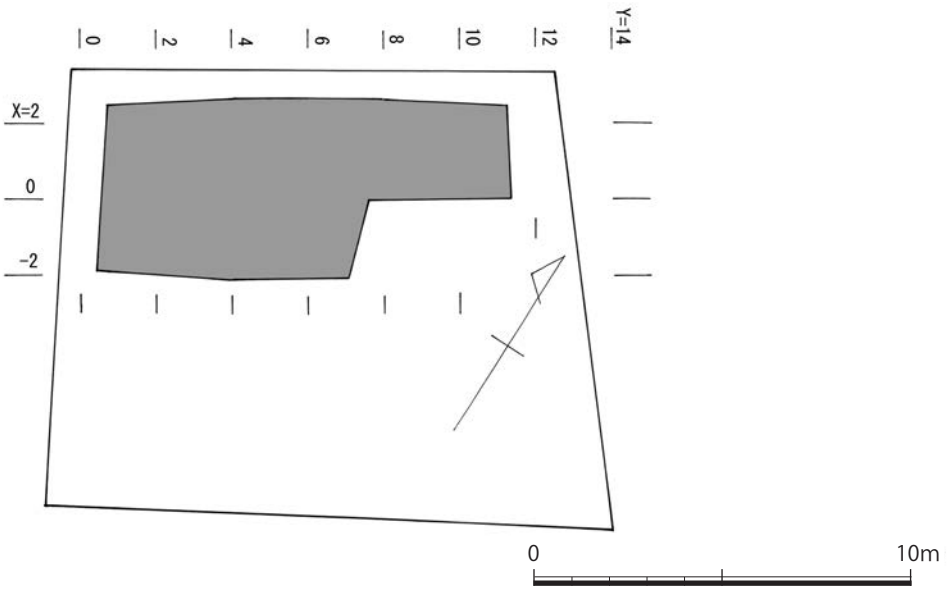
調査区東半で検出。長さ 4.45 m以上、幅 0.23 ～ 0.4 m、深さ５～ 10 ｃｍ。1.1 m間隔で南北方向に走る。出土遺物は極めて少なく、中世の磁器も含むが染付片があり、埋土も灰色土で近世に下る可能性が高い。

４.まとめ

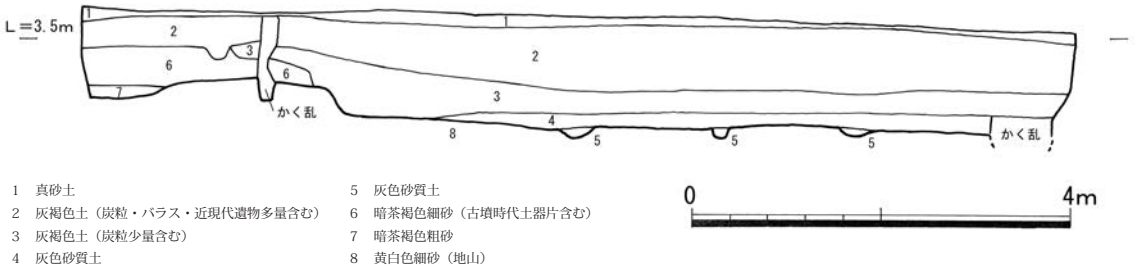
今回の調査では、現地表面下 75 ～ 125 ｃｍ、標高 3.1 ～ 2.5 mの砂丘面上で、古墳時代後期の土坑、中世もしくは近世の南北方向の溝を検出した。砂丘面は西から東へ向かって下がり、遺跡中央に近い西側に弥生～古墳時代の土器を含む包含層が残存している。包含層が残存しない東側ではより古い時期の遺構は見られない。砂丘の頂上からの地形変換点を検出した可能性がある。



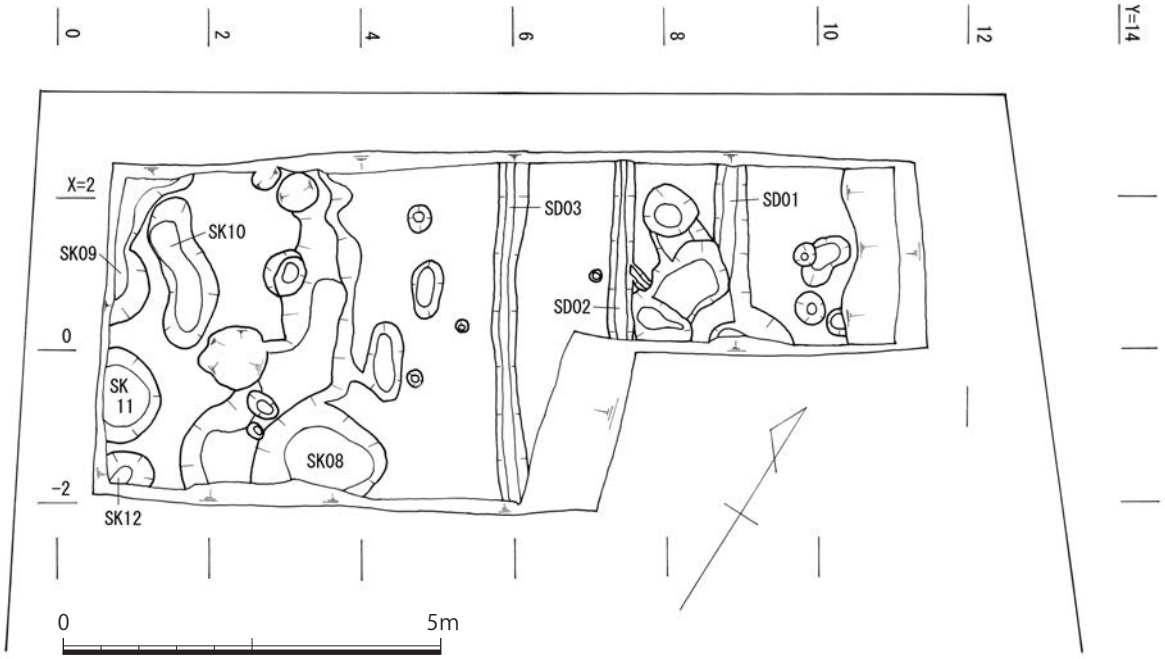
２．調査地点と周辺の調査区（1/2,000）



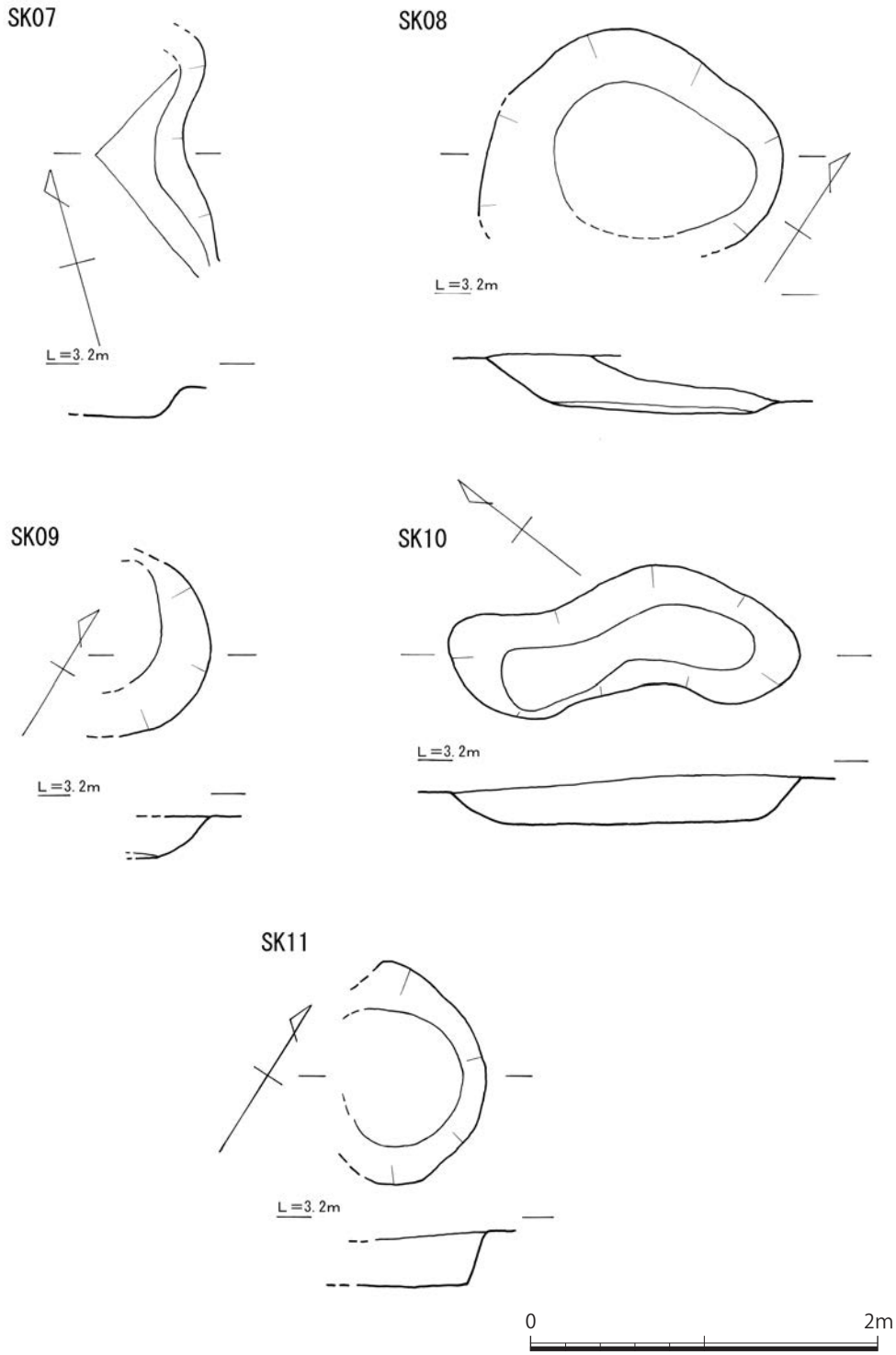
3．調査区位置図（S ＝ 1/200）



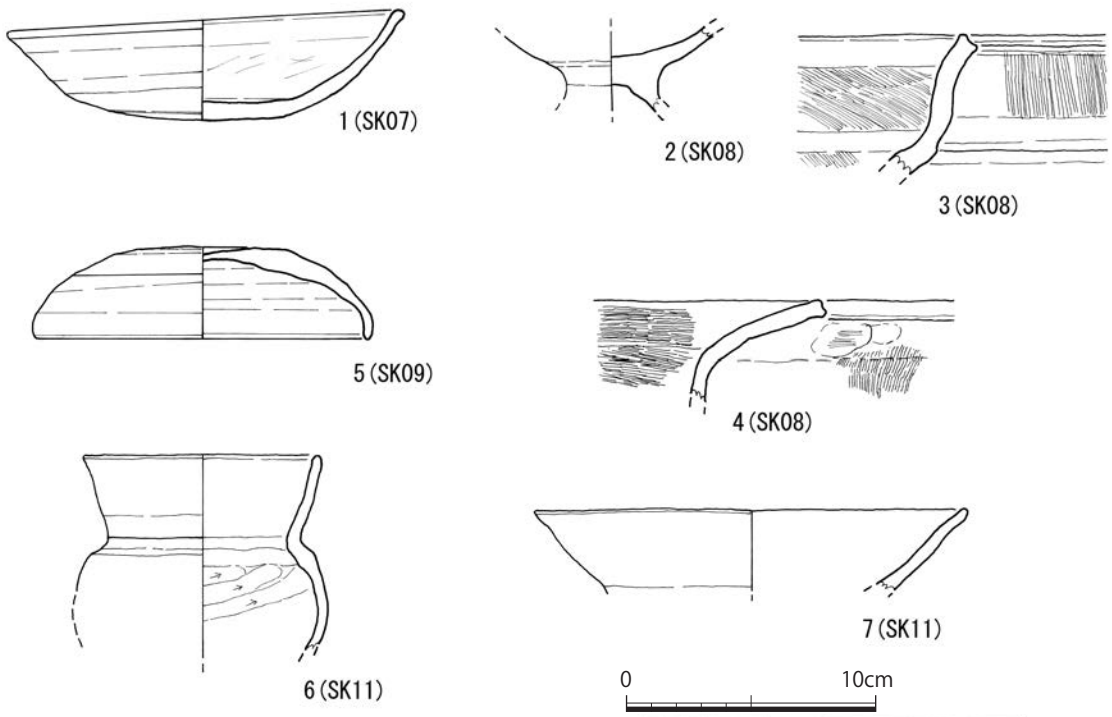
4．調査北壁土層断面図（S ＝ 1/80）



5．調査区平面図（S ＝ 1/100）



6．ＳＫ 07 ～ＳＫ 11 検出遺構実測図（Ｓ＝ 1/40）



7．出土遺物実測図（S ＝ 1/3）

8．調査区北半（南東から）

9．調査区南半（南東から）

10．SU002 ～ 004 検出時（西から）

11．SU001（南から）

12．SU002 ～ 004 検出時（西から）

13．SU003・004（南東から）

14．SK07 出土遺物 1

15．SK08 出土遺物 2

16．SK08 出土遺物 4

17．SK09 出土遺物 5

18．SK11 出土遺物 6

2149　箱崎遺跡 123 次（HKZ-123）

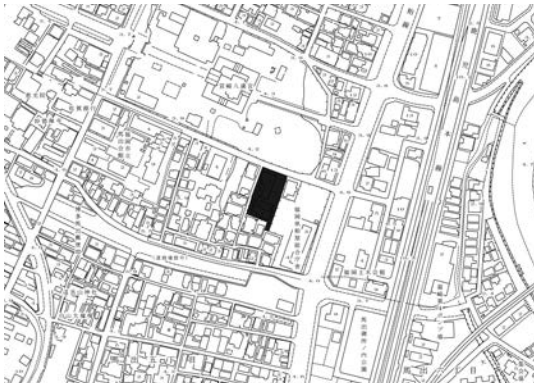
所 在 地　東区箱崎 1 丁目 1911 番 2，1912 番 2，1925 番 1 ～ 3，1927 番
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2022.3.1 ～ 2022.4.18
調査面積　280㎡
担 当 者　佐藤一郎
処　　置　記録保存

調査の概要

箱崎遺跡は福岡平野の東部、多々良川水系の宇美川河口部左岸に位置し、博多湾岸に沿って形成された砂丘上に立地する。調査地は箱崎遺跡の南西部に位置する。遺構面は現地表下 1.5m、標高 3m 前後の黄白色砂上面で確認した。

遺構の時期は 11 世紀前半から 13 世紀前半にかけてのもので、井戸 4 基、溝 1 条、土坑 20 余基、方形竪穴 1 基、柱穴 30 余個を検出した。

遺物はコンテナケース 45 箱分出土した。その 7 割は土師器小皿・杯片である。特筆されるものとして SK12 出土の耀州窯系青磁皿片（1/3 残存）が挙げられる。内面には印花文が型押しされる。中世前半に博多、およびその周辺出土の中国産輸入陶磁器は華南産が多数を占める中、中原地域で生産された青磁の出土は希少な例である。



1．調査地点の位置（34　箱崎　2639　S ＝ 1 /8,000）

2．調査区全景（南から）

2150　博多遺跡群 250 次（HKT-250）

所 在 地　博多区下呉服町 502，503 - 1，503 - 2
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2022.3.1 ～ 2022.5.20
調査面積　166.35㎡
担 当 者　阿部泰之
処　　置　記録保存

調査の概要

今回の調査地は博多遺跡群の北縁辺部に位置する。

調査区の層序は下部から黄白色の砂丘砂、標高は 2.0 ～ 2.2m で石堂川の方向に向かって低くなる。その上に暗灰色砂、さらに人為的な整地層が乗る。

整地層は 2 時期に分かれ、下層の上面で塀の石基礎を検出した。基礎の掘方は整地層の端、砂丘砂の落ち際上に構築されており、町場の範囲が現在より東西方向に狭く、その縁辺に塀をめぐらしていた情景が想定できる。その上層に別の整地層が観察でき、この 2 回目の整地によってほぼ現代につながる地表面が形成されている。砂丘砂の上では鍛冶炉を 1 基検出した。この炉跡が最も古い遺構で、16 世紀末頃まで遡る可能性がある。その他、井戸・土壙が検出されたが、すべて近世以降、近現代の所産と考えられる。

1．調査地点の位置（48　千代博多　0121　S ＝ 1 /8,000）

2．2 区第 1 面全景 (南東より)

2151　井尻B遺跡51次（IGB-51）

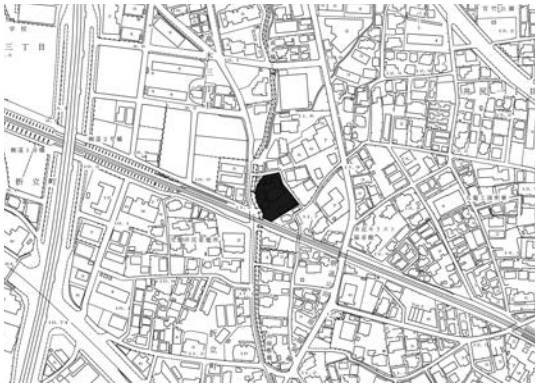
所 在 地　南区井尻1丁目372番2、373番2
調査原因　共同住宅建設
調査期間　2022.3.1 ～ 2022.6.8
調査面積　531.83㎡
担 当 者　鶴来航介
処　　置　記録保存

調査の概要

井尻B遺跡は春日丘陵からのびる台地上に立地する、弥生時代から古代を中心とする集落遺跡である。本調査地点は遺跡西端に所在する。

今回の調査では弥生時代から古代の竪穴建物10棟、掘立柱建物3棟、古代の溝1条、中世の溝1条、中世の木棺墓2基などを発見した。竪穴建物は調査区全体で確認され、居住域が調査区外へ広がることを示唆する。古代の溝は直線的で総延長約30ｍを確認しており、何らかの区画を意図した可能性があろう。

この調査では遺跡西側の集落範囲と具体的な人間活動を明らかにした点に大きな意義がある。とくに8世紀には居住域として利用していた場所に直線的な溝を掘り込むという画期がみとめられた。



1．調査地点の位置（25　井尻　0090　S＝1/8,000）

2．Ⅱ区全景（南から）

2152　箱崎遺跡124次（HKZ-124）

所 在 地　東区箱崎3丁目3518－1
調査原因　個人住宅建設
調査期間　2022.3.11 ～ 2022.3.25
調査面積　72㎡
担 当 者　岩熊拓人
処　　置　記録保存

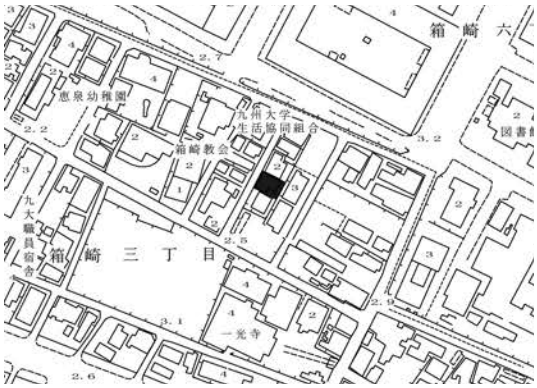
調査の概要

箱崎遺跡は博多湾岸の砂丘上に立地する、中世を中心とする遺跡である。本調査地点は箱崎遺跡の北西部に位置し、その西側には元寇防塁の推定延長ラインが伸びている。

検出遺構としては溝と考えられる遺構を3条確認している。いずれも14世紀後半～15世紀の時期で、現在の街区と同方向に伸びている。

出土遺物は15世紀の中国の青磁などの陶磁器、16世紀の朝鮮半島の白磁、国産の土師器皿や土鍋など、コンテナケース2箱分である。

中世後半には箱崎遺跡の北西縁辺部でも都市化が進み、溝などの遺構が広がっていたことが判明した。本調査地点周辺の発掘事例は少なく、今後の調査に期待される。

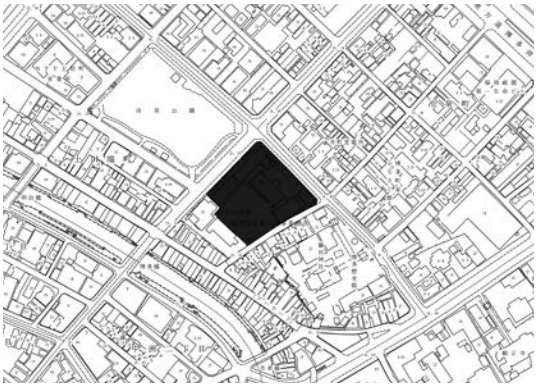


1．調査地点の位置（34　箱崎　2639　S＝1/4,000）

2．南側調査区（南西から）

1805 博多遺跡群第 221 次（HKT-221）

所 在 地	博多区上川端町 97-1			
調査原因	跡地活用事業			
調査期間	2018.4.26 ～ 2022.2.17			
調査面積	Ⅶ区	459.4㎡	Ⅷ区	281.9㎡
	Ⅸ区	554.6㎡	Ⅹ区	241.9㎡
	Ⅺ区	688.4㎡	Ⅻ区	445.6㎡
	総面積	4443.67㎡		
担 当 者	大庭康時・岩熊拓人			
処　　置	調査後埋め戻し			



1．調査地点の位置（49　天神　0121　S＝1/8,000）

2．Ⅶ区 050 土壙墓（南から）

3．Ⅸ区 030 一字一石経（南東から）

調査の概要

Ⅳ区　令和３年度に引き続いて近世大乗寺墓地の調査、およびその下層に遺存する中世の遺構の調査を行った。中世以前については、深く掘削された近世墓のため遺構の遺存は極めて悪かったが、最下層の 12 世紀後半代の溝から柿経が出土した。妙法蓮華経を墨書したものである。

Ⅶ区　基盤は河川性の堆積砂層で、砂丘には当たらなかった。12 世紀前半代までは空き地にゴミ穴だけがある景観、12 世紀後半になると井戸が営まれ、土葬墓もつくられるなど、生活域に組み込まれたことがわかる。

Ⅷ区　中世初頭の港湾関連遺構である石積遺構の前面の検出を意図して設定した調査区である。第 1 面を調査した後、Ⅸ区・Ⅺ区に包摂した。

Ⅸ区　河川堆積物を基盤とした調査区。前述の石積遺構の前面に当たる調査区である。井戸、土坑、溝、近世墓などを調査した。18 世紀代の一字一石経塚が出土した。

Ⅹ区　調査対象地の南東角にあたる。標高 3.4 mで砂丘砂層が出土した。最下層で検出した 8 世紀前半の井戸は、最下部の井戸側に鴻臚館式の平瓦を立て並べており、Ⅹ区付近が官衙的性格を帯びていたことをうかがわせる。

Ⅺ区　Ⅸ区同様、石積遺構の前面に当たる調査区である。井戸、土坑、溝、近世墓などを調査した。時期の特定には至っていないが、多字一石経塚が出土した。経文に加え、結縁した人名が墨書されている。Ⅸ区同様河川堆積物を基盤とした調査区であり、石積遺構から 8 mほど水域に入った地点から白磁の一括廃棄遺構が出土した。

Ⅻ区　Ⅹ区の北側に隣接した調査区である。基盤の砂丘砂層は、北のⅦ区に向って下降しており、砂丘末端である。

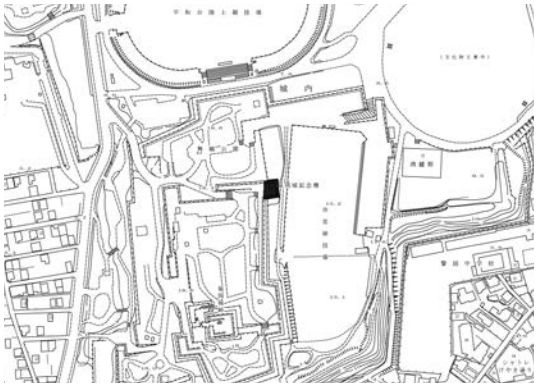
今日冷泉小学校跡地の発掘調査は、出入り口に使用した一部を除いて、ほぼ全面の発掘調査を終えた。全体的な成果として、鴻臚館から博多の貿易港としての機能が移転した当初の港湾遺構である石積遺構を検出し、中世初頭の港の景観・構造を復元する手がかりを得たことを特筆する。石積遺構については、埋め戻して保存を図っており、今後、本格的な保存・活用を検討していくことになる。

1924　福岡城跡第 78 次（FUE-78）

所 在 地　中央区城内
調査原因　史跡整備
調査期間　2019.11.26 ～ 2021.12.28
調査面積　316㎡
担 当 者　井上繭子　史跡整備活用課
処　　置　現状保存

調査の概要

福岡城跡祈念櫓石垣は、福岡城本丸の北東隅に位置している。経年により石の孕み出しがみられ、崩壊の危険性が高まったため石垣の積み直し工事を行うこととなった。祈念櫓を解体した後、天端の発掘調査を行い、築石の解体を進めた。解体結果をもとに積み上げ方針を決定し、築石の積み上げを行った。天端の発掘調査では、東西 9.5 m、南北 9 mの範囲で礎石列を検出した。礎石は大部分を玄武岩が占め。大型の石を２～３段積み重ねて強固に据え付けている。礎石列は 5 間× 5 間で、北西側に 3 間× 1 間以上の大きさの附櫓が付く構造と思われる。石垣は、根石の玄武岩以外は、築石はほぼ加工した花崗岩を用いて、打ち込み剥ぎの積み石工法を取る。築石背面は盛土と裏込石を充填している。出土遺物は、天端から大量の瓦の他、肥前系の染付皿、裏込石の中から板碑、五輪塔などが出土している。瓦は、鬼瓦、桐文の軒平瓦、滴水瓦が確認された。



1．調査地点の位置（60　舞鶴　0193　S ＝ 1 /8,000）

2．石垣の解体状況（南東から）

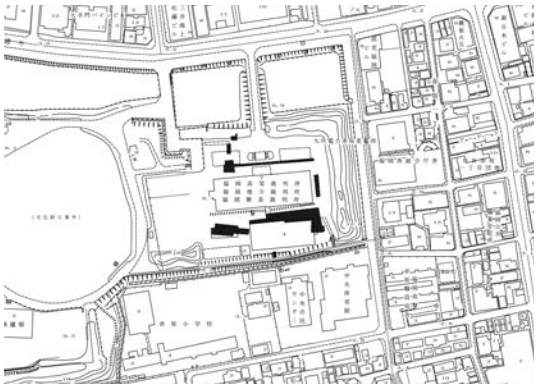
1959　福岡城跡第 80 次（FUE-80）

所 在 地　中央区城内
調査原因　史跡整備
調査期間　2020.1.10 ～ 2022.7.15
調査面積　1,541㎡
担 当 者　中村啓太郎・吉田大輔　史跡整備活用課
処　　置　現状保存

調査の概要

今年度の調査では、鴻臚館に関連する明確な遺構は検出されなかった。中世の可能性のある柱穴や土坑、福岡城に関連するとみられる石基礎や礎石、礎石据付穴、石組溝、石列、瓦組井戸、土坑・柱穴なども出土している。また、近代以降の陸軍関連施設の基礎等もみつかっている。調査区内で地形確認を行ったトレンチでは、いくつかの地点で地形の変換点（地山の急激な落ち）や地山上に堆積する旧表土および谷埋土が検出された。

今回調査を実施した範囲では、鴻臚館が存在した奈良・平安時代における人々の活動・生活の痕跡はみつかっておらず、当該期の遺物もごくわずかである。このことから、大規模な造成が行われたのは、福岡城築城時であることが推測される。今年度の調査でも、鴻臚館跡を含めた調査地周辺の地形や環境等の復元に関する重要な知見を得ることができた。

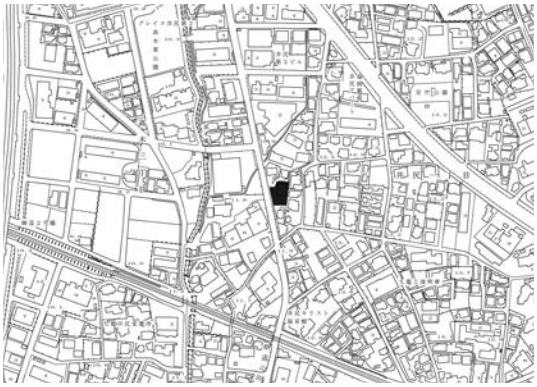


1．調査地点の位置（60　舞鶴　0193　S ＝ 1 /8,000）

2．調査地全景（南西から）

2043　井尻Ｂ遺跡第 48 次（IGB-48）

所 在 地　南区井尻１丁目 704 番の一部、705 番の一部
調査原因　戸建住宅建設
調査期間　2021.2.15 ～ 2021.3.13
調査面積　120㎡
担 当 者　久住猛雄
処　　置　記録保存



1．調査地点の位置（25　井尻　0090　S＝1/8,000）

2．調査区の位置と周辺街区（1/500）

調査の概要

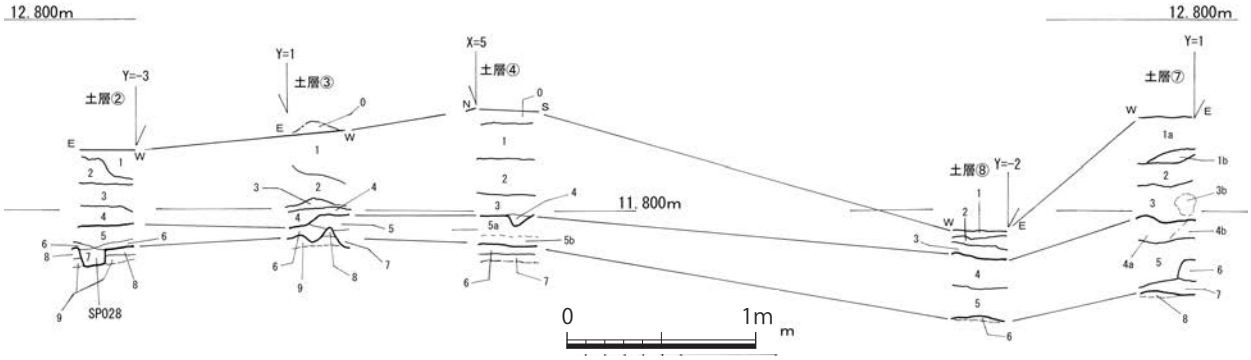
１．位置と環境

井尻Ｂ遺跡は、那珂川と御笠川水系にある諸岡川に挟まれた段丘上にあり、「奴国」の二大遺跡群である比恵・那珂遺跡群（福岡市博多区）と須玖岡本遺跡群（春日市）を結ぶ線上のほぼ中間地点に位置する。その二つの巨大遺跡に比較すると目立たないが、弥生時代後期には青銅器鋳造関係遺物なども多く出土し、規模・内容的には一般の弥生時代「拠点集落」としても差し支えない。48 次調査地点は、井尻Ｂ遺跡の東側縁辺部の中央やや北側に位置する（第１図）。周辺では 33 次調査、42 次調査がある。周囲の標高は、11.1 ～ 12.5 ｍで、西が低く、東が高いものの、現況地形は近年の宅地造成により削平が進んでいるものとみられ、本来的な地形の起伏は分かりにくくなっているとみられる。

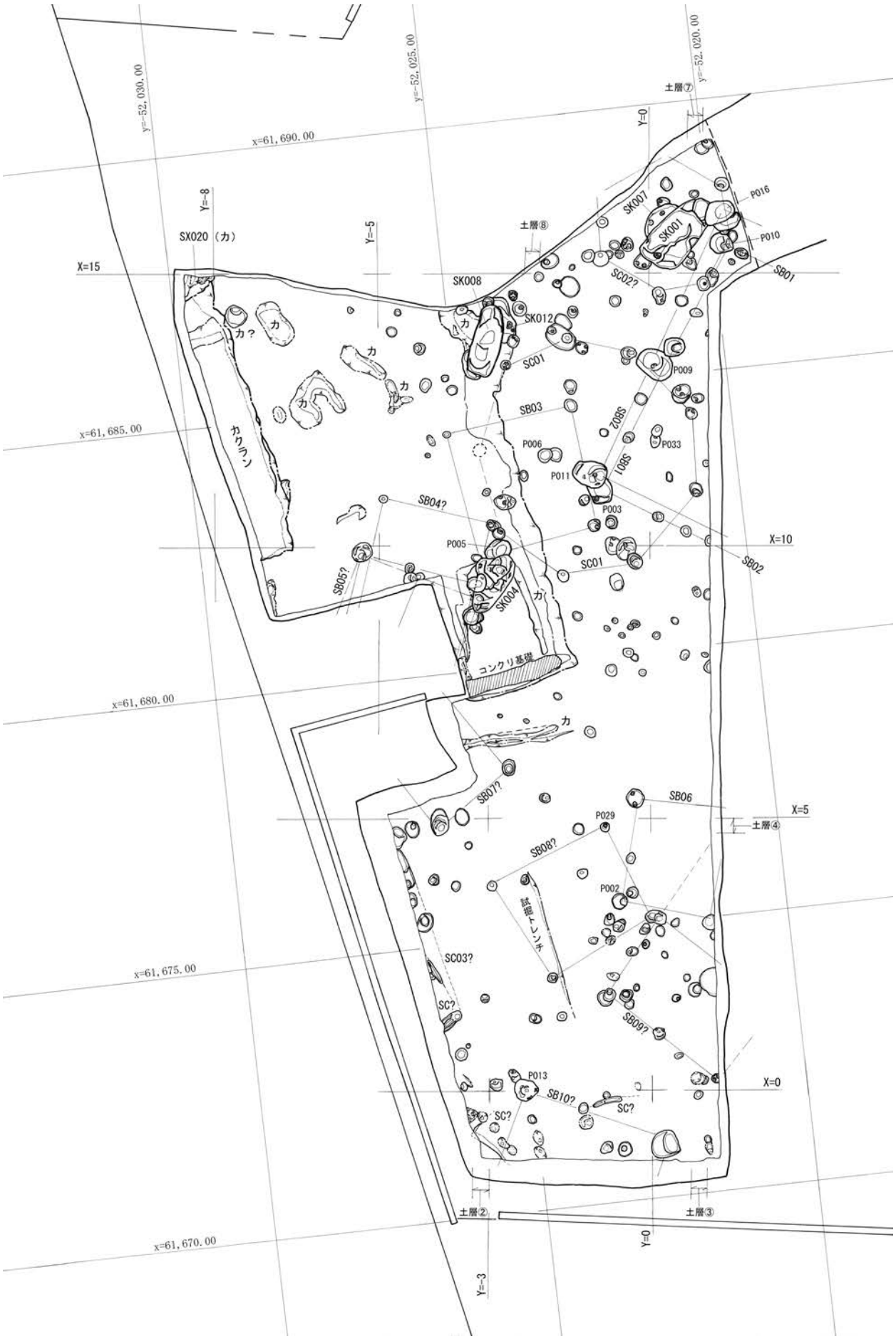
２．調査の概要

調査は、対象敷地（第２図）に対して要調査範囲が比較的広く廃土置場が確保出来たので、重機による表土剥ぎを一度とすることができた。しかし、調査後に予定されていた施工の都合上、調査範囲内にあった電柱建替を発掘調査期間中に行う必要が生じたため、電柱のあった調査区南半分の掘削と記録作業について北半分の作業と平行しつつ３月初めまでに先行して終了させ、残り北半分の調査を３月 13 日に終了させた。なお発掘調査においては、標高と測量座標系（世界測地系）は国土交通省設置の街区調査基準点から移動させて用いているが、個別遺構図は磁北も併用している（真北から約 6° 20′、国土座標北からは約 8° 30′西偏する）。発掘調査の記録作業の多くは担当者が行ったが、遺構図化作業の一部について野村俊之（埋蔵文化財課会計年度任用職員）の助力を得た。

現況標高が低い北西部では地表下 10 ～ 25㎝で、現況がやや高い南西部（第４図　土層②およびその北側）で



3．調査区壁面土図（1/40）※報告末尾に土層注記あり



4．調査区全体図（1/100）

は地表下 45 ～ 70㎝で、現況が最も高い東側（第４図　土層③・④・⑦）では地表下 60 ～ 110㎝で地山の鳥栖ローム上面となり（調査区北辺は北東隅＝第４図　土層⑦、から西に向かって北辺中央＝第４図　土層⑧、に向かって現況地表が下がっていた）、暗褐色～黒褐色覆土が主体の遺構が検出された。地山上面に極暗褐色土の遺物包含層があるが、二次的堆積層である。弥生時代の土坑や、竪穴住居の痕跡と考えられる方形遺構の一画がわずかな遺存であることや、推定円形竪穴住居の柱列に伴うはずの竪穴壁が全く遺存していないことから、弥生時代の旧地形からは 80 ～ 100㎝前後の削平が考えられ、おそらく古代～中世に造成・削平された後に二次的包含層が形成（造成か）され（「包含層」に中世陶磁器が混入する）、その後さらに近現代の造成がなされていると考えられ＝ **SC01・02**、方形住居推定１箇所以上＝ **SC03** ほか、貼床痕跡遺存箇所など）、ほとんどまたは全く壁は遺存していなかった。大小のピット状遺構が分布するが、確実な柱穴の他に根穴など生痕とみられるものもあったが，明らかな生痕を除き「遺構」の可能性があるものとして記録した。ただし覆土の土色や特徴については、ほぼ全てのピットのメモ記録を残している。そこから復元（現地で **SB01・02** は推定したが他は図上復元）できる掘立柱建物は、少なくとも５棟（**SB01 ～ 03・06・08**）、可能性があるものを含めると 10 棟ある。また弥生時代中期の不整楕円形土坑が３基（**SK001、SK004、SK008**）＋α（**SK007**）を検出した。検出したピットがどこまで「遺構」なのかという問題は残るが、推定削平度を考慮すると、遺跡縁辺部とされる割には、本来は多くの遺構が（比較的密に）分布していたと考えられる。出土遺物も勘案すると、主に弥生時代中期の遺構が多く、一部が弥生時代後期（特に終末期）～古墳時代初頭で、また一部が古代・中世と考えられる。

５．調査区南半部遺構（東から）

６．北半調査区遺構検出状況（南から）

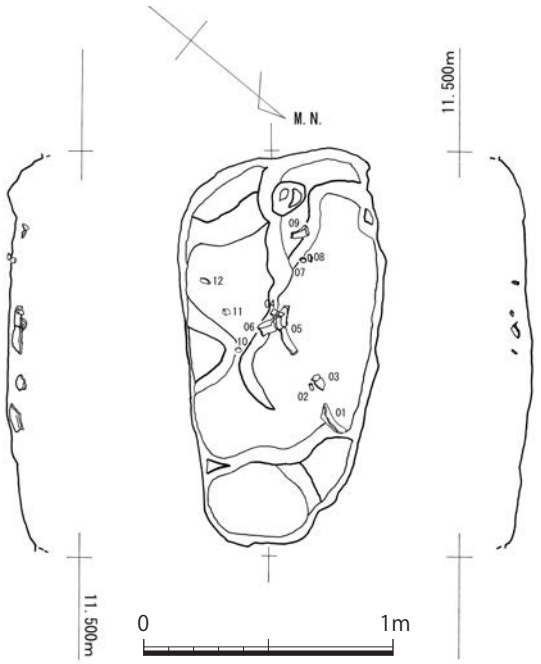
７．北半調査区中央～西側掘削状況（東から）

３．検出遺構（第４図）

（１）SK001（第９・10 図）

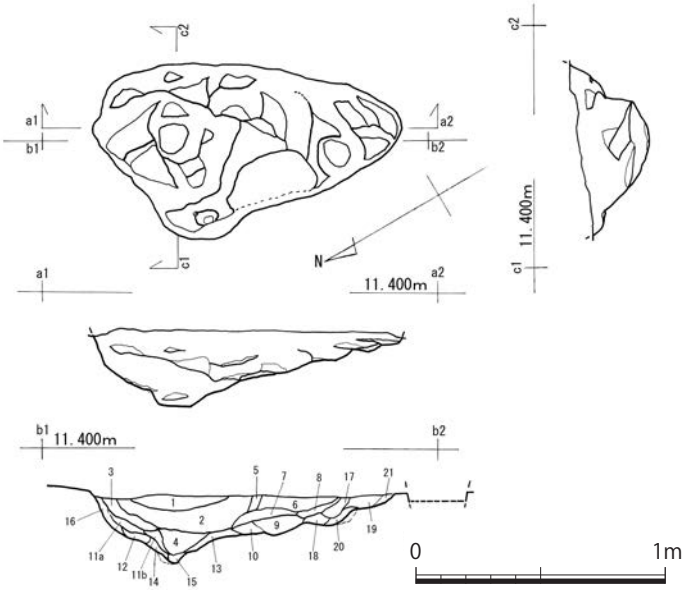
調査区北東側で検出した浅い不正楕円形ないし不正長台形状土坑。ただし「浅い」としたが（最深 12㎝前後）、本来は１m前後の深さがあったと考える（「２．調査の概要」参照）。覆土は黒褐色～極暗褐色土。計測値は全て検出面でのものになるが（以下全て同じ）、長さ 160cm、最大幅 83cm。中央長軸方位（国土座標北基準）は N-46°-E。底面は平坦ではなく、不整な凹凸があり、中央軸の北西側がわずかに深い。なお南西側中央の小穴は、おそらく上からのピットだろう。弥生時代中期（須玖Ⅰ式）土器が出土した（第 19 図 -1 ～５など）。ただし１点（第 19 図 -6）のみ弥生時代終末期前後の土器片があったが、他の遺物は須玖Ⅰ式期でまとまり、出土状況的にもほぼ床面「一括」として良さそうなので、遺構検出時に気付かなかった重複するピットなどに伴う混入品と考える。その１点を除く土器の型式は須玖Ⅰ式でも後半で、須玖Ⅱ式古相直前ぐらいだろう。なお北西辺側に SK001 に切られる **SK007** が

８．調査区北半調査区東半掘削状況（北から）



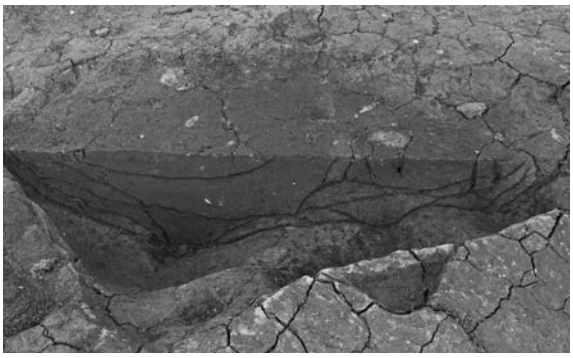
9．SK001 実測図（S=1/30）

10．SK001 掘削・遺物出土状況（北東から）



11．SK004 実測図・土層図（S=1/30）　※土層注記省略

13．SK004 完掘状況（南から）

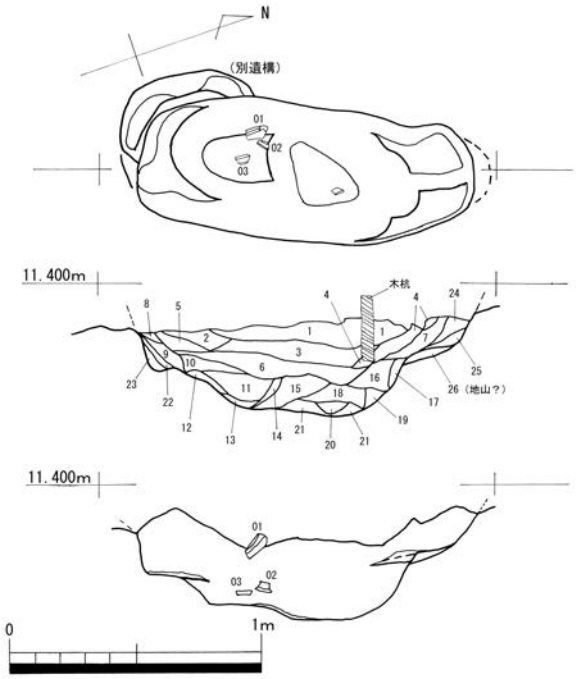


12．SK004 縦断土層状況（西から）

あり（第 10 図右側にその覆土が写っている）、SK001 よりわずかに深く、約径 84cm 前後の略円形をなす土坑である。

（2）SK004（第 11・12・13 図）

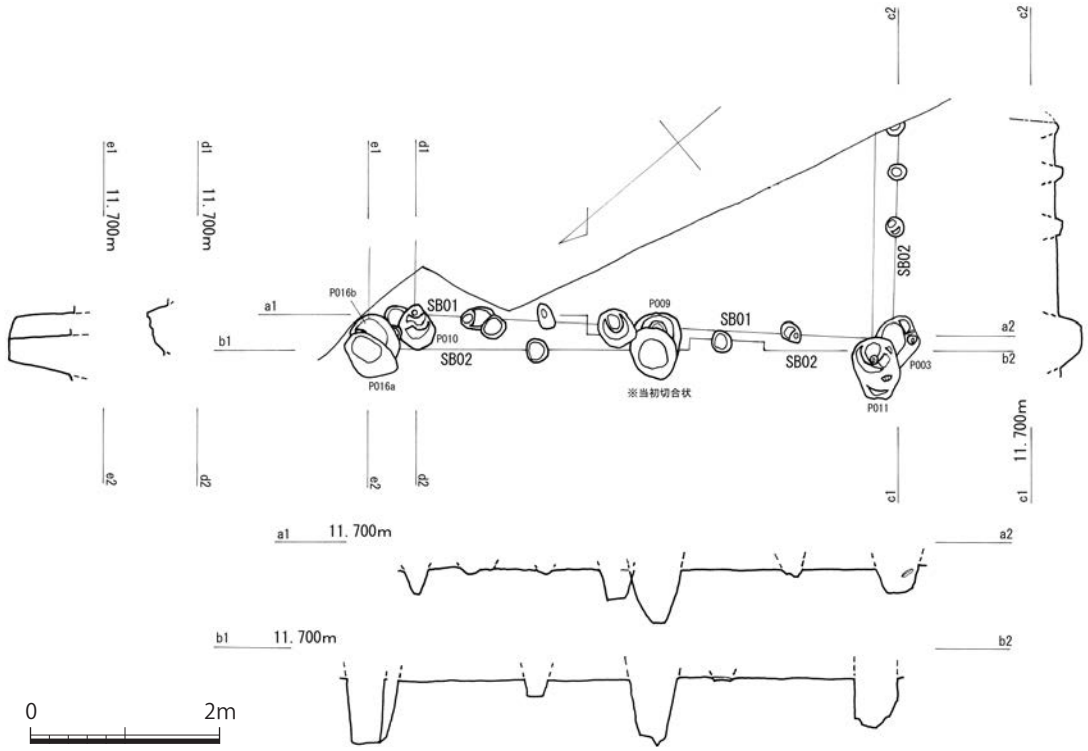
調査区中央北側で検出した土坑。不整楕円形ないし丸みを有する略三角形状にも見える平面形。長軸は N-29.



14．SK008 実測図・土層図（S=1/30）　※土層注記省略

15．SK008 縦断土層状況（東から）

16．SK001 掘削・遺物出土状況（東から）

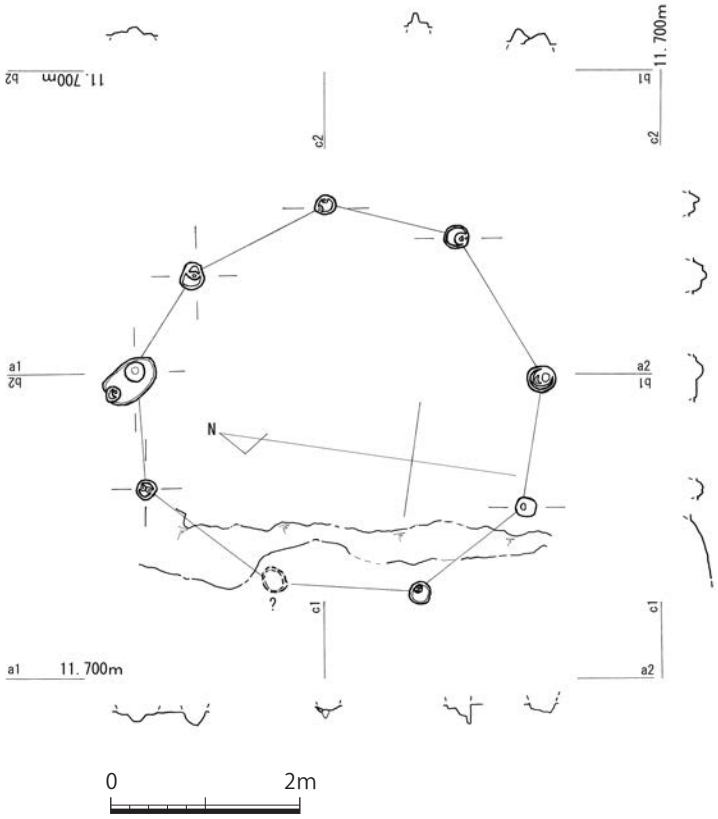


17．SB01・02 実測図（S=1/80）

5°-E。長さ 123cm ×最大幅 71cm。中央よりやや北側が最も深く、深さ最大 31cm、北側はやや急に立ち上がり、南側はスロープ状に立ち上がる。土層断面を見ると（第 11 図）、断定的ではないが、何度か掘り直したか、または深いところに柱状のものがあったのが掘り起こされ抜かれたようにも見える。後者の場合は「大柱遺構」とされる遺構にも近いが、柱穴としても「大柱」というほどではない。出土遺物がほぼ皆無であり、時期不詳であるが、覆土が黒褐色～極暗褐色土のため弥生時代～古墳時代前期とみられる。弥生時代中期（須玖Ⅰ式期）の建物とみられる **SB01・02** の方位に近いことから、それら建物に関連する遺構との考えもあり得るが、切っている北側の **SP005** は弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器片を出土し（第 19 図 -17）それよりも新しいとするのが穏当だろう。また土坑西側は別の柱穴（SB05 ？）に切られている。

（3）SK008（第 14・15・16 図）

調査区北側縁辺中央部で検出した不整長楕円形の土坑。長軸は N-18.5° -E。長さ 135（～ 140）㎝、最大幅 55cm、深さ 41cm。土層断面を検討すると（Ph.8）、中央やや北側が最も深いが、下層が埋まった後に中央より西側が掘りこまれそこが埋まった後に（10 ～ 15 層）、全体が埋まっていくというようにも見える。土壙墓などではなさそうであり、一つの解釈としては中央やや北側に「柱」があり、それを抜いてある程度埋めた後に中央南側に新たに柱を立て、さらにそれが抜かれた後に全体が埋められる、ということが考えられる。出土土器（第 19 図 -7 ～ 9）はいずれも弥生時代中期（須玖 I 式期）で、掘り直し（？）下層の 2 個体（第 19 図 -8・9）と、埋没過程上層の甕棺口縁部片（第 19 図 -7）に分かれるが、同時期でもよい幅である。SK001 の土器群よりわずかに古く、SK001 を須玖 I 式末とすると、SK008 の 3 片は須玖 I 式新相前半である。上層出土 2 点のうち 1 点(第 19 図 -11)は弥生時代後期の混入の可能性があるが、もう 1 点（第 19 図 -10）は須玖 I 式新相でよい。また土坑北東側は、より古い SK012 土坑を切る。**SK012** は長さ 83cm、深さ 7cm の遺存である。出土土器（第 19 図 -19）は、SK008 とほぼ同じかわずかに古い（須玖 I 式古相後半）の甕である。



18. SC001 実測図（S=1/80）

（4）掘立柱建物およびその可能性がある遺構

・SB01 および SB02（第 18 図）

北半調査区東側で検出した。復元される建物の大半は調査区東側になるが、建物の西側桁行と考えられる柱列とその重複は調査時に気付いていた。SB01 と SB02 は重複しており、一部に重複関係の矛盾があるピットも存在するが、切合いが明確であった南西隅角の **SP003 → SP011** の関係を重視すると、**SB01 → SB02** となる。また西側柱列中央の **SP009** は二つの建物の柱穴の重複のようである。さらに SB02 北西隅柱穴の **SP016** の状況から、SB02 自体も一度建替えられている可能性がある。SB01 は桁行 5.0m ×梁間 2.2m 以上で、西側桁行や南側梁間の柱穴は、隅角や桁行中央のやや大きい柱穴以外は小さい。方位は N-34° -E。SB02 は桁行 5.4m ×梁間 2.3m 以上、方位 N-31° -E。厳密には梁間部分の柱穴は検出できていないが、SB01 の建替えは明白であり、SB01 の梁間柱穴よりさらに浅かったものが削平されたのであろう。西側桁行の柱列も確実には SP011-SP009 西 -SP016 のみで、その間にあった束柱状の小柱穴は削平されたのであろう。このような隅柱を除いた柱穴が小柱穴からなる掘立柱建物は、たとえば粕屋町江辻遺跡の弥生時代早期建物などに存在する。SB01・02 の柱穴から弥生時代中期土器が出土しており（第 19 図 -12 ～ 16）、須玖 I 式古相であろう。

その他、掘立柱建物として SB03 ～ SB10 までを想定した。SB03 と SB06、SB08 は大丈夫と思われるが、他はやや怪しい。以下詳細は述べないが、概要ないし方位だけを記す。SB03 は 1 × 1 間、2.35 mの正方形。N-8° -W。SB04 は N-18° -E。SB05 ？は柱穴の組合せ案が 2 つあり、SK008 西側を切る柱穴（ただし攪乱の可能性あり）を生かすと SB04 とほぼ同方位、別の案だと N-15° -E となる。SB06 は北東隅柱のみ調査区外だが 1 × 1 間、1.85m × 1.65m。N-16° -E。SB07 ？は N-56° -E。SB08 はやや不整方形気味だが、1 × 1 間、2.1 ～ 2.4m × 1.9 ～ 2.1m で、N-68° -E。SB09 ？は、建物なら 1 × 2 間で、2.55m × 1.75m、N-45° -W である。SB10 は、SP013 と東側の柱穴間が 2.9m、N-65° -W となるが、弥生時代後期の二本主柱穴長方形竪穴住居かもしれない。以上の多くは

極暗褐色覆土の柱穴を含み、弥生時代～古墳時代前期が主体と思われるが，一部暗褐色覆土主体の場合もあり、古代（飛鳥時代～）以降が含まれる可能性がある。

（５）竪穴住居および竪穴住居の可能性がある遺構

・SC001（第 17 図）

調査区北半部で図上復元した推定円形竪穴住居。推定九角形状をなす柱列は、1 箇所のみ検出面が攪乱で西側に段落ちするので消失していると考えられるが、南北 4.3m ×東西 4.0m となり、竪穴の壁は削平で全く残らないが、推定 6m 径前後であろう。ただし中央土坑は不明である。削平されたものか。時期不明の **SB04**（SK008 より古い）より新しく、前後不明だが SB01・02 と重複する。

また、SB01･02 に切られ、かつ SK001 と前後関係不明ながら、推定七角形の柱列（うち北側 2 箇所は調査区外）からなる、**SC002** が調査区北東側にある。この推定七角形柱列は径 2.4 m前後で、径 3.5 ～ 4.0m 前後の円形竪穴住居が想定される。この SC002 のほぼ中央に **SK007** があるが、関連遺構とすれば SK001 より古いことになる。

その他、南半調査区西壁沿いに、**SC003** とした貼床および壁溝痕跡部分がある。長さ 3.35m で、方位は N-14°-W である。弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居痕跡だろう。さらに SC003 内には、やや異なる方向の壁溝痕跡がある。さらには調査区南西橋に竪穴住居の隅角痕跡（貼床？箇所や、調査区南端付近中央にも壁溝のわずかな痕跡がある。調査区内には本来、弥生時代中期～後期、古墳時代前期頃までの竪穴住居が分布していた可能性が考えられる。

４．出土遺物（第 19 図）

出土遺物はパンケース２箱程度で、弥生土器（中期主体、一部後期～終末期）、古墳時代初頭の古式土師器、古代以降の土師器、中世の輸入陶磁器、石器（弥生時代前半期の黒曜石剥片など）がある。図示した遺物は Fig.10 の通りだが、簡単に記す。**1 ～ 5** の **SK001** 出土土器は須玖Ⅰ式新相後半（Ⅰ式末）、**7 ～ 10** の **SK008** 出土土器は須玖Ⅰ式新相前半、**12 ～ 16** の **SB01・02 柱穴**出土土器は須玖Ⅰ式古相後半。遺構外の調査区壁出土だが、24・25 は軟質（土師質）の初期瓦ないしその系統の古代瓦。**26** は白磁皿、**27** は象嵌青磁（高麗か）。遺構が不明確だが古代～中世も存在する。

５．まとめ

井尻Ｂ 48 次調査は、井尻Ｂ遺跡西端中央部の弥生時代集落の展開様相が確認できた。遺構は南側が比較的薄く、北東側に向けて濃密になる傾向にあった。ただしすでに述べた通り、削平を考慮すると、本来の遺構密度は高かった可能性があり、遺跡（包蔵地）の最縁辺としてはやや不自然であり、今後西側への遺跡の広がりを確認する必要がある。

土層②

１．表土、極暗褐色土＋明褐色土＋砂礫ほか、しまり甘い／２．造成盛土、にぶい灰黄褐色真砂土、しまりやや甘い、土器小片／３．造成盛土、にぶい（灰）黄褐色真砂土、しまりややあり、土器小片／４．暗褐色土包含層（二次的堆積）＋にぶい黄褐色真砂土 10%、土器小片わずか、しまりあり／５．極暗褐色土包含層（二次的堆積）、しまりあり、土器小片わずか／６．極暗褐色土＜暗褐色土包含層（二次的堆積）、しまりあり、土器小片わずか／７．小ピット（SP028）、極暗褐色土＜暗褐色土＋明褐色ローム土 5%、しまりややあり／８～９は漸移する地山／８．明褐～明赤褐色ソフトローム土（地山）、しまりあり／９．明赤褐色～橙色ローム土（地山）、しまりややあり

土層③

０．最近の盛土／１．根が張る表土、(暗）黄灰色～（暗）灰（～褐灰）色真砂土＋にぶい褐色～明褐色土ブロック 30%＋暗褐色土 5%、しまり甘い／２．造成盛土、(暗）褐色土＋黄灰色真砂土 35%、しまり甘い／３．造成盛土、褐色土 30%＋黄灰色真砂土・小砂礫混じり 70%、しまりやや甘い／４．造成盛土、褐色～暗褐色土＋（暗）灰～黄灰色真砂土 35%、しまり甘い／５．暗褐色～極暗褐色土包含層（二次堆積）、しまりあり／６．二次的包含層に根の影響、極暗褐色土＋褐色土 10%＋暗褐色土 10%＋明褐色土 10%、しまりやや甘い～ややあり／７．遺構（ピット）か、明褐色ローム土＋暗褐色土 30%、しまりあり／８・９．土層②の８・９層と同じ地山

土層⑤

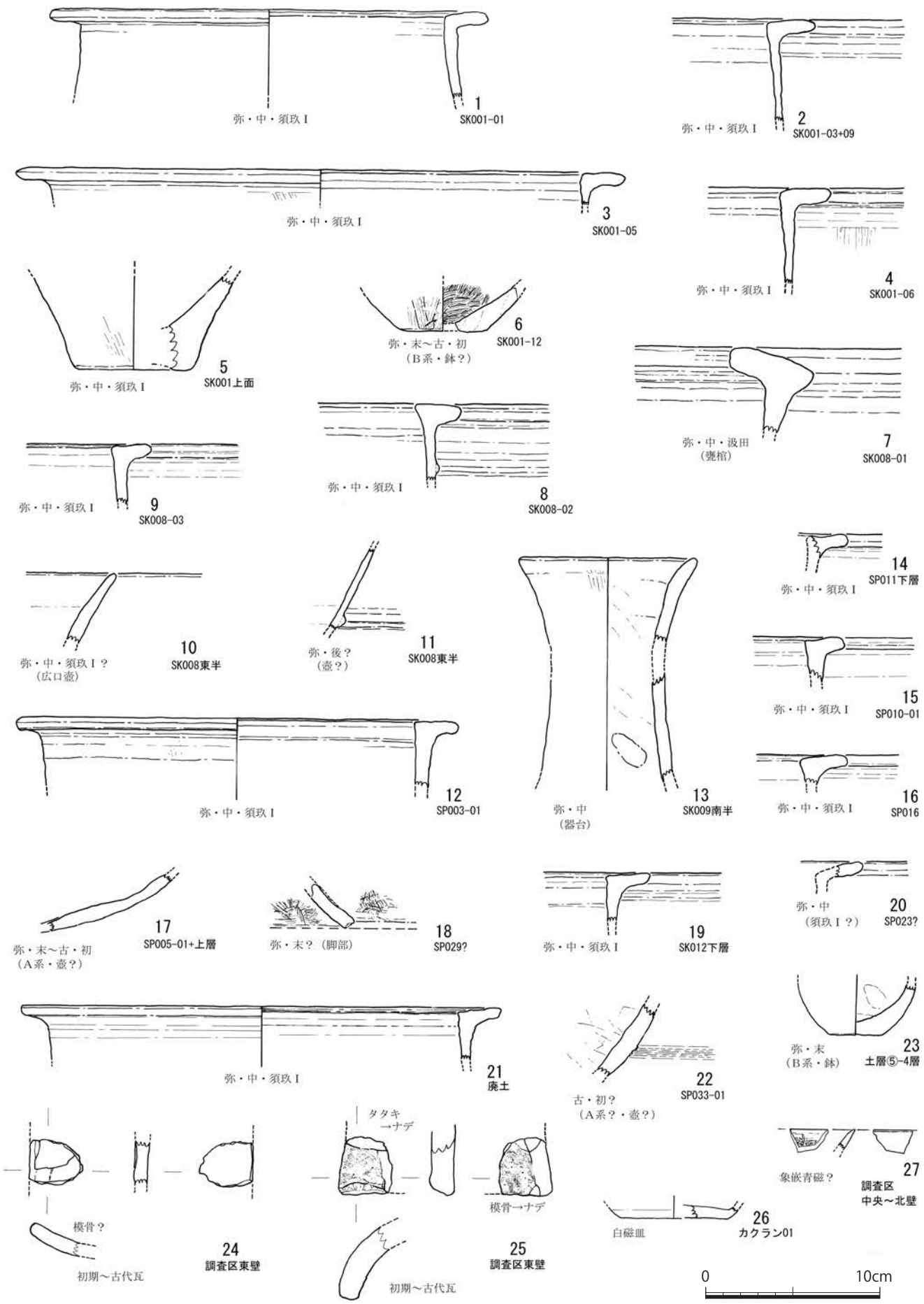
０．最近の盛土、暗褐色土＋砂礫 10%／１．にぶい黄褐色～灰黄色真砂土＋砂礫 10%＋明橙色土 5%＋小瓦礫若干、しまりややあり／２．淡黄褐色～灰黄色真砂土＋砂礫 3%、土器小片、しまりあり／３．２層より暗い淡黄褐色～灰黄褐色（またはにぶい黄褐色）真砂土＋砂礫 5%、しまりややあり／４．３層真砂土＋暗褐色土 20%＋砂礫 5%／５．極暗褐色土（５a）～暗褐色土（５b）包含層（二次堆積）、土器片あり、しまりややあり／６．にぶい褐色～にぶい赤褐色ソフトローム土（地山）、しまりややあり／７．橙色～明褐（ないし明赤褐）色ローム土（地山）

土層⑧

１．小バラス＋小瓦礫＋灰色真砂土／２．淡黄褐灰色～（淡）黄灰色真砂土＋暗褐色土 10%＋砂礫７～ 10%、しまりあり／３．極暗褐色土包含層（二次堆積）＋黄灰褐色砂質土 10 ～ 15%＋砂礫 5%強、しまりあり／４．極暗褐色土包含層（二次堆積）＋黄灰褐色砂質土 3%＋明褐色ローム土粒子 3%、しまりあり／５．暗褐色＞極暗褐色土＋明褐色～褐色ローム土 20%しまりあり／６．明赤褐色～明褐色ソフトローム土（地山）

土層⑦

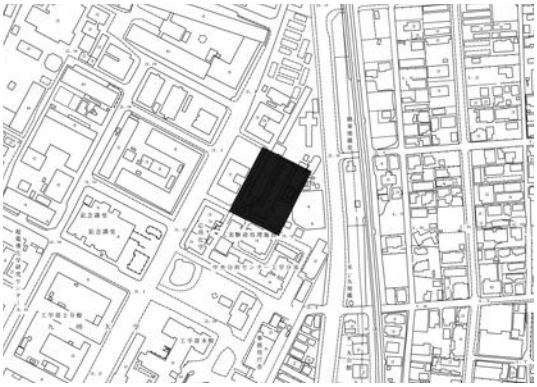
１a．最近の盛土、淡褐灰色真砂土＋瓦礫・砂礫多量／１b．最近の盛土、黄灰褐色真砂土＋砂礫・小瓦礫多量／２．にぶい黄褐色～黄灰褐色真砂土＋砂礫 10%、土器小片、しまりあり／３．にぶい黄褐灰色砂質土（２層より暗い）＋暗褐色土 15%（３ｂは暗褐色土ブロック）＋砂礫７～ 10%, しまりあり／４．暗黄褐色～暗褐色砂質気味土（４a 層は暗褐色土）＋にぶい黄褐灰色砂質土 30%（４b 層は 50%）、しまりあり／５．極暗褐色土包含層（二次堆積）＋にぶい黄褐灰色～灰黄色砂質土 7%、しまりあり／６．にぶい黄褐灰色～灰黄褐色砂質土＋極暗褐色土 15%、土器小片、しまりやや甘い／７．極暗褐色土＞暗褐色土包含層（二次堆積）＋褐色～明褐色土 10%、しまりあり／８．にぶい明褐色～にぶい明黄褐色ソフトローム土（地山）、しまりあり



19. 井尻Ｂ 48 次出土遺物実測図（S=1/3） ※実測は野村美樹（埋蔵文化財課技能員）および久住，製図は久住

2044　箱崎遺跡第 115 次（HKZ-115）

所 在 地	東区箱崎 6 丁目 10-1（船舶海洋工学実験室地点）
調査原因	学術研究（記録保存・HZK2007）
調査期間	2021.2.15 ～ 2022.1.28
調査面積	3,200㎡
担 当 者	九州大学埋蔵文化財調査室
処　　置	記録保存



1．調査地点の位置（33　貝塚　2639　S ＝ 1 /8,000）

2．甕棺墓 ST108（東から）

調査の概要

HZK2007 地点は、昨年度からの継続調査である。最終的に近世の甕棺墓が 67 基、桶棺墓・木棺墓・土坑墓が 38 基が検出された。木棺墓・土坑墓の中には中世まで遡るものが存在する可能性もある。甕棺の多くは近現代の改葬を受けているが、人骨が良好に残っているものもある。また特筆される点として、中世のものと考えられる火葬土坑（荼毘の場）が 24 基検出されている。火葬土坑は調査区南側に集中して検出される傾向がある一方、甕棺墓は調査区北側に集中する。また、調査区南側では完形の中国陶磁器（龍泉窯青磁碗など）が出土しており、付近に中世墓が存在していた可能性がある。これらの調査成果から、墓域としての利用が、南から北への展開していった様子がうかがえる。中世から近世にかけての葬墓制の変遷が追える貴重な調査事例と言えよう。

7019　野方古墳群１次調査（NKK-1）

所 在 地　大字野方字大音（現西区野方５丁目）
調査原因　宅地造成
調査期間　1970.11 ～ 1971.1
調査面積　1,500㎡
担 当 者　鈴木重治・三島格
処　　置　記録保存

調査の概要

１．本報告及び調査に至る経緯

野方古墳群１次調査は、昭和 45 年 11 月から翌 46 年１月にかけて行われた。しかし、その後、発掘調査報告書が刊行されることなく今日に至っている。記録類や出土遺物は当時の調査担当者から福岡市に移管されたが、一部は調査担当者が在籍した同志社大学考古学研究室に残っていた。発掘調査にかかる書類などは失われたものもあり、調査に関する詳細は不明な部分も多いが、可能な範囲でここに報告を行い、出土資料の活用を図るものである。

発掘調査については、残存する書類を見ると、昭和 45 年 11 月 10 日付で、上記地内における宅地造成に伴う発掘調査届が関東企画株式会社から提出されている。これに基づき南九州大学 鈴木重治と、福岡市教育委員会 三島格（いずれも肩書は調査当時）が調査を行ったことが分かる。

なお野方古墳群は調査当時、小松ヶ丘古墳群と称されていた。その後、全市的な埋蔵文化財包蔵地の整理を経て、現在は野方古墳群 A 群、B 群となっている。

２．位置と環境

当該古墳群は室見川が南から北に貫流する早良平野北西部の丘陵上に位置する。この丘陵は背振山系から飯盛山、叶岳、長垂山へと連なる山塊から東にいくつも伸びる小丘陵の一つである。

旧石器時代には羽根戸原や吉武、有田といった遺跡でナイフ型石器が出土するとともに、羽根戸遺跡で押型文や撚糸文といった縄文早期の土器が出土し、市内でも早くから人の生活痕跡が見られる地域となっている。以後、早良平野を中心に遺跡が展開し、弥生時代には吉武遺跡群で王墓を含む大規模な集落が営まれる。野方周辺では野方久保で青銅器を副葬する墳墓が見られるほか、弥生時代後期になると野方中原、野方塚原の各遺跡を中心に、豊富な鉄製品が出土する集落や、青銅鏡、玉類を副葬する墳墓が営まれるなど、拠点集落の一つとなる。古墳時代には羽根戸南古墳群で前方後円墳が築造され、後期には丘陵斜面に後期群集墳が多数みられる地域となる。早良平野から今宿平野に抜ける入り口にあたる野方周辺は、古代官道に比定される道も通り、野方の地名は「額田郷」、「額田駅」に由来するとされる。

３．調査の概要と出土遺物

野方古墳群１次調査では、当時の小松ヶ丘古墳群１～ 10 号墳（現、野方古墳群 A 群１～３号墳、B 群５、６、８、９、11 ～ 13 号墳）の中で、調査開始時に既に半壊状態となっていた２基を含む７基の古墳の調査が行われた。これにかかる記録類としては、調査区の全体図、各古墳の墳丘測量図、石室実測図などが残されている。

野方古墳群はその後、昭和 48 年に２次調査が行われ、当時の小松ヶ丘 11 ～ 16 号墳（現、野方古墳群 B 群１～４、７、10 号墳）の６基が発掘調査されている（未報告）。また昭和 49 年には宅地造成に伴い第３次調査で C 群の２基が（未報告）、昭和 62 年には区画整理に伴い、D 群の２基について発掘調査が行われている（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 226 集）。

１次調査及び２次調査における各古墳の概要を一覧表に示す。表の内容は、記録として残されている出土遺物の情報、墳丘や石室の実測図などから集めた情報に基づくものである。各古墳の詳細について、全てを掲載することは時間や予算の制約から困難である。いずれ別の機会を模索するとして、ここでは出土資料の内、小松ヶ丘８号墳＝野方古墳群 B 群６号墳出土の鉄製品の報告を行う。

出土遺物の内、土器類は調査担当者であった鈴木重治氏から福岡市埋蔵文化財センターに移管された。しかし小松ヶ丘８号墳＝野方古墳群 B 群６号墳出土鉄器は何らかの事情により、鈴木氏が在籍していた同志社大学考古学研究室に残されたままとなっていた。今回、同志社大学４回生の槇和泉氏がこれらを資料化したことから、ここにその概要説明と実測図を掲載する。

なお本報告に合わせ当該古墳出土の土器類を確認したが、概ね７世紀代の年代観（陶邑編年 TK209 ～ TK217、小田編年Ⅳ期）を示すものであった。土器に比べ鉄製品がやや古相を示す結果となっているが、詳細な検討は今後に委ねたい。

小松ヶ丘８号墳出土鉄製品

槇　和泉

はじめに

本稿は、同志社大学考古学実習室に収蔵されていた「小松ヶ丘古墳８号墳」出土鉄製品の報告と編年的位置づけを行うものである。本資料は、実習室内にて菓子箱に封入された状態で保管されていた。菓子箱の蓋には「小松が丘鉄製品」という朱書きと、「８号鉄製品」という黒の題書きが認められる。箱の中には 26 点の鉄製品とラベルが収蔵されていた。ラベルは、「福岡市 野方 大音 こまつヶ丘古墳群 ８号墳　羨道右袖石付近 H13　710113 （実測日記入）」と朱書きされたものと、「小松ヶ丘古墳群　８号墳　羨道内西袖寄り　障壁外部コーナー　71.1.10」と黒字で書かれたものの計２枚から構成される。本資料は 2018 年の収蔵庫整理の際に一度認知されたが、資料の帰属等が不明であったため、再収納した。しかし、2021 年２月 14 日に行った収蔵庫整理に際して、再度本資料の存在が認知された。その際に、ラベルに記載されていた古墳名、所在地、調査年月日等から、福岡市西区野方に所在する小松ヶ丘古墳群の出土資料である可能性が浮上し、福岡市に返還する運びとなった。

武器・馬具・工具等から構成され、副葬品組成の追求も可能であり、小松ヶ丘古墳群の形成過程を考えるうえで極めて重要な資料であると言える。また、本資料は破片化しているものが多いが、有機質の遺存状況は良好であるため、26 点中 25 点を図化し、この度報告するに至った。

鉄鏃（図２- １～ 10）

１～ 10 は鉄鏃である。いずれも鏃身部を欠損しているため、形式は明らかにできないが、頸部や茎関の形状などからそのほとんどは長頸鏃か有頸平根鏃であったと推定される。

鉄鏃は関部の形状から大きく二つに区分できる。１・５は台形関を呈し、共に頸部から茎関にかけて遺存する。１は、頸部残存長 5.1cm、頸部厚 0.4cm を測る。５は頸部残存長 4.75cm、頸部厚 0.25cm を測る。

２・３・８・９は刺状関を呈する。２・３は、頸部から茎部にかけて遺存し、茎関にかけて緩やかに頸部幅を増す特徴を持つ。10 は、頸部残存長 4.55cm、頸部厚 0.4cm、茎部長（残存）2.15cm、茎部厚 0.45cm を測り、茎部に樹皮が残存する。３は、頸部残存長 4.35cm、頸部厚 0.25cm、茎部長 (残存)2.15cm、茎部厚 0.25cm を測る。茎部には樹皮巻きが認められ、内部には矢柄の木質が遺存する。

８・９は、２・３とは異なり頸部幅の変化が認められない。８は、二本の鉄鏃が錆着している。８a は頸部から茎部、８b は頸部が遺存する。８a は、頸部残存長 4.9cm、頸部厚 0.3cm、茎部残存長 0.4cm、茎部厚 0.3cm を測る。８b は、頸部残存長 5.5cm、頸部厚 0.3cm を測る。９は、頸部から茎部にかけて遺存し、頸部残存長 1.4cm、頸部厚 0.4cm、茎部残存長 2.45cm、茎部厚 0.3cm を測る。

上記以外の資料は茎関の形状が不明瞭である。４は、頸部の一部が遺存し、頸部残存長 4.15㎝、頸部厚 0.4cm を測る。６は、頸部関から茎部にかけて遺存し、茎部残存長 4.7cm、茎部厚 0.35cm を測る。茎関は不明瞭であるが、無関と推定される。７は、茎部の一部が遺存し、茎部残存長 3.45cm、茎部厚 0.3cm を測る。６・７ともに茎部には、樹皮巻きが認められ、内部には矢柄の木質が遺存する。10 は茎部の一部が遺存し、茎部残存長 3.75cm、茎部厚 0.2cm を測る。縦方向に木質が残存する。

飾金具（図２-11・12）

11 と 12 は飾金具である。11 は、鉄製の方形飾金具である。鉄板は四辺とも直線を呈し、縦幅 2.05cm、横幅 2.3cm、厚さ 0.3cm を測る。四隅に穿たれたかしめ鋲と責金具で繋を固定していたと考えられる。鋲はそれぞれ鋲頭径 0.6cm、鋲頭高 0.2cm を測る。12 は、鉄製の爪形飾金具である。縦幅 2.15cm、横幅 2.3cm、厚さ 0.3cm を測る。鋲は二つのみ遺存するが、鋲穴の存在から本来は三つのかしめ鋲が穿たれていたと考えられる。鋲は鉄板から 0.6cm ほど鋲頭が突き出しており、鋲頭径 0.6cm、鋲頭高 0.25cm を測る。繋は遺存していないが、折り返して筒状にした繋を綴じた革の痕跡と考えられる有機質が遺存している。

鞍金具（図３-15・16）

15・16 は鉄製の鞍金具であり、脚と輪金を別造りで製作されたものである。15 は、ほぼ完存している。輪金は縦 6.2cm、横 3.9cm、幅 0.5cm の断面隅丸方形であり、頭部が左右に張り出す。半球状の座金具は直径 2.75cm、厚さ 0.15cm を測る。脚に残存する縦方向の木質は、脚の軸方向に一致することから、居木に固定されていたと考えられる。脚の一端は完存するが、もう一端は欠損している。16 は、輪金が縦 6.5cm、横 4.2cm、幅 0.5cm の隅丸方形で、半球状の座金具が半径 1.6cm、厚さ 0.15cm を測る。輪金と脚の方向は直反する。

刀子（図２-13・14）

13・14 は、刀子である。13 は、切先をわずかに欠損するがほぼ完存している。残存長 10.95cm、刀身残存長 6.65cm、推定最大刀身幅 1.1cm、推定茎部長 4.3cm を測る。刀身と茎の間に鏁を有するが、土圧等によって鏁がやや刀身側にずれている。刀身は、刃・棟ともに直線的に切っ先に至る。茎部には柄木の木質が遺存するほか、刀身にもわずかに木質が付着する。14 は、刀身の一部のみ遺存している。刀身残存長 4cm、刀身幅 1.1cm を測る。切先が土圧によって折れ曲がっている。

二股状鉄製品（図３-17 ～ 19）

17 ～ 19 は二股状鉄製品である註１）。17 は片側の脚部が欠損しているが、頭部が円形型で脚部先端が開く開放型に該当する。全長 9.75cm、頭部長 1.25cm、頭部厚 0.3cm、頭部側面幅 0.25cm、頸部長 1.3cm、頸部厚 0.3cm、頸部側面幅 0.5cm、脚部長 7.2cm、脚部厚 0.3cm、脚部側面幅 0.85cm を測る。頭部断面は隅丸方形、頸部・脚部断面は長方形を呈する。脚部先端は丸く収まり、脚部に対して斜め方向と縦方向に木質が遺存する。18 も 17 と同様の形状であり、また木質が付着する様子などから 17 と同一個体に復元されると判断した。脚部残存長 4.1cm、脚部厚 0.3cm、脚部側面幅 0.8cm で先端が丸く収まる。19 は頭部から頸部にかけて遺存する註２）。遊環が連結し、頭部が頸部の側面幅とあまり変化しない扁平型に該当する。残存長 2.5cm、推定頭部長 0.95cm、推定頭部厚 0.2cm、頭部側面幅 0.65cm、頸部残存長 1.55cm、頸部厚 0.2cm、頸部側面幅 0.45cm を測る。厚さは頭部から頸部にかけて薄くなっていく。また 17 とは異なり、頭部断面も脚部断面と同様に長方形状を呈する。遊環は、断面形は円形で、残存長 1.25cm、幅 0.5cm、厚さ 0.4cm を測る。

不明鉄製品（図３-20 ～ 23）

上記の資料以外に、器種不明の鉄製品が存在する。20 は、縦残存長 3.35cm、横残存長 2.3cm、幅 0.6cm を測り、断面角丸状である。鉸具の一部である可能性も指摘できるが、判然としない。21 は棒状の鉄製品で、残存長 3.1cm、幅 0.6cm を測る。一端の断面は厚さ 0.5cm の楕円形で、もう一端は厚さ 0.4cm の長方形状を呈するが、変化点は明確でない。22・23 はいずれも柳葉状でかまぼこ形を呈する鉄製品である。22 は残存長 2.6cm、幅 0.75cm、厚さ 0.2cm を測る。23 は残存長 2.25cm、幅 0.8cm、厚さ 0.3cm を測る。鉄鏃の鏃身部の一部である可能性が推測できる。

編年的位置づけ

以上行った鉄製品の報告を基にこれら資料の編年的位置づけを示したい。報告を行った鉄製品の中で時期の特定が可能な資料は、鉄鏃と鞍金具である。鉄鏃は、台形関と刺状関の鉄鏃が出土している。水野敏典氏は、後期１段階に台形関の鉄鏃が増加し、後期２段階に刺状関が長頸鏃に斉一的に採用されると指摘している（水野 2009）。また、後期２段階の開始期を TK43 型式期と捉えている。よって、本古墳出土の鉄鏃は、TK43 型式期以降に位置付けられる。鞍金具は本資料群内では２点しか確認することができなかったことから後輪にのみ鞍金具を取り付ける木製鞍が副葬されていたと考えられる（宮代 1996a）。木製鞍の鞍金具については、刺金をもたず、輪金の頭部が左右に張り出すものが TK43 型式期に出現し、半球状座金具をもつものが TK209 型式期に一般化することが指摘されている（宮代 1996a）。したがって、本古墳出土の鉄製品は、TK209 型式期を前後する時期に位置付けられると考えられる。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、比佐陽一郎氏・板倉有大氏・水之江和同先生には本資料を報告する機会をいただき、お世話になりました。また、尼子奈美枝氏・繰納民之氏には資料検討にあたって、大変有益なご助言をいただきました。記して感謝いたします。

註

１）鉄棒を折り曲げ、頭部を環状に造り出す形態を呈する製品は、これまで「鑷子」や「鑷子状鉄製品」、「毛抜状鉄製品」などのように、使用用途に規定された用語設定が行われてきた。しかし、遺物の詳細な検討が進む（諫早 2008）今日でも、具体的な用途は判明していない。そこで小林美土里氏は機能を想定した呼称を避け、「二股状鉄製品」という名称を設定している（小林 2019）。本稿でも「二股状鉄製品」と呼称した。

２）遊環に該当する部分が一部欠損しているため、棒状金具である可能性も捨てきれない。しかし、きゃしゃ（田中 1995）や細い（中村 2005）という大きさや作りのほかに、頭部断面が長方形状で連結部との可動性が低い（諫早 2008）ことなどから、本稿では本資料を二股状鉄製品の一部として捉えた。

参考文献

諫早直人 2008「第７章 鑷子状鉄製品と初期の轡」『大隅串良岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告 No. 3 鹿児島大学総合研究博物館 pp.257-268

宇野慎敏 1985「鑷子考」『末永雅雄先生米壽記念獻呈論集』乾 末永先生米寿記念会 pp.505 ～ 522

小林美土里 2019「二股状鉄製品の研究」『花園大学考古学研究室 40 周年記念論集』花園大学考古学研究室 pp.99-113

田中新史 1995「古墳時代中期前半の鉄鏃（一）」『古代探叢Ⅳ－滝口宏先生追悼考古学論集－』早稲田大学出版部 pp.247-308

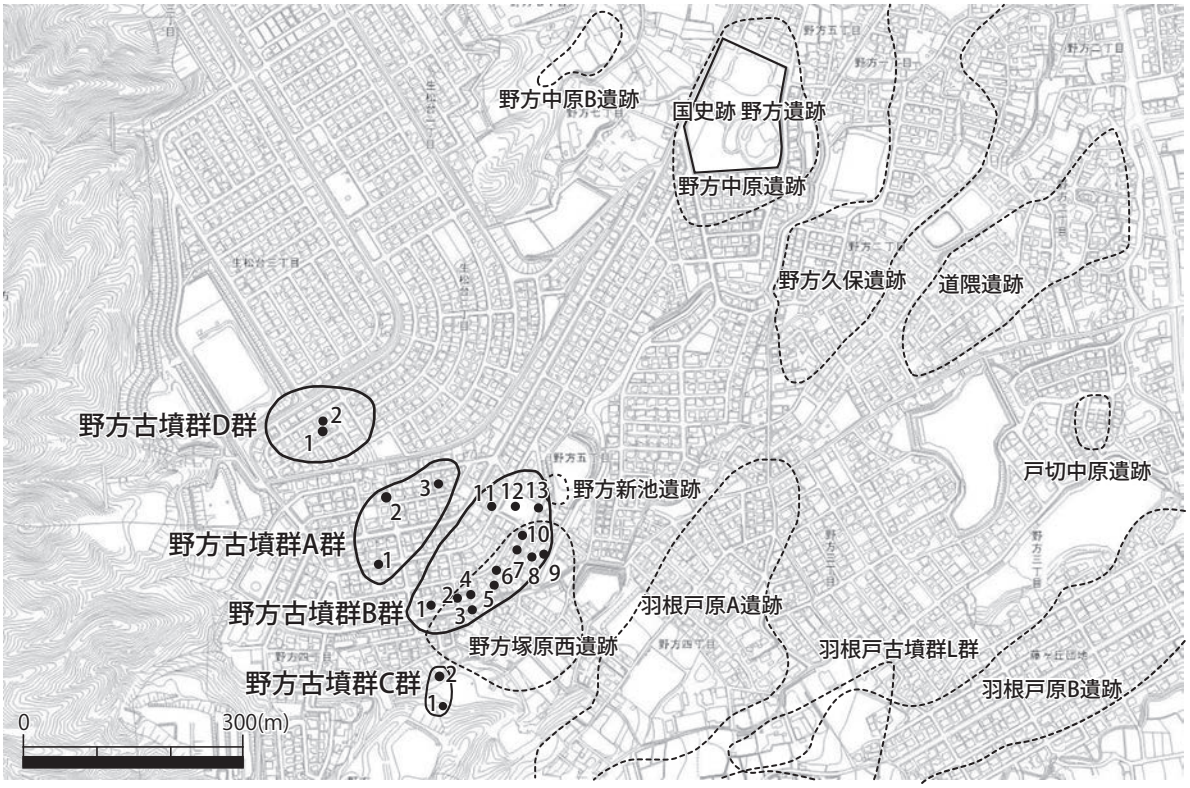
中村潤子 2005「初期馬具」『季刊 考古学』90 雄山閣 pp.75~78

水野敏典 2009『古墳時代鉄鏃の変遷にみる儀仗的武装の基礎的研究』基盤研究（C）研究代表：水野敏典（課題番号 18520598）「古墳時代鉄鏃の変遷にみる儀仗的武装の基礎的研究」研究成果報告　書

宮代栄一 1996a「古墳時代の金属装鞍の研究－鉄地金銅装鞍を中心に－」『日本考古学』第３号 日本考古学協会 pp.53-81

宮代栄一 1996b「鞍金具と雲珠・辻金具の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘 pp.48-53

渡邊可奈子 2010「畿内における古墳時代の刀子－大和地方を中心に－」『古代学研究』185 古代学研究会 pp.21-37

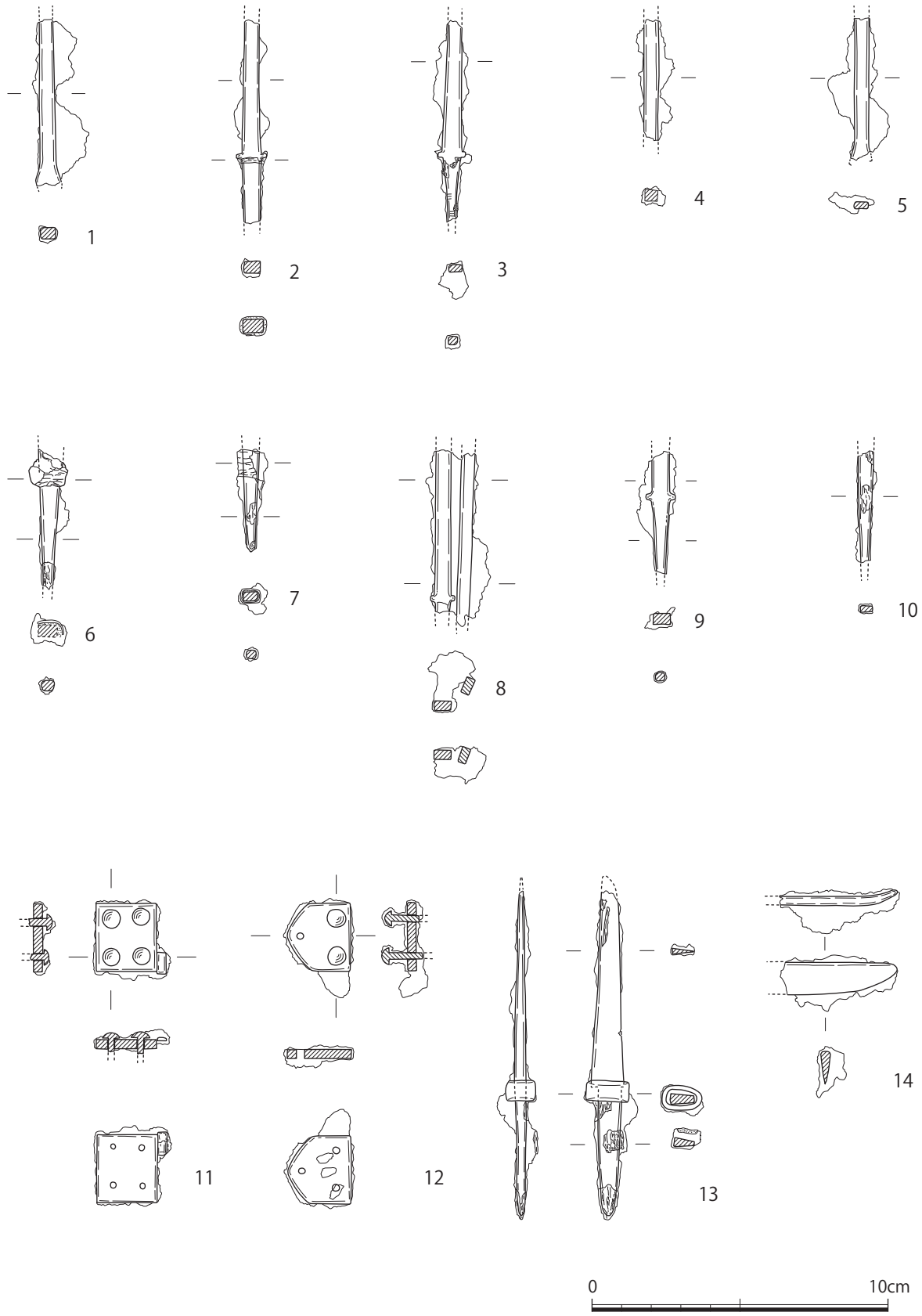


１．調査地点と周辺の遺跡（S=1/10,000）

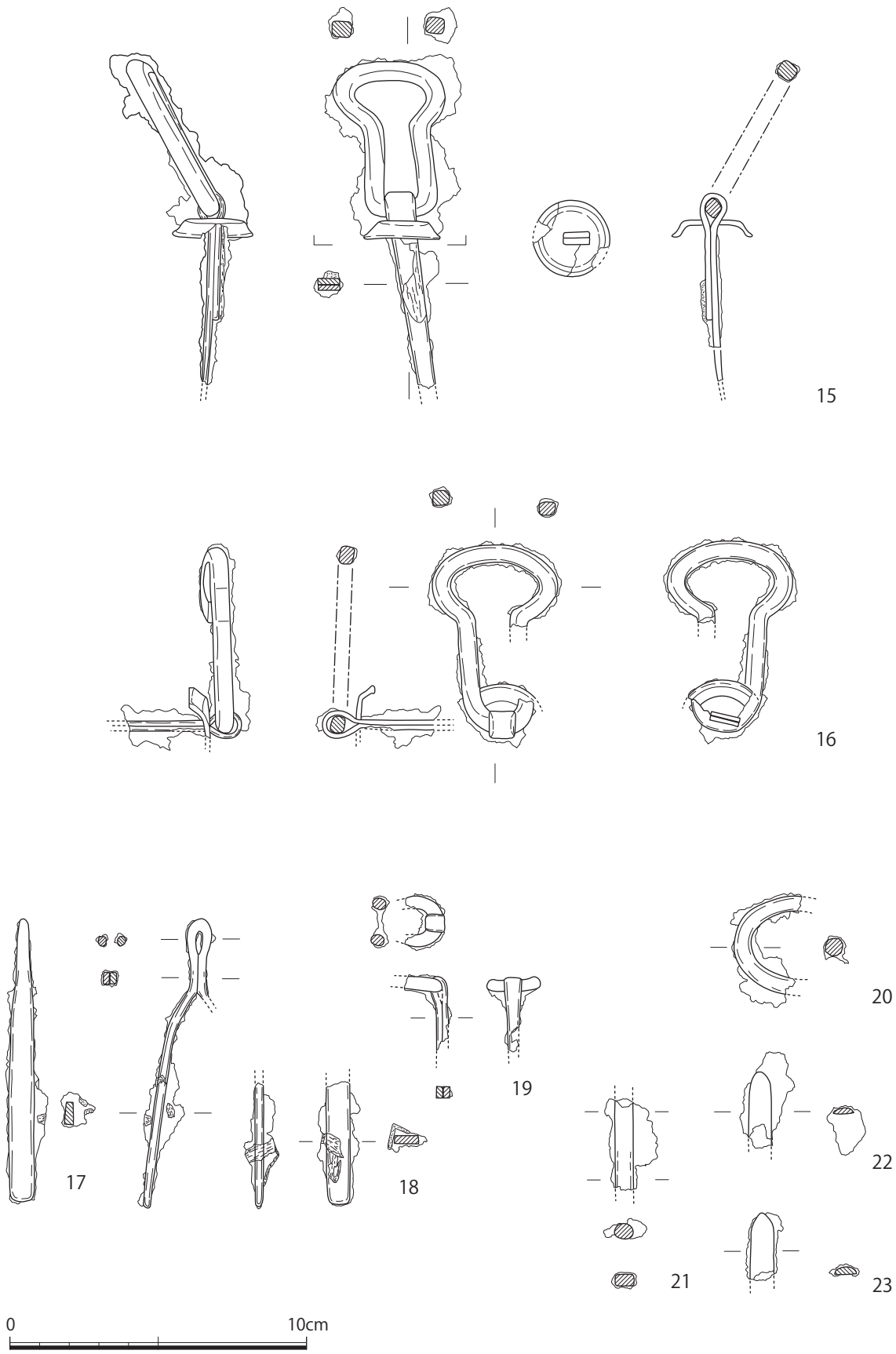
表１　野方古墳群調査一覧

	調査次数	調査番号	現名称	分布地図番号	墳形 大きさ(m)		主体部	主体部寸法(m) 奥行	幅	残存全長	須恵器		土師器		玉類		鉄器		
小松ヶ丘1号墳	1次	7019	野方古墳群B群 13号墳	B-4	前方後円墳？	20	横穴式石室 単室・両袖	2.54	2.16	8.14								刀、鏃、馬具、弓金具、耳環	
小松ヶ丘2号墳	1次	7019	野方古墳群B群 12号墳	B-4	円	12	横穴式石室 複室？・両袖	1.80	1.76	8.50									
小松ヶ丘3号墳	1次	7019	野方古墳群B群 11号墳	B-4															
小松ヶ丘4号墳	1次	7019	野方古墳群B群 5号墳	B-4	円？		不明（破壊）												
小松ヶ丘5号墳	1次	7019	野方古墳群A群 1号墳	B-3	円	11	横穴式石室 単室・両袖	2.24	1.78	3.94	66								
小松ヶ丘6号墳	1次	7019	野方古墳群A群 2号墳	B-3	円	12	横穴式石室 単室・両袖	2.56	2.10	5.00									
小松ヶ丘7号墳	1次	7019	野方古墳群A群 3号墳	B-3															
小松ヶ丘8号墳	1次	7019	野方古墳群B群 6号墳	B-4	円	12	横穴式石室 単室・両袖	2.14	1.94	6.44	52	蓋坏、高坏、大甕、横瓶、長頸壺、ハソウ等	2	高坏、蓋坏				鏃、刀子、留金具、馬具、二股状鉄器等 ※今回報告	人頭骨
小松ヶ丘9号墳	1次	7019	野方古墳群B群 9号墳	B-4	円？		横穴式石室？				15	蓋坏、甕	8	マリ、甕	27	ガラス小玉、瑪瑙玉			鉄滓(1)、黒曜石、縄文土器
小松ヶ丘10号墳	1次	7019	野方古墳群B群 8号墳	B-4			1号石棺 2号石棺	2.37 1.80	0.80 0.43		78	蓋坏、高坏、甕、長頸壺、ハソウ、横瓶等	31	甕、椀、マリ、壺等			7	刀、鏃、留金具等	石鏃、縄文土器
小松ヶ丘11号墳	2次	7321	野方古墳群B群 10号墳	B-4	円	10	横穴式石室 単室・両袖	2.37	2.23	3.43	90	蓋坏、高坏、甕、壺、ハソウ、横瓶等	67	坏、甕、マリ、壺、甑等	43	ガラス小玉、碧玉管玉、水晶切子玉	43	刀、鏃、留金具、馬具等	鉄滓(36)、黒曜石、サヌカイト、弥生土器、縄文土器、犬骨
小松ヶ丘12号墳	2次	7321	野方古墳群B群 7号墳	B-4			横穴式石室 単室・両袖	2.77	2.30	4.95	131	蓋坏、高坏、甕、壺、ハソウ、横瓶、提瓶等	108	甕、坏			5	鏃、刀子	黒曜石、サヌカイト、縄文土器、磨製石斧
小松ヶ丘13号墳	2次	7321	野方古墳群B群 3号墳	B-4	円？	6	横穴式石室 単室・両袖	1.20	1.83	3.80	3	蓋坏、短頸壺	2	破片					縄文土器
小松ヶ丘14号墳	2次	7321	野方古墳群B群 2号墳	B-4	円	10		2.90	2.02	2.90	13	蓋坏、甕	30	甕、坏			1	鏃	黒曜石
小松ヶ丘15号墳	2次	7321	野方古墳群B群 1号墳	B-4	円	8	横穴式石室 単室・片袖	2.45	2.13	5.00	32	蓋坏、甕、壺、平瓶等	10	壺、坏、高坏			2	破片	瓦質土器（「大」銘）
小松ヶ丘16号墳	2次	7321	野方古墳群B群 4号墳	B-4	円	13.5					75	蓋坏、高坏、甕、直口壺、ハソウ等	24	丸底壺、破片					鉄滓(5)、弥生土器、黒曜石、サヌカイト、縄文土器

※資料名横の数字は概ねの資料点数を示す



2．小松ヶ丘８号墳（野方古墳群Ｂ群６号墳）出土鉄器実測図（S=1/2）



3. 小松ヶ丘８号墳（野方古墳群Ｂ群６号墳）出土鉄器実測図（S=1/2）

Ⅵ 令和３年度国指定史跡

福岡市内における令和３年度の国史跡指定は、令和３年６月 18 日に開催された国文化審議会文化財分科会において、九州大学箱崎キャンパス跡地内で発見された石積み遺構について、史跡指定（追加指定）するよう答申を得、令和３年 10 月 11 日の文部科学省告示第 169 号により告示された。

１　史跡（追加指定）の概要

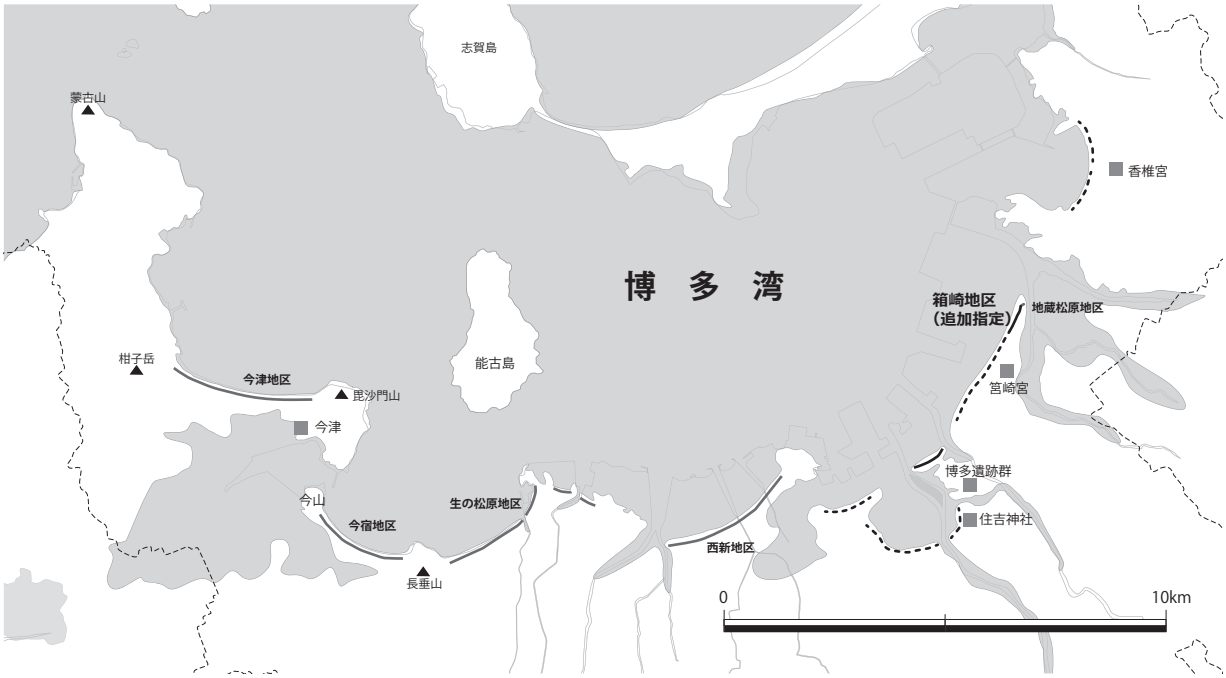
種　類	指定名称	員　数	所　在　地	所　有　者	管理団体	指定年月日
史跡	元寇防塁	1	福岡市東区箱崎6丁目3330-3の一部	国立大学法人 九州大学	福岡市	指定　昭和 6年　3月30日 追加　昭和56年 3月16日 追加　令和 2年　3月10日 追加　令和 3年10月11日

（１）史跡元寇防塁　（史跡）

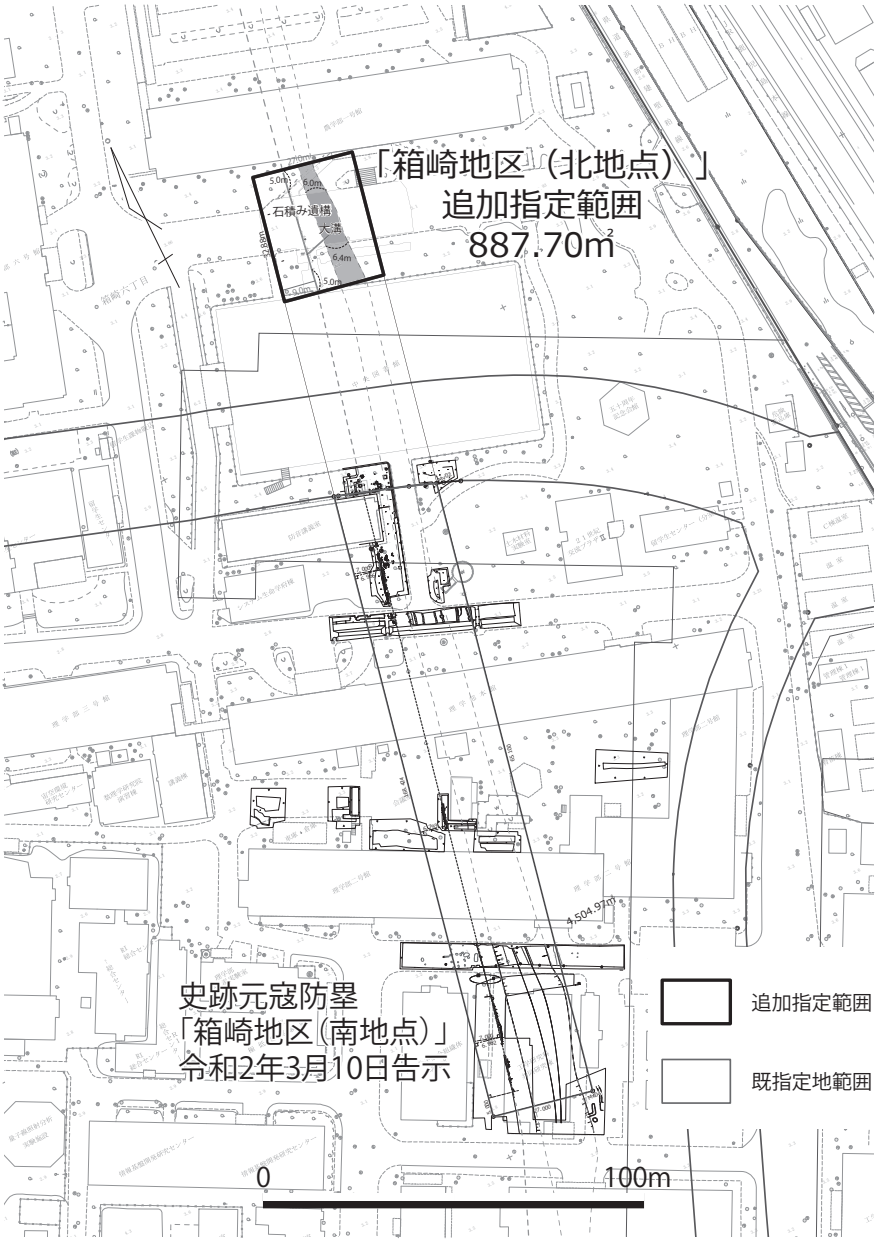
指定地の概要

元寇防塁は文永 11 年（1274）の元軍による文永の役の後、時の執権である北条時宗が建治２年（1276）に九州の御家人に命じ博多湾沿岸に築かせた石築地の防衛施設である。総延長は約 20 ㎞にもおよび、当時の状況は「蒙古襲来絵詞」からもうかがい知ることができる。その歴史的重要性から昭和６年（1931）に国の史跡に指定され、現在、福岡市内において今津・今宿・生の松原・西新・箱崎の５地区 11 箇所の防塁が史跡に指定されている。
このうち箱崎地区については、平成 28 年からの九州大学埋蔵文化財調査室による九州大学箱崎キャンパス跡地での内容確認調査によって、指定地外の箇所で石積み遺構とその背後の溝状遺構が確認された。他の地区とは異なり、石積みは前面のみで、背後に溝状遺構が伴う点が特徴である。

今回の追加指定地は、令和２年に追加指定（令和２年３月 10 日告示）された地点の北側にあたる。前回同様、石積み遺構の背面で幅 6.0 ～ 6.5 mを測る溝状遺構が確認された。石積み遺構基底面から溝状遺構底面までの比高差は 70cm 程度を測る。なお、今回の追加指定地点の北東側 100 m付近には、既指定地である史跡元寇防塁箱崎地区地蔵松原西地点（昭和６年３月 30 日告示）が位置する。既指定地との間は、大学建物建設により遺構は残存していないが、現状の石積み遺構の方向から想定すると、直線ではなく、途中で屈折していたと考えられる。今回新たに石積み遺構が確認された範囲（887.70㎡）について、既指定地と一体のものとして追加指定を行い保護を図る。



１．史跡元寇防塁位置図（実線部は確認範囲、破線部は未確認範囲）



2．史跡元寇防塁箱崎地区北地点指定範囲実測図位置図（S=1/2,000）

3．　史跡元寇防塁箱崎地区北地点
石積み遺構残存状況（北から）

4．　史跡元寇防塁箱崎地区北地点
石積み遺構埋戻し保存状況（南西から）

Ⅶ 令和３年度福岡市新指定文化財

令和３年度の福岡市新指定および新登録文化財は、令和４年２月４日開催の福岡市文化財保護審議会において、１件の文化財について答申を得、令和４年３月28日の福岡市公報により告示された。

区　分	種別	指定名称	員数	所在地	所有者・保持団体
有形文化財	建造物	キョハクインアンシツ 虚白院庵室	1棟	福岡市博多区御供所町１９－６	宗教法人　幻住庵 代表役員　山根　玄眞

構造・寸法等：桁行10.1m、梁間8.1m、木造平屋建一部二階建、切妻造、桟瓦葺

（１）虚白院庵室　１棟（有形文化財／建造物）

虚白院は、かつて聖福寺塔頭の一つで、現在その庵室が幻住庵境内に残る。嶋井家の菩提所・弓一庵を前身とすると伝わる同院は、宗室（1539-1615）の７回忌に際し、元和７（1621）年に「再建」されたが、18世紀後半から19世紀初頭には廃絶していたとみられる。のち文化９（1812）年に聖福寺の住職を退いた仙厓義梵の隠居所となり（西日本新聞社編 1995b）、この年までに再興されたと考えられる。

庵室は、桁行10.1m、梁間8.1m、木造平屋（一部二階）建、切妻造、桟瓦葺で、下屋が四方に付く。北側に別棟の東司（便所）が附属する。

一階のほぼ中央に、玄関（二畳土間）・取次（二畳板張り）・廊下（四畳板張り）が並ぶ。廊下には裏口と階段が付き、それぞれ東司または二階へ通じる。一階西側には、六畳の座敷２間が南北に並ぶ。北室は、下屋部に縁側をL字形に廻し、付書院を設ける。付書院は、花頭窓を開け、外側に障子を嵌める。なお、同室が仙厓の書斎兼寝間だったという（冨田 1920）。南室は、南に縁側を付け、西に床と床脇を構える。床柱にはスギ磨き丸太を立て、狆潜りが付く。各縁側は、障子と雨戸を建て付け、欄間には連子子とガラス板を嵌め殺しにする。一階東側には、土間・二畳（板張り）・四畳を配する。土間は、下屋に沿ってL字形に折れる。北側に竈と流しを設け、上部に無双窓を開ける。四畳は、周囲の各室と襖で仕切られる。うち北側二畳との間は小襖とし、洞庫の可能性がある。東側の下屋部には押入と床を設け、柱に花釘を打つ。床は、上部に雲板を嵌め、その右に琵琶棚を設ける。室の南側と西側に下地窓を設け、南側は円窓とする。また庵内には炉が保存されており、四畳は茶室として利用されたと推測できる。二階には、四畳半と三畳の二室を配する。四畳半は、北側および東側に肘掛け窓が開き、居室と考えられる。一方、三畳は、腰高窓が南側に開く以外は壁とする。

庵室は、「離書院 竪四間横四間半 瓦 仙厓和尚閑棲ノ室 文化八年」の記述（時期不明『寺籍調査表』）から、仙厓が隠居する前年の文化8(1811)年に建てられた可能性がある。なお文政４（1821）年成立の『筑前名所図会』は、境内裏手に現存する黒田政冬（見桃院、1605-1625）の墓への参道西側に門を設け、これと並行して玄関を東に開ける南北棟の「虚白院」を描く。この墓との位置関係は、明治３（1870）年の『聖福寺鳥観図』や同８（1875）年の『聖福寺境内』でも確認できる。『聖福寺鳥観図』の虚白院は玄関を南にむけた東西棟で描かれる。

仙厓の没後、「虚白院一宇 并抱畠二反一畝余」は松尾源助（？－？）をへて奥村氏の所有となり、明治３（1870）年に同氏一統から幻住庵へ譲渡された。その後、韜光玄譲（1876-1948）が、博多の諸氏（藤井五平・梅崎榮次郎・石蔵慶太郎・河内幸七）らと庵室の「再興」および仙厓の顕彰事業を発起し、明治36（1903）年に「旧構を修造」した。当時の庵室は、東西棟であり、北東に「井戸」をそなえた「土間」を張り出していた（冨田 1920）。なお東司は、すでに仙厓時代のものとは「位置が違って居た」という。

大正後期になると「庵室は腐朽」がすすんだようで（冨田 1920）、88歳で没した仙厓の88回忌にあわせて大正13（1924）年に韜光や冨田渓仙（1879-1936）らが中心となり、仙厓和尚遺蹟保存會を設立して寄付を募り「再建」に着手している。この事業により庵室は、翌14（1925）年４月までには、原位置から墓地参道をまたいで東へ移築され、さらに玄関を西にむけた南北棟として配置された。また、玄関から東に庇をかけて窓を開け、南面妻側に下屋を増築した。一方、庵室の原位置付近には、翌年、「虚白院眞殿（仙厓和尚拝所）」が竣工した。

次代の今長谷蘭山（1911-1971）は、昭和34（1959）年頃に玄関・土間・板敷二畳・四畳などを変更し、また東司を建て替えた。昭和44（1969）年、当初の向きに戻すため、今日みる東西棟に曳家される。ついで、顯道隆文（1943-2013）は、仙厓150年遠忌にあわせ、昭和61（1986）年に庵室を修繕した。工事では、上屋を中

心に梁や柱などの部材を取り替えて一部鉄骨で補強し、壁には石膏ボードを埋め込んで上から白漆喰を施した。また内装（居室天井の貼り直し）や外観（瓦葺き替え、正面庇の杉皮葺への変更、建具の取り替えなど）の工事もおこなった。

虚白院庵室は、『寺籍調査表』に「仙厓和尚閑栖ノ庵 文化八年」とあり、部材の経年感からも、江戸時代後期に建立された可能性が非常に高い。数回の曳家・改修が行われるが、比較的多くの当初材が残る。現在みられる平面は、土間をはじめ一階東側に改変があるものの、仙厓時代の平面（冨田 1920）をほぼ留めているといえる。また、仙厓の顕彰を目的として幻住庵の歴代住職がおこなった改修により、小間の床や窓などに瀟洒な意匠が加えられた。市内における禅宗寺院の庵室は、他に聖福寺仙厓堂（18 世紀末）が存在するのみで、当遺構は希少価値が高い。なお、閑居時代の仙厓が多くの「厓画」を製作した遺構として歴史的価値が高い。

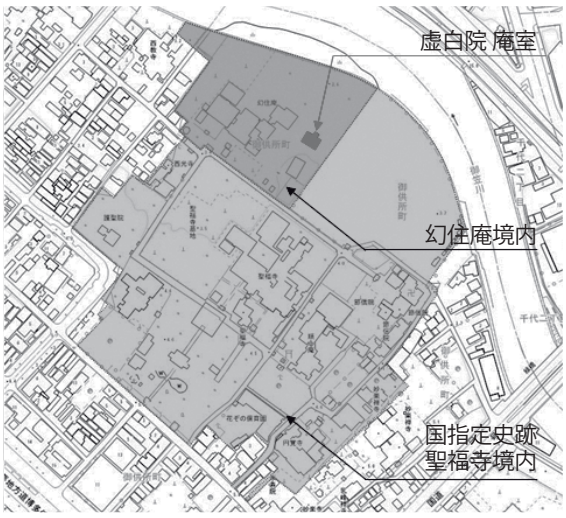
【参考文献】

岩崎建設株式会社編（2018）『岩崎建設百伍拾年史』、ダイヤモンド秀巧社

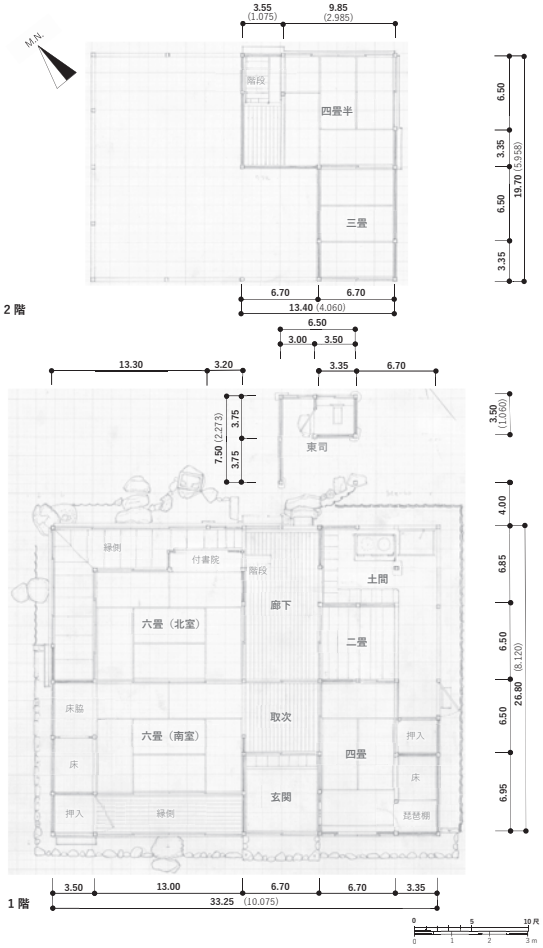
冨田渓仙編（1920）『仙厓禅師遺墨集』上、新時代社

西日本新聞社編（1995a）『聖福寺主要圖録』、西日本新聞印刷

西日本新聞社編（1995b）『聖福寺通史』、西日本新聞印刷



1．虚白院 庵室位置



2．虚白院 庵室平面図（1 /200・単位尺）

3．虚白院 庵室全景（南から）

4．虚白院 庵室　六畳南室　縁側（南東から）

報告書抄録

ふりがな	ふくおかしまいぞうぶんかざいねんぽう
書名	福岡市埋蔵文化財年報
副書名	令和３（2021）年度版
巻次	36
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	田上勇一郎
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	福岡市中央区天神１丁目８－１
発行年月日	令和５（2023）年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 調査開始	調査期間 調査終了	調査面積 （㎡）	調査原因
たむらいせき 田村遺跡（2105　29次）	さわらく　たむら 早良区田村2丁目804番1	40137	0317	33°32'33"	130°19'46"	2021.4.12	2021.5.10	136.50	記録保存
のためし－いせき 野多目Ｃ遺跡（2113　7次）	みなみく　のため 南区野多目2丁目328-1、329-1、335-1	40134	0147	33°32'25"	130°25'29"	2021.5.19	2021.6.11	249.10	記録保存
のけいせき 野芥遺跡（2115　21次）	さわらく　のけ 早良区野芥5丁目378番2	40137	0319	33°32'15"	130°20'47"	2021.7.1	2021.7.21	62.15	記録保存
かたえび－いせき 片江Ｂ遺跡（2117　5次）	じょうなんく　かたえ 城南区片江1丁目27-1	40136	0207	33°33'05"	130°22'38"	2021.7.15	2021.7.28	62.44	記録保存
ごじっかわいせき 五十川遺跡（2126　24次）	みなみく　ごじっかわ 南区五十川1丁目629番2、630番1	40134	0088	33°33'49"	130°26'15"	2021.9.6	2021.9.28	103.00	記録保存
いたづけいせき 板付遺跡（2127　76次）	はかたく　いたづけ 博多区板付2丁目10-9の一部	40132	0094	33°33'59"	130°27'04"	2021.9.1	2021.9.1	9.40	記録保存
むぎのえ－いせき 麦野Ａ遺跡（2129　32次）	はかたく　むぎの 博多区麦野3丁目1番19	40132	0048	33°33'15"	130°27'32"	2021.10.1	2021.10.29	83.80	記録保存
ごじっかわいせき 五十川遺跡（2136　25次）	みなみく　ごじっかわ 南区五十川2丁目261番4、257番1	40134	0088	33°33'35"	130°26'22"	2021.12.1	2021.12.21	80.70	記録保存
はござきいせき 箱崎遺跡（2137　121次）	ひがしく　はござき 東区箱崎1丁目28-2、28-3	40131	2639	33°37'04"	130°25'27"	2021.12.1	2021.12.28	37.00	記録保存
ごじっかわいせき 五十川遺跡（2138　26次）	みなみく　ごじっかわ 南区五十川2丁目287番16、287番24	40134	0088	33°33'36"	130°26'20"	2021.12.13	2022.1.14	74.00	記録保存
なかいせきぐん 那珂遺跡群（2139　189次）	はかたく　なか 博多区那珂2丁目132-2	40132	0085	33°34'09"	130°26'15"	2021.12.23	2021.12.23	20.73	記録保存
おおばやしいせき 大林遺跡（2142　2次）	にしく　じゅうろくちょう 西区拾六町5丁目11番2	40135	0375	33°34'13"	130°18'24"	2022.1.11	2022.1.17	15.43	記録保存
はかたいせきぐん 博多遺跡群（2144　249次）	はかたく　れいせんまち 博多区冷泉町107番	40132	0121	33°35'36"	130°24'41"	2022.1.17	2022.1.18	29.02	記録保存
たしまおしょうずいせき 田島和尚頭遺跡（2145　1次）	じょうなんく　たしま 城南区田島2丁目565番2、566番2	40136	0249	33°34'05"	130°22'13"	2022.2.10	2022.2.22	56.00	記録保存
けやごうび－いせき 警弥郷Ｂ遺跡（2146　10次）	みなみく　やなが 南区弥永４丁目2番3号	40134	0158	33°31'46"	130°26'10"	2022.2.14	2022.2.18	170.00	記録保存
よしづかいせき 吉塚遺跡（2148　19次）	はかたく　かたかす 博多区堅粕4丁目370番3	40132	0123	33°35'50"	130°25'38"	2022.2.21	2022.3.4	39.80	記録保存
いじりびーいせき 井尻Ｂ遺跡（2043　48次）	みなみく　いじり 南区井尻1丁目704番の一部、705番の一部	40134	0090	33°33'18"	130°26'23"	2021.2.15	2021.3.13	120.00	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田村遺跡（2105　29次）	集落跡	弥生・中世	溝・土坑・ピット	弥生土器・土師器・貿易陶磁器・石器	
野多目Ｃ遺跡（2113　7次）	集落跡	中世～近世	溝・土坑・ピット	土師器	
野芥遺跡（2115　21次）	集落跡	古墳時代	竪穴住居・土坑・ピット	土師器・須恵器・石器	
片江Ｂ遺跡（2117　5次）	集落跡	弥生～古墳	ピット	弥生土器・須恵器	
五十川遺跡（2126　24次）	集落跡	古代～中世	溝・土坑・ピット	弥生土器・土師器・須恵器・貿易陶磁器	
板付遺跡（2127　76次）	水田跡	弥生・近世	溝・水田		
麦野Ａ遺跡（2129　32次）	集落跡	古代～中世	竪穴住居・掘立柱建物・土坑	土師器・須恵器	
五十川遺跡（2136　25次）	集落跡	中世	溝	須恵器・貿易陶磁器	
箱崎遺跡（2137　121次）	集落跡	中世	井戸・土坑・ピット	土師器・貿易陶磁器	
五十川遺跡（2138　26次）	集落跡	弥生～中世	溝・井戸・ピット	弥生土器・土師器・須恵器	
那珂遺跡群（2139　189次）	集落跡	弥生～古代	井戸・ピット	弥生土器・土師器	
大林遺跡（2142　2次）	集落跡	弥生～古墳		弥生土器・土師器・石器	
博多遺跡群（2144　249次）	集落跡	古代～中世	井戸・ピット	土師器・須恵器・貿易陶磁器	
田島和尚頭遺跡（2145　1次）	集落跡	古代・近世	掘立柱建物・土坑・ピット	須恵器・瓦	
警弥郷Ｂ遺跡（2146　10次）	集落跡	弥生時代	貯蔵穴・土坑・ピット	弥生土器	
吉塚遺跡（2148　19次）	集落跡	古墳・近世	溝・土坑・ピット	土師器・須恵器	
井尻Ｂ遺跡（2043　48次）	集落跡	弥生～中世	掘立柱建物・土坑・ピット	弥生土器	

福岡市埋蔵文化財年報
VOL.36
―令和３（2021）年度版―

発　行　日　令和５年３月 23 日
編集・発行　福岡市教育委員会
〒 810-8621　福岡市中央区天神１丁目 8-1

印　　刷　魚住印刷
〒 812-0033　福岡市博多区大博町 8-20

THE ANNUAL REPORT
OF
THE BURIED CULTURAL OF FUKUOKA CITY
VOLUME 36

THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY

MARCH 2023

JAPAN

『福岡市埋蔵文化財年報Vol.36』令和3（2021）年度版　　正誤表

頁	行/図	誤	正	
抄録		所在地　野芥遺跡（2115）　早良区野芥5丁目378番2	所在地　野芥遺跡（2115）　**早良区野芥5丁目378番12**	